

寝て起きたらデスゲームに巻き込まれていたんだが。

リベリオン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ちよつとまって！ ここは一体どこ!?

ソードアート・オンラインを読み終えた主人公が寝て起きたらなぜか森の中！ そしていきなり遭遇したのは主人公のキリト!?

超展開に戸惑いつつも、どうにかこうにかやっていこうとする主人公。シリカに懐かれたり、キリトに信頼されたり、アスナには怒られたり、リズベットにはこき使われたり、エギルからボツタされたり、クラインの魔の手からシリカを守ったりしながら戦い抜いて、このデスゲームを生き延びる事ができるのか!?

注意事項

・ 作者はSAOの小説を読んでません。アニメとWikiを見た程度です。

・ はじまりの街で最初からではなく、強くて途中から介入します。強いと言っても攻略組トッププレイヤー集団（キリト、アスナ、ヒースクリフたち）よりは弱いです。

・ ヒロインはシリカ。リズとも悩んだけど……。

2014.11/15 まさかの日間ランキング入りしました。しかも7位って……え？ マジで？ いいの？ すいません、まさか入ると思わず思いっきり吹き出しました。とにかくありがとうございます。

2015. 01 / 10 予想を上回る反響につきフロントム・バ
レット編開始!!! 併せて話数をちよつと整理しました。
2018. 09 / 01 キャリバー編開始。

目次

起きたらインクラッドの中でした。

設定	1
第1話 デスゲームの世界へようこそ	3
第2話 黒と赤の剣士	12
第3話 赤と赤のデュオ	31
第4話 攻略の鬼	46
第5話 振り回されて東奔西走	56
第6話 紅蓮の王が眠る地	77
第7話 黒幕登場	101
第8話 繋がる心	126
第9話 最奥に潜む者	139
第10話 突きつけられる結末	159
第11話 君臨する神	175
第12話 決別の扉	193
第13話 最後の戦い	208
第14話 ぶつかり合う想い	222
第15話 終わる世界	239
そーどあーと・おふらいん 番外編	251
復活ルートに進むそうです？	
復活ルート（フェアリー・ダンス編）第1話 飛翔：片翼の天使	264
復活ルート（フェアリー・ダンス編）第2話 再臨：片翼の天使	
復活ルート（フェアリー・ダンス編）第3話 再会：片翼の	268

フアントム・バレット編

第1話	Gun & Sword	304
第2話	ALOでのある1日	317
	ミスト君、第1級フラグ建築士疑惑（バレンタインネタ）	332
第3話	GGOでのある1日	347
第4話	バレット・オブ・バレッツ	363
第5話	本戦開幕	383
第6話	雲は霞む	395
第7話	MOON LIGHT	416
第8話	幕引きはド派手に	429
第9話	感動エンディングだと思った？ 残念、修羅場に入らだよ	435
！		
キヤリバー編		
第1話	ネコもトラも同じネコ科動物	446
第2話	男気を見せる時	457
第3話	レッツ・ジャイアント・キリング	467
第4話	それはまるで稲妻のように	482
第5話	エクスキャリバー	493

起きたらアインクラッドの中でした。

設定

ミスト

友人から借りていた小説「ソードアート・オンライン(以下SAO)」を読み終え、寝たらSAOの世界に投げ込まれていた不幸な高校2年生の17歳。

アバターはリアルでやっていたMMORPGのものが一部流用され、容姿は赤い鎧に盾と片手用直剣を装備した、ちよつとツンツンヘアーの赤茶髪が特徴の剣士。レベルは迷い込んだ時点で80とキリトを若干上回っている。

性格はちよつといたずら好き・からかい好きではあるが、しつかりフォロワーも入れている。特にシリカには献身的にレベルングに付き合ったおかげで慕われており、コンビを組む事になった。好意を向けられるのは嬉しく思うも、少しでも邪念が混ざればピナが容赦なく襲ってくるため戦々恐々としている。ついでに言えばロリコンというわけでもない。一応紳士。

いきなりこの世界に投げ出された当初は当惑したものの、持ち前のMMORPG経験を総動員して対応し、おまけに装備もこの時点では最強クラスに加えてエクストラスキル「盾剣技(体術と盾術の複合スキル。使用には特別な盾が必要)」による一部片手剣のソードスキルを使用できると言う幸運によって、攻撃力と防御力を活かしたキリト以上のアタッカーと化してしまった。

おまけに擬似的な二刀流でもあるため、二刀流専用のソードスキルこそ出来ないが後にキリトが編み出す「剣技連携(スキルコネクト。ミストはスキルチェインと呼んでいる)」を独力で編み出す。ただし本物に比べて盾と組み合わせるもののためバリエーション(装備する盾によって発動できるソードスキルが異なる。例：プロテクションエッジ(突き技限定)、デモンズ・クロウ(斬り技限定)など)が限定されるため事前に使い所や使用ソードスキルを見極める必要がある

が、逆に限定されているからか成功率はキリト以上。本人の感覚で言うところ「自分で自分をスイッチする感覚」らしい。

中でも定番の組み合わせは突進&連撃系で、硬直も少なく扱いやすい「シャープネイル」と突進力のある「ヴォーパル・ストライク」が基本。これだけで突撃・追撃・離脱に対応できるためほぼ固定だが、盾によつてはボス戦で有効な連撃&連撃も用いる事がある。

いくつもの幸運とあまり見かけないエクストラスキルによつて、その噂が広まった末にフィールドボスをエギルとキリトの2人と協力してラストアタックボーナスをゲットした結果、「レッドクリフ」と言う微妙な異名で一部から呼ばれるようになった。

第1話 デスゲームの世界へようこそ

第1話 デスゲームの世界へようこそ

ペラ：ペラ：と、静かな部屋の中でページを捲る音だけが微かに鳴る。

窓際のベッドで、俺は仲間から借りた仰向けに寝転がってライトノベルを読みふけていた。

……借りたって言うか、強引に貸し出されたんだけど。俺がMMORPGやってるって言ったなら、「じゃあこれ読め!」と言って「ソードアート・オンライン（通称SAO。サオ）」を押し付けてきたんだよ。活字苦手なんだけどなあ……けど早く読まないと催促してうるさいから、こうして毎日読み続けた結果……どうにかこうにか「アインクラウド編」を読み終えようとしている。

「……終わった」

最後の1冊を読み終え、深く息を吐き出しながらページを閉じた。長かった……本当に長かった。これでようやく解放される。

「つと。あいつに返すって伝えておかないと」

ふと思いついて、俺は枕の隣に置いていたスマートフォンを取ると、LINEを開いて仲間にメッセージを飛ばす。

『今SAO読み終わった、月曜に返す』

『うー。ちゃんと感想聞かせてもらおうかなー』

はいはい、分かっていますよ……と返信。あれやこれやと質問されてくるだろうが、ある程度は答えられると思う。

さて、明日も学校休みだしこれからPCつけて……って行きたいところだけど、活字読んだせいでもう疲れた。寝て起きてからやろう。

「どうせ日曜はラ○ダーとプ○キュア見るし」

子供向け番組のはずだけど、なんだかんだで最近すっごい展開をしている日曜朝のお約束を脳裏に浮かべつつ、スマートフォンに充電器を差して目覚ましをセット。明りを消して、俺は横になった。

「……い……し」

「……」

「おい……って」

「……」

「おい！ 起きろって！ もしもーし!？」

「……んああ？」

誰だよ、人が寝てる時に……っつーかノックも無しで部屋に入ってくるとはどういうことだ。

あれ……なんか変な感覚なんだけど。俺変な体勢で寝てたか？

「ん……んあ……ああ？」

想いつきり伸びをしようとして、なんかバランス崩しそうになったから慌てて踏みとどまる。

なんだなんだ？ 俺何がどうな……って……。

「……」

あんるえく？ どこなんでしようここ。なんで俺木の枝に引つかかったまま寝てるんでしょうか？

いやそもそも俺の家南国じゃないし。庭になら柿の木があるけど中にはないし。っつーより外じゃん。なんで外？

そしてなあに？ なんか下のほうで黒尽くめの男の子が色々言ってるんですけど。あれってつい最近見た事あるような気がするの。きつと気のせいじゃないよねえ？ 木だけにか。誰が上手いこと言えと。

「おい、大丈夫か……？」

なにやら心配してくれるのはありがたい。ありがたいが……

「こっ……」

「こ？」

「こ こ は ど こ だ あ あ あ あ

っ ! ? あっー?!」

「ちよ、おわあっー!」

木の上で思い切り今の心境をシャウト。その瞬間、バキッと音立てて枝がへし折れて地面に落下。

突然叫んだ俺に男はビビッて、おまけに枝が折れて落ちてきたから血相変えて受け止めようとするが、失敗して諸共倒れこむ。

「ぐ……おっふう……」

「つく……いきなり暴れたら折れるに決まってるだろう」

いや本当に申し訳ない。

押しつぶしてしまった黒髪の男の上から退いて、何度も相手に頭を下げる。

「ほんつとうに済まなかった。自分でも突然の状況で混乱してて」

「混乱……？ まあ、木の枝に引つかかったまま寝てるって言う時点で、自分からやったわけじゃなさそうだからな。街ならまだしもフィールドで」

「フィールド……お、おおう？」

改めて言われて、俺は周囲の風景に気づく。

うっそうとした森の中。俺の部屋っていつの間こんなワイルドになったの。いやそもそも俺はどうしてここにいるの？

「ど……どこだここ？」

「どこって、35層の迷いの森ってフィールドダンジョンだよ。知らないのか？」

「ま……迷いの森……」

いや、知らないっていうか……いやもう、考える事が多すぎて何かなんだか。

「なんで俺、こんなところにいるんでしょうか……部屋で寝てたはずなのに」

「部屋で……？ 圈内じゃPKは出来ないはずだし……また新しいPKが見つかったのか？ けど、よく生きていたな」

「え……ああ、はい……」

圈内だとかなんだとか、まあ知識としては覚えている。

ちよつとずつだけけど今の自分がどういう状況に置かれているのか……分かってきた。

結論。

寝て起きたらデスゲームに巻き込まれていたんだが。

あつははははは！　なんだよそりゃ！　ツ○ツターや2○hに書き込めば馬鹿にされる事請け合いだつて！　ねーよこんなの！

「おい……大丈夫なのか？」

俺が黙り込んだのを不審に思い、黒髪の男が声をかける。

線が細くて女の子みたいな顔立ちをしていて、黒いコートを纏い背中には剣1本を差している。

こいつつて……間違いない、よな。

「キリト……だよ、な？」

「そうだが……どこかであった事があるか？」

自分の名を知っているのが以外だったのか、黒髪の男「キリト」は、意外そうに聞き返す。

しまった。思わず口に出してしまった。ど……どうしよう。

「ま、前に……攻略会議の時に見かけた」

「お前も攻略組か。けどPKの標的にされるなんて災難だったな」

「ん……まあ、うん」

とりあえずは俺の言い訳を信じてくれたらしい。

間違いない。こいつはSAOの主人公キリトだ。なんだつてここに……いやそもそも、俺がどうしてここ……SAOの世界にいるんだ？

夢……じゃ、ないんだよな。その割にはやたら現実過ぎているから。

えつと……あ、ステータスがあつた。なにになに……俺のプレイヤーネームは「Mist」、レベルが……80!?　っていうかこのデータ俺のやっていたMMOの奴と一部同じじゃないかよ！

視線を下に下げて自分の格好を見ると、赤いアーマーに盾と腰には片手用長剣を差している。これも俺がMMOで使っていたアバターの装備と同じだ……。

な……なして？　なんで俺こんなデスゲームの世界にいるの？　本当にどうして!?

「おい……本当に大丈夫か？ バグったか……？」
「不幸だ……」

「えっ……。いや、確かにPKされかけてこんな場所に飛ばされたのは災難だったけど……」

突然涙を流して自分に置かれた境遇を嘆きだした俺に、キリトは若干引きながらも同情するように声を掛けてくれた。

違う、違うんだよお……同情してくれるのはありがたいがするポイントが違うんだよお……っ！

「じゃあ……俺はこれで」

「待って、待っておくれ！ お願いだから俺を安全なところまで連れてって！」

「え……ええっ!？」

「俺ここまったく知らないんだよ！ しかも夜だし暗いし1人だと怖いの！」

見知らぬ男に泣きつかれ、当然キリトは本気で困っているようだった。

だって仕方ないだろう!? ここって死んだらリアルでも死ぬんだし！ いきなりこんなところに投げ込まれたら誰だって怖いって！

神様俺が何をしたの!？」

「怖いって……それでも攻略組かよ、お前……？ 道案内くらいしてやりたいけど、俺この先に用があるんだ」

「なら一緒に行くし！ 1人で森を抜けるより全然いい！」

「……はあ。仕方ないな」

よかった！ 俺の願いが届いてくれた！ ありがとう神様！ ありがとうキリトくん！

「改めて俺はキリト。少しの間だけでもよろしく頼む」

「お、俺はかす……じゃなかった。ミス。助けてくれてありがとう」
互いに握手を交わし、ひとまずキリトの目的である森の奥に進む。
なんでも、キリトはある人物を探しているらしい。

オレンジギルド「タイタンズハンド」……そこまで聞いて、俺はこの後の展開に察しがついた。

案の定、猿人のモンスター「ドラंकエイプ」に囲まれているおさげ髪の女の子を見つけるや否や、キリトは背中の剣を抜き放ち戦闘態勢に入る。

「左の1匹は任せたー!」

「お……おうー!」

キリトに頼まれはしたけど……そもそも俺、このゲームのシステム分からないんですけど!?

このSAOでは魔法はなく、この剣みたいな武器1本で戦い抜かないと魔法使えなかったけど、いきなり実戦は難易度高くないですかあ!?

「お……うおおおっ!」

けどあのままじゃあの子が殺されてしまう。それだけはしたくないという思いで俺は腰の剣「マーヴェルエッジ」——高い攻撃力よりも特殊効果である命中率100%の効果が脅威のレアドロップ——を抜き、任されたドラंकエイプに立ち向かう。

こいつってなんか回復とかするんだよな……さっさと威力の高い技で倒すのが最短ルートだけど……

「——うぐっ!」

振り下ろされた太い棍棒を扇型盾「プロテクションエッジ」——防御だけでなく下部のエッジを備えた事で攻撃力を有したている——で受け止める。

お……重い。これがSAOでの戦いかよ。そしてこの世界でHPが0になれば……死んでしまう。

ゾツと背筋を寒いものが駆け抜ける。それだけは絶対にゴメンだ!

ソードスキルは初動のモーションを起こしたら武器がライトエフェクトで輝き、後はシステムが命中させてくれる……ってあった気がするがどうすればいい?!

えっと……こう、ぐつと構えて溜めて……システムが立ち上がるのを感じたら……ズパーンって打ち込む感じ……!

「——はあっ！」

剣がライトエフェクトで輝きを放った瞬間、俺はドラクエイプの棍棒を払い除け、垂直に斬り上げる。

すかさず、返す刃で振り上げた剣を縦に振り下ろす。片手剣の垂直2連撃ソードスキル【バーチカル・アーク】が炸裂し、ドラクエイプは一瞬の硬直の後にガラスが割れたような音を立てて砕け散った。「で……出来た」

無我夢中でやっていたから何が発動されるのか分からなかったけど……とにかく倒す事ができてよかった。

「悪い、ちよつと手間取った……」

「いや……それよりも」

キリトは1度だけ俺を見やって、目の前で蹲る女の子を見る。

その手にはうつつすらと光る羽が乗っていて、何か悲しんでいる様子だった。

「(やつぱり、シリカとの話か……)」

「ビーストテイマーのシリカ」……その友達であるフェザードラ「ピナ」がついさつき、彼女をかばってドラクエイプの攻撃を受けて死んだ所か。

もつと早くに駆けつけていたら……あれ？ この場合ってキリトを足止めした俺が悪いんじゃない。

「なんか……ごめん。俺がキリトを足止めしなければ、この子の友達死ななかつたかもしれないのに」

「いや……あのままミストを置いて行くのも心配だったし、こうなるとは分からなかつたから」

頭を下げる俺にキリトは首を横に振って否定する。

確かにキリトはこうなる事を知らなかった。けど俺はこうなる事を知っていたから、なおの事責任を感じてしまう。

「なあ、キリト。確か使い魔を蘇生させるアイテムってどこかにあったよな？」

「47層の「思い出の丘」だな……使い魔の主人がそこへ行けば、使い魔蘇生用の花が咲くって聞いた事がある」

「47層……」

この35層で苦戦していたシリカにとって、そこはまさに雲の上の存在に等しい。しかも死後3日以内に手に入れないとピナはもう2度と生き返らない。

「あたしのせいで……ごめんね、ピナ……」

「……大丈夫。3日もある」

諦めかけるシリカ。しかしキリトは立ち上がって背を向けて眩くと、すぐにメニューウインドウを開いてアイテムストレージから幾つかの装備を選択し、それをシリカに与えた。

「なあ。俺も同行させてくれないか？　ピナを助けられなかったのは、俺に責任があるわけだし……」

「けど……お前は良いのか？」

「基本ソロだからな。それにこのままはいさよなら、じゃ俺の気が済まないんだよ」

「……わかった。そういうことなら」

「あ……あのっ」

俺の頼みにキリトは少し諦めたように納得して、同行を許してくれる。

その時、話を聞いていたシリカが割って入ってきて口を開いた。

「なんで……そこまでしてくれるんですか？」

「え……なんで、って……」

「俺は償い……って言えば、虫のいい話になるかな。キリトには助けてもらったし、借りを返したいって言うか……まあ、そんなところ」

その質問に俺ははつきりと答えるが、キリトはとうとうどう答えればいいのかかなり困っている。

「笑わないって約束するなら……言う」

「笑いません」

「俺もだ。よっぽど変な理由じゃない限りな」

「……君が、妹に似てるから」

それが、助けてくれる理由か。

知ってはいたけど……聞いたシリカは一瞬ほかんとして、次の瞬間

には嘖出してしまおう。

ようやく笑ってくれた彼女にひとまず安堵し、思わずぽんぽんと頭を叩いてしまった。

「あ………」

「わ、悪い。ようやく笑ってくれたと思ったらつい嬉しくって……」

「いえ……。あの、こんなじや全然足りないですけど……」

「いや、いいよ。俺がここに来た理由と被らないでもないから」

「俺もだ。償いなんだから、礼を受け取ったら困る」

「……?」

キリトの理由というのにシリカは疑問符を浮かべるが、特に気にしないでくれたらしい。そして、今まですっかり忘れていた自己紹介をしてくれた。

「あの、あたしシリカって言います」

「俺はキリト。しばらくの間よろしくな」

「ミストだ。こっちもよろしく、シリカ」

こうして「ピナ復活させ隊（命名俺。キリトは微妙な顔をして、シリカは笑っていた）」がその場で結成され、ひとまず街に帰還するのだった。

第2話 黒と赤の剣士

第2話 黒と赤の剣士

前回のあらすじ：

寝て起きたらデスゲームの世界にいた。

キリトの案内のおかげで、無事に迷いの森を抜けて第35層の主街区「ミーシエ」に無事に戻ってこれた俺とシリカ。白い壁に赤い屋根の建物が並んでいて、時間が時間だからかあちこちの窓から明りが見える。

「えっ……じゃあミストさんは、PKされかけたところをキリトさんに助けてもらったんですか？」

「どうにもそうらしいんだよ……俺はまったく気づかなかったんだけど」

驚いて口に手を当てるシリカに俺はそう説明する。

まあPKの話は嘘なんだけど……キリトにもそう話していたし、これで通すしかない。実際には俺、リアルからいきなりこのSAOの世界に来てしまったんだけど。

「睡眠PKにモンスターPKの合わせ技……ってことでいいのかな。誰かに恨みを買うような覚えはあったのか？」

「そう言ってもソロだぞ？ あんま人と関わりないのに恨み買うって……」

あんまり追求されるとだんだんボロ出しそうだから、やめてもらえると嬉しい。

「お、シリカちゃん発見！」

ネタが切れそうになって困っていたところ、誰かがシリカを呼ぶ声があった。

足を止めて声のほうへ目を向けると、これまた対照的な太めと細身の男2人がやってくる。

「随分遅かったんだね！ 心配したよ！」

「あ、あのっ……」

「今度パーティー組もうよ、好きなトコ連れてってあげるから！」

「お話はありがたいんですけど……」

「どうやら2人はシリカの熱烈なファンらしい。」

その2人にシリカは困った表情を浮かべて、チラッとこつちを見る。

「悪い、シリカは今俺たちとパーティー組んでるんだ」

「……………んん？」

俺がフォローに入ると、とたんに2人から嫉妬の目線が。うわー、男の嫉妬って恐ろしい。

けど俺の援護にシリカは愛想笑いを浮かべ、俺とキリトの手を取る。

「そ…そうなんです。少し急ぎの用事があって」

「用事って、なんなの？」

「俺たちじゃ力になれないの？」

「明日47層に行かなきゃ行けないんだが、それでも来るのか？」

「よ……47層……!?!」

ニヤリと意地悪な笑みを浮かべて切り札のカードを切ると、男2人は驚いて固まる。

「どうやら効果は抜群らしい。ここよりもかなり上の階層を出されては言葉に詰まってる。」

「と言うわけでだ。またの機会にするんだな。行こうぜキリト、シリカ」

「あ……ああ」

促されてキリトは少し戸惑い気味に頷いて歩き出す。

シリカを取られた事がよほど悔しいのか、それでも男たちはせめてもと嫉妬の目で俺たちを見続けていた。

「ごめんなさい……迷惑をかけて」

「気にしてないよ。人気者なんだな、シリカは」

「そりゃこんな可愛い子だったらな……って言うかキリトよ、お前も少しは何とか言っちゃったらどうだよ？」

「いや……どうもこういうのは苦手だ」

そう言えばキリトって人付き合いが苦手なんだっけ……。おまけにこの頃は色々起きて余計に関わる事が減っていたんだよな。

けど話せば普通に返って来るし、悪い奴じゃないってのは分かるけど。

「可愛いなんて……マスコット代わりにされているだけですよ、きつと。それなのに……「竜使いシリカ」なんて呼ばれて……いい気になって……」

「誰だってちやほやされば嬉しいもんさ。そしてシリカは……まあ、言っちゃ悪いけど報いを受けた。ピナの死っていう大きな報いにな」

「……………」

じわ…とまたシリカの目じりに涙が滲む。

キリトが「おい……」と何か言おうとしたが、俺は「けどな」と遮ってさらに言葉をつむいだ。

「もう2度、同じことは繰り返さないだろ？」

「ミストさん……」

「ピナが生き返ったら、ちゃんとやってあげないとな。「死なせてごめん。庇ってくれてありがとう、また会えて嬉しい」って」

「……………はいっ」

その言葉にシリカはもう泣くのを止めた。浮かぶ涙を指で拭い、しっかりと頷く。

「……………」

「なんだよ、キリト？」

「いや……言おうとした事言ってくれるから、俺の出番ないなあと」

「えっと……なんかごめん」

ちよつと寂しそうなキリトに罪悪感がわいて頭を下げる。俺本当にキリトに謝ってばかりだな。

「と、ところでどうする？ 当日の移動を考えると現地の宿を使うって方法もあるけど」

「とは言っても夜も遅いからな……今日はここで1泊でいいんじゃないか？」

「そうですね、ここってチーズケーキが結構いけるんですよ?」

「ははあ、シリカの目的はそれか」

「い、いえっ。別にそんなんじゃないよ……」

顔を真っ赤にしながら慌てて否定するシリカに俺とキリトは揃って笑った。そこへ――

「あらあ? シリカじゃない」

またも誰かがシリカを呼ぶ。しかしその声を聴いた瞬間、シリカは目を伏せていた。

見れば、どつかの新機動戦記にいたピエロみたいに前髪で顔半分を隠した赤い髪の女と、その後ろには連れらしい3人の男がいる。

こいつ……確かロザリアだな。グリーンのカースルだけど、その実はオレンジギルド「タイタンズハンド」のリーダー。

他の面子は……いないらしい。そもそもこんな街中に堂々とオレンジがいるはずないか。

「へえ。じゃあ「思い出の丘」に行くんだ。でもアンタのレベルで行けんの?」

「行けるさ。そんなに難しい難易度じゃない」

俺が周りに警戒をしていると話ほんぼん進み、シリカを嘲笑するロザリアにキリトが間に立つ。

「行こう、シリカ。ミスト」

「はい……」

「……悪い、俺ちよつと雑貨屋でアイテム揃えてくる。遅くなるかもしれないから、2人は先に休んでいてくれてもいい。何か用事あったらメッセージ飛ばしてくれ」

俺たちを促して宿に入ろうとするキリトに、俺は思い出したように言っただけ行動を取らせてもらった。

マップを開いて雑貨屋の位置を確認すると、そこで一通りの回復アイテムなどを購入してポーチに詰め込み、今度は転移門広場に向かう。

今のままじゃダメだ。レベルこそ異様に高いし装備も最高クラスだが、俺自身が完全に素人。この世界に慣れていない。

早くこの世界に慣れる為には……実践しかない。

幸い、明日の目的地は分かっている。下見ついでに腕慣らしと行く。

「転移。フローリア」

転移門で行きたい主街区を言った瞬間、俺は青い光に飲まれる。

一瞬の浮遊感を経て、俺はどこまでも花が咲き誇る花畑の街にやってきた。

「ここが……通称フラワーガーデンか」

初めての転移もそうだが、目の前に広がる風景に心奪われる。

夢の国……シリカが思わずそう言ったのも頷けるな。

……そしてこんな時間なのにカップルが多いこと多いこと。

「(お前ら全員圏内で爆発しろっ!)」

口には出さずに心の中で砂糖を吐き出さんが如く吠える。圏外で爆発なんてしたら皆死ぬからな。その辺を配慮した俺の一欠けらの優しさに感謝してもらいたい。

つつーわけで……目的地の「思い出の丘」に行くのもいいが……迷宮区って言う方法もあるな。幸いにも転移結晶など緊急時に必要なアイテムは揃っている。つつーかストレージ見たときはびっくりした。俺がやっていたM M O R P Gで入手した素材とか無い代わりにこつちでの素材やアイテムに変換されていたし、金なんて1千万あった時は「0多すぎないか」と疑ったもん。

とにかく、どっちに行くべきかな……マップを見ると「思い出の丘」は分かりやすい1本道だけど。迷宮区に行けば運よくレアアイテムをドロップできる可能性だつてある。

「よし……ここは安全を重視して目的地の方に行こう」

及び腰になったわけじゃないぞ。念のため。これは下見だ。

マップを頼りに主街区を抜け、フィールドに出てくる。しばらく歩いていると早速ポップが起きて、さながらマ○オのパッ○ンフラワーみたいな植物のモンスターが出現する。

「早速お出ましかー」

すぐに剣を抜いて身構える俺。足元からモンスターが触手を伸ば

して捕まえてこようとするが、その前に俺は横に飛ぶ。

ここまで来る道すがら、こっちはスキルをある程度は確認していたんだ。何しろ俺の命がかかっているからな。

構えて軽く力を溜めると、剣がオレンジ色のライトエフェクトに包まれる。ステツプインで一氣に間合いを詰めた瞬間、俺は力を解放した。

独楽のように回りながら袈裟懸けに3連撃。ソードスキル「シャープネイル」が炸裂してその名のとおり鋭い爪のような軌跡をモンスターに刻み込む。

このレベルでしかも連撃技なら、一撃かとも思ったが……狙いが悪かったかはたまた別の要因か、パツ○ンフラワーモードキは意外にも生きていた。

「だったらこれで！」

だが何事も保険は重要。だからこそ硬直が少ない「シャープネイル」を使った。

再び剣が青いライトエフェクトに包まれ、触手を横ステップでやり過ぎすと同時に飛び込みながら水平単発ソードスキル「ホリゾンタル」を浴びせる。

すれ違いざまにモンスターに刃が深く抉り込み、そのまま思いつきり斬り飛ばしてやった。

「っしー」

今度は何となく済み、ガツツポーズをする俺。

そのまま勢いに乗り、出てくるモンスター全てを片っ端から蹴散らす。夜間になれば出現率が上がるのは当然だが、こっちのステータスの高さやバトルヒーリングスキルのおかげでたいしたダメージも受けていない。

これが前線だったら、また違う結果になるんだろうが……一応俺、攻略組って言った手前この程度じゃまだまだだよな。

「実際にはシリカにも劣る素人だからなあ……」

ポツリと呟きながら道を歩いていく。と、いきなり俺の足元からモンスターがポップした。な、なんだこのイソギンチャク!?

「おわっ!?!」

抜け出そうと思っても中々抜け出せない。触手が絡みついてきて俺を縛り……って触手プレイとかそんな趣味無いぞ俺!」

「ゆ、油断したー!?!」

ダメージこそ微々たるレベルで、おまけにすぐ回復するから大した敵じゃないんだが……とにかく動きを封じられてはどうにも出来ない。

ちよ……待ておい!? だから俺にはそんな趣味はないと……あ
あつ……ら、らめー!?!

「ふっー!」

いろんな意味でピンチに陥っていた俺に、さっと誰かが触手プレイしていたモンスターを切り裂く。

その一撃は1発でモンスターのHPゲージを0にし、ガラスが砕け散るような独特の音と共にポリゴンが崩壊。モンスターの上には俺は地面に尻餅をつく。

「おいおい、攻略組が情けないだろ」

「キ……キリト? どうしてここに?」

「今パーティー組んでいるから追跡できるだろ。いくらなんでも来るのが遅いと思ったら、こんなところに来てしかも不意打ち食らってるし」

「いや……はは。悪い悪い、足元から来るとは思わなくて油断してた」
「やれやれ……下層だからよかったけど、前線だったら命に関わっていたぞ?」

心配したキリトが俺の後を追ってきて助けてくれたらしい。何はともあれ助かった。

「それで、どうしてここに? シリカがいなきや復活アイテムは手に入らないのに」

「ちよっと下見にな。ついでにモンスターのチェックと腕慣らしを」
「だからってこんな夜に来なくてもいいだろう……?」

呆れてため息をつきつつ、キリトは手にしていた剣を背中のお鞘に収める。

本当は違うんだけど……まあ、あの場で色々話すのはキリトに譲っておこうと思った。なんかことごとく台詞取っちゃって申し訳なかったし。

「シリカはどうしたんだ？」

「もう休んだよ。俺がここの説明したあと」

「そっか。子供は早く休まなきや……つと、これを本人に言ったら怒られるな」

「言わない方がいいぞ、それ」

慌てて口に手を当てる俺を、キリトは苦笑いして言う。

けどすぐに真面目な顔になると、俺の行動を咎めるように言葉を紡いだ。

「けどミスト、お前の行動は軽率すぎる。さつきも言ったとおりここは前線じゃないし、大して強くないモンスターと言つても……お前はPKされかけたんだぞ？　もうちよつと危機感持たないと」

「あ……ああ、そうだな。すまなかった」

それはただ言葉にする以上の思いが込められているような気がした。

キリトは前に自分のレベルを偽ってギルドに加入し、そこにいたギルドを壊滅させてしまった過去があったんだっけ。だからなおさらパーティーの生死には過敏になっている。

けどキリトは俺がそのことを知っているとは思っていないはずだ。

……だったら

「なあ……キリト。なんかさ、お前のその言葉、重みがあるような気がするんだけど……俺の気のせいか？」

「それは……」

知り合ってしまった以上、やはりその苦悩を少しでも軽くしたい。

俺の質問にキリトは気まずげに目を逸らす。まだ引きずっているのなら言いたくはないのかもしれないけど……。

「一時的とはいえ、今俺たちパーティー組んでるだろ？　俺でよければ話くらい聞いてやるし、もしかしたらアドバイスできるかもしれない。知り合ったばかりの人間にそう言うの話すのは……やっぱ嫌

「かもしれないけどさ」

「…………ごめん。気持ちだけは受け取っておくけど、今はまだ話せない…………」

「そ…………つか。凶々しい真似して悪かったな」

「良いんだ。気を使ってくれてありがとう」

「やっぱり知り合って間もないからすんなり話してくれるわけには行かないか…………とはいえこれからちよつとずつでも仲良くなれればいいけど。」

「そうだキリト、フレンド登録しよう。同じ攻略組なんだし、時々コンビ組めれば安全マージンとか格段にあがるだろ？」

「え？ ああ、そうだな…………」

とりあえずさつきの話題は明後日に投げ、指を振ってメニューを開くとそのまま操作してフレンド申請。向こうが申請を受けてくれて登録完了…………したらキリトは何か見て目を疑っていた。

「ミ、ミスト…………」

「ん？」

「お前ってレベル80だったのか!？」

「そ、そうだけど？」

「俺より高いじゃないか…………どんなレベルリングしたらそうなるんだよ」

「えつと…………気づいたらこんなに？」

「やっべー、俺のアバターってこの時点のキリトより上なのかよ!？」

失念してた！

「お、おまけになんだこのレアアイテム…………エリユシデータと同じ魔剣クラスの剣にステータス高補正の防具とか、90層クラスのボス相手にも通用するんじゃないか？」

「(マジでか)」

つまりこの段階では、俺のアバタースペックはキリト以上ってことになる。中身はそれに追いついていないけど。

確かにあのMMORPGでも大型レイドボス討伐報酬とか、限定アイテム素材で作った装備だったけど…………まさかここまでとは。けど

あのゲームじゃ俺よりも凄まじい猛者なんてうじゃうじゃいたし、俺精々中の上か上の中くらいだと思ってたんだけど。

「凄いな、ミスって……どうやってこんな手に入れたんだ？」

「え、えーっと……フィールドボスとかのラストアタックボーナスとか、クエストとかトレジャーやったら偶然？」

「偶然って……SAOには幸運値無かったけど、あつたらお前の幸運値を見てみたいよ」

呆れたような、それでいて感心したようなキリトに俺は内心冷や汗が流れるのを止められない。

「け、けどこれで俺が攻略組って言う信憑性は増したってことだし……結果オーライってことで！」

その後、キリトと共に「思い出の丘」の下調べを済ませ、徒歩でゆつくりと主街区に戻る俺たち。当然出てくるモンスターはことごとく狩り、だいぶ俺も慣れて来た。

「なあキリト。例の「タイタンズハンド」の事だけど……」

「ああ。どうした？」

「いや、そのギルドってどの程度危険な連中なのかって思ってな。オレンジギルドとは聞いたけどさ、結構やばいのか？」

「オレンジって言うだけで十分危険な連中だな。まあ、ラフコフに比べたら小物になるだろうけど」

「ラフコフ？」

「「笑う棺桶（ラフィン・コフィン）」だよ。誰も知っている殺人を平気で行うレッドギルド」

「あの朝○ツクで出て来る……」

「それはマフィンとコーヒード。……突っ込んだら結構似てるって思うようになってきたじゃないか」

まあ、冗談はさておいて俺もラフコフは知っている。

確かリーダーの名前は「POH（プー）」ってふざけた名前の奴で、この時点じゃまだ健在だったか……。

「どっちにしても放置はしておけない。目もつけられたようだしな」

「あのロザリアってオバさんだろ。目を見れば分かるさ。ドス汚く濁ってた。シリカの事を狙っていたみたいだし」

「ああ……だけど、そんな事はさせないさ。絶対に」

「俺だって同じさ。手を貸すよ」

「けど……これは俺の頼まれた事だぞ？ ミストには関係ないし……」

「今更他人は勘弁してくれよ？ こっちはもう関わってるんだし、シリカまで狙われてるんじゃないかとけるわけじゃないじゃないか。少なくとも、壁役はお前より適任だろ？ 盾なし片手剣」

「そう言われたらそうだけだな……」

けどキリトが盾を使わないって言うのはれっきとした理由がある。

この世界で最高の反応速度を持つものだけが使う事のできるユニークスキル《二刀流》。ラスボスはこのスキルを持つものを勇者ポジションにしたかったらしい。

そう言えば……ユニークスキルって他にもあるんだよな。鉄壁の防御を誇る《神聖剣》、そして圧倒的手数と攻撃力の《二刀流》と……あと《射撃》もあるらしいけど、残りの7つは結局不明のままだ。

けどまあ、俺には到底縁のない物だろうな。そんな凄腕じゃないし。

「(でも……いつかは)」

今は嘘でも、必ず本物にしたい。キリトたちと肩を並べて戦えるように。

そのためにももつともつと強くならないといけない……アバター
の強さじゃない。それを扱う俺自身が。

「ミスト？ どうかしたか？」

「ん？ いやなんでも。街が見えてきた、もうすぐだな」

「ああ……早く宿に戻って休もう」

とりあえず現時点で危険そうなものはなかったことだし、明日は何の滞りもなく進むはずだ。

ミーシエの宿屋に戻った俺とキリトは各自の部屋に戻り、俺は装備も脱がずにそのまま横になるのだった。

翌朝、宿屋前で2人と合流し、再度フロリアへ。フロリアへ来るのは初めてだったシリカはその景色に目を奪われている。

「しかし……まあ」

「どうした？」

「昨日も思っただけどカップルの多いこと……圏内で爆発しやがれ」

「おい、物騒なこと言うなよ……」

「圏内に限定したのはリア充たちに対する俺なりの優しさだ。キリトは思わないのか？」

「別に……そんな風には考えた事なかったかな」

「はっ。ここで彼女できたら誘ってピクニックにでも来たらどうだよ？ きつと大喜びするぞ？」

「検討しておくよ……と言うかそもそも、この場合俺たちってなんだ？」

「俺たちは……」

女の子（シリカ） 1人に男（俺とキリト） 2人……。

「妹とピクニックに来た兄2人」

「……的確すぎる」

「何が的確なんですか？」

転移してきたその場から1歩も動かない俺たちに、シリカが下から覗き込むようにしながら訪ねてきた。

……うん。どう頑張っても妹だ。この時点でキリトは16歳で俺は17歳。そしてシリカは15歳……だったっけ？ イエス・ロリータ・ノータッチ。まだ蓄を取ってはいけません。

「い、いやあ、なんでも。なあミスト？」

「そ、そうそう。いい天気だなんて話してただけだ、うん！」

「??？」

肩を組んでどうにかごまかす俺たちをシリカは不思議そうに首を傾げてみている。

まあ、その後の進みは極めて順調。スイッチの練習も出来たし、シリカもレベルが上がったし問題はない。目的の蘇生アイテム「ブネウ

マの花」も無事ゲットし、さあ帰ろうと街に戻ろうとする。

……が、橋の最後に来たあたりでキリトが足を止め、手を出して俺たちを制した。

「隠れてないで出てきたらどうだ？」

キリトが言うと同時に、俺は剣を抜く。こいつの索敵スキルを甘く見ちゃいけない。あのS級食材「ラグーラビット」を発見するほどの腕だ。

観念したわけでもない、悠然と槍を持った赤髪の女……ロザリアがその姿を見せる。

「ロザリアさん……!？」

「その様子だと首尾よく「プネウマの花」をゲットできたみたいねえ……おめでどう。じゃ、早速花を渡して頂戴」

「アンタに渡す義理も道理もないね」

明確なまでも拒絶のオーラを放ってロザリアをけん制する。

そしてその正体をキリトが明かすと、ロザリアは面白そうに目を細め、聞いていたシリカは信じられないようにロザリアを見やる。

確かにロザリアのカーソルはグリーン。けど簡単な手口だ。グリーンのメンバーが獲物を見繕い、オレンジが待ち伏せているポイントまで誘い出す。PKじゃ比較的メジャーなパターンだな。

「こいつは仲間になった振りをして、ずっと獲物の品定めをしていたってことさ」

「何もかもお見通し……ってことみたいね。けど、そこまで分かかってその子に付き合うなんてバカア？ それとも本当にたらし込まれちゃったの？」

「別に？ ただ2人には迷惑をかけたからな。俺はその詫びで付き合っていただけだ」

「俺はアンタを探していたのさ。ロザリアさん」

そもそもキリトが前線を離れてここへ来た理由……それはある人物に頼まれたからだ。

10日前、「シルバーフラグス」と言うギルドが「タイタンズハンド」に襲われてリーダーを除き全滅した。リーダーの男は朝から晩まで、

最前線の転移門広場で泣きながら仇討ちをしてくれる奴を探して……それを請け負ったのがキリトだったんだ。

そいつはこいつらを殺すんじゃない、牢獄に入れてくれと……このデスゲームで出来た信頼できる仲間を殺された悲しみ、憎しみは俺には想像もつかない。

これがただのゲームなら、復活して何やってんだよ、と笑われて終わるだろう……けど、ここでの死は現実での死。死者は蘇る事はないんだ。

こいつは……こいつらはそれを、分かってないのか？ 今のこいつらにとっては、ゲームであるはずのこの世界こそが現実だってことに。

何がこいつらを狂わせた？ このデスゲームが人を狂わせたのか……？

パチン、とロザリアが指を鳴らすのを合図に、隠れていたほかの7人のメンバーが姿を見せる。それぞれのカーソルはオレンジに染まっただけ。

「合計8人……か。お前の依頼主もどれだけ悔しかっただろうな……本心は殺してくれて言いたいのかもしれないのに」

「ああ……そうだな」

読んでいた限りキリトにとって大した脅威ではなかった。

なら今の俺にも、大した脅威じゃないはずだ。

「キリト……少し、俺に任せてくれないか？」

「ミスト……？」

「こいつら1人残らず生かしたままって言うのは分かる。けどそれじゃあ、俺の腹の虫が納まらない。こいつらのやって来た報いを受けさせないと気が済まないんだ」

「それは俺も同じだが……殺すなって言われているんだぞ？」

「ちゃんと約束は守るさ。万一、俺が頭に血が上りすぎて歯止め利かなくなっていたら……お前が止めてくれ」

「……分かった。少しだけ、だからな」

俺の怒りにキリトは少し被りを振って許可をしてくれた。

しかし、たった1人であの大人数を相手にしようという無謀にも見える俺の行動に、シリカは悲鳴に近い声を上げて制する。

「1人でなんて無茶ですよ！ 2人とも逃げましょう！」

「大丈夫。キリトよりは防御力高いし」

「俺は回避型だからいいんだよ……」

からかうようにキリトを引き合いに出すと、そう言われるのは不満なのかキリトはむっと頬を膨らませる。

それに謝ってから、俺は2人に背を向けて歩き出した。

「ミストさん！」

「大丈夫大丈夫、最前線最強のキリトには劣るけど、俺もこれで攻略組の1人だから」

「こ……攻略組!？」

俺の言葉を聞いた何人かがその単語を聞いて表情を変える。

攻略組……最前線で活躍する、このSAO内での最強クラスの集団。そしてその中でもキリトは「黒の剣士」と呼ばれる最強の男。

そして俺も、ハリボテだが攻略組を名乗った。あいつらには結構な動揺が走っただろう。

「ロザリアさん、攻略組が相手じゃ分が悪いんじゃない……」

「攻略組がこんなところにいるわけじゃないじゃない！ どうせハツタリでしょ！」

「ハツタリかどうか……その目で確かめろよ。なあ、お前ら……そんな平然と悪になったんだ。なら報いを受ける覚悟は……当然あるんだろう?」

「報い? あんたが報いを受けさせるって言うの? たった1人で、8人を相手にして?」

「数なんか大した脅威じゃない……どうやら、お前たちは自分の置かれた状況を理解してないみたいだな。俺から言えるのは……そうだな、この言葉を贈らせてもらおう」

かつて、リアルタイムではまったあの半分ライダー。彼らが街を泣かせ続ける悪党どもに、投げかけ続ける「あの言葉」……。キザであるが、今回くらい特別だ。

「さあ、お前たちの罪を……数えろ」

「ふん！ とつとと始末して、身包み剥いじやいな！」

ロザリアの命令に男たちは武器を構えなおし、それぞれが様々なカラーのライトエフェクトを発する。誰かが吠えたと同時に、男たちは一斉に俺に襲い掛かった。

側面からならまだしも、盾持ちの相手に真正面から……馬鹿じゃないのかよ。

けどこつちも、2人にああいった手前引き下がれるか！

ぎゆうつと両腕に力を込めた瞬間、「剣」と「盾」がライトエフェクトの輝きを放つ。これって……!?

「——はあああああつ!!」

驚きはしたが、そのままにするつもりはない。

俺は吠えながら1歩踏み出し、同時に両手を前に突き出す。

赤いライトエフェクトとジェットエンジンのような音と共に俺は集団目掛け突っ込んだ。

お互いモーション中で回避は間に合わない。かち合いになれば

……

「おがあつ!？」

向こうの迎撃よりもさらに早く、片手剣重単発ソードスキル【ヴォーパル・ストライク】が7人の男たちをボーリングのピンのように弾き飛ばし、その勢いのままロザリアの喉元に盾と剣を突きつけた。

「……………」

「お前たちの負けだ。武装を解除して投降しろ……」

静かに告げられる言葉。

だがロザリアは俺との圧倒的な力の差を理解し、手にしていた槍を手放すのだった。

「凄かったな、ミストのスキル。俺も見たことがないよ」

「いや、俺もはじめて見た」

「「ええっ!？」」

ロザリアたち「タイタンズハンド」のメンバーを監獄エリアに設定した回廊結晶で飛ばし、キリトの方の依頼も無事に終わって一度宿屋に戻った俺たち。

話題となるのは当然、俺の発動したスキルなんだが……俺だってあの時偶然発動できて驚いた事を伝えると、キリトもシリカも意外そうに俺を見つめてきた。

「いや、まさか盾でソードスキルが使えるとは……最初は攻撃をパリイしようかと思ってたのに」

「気づいてなかったのかよ……」

「だって盾でソードスキルだぞ？　なんだって……あ」

呆れて突っ込むキリトに言いつつ、俺はスキル画面を呼び出してスクロール……すると、見慣れない文字がスキル一覧にセットされていた。

「どうした？」

「いや、これ」

俺の反応を見たキリトに、俺はウインドウを透過させて2人に見せる。2人は顔を寄せてそれを覗き込んだ。

「《盾剣技》……？」

「盾でソードスキル撃てたのは、こいつのおかげみたいだ」

説明には「一部の盾を使うことでソードスキルの一部が使用可能になります」と書かれている。

「どうやって出たんだ……？」

「俺が聞きたいって。エクストラスキルみたいだし、出現条件不明なのはよくあることだろう？」

「ユニークスキル……なんででしょうか？」

「それだとヒースクリフの《神聖剣》と被るし……《神聖剣》が「静」なら、《盾剣技》は「動」……より攻撃型のスキルなんじゃないか？

俺《体術》習得してるし」

「可能性は十分あるな……けどこれ、場合によってはユニークスキルに匹敵するレアものかもしれないぞ。両手でソードスキルが使えるってことは単純に攻撃力が上がるってことだし、スキルの硬直をス

キルでキャンセルする事も可能になるわけで、ミストが同時に使ったように同時に使えば効果は単純計算でも倍増。フェイントを仕込む事も可能になって……」

「近い近い近い近い近い。落ち着け、そして離れろ」

「キ、キリトさん……」

興奮気味に語りだすキリトに俺は寄せられた分を離しつつ頭にチョップを入れて大人しくさせ、シリカは苦笑いしながら若干引いていた。

「ご、ごめん。ちょっと興奮して……と、とにかく。そのスキルがあれば攻略にも随分貢献できると思うってことなんだ」

自分の行動にキリトは顔を赤くして謝りつつ、とりあえず簡単にまとめる。随分端折ったなあ……恥ずかしかったのか。

確かに凄いスキルだと思う。言ってしまったえば擬似的な《二刀流》だ。《二刀流》専用のソードスキルは使えないだろうが、似たような事は可能になるはず。

「けど、2人とも凄いですよね……前線なんてあたしにはとてもじゃないけど……今だって怖いのに」

「凄くなんかないさ。怖いのだって変わらない。この世界においては最前線だろうと中層だろうと、死ぬ時は死んでしまう」

最初に戦った時は興奮していたが、落ち着いて熱が冷めてくると途端に怖くなった。

「これはゲームであつても遊びではない」

このゲームを生み出した茅場晶彦が残した言葉の意味が、その時々ようやく理解できた。

ここでの死は現実での死……急速に現実味を帯びていくこの仮想現実での出来事。もはやここはリアルと言つて過言でもない。

体験したからこそ分かる事がある。この世界で怖くない場所なんて、きつとないんだろう。

「……そうだな。ミストの言うとおり……危険な事には変わりない。だけど俺たちは戦わなきゃいけないんだ。この世界から脱出するために」

「やっぱり……行くんですね」

「5日も前線を離れていたからな……遅れを取り戻さないと。ミストはどうするっ？」

「俺は今日ここで1泊してから、かな。このまますぐ前線に行くほど気力はない」

「そうか……俺は今日中に戻るつもりだけど、その前にピナを呼び戻してあげないとな」

「……はいっ」

シリカは頷き、テーブルの前に立つとアイテムストレージから青く光る羽……「ピナの心」を出し、それをそっとテーブルに置くと次に出した「プネウマの花」から1滴の雫を落とす。

すると羽から黄金の光が部屋を包み込んでいって――

第3話 赤と赤のデュオ

第3話 赤と赤のデュオ

前回のあらすじ：

サイクロン！ ジョーカー！

第50層迷宮区。

バトルアックスを両手に持ったミノタウロスの振り下ろした攻撃を、俺は盾で受け流しつつ、受け流した反動を利用したステップ移動と共にその横っ腹に剣を叩き込む。

血飛沫代わりの赤いポリゴンエフェクトと共にミノタウロスは怯み、続けて俺はソードスキル【ホリゾンタル】を使ってその左足——の、正確には膝関節を狙って——を斬り飛ばした。

「スイッチー！」

「はいっ！」

俺の合図と共にシリカが倒れこんだミノタウロスの上に飛び乗り、その喉元にダガーを突き立てる。

急所を突かれたミノタウロス。シリカはダメ押しとばかりに4連撃ソードスキル【ファッド・エッジ】を発動し、今度こそミノタウロスへ止めを刺した。

戦闘が終了してリザルト画面が表示され、経験値とコル、あと素材の《牛人の角》が手に入る。

「よーし、いっちゃあがりつと。中々良かったんじゃないか？ シリカ」

「本当ですか？ ありがとうございますっ！」

剣を収めながらそう言うと、シリカは嬉しそうに頭を下げる。もちろんその頭の上には使い魔兼友達のカエザードラ「ピナ」も一緒だ。

え？ なんでシリカと一緒にいるのかって？ それはおおよそ1週間ほど前に遡るんだが……。

無事にピナの復活を見届けて、キリトは一足先に前線へ帰ってし

まった。転移門までシリカと一緒にキリトを見送って、さて宿に戻って飯でも食おうかと思っていたところ……。

「あの、よかつたらご一緒しませんか？ ピナを呼び戻してくれたお礼がしたいんです」

「え？ いいって、お礼なんて。そんな大したことはしてないし」

事実、ただ2人に付き添って復活アイテムを取りに行っただけの俺にそんな事をする必要はない。むしろお詫びに俺が食事に誘ってもいいくらいだと思う。

「そんな事ないですよ。ミストさん、昨日の夜に思い出の丘に行つて、危険がないか確認してきてくれたんですね？ 私のために」

「そ、それってキリトが喋つたのか？」

「はい……それに、私のためにロザリアさんたちと戦つてくれて……その、凄くかつこよかつたですし」

「か……カツコいいってそんな」

生まれて初めて女の子にそんな褒められた。彼女いない暦11年齢と同じ、趣味はネトゲとアニメに特撮鑑賞だったインドア系の俺が、こんな可愛い子にカツコいいって言ってもらえた……。

「奇跡も、魔法もあるんだな……」

「はい？」

『きゅーー！』

「いたつ、イタイイタイ！ なにごと!？」

「ピ、ピナ!? どうしたの？ ダメだよ、突いたらー!」

感動のあまり某有名なセリフを言ったらなぜかピナに突かれる。そのことに飼い主のシリカも驚いて慌てて胸の中に抱いて押さえつけた。

「ごめんなさい、ピナは普段こんな事しないはずなんですけど……もう、ダメだよピナ？ この人はあたしたちを助けてくれた恩人なんだから」

『きゅー……』

「お、俺に対する突っ込みか……?」

大人しくなったピナはそれを肯定……と受け取っていいのだろう

か? とにかく頷くような仕草をする。どうやら突っ込みは厳しいらしい。

「あの……それで、お礼なんですけど」

「え? ああ、そうだな……じゃあ、シリカの気の済むようにしてくれ」

「本当ですかっ!?!」

こりや俺が折れる以外ないだろう。そう思って口にするると、シリカはぱあつと嬉しそうな顔を浮かべて俺を見上げてくる。

ちよ、ちよつとシリカさん……近いですよ。悪い気はしないけど、けど蓄を取っちゃいけません! ダメ! ゼツタイ!

『きゅっ(ガプッ)』

「ふっおっ!?!」

「ミ、ミストさん!! もう、ピナったらダメだつてばあ!」

俺のやましい下心を感知したのか、シリカの頭の上に乗ったピナが思いつきり鼻の頭に噛み付いてきた。圈内だから痛くないけど、どうやらピナはシリカの事を守っているらしい。こりや上層のフロアボスよりも下手したら手ごわいかもしれない。

宿に戻ってシリカにご馳走してもらったあと、俺は宛がわれた部屋で横になった。

「なんとか、ピナを生き返らせることは出来たなあ……」

おまけにキリトと友達になれたし、もう幸先がいいとしかいえない。いやあ、よかったよかった……

「——っじゃねえって!」

がぼつとは寝起きつつ自分で自分に突っ込む。

そうだよ! 俺なんでこんな物騒な場所にいるの!? なんで!?

やつぱり夢って……いや昨日寝て覚めてもここだったし! 夢才チでオチないし!

立て続けに色々あってまったく持つて考える余裕はなかったが、今度こそ自分の境遇について考えなければいけない。

なぜ、フィクションである「ソードアート・オンライン」に俺は来

てしまったのか。

原因は？ どうすれば戻れる？ 手がかりはあるのか？

「ぎ……材料が微塵たりともなさ過ぎる」

即座に挫折して「orz」する俺。

だって、寝て起きたらこんなだよ？ 原因とか、わかるはずない

じゃん！

「手がかり……手がかりかあ」

必死にそこまでよくない知恵をフル活用して考え込む。やっぱり、

キーマンは……。

「ヒースクリフ……だよな」

最強ギルド「血盟騎士団」のリーダーにして最強剣士の1人、ユニークスキル《神聖剣》を持つ鉄壁の男……そしてこのデスゲーム「ソードアート・オンライン」の生みの親である黒幕……ヒースクリフこと茅場晶彦。鍵を握るのはこいつしかいない。

幸い、ボス攻略会議に出れば顔を合わせることだってあるはず。こ
うなったら何が何でも最前線に出なければいけない……。

「よし……まずは明日、前線に行こう」

基本動作はこの2日でミッチリ覚えこんだ。パーティー戦のやり
方も今日で覚えた。当分ソロは厳しいかもしれないが、それでもやる
しかないんだ。

幸い、幸運にも俺にはエクストラスキル《盾剣技》がある。これを
使えば1人でもどうにかいける……はず。さらに生存率を上げるた
めに索敵と隠蔽、後は生存能力に堅牢鉄壁を強化しよう。特に戦闘面
では《シールドコーティング》と《バトルヒーリング》でかなり打た
れ強くなるはずだ。

「こんなところかな……」

状態異常耐性のトライレジストやフィジカルビートも場面によつ
ては有効に働くだらう。状態異常をしてくるボス相手には特に有効
なはず。

こうして見るとガッチガチの防御型だよなあ。けど不慣れな俺に
はこれがちようどいい。

「ミストさん、シリカです。起きてますか？」

「シリカ……？ ああ、起きてるよ。ちよつと待つてな」

スキルの設定を終えた頃になって、ノックと共にシリカが呼ぶ声がする。

何の用だろう……？ 思い当たる節がなくて首を傾げながら、俺はドアを開けた。

「ごめんなさい、こんな時間に……お休みしてましたよね？」

「いや、もう少ししたら寝るところだったから。立ち話もなんだし、入ってくれよ」

俺に促されてシリカは部屋に入ってきて、勧められた椅子に腰掛け、俺はベッドに腰を下ろした。

「それでどうしたんだ？ お礼ならもう十分すぎるくらいしてもらったぞ」

「いえ……そうじゃなくて」

シリカはどこか恥ずかしそうに、それでいて言いづらそうにもじもじしている。

なんだろう。シリカは一体なにがしたいんだ？ 皆目見当がつかない俺はただ首を傾げるだけだ。

「助けていただいた上に、こんな事を言うのは凶々しいかもしれないですけど……」

「んー、まあ話聞くだけでも聞くけど？ と言うか、聞かなきゃ判断つかないし」

「……じゃあ」

その時の俺は、この時シリカが何を言うか分からなかった。分かっていたら聞こうとしなかっただろう。

なぜなら、シリカの頼みは――

「――あたしを、前線に連れて行ってくれませんか!？」

「……はい？」

俺の想像の斜め上を行ったものだったのだから。

「ぜ、前線に連れて行けって？ シリカを？」

「はい……」

「なんでそんな事……シリカのレベルじゃ前線は厳しいし、何よりこのことは比べ物にならない危険だ。分かっているのか？」

「分かっています……けれど、ミストさんは言いましたよね。「最前線だろうと中層であろうと、死ぬ時は死ぬ」って」

「言ったけどさ……」

だからと言って俺の場合とシリカの場合では状況が違いすぎる。俺は幸いステータスに恵まれていて攻略組の誰かと組んで前線に挑めるが、シリカはレベルも装備も低い。特にレベルは俺と半分近い差がある。

そんな状態で前線に挑んでも……死んでしまうのがオチだ。無謀すぎる。

「理由はあるんだよな？」

「……このまま、誰かがゲームクリアしてくれるのを待っていたらダメだって思ってたんです。ミストさんとキリトさんの2人が攻略組だって聞いて、戦っているのを見て……凄いつて思いました。攻略組なんて私のレベルじゃとてもじゃないけど無理だろうなって、そんな所で活躍している2人が凄いと思つて……でも、ミストさんの言葉で気づいたんです。前線にいる人たちも私と変わらない。それどころか、もつとたくさん怖い思いをしているんだって」

「……………」

確かにシリカの言うとおり、前線のほうが危険度ははるかに高く、死ぬ可能性も高くなってくる。どれだけ万全を期そうとも、結局は想定外のこと起きれば死ぬ可能性があるはず。

それでも、この世界から解放される事を望んで彼らは今も戦い続けている。自分たちが手のひらで踊らされているのを分かっているがらも。

「だから、あたしも……そんな人たちの力になりたい。もう「竜使いのシリカ」なんてもてはやされる自分と、決別したいんです！」

「……死ぬ可能性は格段にあがるぞ」

「分かっています」

「俺がお前を守る保証だってない」

「承知の上です」

「……………はあ」

シリカの固い決意の前に俺はため息をついた。何をどう言っても、折れるつもりはないらしい。

まさかこんな形でストリーを外れる展開になってしまおうとは……………やらかしたな俺。

どうする……………問題はシリカのスペックだ。このまま挑んでも無駄死にする可能性のほうが大きい。特に装備は現状どうにかなるにしても、HPが最大の問題だ。

俺のHPは15,890……………キリトと違ってVITを優先的に振っているからやや高い。スタイル的にも盾持ちの片手剣だから、このくらいはあってもいいだろう。むしろこのゲームならHPがいくらあっても困る事はない。

対してシリカは10,000にも満たない……………元々敏捷重視の短剣使いだからその辺りが低いのは当然だが、このままじゃ低すぎる。せめて10,000以上は欲しい。

そのためにはレベルを上げないと……………最低限安全マージンを超える程度には。この時期だと56層くらい……………シリカのレベルが45だから……………21も上げなきゃいけないのか。これは相当骨が折れる上にハードなレベリングが必要になるぞ。

まずは経験値効率のいい狩場と、所得経験値のブースト……………何かいい方法はないか？

「ちよつと待っててくれ」

一旦シリカに断ってから、アイテムストレージに収納していたガイドブックを取り出して情報を読み漁る。

えーつと、スキルスキル……………そしてバトルスキルで……………お、いいのがあった。これを俺は……………覚えてる、と。

ブック片手にスキル画面を確認して頷く俺に、シリカはどうしたのだろうと首を傾げる。俺はブックを閉じてまたストレージに収納すると、咳払いをして口を開いた。

「そこまで言うなら、分かった。シリカを前線に連れて行く」

「本当ですか!？」

「だけど今のままじゃレベルが低すぎる。先を見越して、57層の安全マージンまでレベルを上げていく」

「57層……22もレベルを上げなきゃいけないですね。でも……」

「そこで、経験値をブーストできる良い方法がある。バトルスキルに《ゲインエクスペリメンズ》と《クライムサーバント》ってものがある。前者は得られる経験値を増加し、後者は所得経験値を全部パートナーに献上する。つまり俺が得た増加経験値を、シリカに全て渡して強引にてこ入れするってことだ」

「ぜ、全部の経験値をですか!? けど、そうしたらミストさんの経験値が……」

「俺は今80だし、安全マージン限界までは当分余裕がある。クォーターポイントも過ぎているし、マージン以上のレベルを上げる必要性は当分ないだろう。けど、俺もいつまでも前線を離れるつもりはないからな。結構ハードな道のりでシリカのレベリングを行う。それでいいか？」

「ミストさんは……あたしが前線に行くのを許してくれるんですか？」

「許したわけではないけど……決めたのはシリカだ。説得こそすれ、却下する権利は俺にない。けれど俺の言う事はちゃんと聞く事。危ない事はしない事。単独行動はしない事。これを守るなら、最前線に連れて行く」

「……ありがとうございます、ミストさんっ!」

ぱつと明るい表情を浮かべたシリカ。そして感極まってそのまま俺に抱きついてくる。

初めて女の子に抱き突かれた俺はそりやもうロケット花火みたいに飛ぶとか、目玉飛び出てビーム出たとか、まあそんな感じで内心では小躍りしたいほどヒヤッホーウ! な気持ち……ではあったが、最終ボスピナと俺の理性が総動員して押し留めた。

諸君、イエス・ロリータ・ノータッチだ。蓄は取ってはいけない。紳士に、紳士に行こうじゃないか。でもシリカって俺と大体3つ違いな

んだよな……いやいやいや、中学生ならいいのかってわけじゃないだろ！

……とまあ、そんな事があって現在レベリング中。俺も得られた経験値は全てシリカに譲渡され、しかも所得経験値増加スキルによってここ数日でえらい勢いでレベルが上がっている。何しろ50台を突破してるんだから。

最初こそ不安に思ったが、シリカのレベリング作業は俺にとっても都合が良かった。《盾剣技》に対応するソードスキルが何なのか、実際に使って確かめられたから。

とりあえずまとめると、キリトの言うとおりスキルの同時使用や連携は可能だが、盾によって対応するソードスキルとしないソードスキルがあり、例えば現在装備している盾は突属性に対応し、「シャープネイル」や「ホリゾンタル」などの斬撃系には対応していないという事だ。

そしてこの場所を選んだわけは、情報屋のアルゴに幾つか条件（パーティー人数とスタイル、レベルなどなど）を設定し、代金としてコルに加えて《盾剣技》の情報を無償で提供した結果でもある。ここなら俺がいればシリカの安全は十分確保できるし、おまけに俺は堅いしシリカはピナの回復スキルのおかげで見た目よりは耐久力もある。まあ、俺が注意をこっちにひきつける盾持ち専用スキル《シールドバッシング》とかパーティーメンバーの防御力を上げる《ディフェンスコールド》で防御力の低いシリカを補うし、今のところはうまく行っている。

うまく行っていると言えば、シリカとの関係もだな。元々懐かれていたほうとは思ったが、兄みたいに慕ってくれるのはやっぱり嬉しい。ピナさんとは……ちよつとは距離も縮められたらどうか。噛まれたり突かれたりする事も少なくなっただし。

……「お兄ちゃんって呼んでもいいですか?」と上目遣いで言われた時にはくらくたと来たが、ピナさんが怖かったので丁重にお断りした。

「今日はここまでにしておくか……一旦安全エリアまで戻って休んだら、街に戻ろう」

「そう……ですね」

少し疲れた表情を見せたシリカの状態を考慮し、俺は今日のレベリングを切り上げる事にした。

一度安全エリアまで後退した俺たちは、岩の傍に腰を下ろして休憩を取る。

「1週間で51か……このペースだと1ヶ月で24かそこらまで上がるって計算になるな」

「ミストさんの言っていた目標レベルは超えられそうですね」

「そうだな。多少強引ではあるけど、結構効率がいい。1日中ダンジョン潜っているんだし」

コルや装備品、素材も手に入るし、不要なものは売って金にすればまた今後の活動資金になる。最初は厳しいと思ったが、これならどうにかなりそうだ。

けどシリカも女の子。こんな毎日ダンジョンに潜っていたら退屈だろう。……よし。

「シリカ。明日と明後日はダンジョンに潜るのは止めて休みにしよう」

「え？」

「休息も大事だ。潜ってばっかじゃモチベーションにも影響がでてる」

「そう……ですか？」

「ああ。けど、休み明けにはまたダンジョンに潜ってレベリングだ。これをローテーションで繰り返そう。予定よりは少し遅れるけど、急いで事を仕損じるって言葉もあるし、急ぎすぎるのも良くない」

「わかりました。ミストさんがそう言うなら、そうしますね」

『きゅーー！』

ピナも休みには賛成なのか、同意するように鳴き声を上げた。

休憩を終えた俺たちはダンジョンの出口を目指し、当然ポップするモンスターは全て倒して主街区の「アルゲード」に戻ってくる。

雑多な町並みは迷路のような構造で、マップを頼りにしないと迷ってしまいそうな場所だ。

「シリカは先に宿に戻っててくれ。俺はダンジョンで手に入れたの売って、アイテム補充してくるから」

「はい。じゃあミストさん、またあとで!」

手を振りながらシリカはピナと共に雑踏の中に消えた。こっちに來てから1週間、宿屋など主要どころの場所はしつかりと覚えていゑる。

さて、俺は……あいつのところに行くのでしょうか。

脳裏にバリトンボイスのタフガイの姿を思い浮かべながら、シリカとは別方向に歩き出した。

「ちーっす。エギルいるか?」

「お、ミストか。また来たのか?」

「客に向かつてまたってなんだよ、またって」

もはや馴染みになったやり取りをしつつ、カウンターにいるどう見ても日本人じゃない浅黒い肌で長身のタフガイの前にやって來た。

こいつの名はエギル。アフリカ系アメリカ人にして生粋の江戸っ子と言うまあ、外見どおり怖そうな奴なんだが面倒見もいい出來た大人でもある。

こっちに來てダンジョン帰りによく顔を出し、トレジャードロップとかその辺を売っていた。

「で? 今日の稼ぎはどんなんだ?」

「ボチボチってところだな。つつーわけで買ってくれ」

言いつつアイテムストレージから使いそうにない武器や防具、指輪やら何やらを全てエギルの前に出す。素材に関しては武器の強化に使うから、今のところはキープしていた。

「しかしお前も苦勞するよなあ。攻略組希望の中層プレイヤーの育成なんて、すぐ根を上げると思ったのに」

「可愛い女の子の頼みを断るわけに行かないだろ? ああ、俺紳士だから変な意味はないぞ」

「どの口が言うんだ、どの口が。えー、なにになに……まあ、こいつらならこんな所かな」

離しつつもエギルは売るアイテムの鑑定を怠らず、少しして買取価格を出す。

「こんなものか？ 安くはないと思うけど」

「まあ、普通の相場だな。前線でたアイテムじゃないしこんな所だ」
「金に困っている事はないからいいけどな……けどその内シリカの装備を新調しなくちゃいけないし、無駄遣いはあんまり出来ないし」

「お前本当主夫みたい」「まだ17だ」いや、わーってるって」

「つたく、こいつは……どう見たらこんな青少年が主夫に見えるんだ。」

「そう言えば明日、フィールドボスの討伐があるんだが……お前も参加するか？」

「そうだな……シリカには明日と明後日休みって伝えたいし、予定は空いている」

そう言えばそんなイベントがあったなど今思い出した。確か、どっかの村だったよな……パニの村、だっけ。

「ラストアタックボーナスを狙えば、労せずシリカの装備をゲットできるんじゃないか？」

「そうだな……そのボス戦、キリトも参加するのか？」

「ああ。俺も出るつもりだ」

エギルがキリトのことを知っているのは知っていたが、エギルが俺とキリトが知り合いつて知ったのはちよつとした偶然だ。

あれはここに来て3日目のこと。ダンジョン帰りにここに立ち寄った時に、たまたま来ていたキリトと遭遇したんだ。あれには驚いた。

で、奇遇だな、どうしたんだと話していたら、当然シリカの事を話さないわけには行かなくて……キリトも最初の俺同様に難色を示していたが、俺のレベリングの説明と一応俺の腕を理解して納得してくれた。

「シリカの装備ってキリトが上げたものだしな……キリトが使いそう

になかったら、シリカに譲ってもらおうよう頼むか」

「おいおい、キリトがラストアタックボーナス達成する前提で進めるなよな？ 俺だって参加するのに」

「その時は安く売ってくれるんだろう？ 何しろ健気にレベリングをしている可愛い女の子のためだから」

「ぐ……」

さすがにエギルもシリカくらいの年の子にぼったくするような真似はできないらしい。それに、エギルがこの店をやっている目的を考えればしないはずだ。

「……お前が出世払いでやれよ」

「なして!？」

「大体、お前はするいんだよ。ふらりとでてきたかと思えば中層クラスのアイドルと専属パーティー組んでレベリングの手伝いと来た。知ってるか？ お前下じやシリカを攫っていったってファン連中に眼の敵にされてるんだぞ？」

「なっ！ 完全に濡れ衣だろ！ 俺はシリカに頼まれてレベリングの手伝いしてるだけで……」

「そ・れ・が、あいつらにとって羨ましいんだろ。攻略組の上に最初に確認された《盾剣技》使い。無名の攻略組が一転して超有名人と来たら嫉妬しない方が無理ってもんだ」

「ええー……」

なにその理不尽な理由。いや、気持ちは分からなくもないけど。俺が下のプレイヤーでシリカのファンなら怒り来るって上層に殴りこみに行くし。

「と、言うわけだ。無自覚で美味しい思いをしているお前は、報いを受けて奴らの怒りを静めるべきだ」

「なんで生贄にされなきゃならないんだ！」

「……店の中で騒いでいたら、ただでさえ少ない客も来なくなるぞ？」

エギルとの話がヒートアップしていると、水をぶっ掛けるように静かな声が店内に届く。

俺は振り返り、エギルはちよつと顔を上げる。店の前には黒いコー

トを来た剣士が呆れた顔で突っ立っていた。

「キリト……」

「2人して何を話していたんだ？ エギル…まさかミストからぼったくるつもりだったんじゃないだろうな？」

「そんなわけないだろう。安く仕入れて安く提供するのがうちのモットーだからな。なに、ミストが自分の境遇が恵まれているか分かっていないらしいから、教えてやっていただけさ」

「それってシリカのことか……？ エギルだって知ってるだろ、ミストはシリカが前線に行きたいって言う願いを叶えるために付き合ってるって。それも、自分の得た経験値全部譲ってまでレベリング手伝っているんだからさ」

「そうだそうだ！ もつと言ってやってくれキリト！」

よっし、さすがキリト！ 分かってくれてる！ そこに痺れる！
憧れるう！

「へいへい……ああ、そうだミスト。ちょうどキリトが来たんだし、さっきの件を話すだけ話してみたらどうだ？」

「さっきの？」

「ああ。キリトも明日、フィールドボス討伐に参加するんだろ？」

「そのつもりだけど……ミストも参加するのか？」

「マージンは十分だしな。シリカも明日明後日は休むように伝えてある。それでなんだけど、もしラストアタックボーナスしてシリカに使えそうな装備だったら、シリカに譲ってやってくれないか？ もしくは売ってくれてもいいけど」

「確かに……あの装備で最前線って言うのは、少し厳しいかもな。目標レベルも安全マージン越えだし」

「オーダーメイドって言う手段もあるけど、レアドロップで使える武器が出たならそれを使うに越した事はないだろ？ 頼む、考えるだけでもしてくれないか？」

両手を合わせてキリトに拝み倒す。

キリトは顎に当てていた手を下ろし、苦笑しながら口を開いた。

「分かったよ。けど、俺が倒してシリカに使えそうな装備だったら、だ

「からな？」

「ほんとか？ 助かる。俺も明日は頑張らなきゃな」

「おいお前ら……俺も参加するって事忘れてるだろ」

「いやいや、忘れてないともエギル。」

「けどこの戦い、シリカのためにも負けられないっての。」

第4話 攻略の鬼

第4話 攻略の鬼

前回のあらすじ：

ちよつといいとこ見せてやんよ。

エギルたちと別れを告げて、道具屋でアイテムの補充をしてきて宿屋に戻ってきたころには日が暮れていた。

待っていたシリカと夕食を食べている途中、俺は明日前線に行く事をシリカに話す。

「前線……ですか？」

「そうなんだよ。フィールドボス討伐やるって言うから、俺もそれに参加してくる。キリトも一緒だ」

パンを千切ってピナに食べさせながら聞き返してきたシリカに、俺は簡潔に答えた。

俺にとって初めてのレイドボスになるわけだが……まあ、無理をせず安全第一でやらないといけないだろう。

「そうですね。ミストさんは元々攻略組の人ですし……あたしが、無理につき合わせてしまつて」

「いや、シリカが責任に感じることはないって。《盾剣技》の性能を確認できる良い機会にもなったし、前線で戦ってくれる人が増えてくれれば俺たちも助かるんだから」

おまけにそれが知り合いと言うなら、連携も取りやすいしボツチにならなくて済む（ここ重要）。

あとは、どうしても参加したい理由があったりするからな。

「シリカが前線に来る時には相応の装備が必要になるし……ラストアタックボーナスで運よくシリカの使えそうな装備が落ちれば、そのままシリカに使えるしさ」

「それって……あたしのために、ボスと戦ってくれるんですか？」

「えつと……まあ、そんなところか？ キリトにも話して協力してくれるって言ってくれたし」

「あ、ありがとうございます。……ミストさんやキリトさんに助けてもらってばかりですね、あたしって」

「下のプレイヤーを助けるのも上のプレイヤーの務めって奴だって。ゲットする保証は……まあ、ないんだけど」

「それでも嬉しいです。ありがとうございます、ミストさんっ」「っ……」

につこり笑ったシリカに顔の表面温度が少し上がる。

ああもう、こんな子に慕われるなんて……これがいわゆるモテ期と
言うものなのか。こんな状況だけどやっば嬉しい。

こういう時ってやっぱりこう言うんだろうな……我が世の春が
来たあああ（ガプツ）アツー!?

「ピ、ピナ!？」

『きゅいー!』

「ピ、ピナさんやめっ、鼻は止めて！ 噛み付いた理由は分かるからご
めんなさい！」

「ごめんなさいピナさん！ 俺が悪かった！ 今後はピユアな気持ち
を心がけますからあああ！」

——翌日、転移門広場でキリトとエギルと合流し、俺たちは最前線
である56層に向かい、主街区から徒歩でパニの村と呼ばれる場所に
向かう。聞けばこの層には《聖竜連合》の本部があるそうだ。まった
く気づかなかった。

「今回討伐するボスって、情報はもう出回っているのか？」

「ああ。オオカミの亜人型で、名前を《ヴェアヴォルフ・ブルート》。特
殊攻撃や武器の類はないが、その分スピードが高いらしい」

「スピードアタッカーかよ……俺やエギルの苦手な部類だな」

キリトみたいに機動力を重視したパワーファイター型ならともか
く、俺は盾を持ってどっしりと構える前衛。エギルは両手斧の威力を
生かして側面からの攻撃を得意とするタイプだ。

「お前の《シールドバッシング》なら注意を引けるだろう。が、代わり
にお前へのリスクが大きくなるな」

攻略のことになればエギルも真面目な顔つきになる。この世界では命がかかっているんだからそれも当然だろう。

「難しいなあ……俺が攻撃受け止めている間にキリトたちが削って、回復のために交代した場合はかく乱して足止めしてもらおう……ってパターンがベターになるか？」

「《聖竜連合》の防御部隊も来るはずだけどな……ここはあいつらのホームだし。場合によってはそいつらに任せて、ミストは《盾剣技》でアタッカーに専念……ってこともできるけど。ところで《盾剣技》はどこまで使えるようになったんだ？」

「とりあえずはスキル発動後の硬直を別のスキルでキャンセルできる程度まで。問題が剣のほうで使うソードスキルとの組み合わせになる。火力を求めるなら盾にも連撃系が欲しいところなんだけど……今のところ突進系しか使えないのがなあ」

「懐に潜って連撃系でダメージを与えた後、突進系で離脱、がセオリーになりそうだな。しかしその《盾剣技》スキルに対応した盾はあったのか？」

「エギル、なんか対応している奴はあったか？」

「それが中々見当たらないんだ。エクストラスキルだけあって対応した盾は見当たらないな……」

念のためエギルにもこのスキルに対応するかもしれない盾を探してもらっているが、今のところ中々出てこないらしい。

ユニークスキルと違って、スキル同士の組み合わせだからレア度は高い方ではないんだろうが……元々盾持ちは防御の担当だ。そこに格闘である《体術》スキルを習得する奴はあまりいないだろう。

「斬撃系って事は、なんかこう……クロームみたいな形状なんだろうけど」

「そもそも攻撃力を持つ盾自体、レアなものだからな。基本的に盾に要求されるのは防御力だけだ」

その通りなんだよなあ。わざわざ盾で殴る奴なんて……あ、ヒースクリフがキリトとのデュエルでやったっけ。けどあれとはちよつと違う。ただ殴っただけでソードスキルは発動されていない。

使いようによっては攻防自在と《神聖剣》に似ていながらも、使用できる盾が限定されていて使い方に困る。完全に《神聖剣》の下位互換だな。

「ま、こいつのことは今はほっといて……そんなボスだったら敏捷系のアイテムをドロップしそうだし、シリカへの土産にはなりそうだな」
「そうだな。シリカのためにもなんとしても倒さないよ」

「だから、お前らが倒す前提で……いや、もういい」
やる気満々な俺たちにエギルは突っ込む気力を完全に失ってしま

う。
そして道中ポップしたモンスターを軽く蹴散らしながら、俺たちは目的地であるパニの村へとやって来た。

「まずは攻略会議から、だよな……集合場所は？」

「えっと……あれみたいだな」

キリトが指差し方向には、岩山をくり貫いて作られたらしい住居があり、その入り口に2人の鎧を纏った男たちがいる。あそこが会議の場所のようだ。

「今回の陣頭指揮って……」

「最強ギルド《血盟騎士団》副団長にして、『閃光』の異名を持つアスナ……だな」

「……マジで？」

まさかこんなに早くキリトの嫁とエンカウトする事になるとは……けどキリトが憂鬱そうな表情を浮かべるのはなんでだ？

「今回もまた意見が合わないんだろうなあ……」

「合わない？」

「キリトとアスナだよ。この2人、いっつも意見が合わなくて衝突してたからな」

そうか、そうだ。思い出した。

このころのアスナは「攻略の鬼」なんて呼ばれるくらい徹底していた時期だ。しばらくすれば《圈内事件》でその性格も本来の明るい性格を取り戻していくんだっけ……この頃のアスナってどんなに怖いんだろう。

……と、ちよつとした好奇心を抱いた俺は激しく後悔している。

攻略会議でアスナがフィールドボスを村に誘い込んでNPCを殺させて、その間に殲滅すると言う作戦に参加していた全員がどよめいた。

確かにNPCで、しばらくしたらリポップするデータだけの存在で言うのは分かるけど……明らかに常軌を逸している。

当然キリトは猛反対。俺もさすがにそんな作戦は気が引けてつい反対意見に加わっちゃったら、思いつきり睨みつけられた。こえーつて。あの気が利いて優しい性格のアスナはどこに行つたの。ナマで聞くとマジ怖い。

結局ボス攻略はその方法で行われる事に決まり、一旦解散してしまつたんだが……。

「マジ怖すぎだろ……」

「ミストはアスナが責任者の攻略会議参加は初だったか？」

「え？ あ、ああ。うん」

初つて言うか攻略会議自体初なんだが、一応攻略組という建前上はそう言う事にしておう。

俺のビビリ具合を気の毒に思ったのか、エギルはバンバン俺の肩をたたいてくる。

「ま、気にするな。この攻略が終わればお前も当分は前線に出てこないし、今だけの辛抱さ」

「そ、そうだな……しかしさすが鬼。迫力が違う……本人の前で言つたら鼻の穴が1つになっちゃう」

「違くない。俺はキリトと話しているが、お前はどうする？」

「俺は……時間になるまで村をぶらついている。またあとでな」

「そうか。またな」

決まってしまった以上、不本意だがこの村を戦場にするしかない。そのためにもこの村の地形を把握しておかないと。

こうして見ると、やっぱり特徴的なのは住居の穴倉だろう。これを利用すればボスをかく乱できるだろうな……。うまく利用して困めば袋叩きできる可能性もある。

人の数は……プレイヤーを除けば多いほうではない。小さい村だし当然か。

「けどやっぱ、気乗りはしないんだよな……」

シリカのために頑張ると張り切った方がいいが、作戦の内容が内容だから気乗りはしない。

確かにNPCを狙わせればプレイヤーへの被害も減る。認めたくはないが安全な方法だ。

……でもそれって、犯罪者ギルドの連中とやる事が同じって事じゃないのか？ ただカルマが減る減らないかの違いだけで。

「はあく……これなら来るんじゃないかなあ」

せめて《圈内事件》のあとならアスナとも気軽に話せただろう。今のアスナとは……出来れば関わりあうのは遠慮したい。

もう1度ため息。すると、タイミングよくメッセージを受信して、俺は受信アイコンをタッチする。メッセージ主は……シリカ？

f o r m シリカ

ミストさん、そつちは大丈夫ですか？

どうやらこつちの心配をしてくれているようだ。なんだかほっこりさせられる。

俺は微笑を浮かべながら、メッセージの返信のために指を走らせた。

f o r m ミスト

今さつき攻略会議が終わったところ。終わったらまたメッセージ飛ばすよ。お土産楽しみにしてくれ。

「よし……つと」

メッセージを送信し終えて、俺は気合を入れるため頬を叩いた。

作戦は気に食わないが、シリカのためにもラストアタックボーナスを達成しないと。もちろん生きて帰る事も最優先で。

「ん？ お前さんは……」

「俺？」

不意に誰かが俺の事を呼んだ気がして辺りを見回した。

見れば和風の鎧姿に身を包み、赤いバンダナに無精髭といった野武

土面の風貌をした男が、その後ろに他の男たちを引き連れている。

「お前さん確か、攻略会議でキリトと一緒に反対していた奴だよな？」

「ああ……そうだけど。あんたは？」

「俺はクライン。ギルド《風林火山》のリーダーをやっつてんだ」

「俺はミスト。ソロだ」

もちろん俺はその男の事を知っている。

キリトがSAOに来て初めて知り合った奴で、理解者にして親友。さつき会議に出席しているのが見えたけど、まさか声を掛けられるとは思わなかった。

「お前さんもソロなのか。いや、キリトと親しそうだったから知り合いなのかと思って声を掛けたんだが……」

「最近知り合つてな。クラインもキリトの知り合いか？」

「ああ。まあな。しっかし、あのキリトに歳の近い同性の友達か……」

「まあ……歳は近いだろうけど。それがなにか？」

「いやな……実はキリトの奴、前に色々あつてよ。それで自分のことを責め続けていたんだよ。それからますますソロで無茶な攻略をするようになって心配していたんだが……なんだ、仲の良さそうな友達が出来たんじゃねえか。ほつとしたぜ」

「そう……なのか」

クラインが言っているのは《赤鼻のトナカイ》の話で起きた事だろう。以来キリトはより孤立してソロで動いていたはずだ。

その時のことはクラインも知っていたんだよな……ギルドに入るよう誘つても、キリトはクラインを見捨てたつて言う負い目を感じていわずと気まずそうに避けていて。クラインは気にしていなかったのに。

「まあ、なんだ。俺が言いてえことはだな……あんな奴だけど、これからも仲良くしてやってくれ。あいつも歳の近い男友達がいれば、色々という方向に向くかもしれないねえ」

「……もちろん。あいつが違つて言つても、俺はそう思つてるさ」

頭を下げながら言ったクラインに俺は笑みを浮かべて断言した。

まだまだ背中を合わせて戦うのは先かもしれないが、キリトはそん

な事で見捨てたりするような奴じゃない。それは分かっているつもりだ。

「そうか……ありがとよ。——とここでおめえもソロって言っていたが……」

「あ、ああ。まああんまり目立たない攻略組さ。今は攻略休んで、知り合いの中層レベルプレイヤー育成の専属パートナーになってる」

「専属パートナー……？　　そういや、どっかで聞いた事があるな……」
「攻略組のソロプレイヤーが、中層プレイヤーに大人気の女の子を攫っていった」って。あれってお前さんのことか？」

「……不本意ながら、そういう風と呼ばれてる」

おいおい、前線にまで知れてるのかよ……この勢いじゃ尾ひれに背びれ、胸びれまでつきそうな勢いじゃないのか。

「はっはあ、やっぱりそうか。なんか珍しいエクストラスキル持ちって聞くからどんな奴かと思っていたんだが、まさかキリトの知り合いとはなあ。ちよつと納得したぜ」

「ちよつと待てどういう意味だ」

「お前さんもキリトと同じって意味だ」

それは性格とかそういう意味じゃなく、女の子にもてるから……とかそんな理由なんだろう。

「おれはしんしだ！」

「紳士ねえ……ロリコンって言う名のおふお！」

「……リーダー!?!」

すつごく失礼な事を言いかけてきたクラインに問答無用でアツパーカット。見事に顎を打ち抜いてクラインはひっくり返る。

「失礼だろお前！」

すぐにクラインの仲間がクラインを囲って、慣れた手つきで運んでいった。「リーダーが悪かったな」とか言われる辺り、比較的存在あるあるなパターンらしい。

ああ、うん……キリトが躊躇なく殴ったりする理由が、ちよつとだけ分かった。俺も今後はそうしようと思う。

そろそろ作戦開始の時刻が迫りつつあり、俺は集合場所に戻りながらスキルの確認と変更を行っていた。

盾持ちだから当然防御強化の《シールドコーティング》にHPリジエネの《バトルヒーリング》、さらには挑発できる《シールドバッシング》も入れてある。……自分で入れておいてなんだが、なにこの堅いの。ヒースクリフに劣るだろうけど。

ああでも、防御は《聖竜連合》の連中がするって言っていたからな……《シールドコーティング》は必要ないかもしれない。かと言って入れる奴がないけど。

「このままでいいか」

耐久力があるに越した事はないんだし。

スキルの変更を完了し、メニユーウィンドウを消す。集合場所には既にエギルとキリトも揃っていた。

「どこほつつき歩いてたんだ？」

「村の地形を確認に」

「お前、そう言うところマメだよな……」

感心したような、呆れたような様子のエギル。地の利を生かすに越した事はないだろう。

そんな風に話して時間を潰していると、陽動隊から間もなくターゲットが村に入ると言う報告が届く。

いよいよだ……真正銘、俺の初のボス戦。今までのレベルが低い雑魚とは違う、真正銘現段階で最強の敵と戦う。

「武者震いか？」

「かもな」

僅かに震える手を見たキリトが、少し勘違いしながら言った。

無論、恐怖もある。だけどただで負けるつもりはない。

見ると数人の軽装の剣士3人が、その後ろにいるモンスターに追われている。あれが今回のターゲットらしい。

《ヴェアヴォルフ・ブルート》。その名のとおり血に塗れたように真っ赤な毛並みは、その一部が硬質化して刃物のように鋭い。サイズもこの中で1番でかいエギルを上回る辺り、2、3mはあるだろう。

「こういう時、なんて言いながら始めればいいと思う?」

「景気よく前口上つて奴か? そうだな……俺は太陽の子!」なんてどうだ?」

「ねえエギルあんた本当にアメリカ人? なんてそんな古いの知ってるの。俺だつてレンタルでようやく知ってる程度なのに」

「え……2人して何の話だ?」

俺とエギルのアダルトすぎる会話についていけないキリトは小首をかしげる。そうだよねー、普通なら知らないもんね俺たちの世代は。バイオライダーマジチート乙。

「機会あればBLACKOXを借りて観てみるよ」

「ブ……ブラツク?」

「俺はあれより……あ、思いついた。「その命……神に返しなさい!」はどうだ?」

「だから何の話だよ!」

どうやらキリトは特撮物に興味はないらしい。面白いと思うんだけどなあ。

そんな事していたら、俺たちがふざけていると思ったのか攻略の鬼が「その3人! 真面目にやりなさい!」って怒られた。ごめんなさい。

「えーつとじゃあ時間も無いし……よし、これで行こう」

ただいま絶賛大人気放送中のあのシリーズから、今回は引用しよう。

村に赤い毛並みの狼男が飛び込み、遠吠えで吠える。

それを聞きながらエギルは斧を構え、俺とキリトは剣を抜いた。

「……ここからは俺たちのステージだ!」

第5話 振り回されて東奔西走

第5話 振り回されて東奔西走

前回のあらすじ：

初ボス戦。

「うおらっしやあー！」

飛び上がりつつ青いライトエフェクトに包まれた『左腕』を逆袈裟懸けに振り上げ、その軌跡が空を飛ぶ大型のハチに炸裂する。爪で切り裂いたかのような軌跡を残す『シャープネイル』で使ったのは、同じように鋭い爪を先端に備えた盾だ。

さらに発生した硬直を右手に持った剣によるソードスキル『ヴォーパル・ストライク』でキャンセルしつつ着地。背後のハチはガラスが砕け散るような独特の音と共にポリゴンが砕け散る。

「慣れて来たみたいだな、そっちにも」

「まあな。ボス戦向きってのが今のところの感想」

やって来たキリトの言葉に、俺は左手の盾『デモンズ・クロウ』を掲げながら答える。

盾と呼ぶには随分と小型で防御範囲も狭く、おまけに3つの鋭いブレードを備えたそれは籠手に近い。防御性能よりも敏捷と筋力重視のステータスを持っている。

「しかし……61層に到着した瞬間に目に見えて攻略の速度落ちたよな」

「まあ……場所が場所だからな」

キリトの感想に俺は首肯で同意した。

第61層……通称「むしむしランド」。フィールド全体で見れば湖が広がる美しい場所だが、その実態は昆虫モンスターが多くはびこっている。その手のものが苦手なプレイヤーにはとことんダメで、女性プレイヤー以外にも虫が苦手な男性プレイヤーが結構いたため参加人数は結構減っている。

かく言う俺も、アリとかテントウムシとかそういうのは平気だけ

ど、クモやカマキリ、ハチとかああいうのはダメなんだよなあ……。ああ、早く帰りたい。

「ポップするのは虫ばかり……。ボスはムカデみたいな奴だな、きつと」
「やめれ。そうなるとマジでシリカと一緒に参加しないぞ」

名前を聞くだけでも身の毛がよだつ！ さつきも「コックローチ」なんて名称のモンスターが出てきた瞬間俺はキリトにスイッチして隠れたし。

え？ お前たちは攻略に来たんじゃないのかって？ いやいや、俺は新装備の慣らしさ。

以前戦ったフィールドボス《ヴェアヴォルフ・ブルート》。キリトとエギルと連携して見事ラストアタックボーナスを達成し、ドロップした奴がこの「デモンズ・クロー」だった。まさかの《盾剣技》対応盾。しかも斬撃対応という柵から牡丹餅？ 的な幸運。本来の目的とは違ったものだったけど。

で、ただでさえ有名だった《盾剣技》使いつていうのがさらに広まって、「レッドクリフ」なんて誰かが言い出したから困った。なんで赤壁の戦い？ ビーム出せばいいの？

「つと……。今日はここまでにするか。アスナとの待ち合わせに遅れる」

「あーはいはい。デートですねご馳走様です」

「デッ!? 違うって！ ただ一緒に食事するだけだし！」

「ディナーデートですね、分かります」

「ミ……ミストー！」

からかう俺に顔を紅くしたキリトは、その手に「エリユンデータ」を持って振り回しながら追っかけてきた。やめれって！ お前のそれ威力高いんだから！

第59層ダナク。

迷宮区から帰ってきた俺とキリトは、それぞれ行く場所が違ったため転移門で別れた。

拠点としている宿屋が近づくと、そわそわした様子の子の女の子が1

人、俺を見つけた瞬間に走ってくる。

「ミストさん！」

「お、シリカ。ただいま」

『きゅい！』

「ああ。ピナもただいま」

今では攻略組に名を連ねるシリカと、その使い魔にして友達のピナだ。俺がレベリングに付き合ったおかげでギリギリ安全マージンをクリアし、結構前に前線デビューしていた。

そして俺も、今もシリカとコンビを組んでいる。互いによく知る仲だし、今更解消するのもなんだろうということですとコンビを組み続けていた。

……まあ、現在は攻略サボってますが。

「キリトさんは一緒じゃなかったんですか？」

「アスナとデートだと」

「ああ……」

もう何度かアスナとも顔を合わせたことがあるシリカはそれだけで納得する。

《圈内事件》が終わってからのアスナはすっかり本来の性格を取り戻し、面倒見のよさもあってシリカにとっては姉のような存在となっていた。そんな風に4人が仲良くなった事もあってか、今では時々ボス攻略でパーティーを組む事もある。

「このあとどうする？ 宿で飯食うには早いし」

「じゃあ、散歩しませんか？ このまま戻るのはもったいないですし」

「そうだな……時間もあつそうするか」

「はいっ！」

嬉しそうに頷き、そのまま俺の手を握ってくるシリカ。もはやこうしてくるのも慣れた。誰かに見られていても「仲のいい兄と妹の図」、にしか見えないだろう。これがアスナだったら……いえ冗談です。冗談だからキリトさんもアスナさんも剣を収めてください。

「このままじゃ1人や2人抜けても変化無いだろうし……明日は息抜きするかねえ」

「じゃあ……明日、フロリアに行きませんか!？」

「んー……そうだな。気分転換にはいいか」

正直今の階層は出来れば潜りたくなかったし、別に誰かに咎められるわけでもないいいだろう。

俺がオーケーを出すと、シリカは本当に嬉しそうにして腕に抱きついてきた。

最初のころの俺なら一々ドキドキしていたが、知り合ってもう4ヶ月ほども経てばすっかり慣れて動揺もしない。ピナが噛み付いてこないのが成長の証だろう。

1人っ子だから分らないけど、慕ってくれる妹がいたらこんな感じなのかねえ……。

それはそうと、そろそろキリトが「ダークリパルサー」を手に入れようとする時期じゃないだろうか。リズに会ってレア金属取りに行くはずだけど……。

「(ああ、明日か)」

だから今日アスナに会うって言うていたのか。これでキリトも本領発揮できそうで何よりだ。

しかし《二刀流》……って言うか、強い武器かあ。

「シリカもいい加減新調しなきゃならないよなあ、武器」

「そうですね……でも、中々いいのが無くて」

今までキリトから貰った装備でどうにか頑張ってきたが、いい加減に限界のころだろう。俺の方はまだ余裕があるが……。

「アスナに良い鍛冶師知ってるか聞いてみるか。どうせ攻略に参加しないんだろうし」

「アスナさんも虫が苦手でしたからね……」

61層のモンスターが虫オンリーと知った瞬間のアスナの顔は、それはもう一気に青ざめていたは強烈に焼きついている。

以来、「ギルドの運営とかで忙しいんだよねー」と色々と理由をつけては攻略をかまけているのは、まあ仕方ないかもしれない。もしも攻略の鬼のまま挑んでいたらどうなっていたか、ちよつと興味がある……あの、ごめんさい。レイピア突きつけないで。

で、翌日。47層フロリア。

「こう言うのもアリ……だなあ」

木陰に寝転んでいた俺は、ゆったりと時間が過ぎるのを感じながらそう呟いた。

シリカと約束したとおり、今日は攻略を休んでシリカとフロリアに来ている。当然戦いに来たわけじゃないし、俺もシリカも軽装姿だ。

そう言えばこの世界に投げ込まれてからずっと、こんな風に羽を伸ばす事はしていなかったはず。シリカのレベリングに付き合っ、シリカを休ませている間は俺自身の戦闘経験を積むために戦って。

……しかし、なあ。

「すう……すう……」

「うーん……」

俺の横ですっかり熟睡しているシリカとピナに、俺はどうにも居心地の悪さを覚える。

いや、嫌じゃない。嫌じゃないんだよ？　こういう風にされるって事はそれだけ頼られている、慕われているって事だし。けどこれは距離が近すぎると違うのだろうか？

まあ嫌いにならないるよりいいんだけど……けど初めてのシチュエーションに身持ちが硬くなってしまう。

いやいや、待て待て！　これも「お兄ちゃんに甘えてくる妹の図」の1つに過ぎない！　うん、そうだとも！　ちよつとでも純真な心を失えばピナが襲ってくる！

「よ、よーし……ちよつとアスナにメッセ飛ばすかな」

うん、ナイスアイデアだ俺。ただし寝ているシリカを起こすと悪いから静かにな！

俺は右手を振ってメニューを呼び出し、フレンドリストを選択してアスナをクリック。さらにメッセージもクリックして、文字を打ち込んでいく。

f o r m ミスト

シリカの武器を新調したいんだけど、いい鍛冶師知らないか？

これでよし……と。

「ん……ミストさん……」

「寝言か……」

僅かに身じろぎして呼んだから何かと思えば、単なる寝言らしい。こうなるなんて前までは想像も出来なかったよなあ……あ、そうだ。シリカが新しい武器買ったら余った金でホームを買ってみるかな。いつまでも根無し草はいかんだろうし。

ホームかあ……どこがいいかな。今拠点にしているダナクは良い所だし、あそこがいいかもしれないな。

「お……早速返信が」

視界の右側にメッセージアイコンが表示され、それをクリックすると予想通りアスナからの返信だった。

f o r m アスナ

昨日キリト君にも教えたんだけど、私の友達にマスターミスをしてる子がいるよ。今日はギルドの仕事で動けないけど……明日なら紹介できると思うよ。2人とも予定は空いてる？

知り合いのマスターミスって事は、リズベットの事だよな。明日か……予定は入れてないし、シリカも大丈夫だし入れてもいいよな。

f o r m ミスト

俺たちなら大丈夫。集合場所は……忙しそうだし、時間が空いたらそっちで指定してくれ。

これでよし……と。

送信確認の表示に「はい」とクリックすると、入力したメールはアスナに送られる。あとでシリカにも教えてあげないとな。

「んん……」

と、メールを送信し終えたタイミングでまたもシリカの方から声が聞こえる。

顔だけを向ければ今まさに起きたところのようで、寝ぼけ眼のシリカはぼーっと俺の事を見ていた。

「よっ。よく眠れたか？」

「……………」

俺がそう声を掛けるものの、シリカはまだ寝ぼけているのかぼーつとしてる。

……が、徐々にその顔に赤みが差し込み、ついには完熟トマトのように真っ赤になった。

「ミ——ミストさっ!？」

自分の状況をようやく理解したシリカは跳ね起き、そのまま横にずれて少し距離をとる。

え……俺何かしたか? 「眠くなったら寝てても良い」って言ったら、シリカは「じゃあ、ちよつとだけ……」って言って寝ちゃっただけなのに。

「ど、どうしたんだ? 俺何かしたか?」

「いいいいいえい! なんでもないんですなんでも!」

「なんか慌てるみたいだけど……」

「だっ、大丈夫です! そうですよ、夢だったんですよね!」

「夢?……そう言えば寝言で俺のこと呼んでいたけど」

「ツツツ!」

さっきの事を思い出して指摘すると、ひゅつと鋭く息を呑む。

「そ、そうなんですかつ!? あたし全然、これっぽっちも記憶になくて

……ほ、ほら! 夢の内容って起きたら忘れてるじゃないですか!?

ああそうだミストさん! ミストさんもお休みしてくださいよ、あたしもお休みさせてもらいましたし! 膝枕しますからどうぞ遠慮なく!」

「は……はいっ」

割り込む余地もないシリカのマシンガントークに思わず生返事で答えてしまった……え? あれ? つまりどういうこと?

え、えーつと……まとめると、「今度はミストさんがお昼寝してください。あたし、膝枕しますから」……膝枕!?

「シ、シリカ? 膝枕って……」

その……いわゆる仲のいい男女が相手の膝に頭を乗せて寝るって言う、よくあるあるなシチュの事でしょうか。

シリカも自分が何を口走っているのか気づいたようで、「ど、どうしよう!」 見たいな感じで視線が泳いでいる。

「い……いや、ですか?」

「嫌じゃないけど……シリカはいいのか?」

「あたしは……ミストさんだったら。ミストさんにだけなら……」

最後が小さすぎて何を言ったのか聞き取れなかったが……えっと、シリカの方はOK……なのだろうか?

けど守護神のピナさんは?

『きゅるるっ。』

俺の視線に気づいたピナは首を傾げ、ひよいとシリカの頭に乗つかる。どうやら「特別に許そう」と言う事になるらしい。

ピナも許してくれるのなら……じゃあ、いいのかな。

「えっと……じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな」

「は……はい……」

俺が言うとシリカは緊張気味に頷いて正座をする。どうやらここに頭を乗せると言う事らしい。

初めての体験に勝手が分からないが、これでいい……の、かな?

「ど、どうですか?」

「大丈夫……だと思っ」

後頭部をシリカの膝に預けて、仰向けになって寝そべる。

周りに咲く花の香り以外にも、石鹸の香りだろうか……シリカからいい匂いがしてドキドキしていた。

「(きゅ……気まずいかも)」

初めての体験にどうにもお互いに落ちつかないそうにそわそわする。

おまけにここには俺たち以外にも人がいるわけで、通りかかる人(ほぼカップル)がこっちを見るのも非常に気になる。

や、やっぱあれか? 人から見ると怪しいのか? やっぱり年齢

差からか?

「えっと……シリカ? 嫌だったらすぐに退くから」

「い、いやだなんてそんな事ないですよ! ミストさんの気が済むまでいくらでもこうしていてくださいー!」

そんなに力強く言われたら退きづらい。ちよつと時間を置いたほうが良さそうだな……。

「えつと……じゃあ、30分くらい眠らせてもらうな？」

「ど……どうぞどうぞー」

それじゃあ、お言葉に甘えて……ちよつとだけ寝させてもらおうかな。

「(うう……ビックリしたあ……)」

まだ顔が火照っているのを自覚しながら、あたしはようやくミストさんの顔をまともに見る事ができた。

起きたら本物のミストさんが目の前に……そのことにあたしは動揺して、つい挙動不審になった挙句に……ひ、膝枕なんてして……！
「(だ、だって仕方ないよ！ 夢でも……ミストさんにしていただし)」

つい、驚いてしまった理由……それは夢の内容。久しぶりに見た現実世界の夢。

以前までは向こうのことを思い出して1人で泣いていたし、ピナと出会ってからはそんな事もなくなった。

けどさつき見たのは、SAOがクリアされた後の夢……。向こうでミストさんと再会して、一緒に色々な所に行つて……。あたしの家に招待して、向こうの「ピナ」も紹介していた。

「(ミストさんも……あたしの事、意識してくれてるのかな?)」

ちよつと外にはねているくせつ毛の髪をそつと撫でる。

勢いでした事だけど、こうして眠っているミストさんを見ているとドキドキする。ここは仮想現実で、今のあたしたちは全部データだとしても……この気持ちは本物なんだよね。

「ピナ……あたし、どうしたらいいのかな？」

『きゅんっ。』

あたしの呟きにピナは首を傾げる。

アスナさんもこんな気持ちなのかな……キリトさんつて、ちよつとボーっとしてるところがあるし、やきもきしてるかも。ならあたしは

まだいい方なのかな？ いつも一緒にいるし、ちょっと意識してくれてるみたいだし。

今度アスナさんに会ったら相談してみようかな……そう思っていたら、あたしの頭の上にいたピナがミストさんのお腹の上に降りて、そのまま丸くなると目をつぶっちゃった。

2人も仲良くなったよね。最初の頃はピナがよく噛みついたり、突いたりしてたけど……あ、でも今もたまにしてミストさん逃げ回ったりするけど。

「これからも……ミストさんと一緒にいたいな……」

それは単にパートナーと言う意味じゃなくて……でもミストさん、あたしの事基本的に妹みたいにしかなってないからなあ……実際年下だけど、意識してくれてるのならミストさんもあたしのこと……す、好きなのかな……。

「……………」

好きって意識したらまた顔が熱くなって来た。

そ、そう言えば夢だとあたし、ミストさんからキスされたけど……

！

「(キ、キスはまだ早いよ！ 告白だってして……こ、こくはっ!?)」

自分で自分が何を言っているのか分からなくなってきて、頭の中がぐるぐるしてくる。

よ、よかった。ミストさんが眠ってて……起きてたら絶対変って思われちゃうし。

「でも、ミストさんにも少しは責任があるよね……」

「俺がなんだって？」

「ミ……………ミストさん!？」

目を開けるとシリカはかなり動揺している様子だった。

うとうとしていたから何の話かは分からないけど……うん？ なんか妙に重いな。あ、ピナが腹の上で寝てる。これじゃあ身動きとれん。

「お、お、起きてたんですか……?」

「ちよーつとだけ寝ていたんだけど……これじゃあ起きれそうにないな。もう少しこのままでもいいか?」

上で気持ち良さそうに寝ているピナを指差しながら苦笑する。するとシリカはぶんぶん勢いよく首を振った。

「いえっ! ミストさんの気が済むまでこうしてていいですよ! あたしも嫌じゃないですから!」

「そ……そうか? シリカがそう言うなら……もうちよつとだけこのままで」

ピナを起こしてと言う事もできるが、それじゃあピナに悪いしな。

しかし、ピナはなんでまた俺の上で寝てるんだろう? 今までこういうことは1度もなかったのに。

「……………」

何か話題があると言うわけでもないから、自然とお互いに口を閉ざす。な、何か話の種ってないものか……えーつと、すべらない話とか……した所でどうなるんだよ。

「ミストさん……その、リアルの事を聞くのってマナー違反ですけど……聞いてもいいですか?」

「どうしたんだ? 急に」

「えつと……ここでキリトさんが妹さんの話をしてくれたのを思い出して。ミストさんはどうなのかなって。家族の事とか」

「うーん……別に普通かな。母親はパートしてて、父親はサラリーマン。俺も普通の学生だったし。1人っ子だから兄弟はいなかったけど」

そう言えば……この世界に投げ込まれてもう結構経つんだよな。

けど不思議と、帰りたいとか家族に会いたいとか思う事は今までなかった。こんなに会わなかったことなんて今までなかったのに。

どうしてだろう……と考えると、ここで生きるために必死になって戦った事や、ずっとシリカと一緒にいたことを思い出す。

いつの間にか、俺たち一緒にいるのが当たり前になっていったんだな……おかげで寂しいとか、帰りたいとか思う事はなかったんだ。こうして振り返ってみると、俺シリカに随分救われていたんだな。

無理に前線に飛び込もうとしなくて、今はよかったと思う。きつと挑んでも隅っこでがたがた震えていたのがオチだ。けれどシリカと強くなつていくことで、俺は1人でも戦える自信を持てたんだ。

「付き合っている人もいなかったんですか？」

「まっさかー。居るはずないだろ。ずっと灰色の人生だ」

あつはつはつはは……は、はは。自分で言っていて虚しくなってきた。

「理想のタイプが高い……とか、そういう理由みたいなものがあるんですか？」

「別にこれといって要望はないけど……ああけど、料理出来る子ってちよつといいなつて思う……かな？ 家庭的なイメージだし」

「料理……ですか」

呟くと、シリカは真剣な表情で考え込む。……？ 俺、変なこと言っただろうか。

内心首を傾げていたら、視界にメッセージ受信アイコンが点灯した。もしかしてアスナか？

「あ、アスナからメッセージ来た」

「アスナさんから？」

「ああ。知り合いに鍛冶師いたら紹介してくれて頼んだんだけど……」

シリカに返しながらメッセージを開く。えーなになに……

f o r m アスナ

大変！

………大変？

f o r m ミスト

どうしたんだ？

なにやら切羽詰っている様子だが、その言葉だけで何をどう判断しろと言うのだろうか。

とりあえず返事を送ると、1分も経たないうちに返事が来る。

f o r m アスナ

リズが居ないの!!!

あー……やっぱりと言うか、分かっただけ……。今頃ダンジョンで足止め食らっているはずなんだよな、リズとキリト。

form ミスト

リズ？ それって例の鍛冶師している友達か？

form アスナ

そう！ マップ追跡も出来ないし、メッセージも返事が来ないの!! かなり慌てている様子のアスナに「落ち着け。ひとまずグランザムの転移門広場で合流しよう」とメッセージを飛ばして、俺はピナを起こすと体を起こした。

「ミストさん？」

『きゆる？』

「悪い2人とも。急なんだけど今からアスナに会って来る」

「アスナさんに何かあったんですか？」

「よく分からないが、アスナの友達で鍛冶師やっている子にトラブルらしい。詳しい話を聞いてくる」

「だったらあたしも行きますよ。3人なら、何かあったときにも対応できるかもしれないですし」

「悪いな……じゃ、休憩は一旦終わりだ。グランザムの転移門広場で合流する手はずだから、すぐに行こう」

第55層主街区グランゼル。

「ミスト君！ シリカちゃん！」

グランゼルに転移してくると、現れた俺たちにアスナは顔を真っ青にしてやって来た。

「アスナ、メッセージの事だけどうということなんだ？」

「2人を連れて行くからって、リズ……鍛冶師の友達の名前ね？ そのリズにメッセージ打ったんだけど、いつまで経っても返事が来なくて……何度かメッセージを送っても返事がなかったから、変だと思ってマップ追跡かけたの。そうしたら追跡不能って表示されて……」

「けど、フレンドリストにあるってことは死んだわけじゃないんですよ。」

「そのはずだけど……ああもう、いったいどこ行つたのよあの子……」
焦っているのか、今のアスナは普段の落ち着きがまったくくない。親友が行方不明というなら当然か。

「落ち着けて。フレンドリストに残っているなら生きてるのは確かだ。ひとまずそのリズって奴が普段居る場所に行つて、聞き込みしてみよう?」

「う、うん……ごめんね? 私気が動転して」

「友達がそんな目にあつたら仕方ないだろう? で、ホームは?」

「48層のリンダース……」

「48層だな。それじゃ早速行こう」

アスナも加えた3人で、また転移門を使い今度は48層のリンダースへ転移する。

主街区は水車があちこちに見られ、職人系のプレイヤーたちの多くがここにいるようだ。

「まずは行つて不在か確かめてみよう。どこかに行つたなら転移門を使っているはずだし、ここでの聞き込みは後だな」

「うん……ついて来て」

アスナに案内されて「リズベット武具店」と書かれた看板の店に来るが、やはり店には鍵がかかつていて人のいる気配はない。

転移門広場でも聞き込みを試みるが、生憎と有力な情報は出てこなかった。

確か2人は55層に居るんだよな……俺たちもさつき居たんだから完全にニアミスしてるし。けどここで「2人とも55層の西の山に居る」って言えば怪しまれる事確かだからな……ジレンマだなあ。

「どうしよう……私、どうしたらいいの……!」

「泣かないでくださいよアスナさん……。ミストさん、何かいい方法ありませんか?」

「そうだな……」

手で顔を覆つたアスナに良心が痛むんだが、かといって話すわけにも行かない。そうなる……時間を潰せる事も考えれば、「アレ」が有効かもな。

「ローラー作戦と行くか」

「ロー…」

「ラー…?」

俺の提案にシリカとアスナは揃って首をかしげた。

「要するにしらみつぶしに聞き込みするって事だ。もちろん、全階層やっていたらキリがないから、転移門が設置されている主街区のみ、さらに転移門広場での聞き込みを中心にする。これだったら効率よく情報を探れるはずだ」

「今のところそれしか方法がなさそうですね…」

「そうだね…じゃあ早速リズを探そう! まずは第1層から! 行くよミスト君! シリカちゃん!」

「あ、ああ。わか「早く行くよ!」お、おい待て、引つ張るなって!」
「ミ、ミストさん!! アスナさんも待つてくださいよ!」

やる気を出したアスナに腕を捕まれ、俺は止める間もなく引きずられてしまう。慌てたシリカがピナと共に後を追い、俺たちは第1層の主街区に向かった。

第1層主街区はじまりの街。

「アスナ、あのなあ…俺とシリカはともかく、お前は血盟騎士団の副団長なんだからここでの行動は慎重にしないと…」

「すみません、人を探してるんですけど——」
「って聞いてないし」

来るや否や道行く人に片っ端から声を掛けるアスナに俺は肩を落とす。

初めて来たけど、ここがはじまりの街か…上に比べるとはるかに大きいな、やっぱり。

いやそれはともかく、武装していない俺とシリカはともかくとして、血盟騎士団の団服着てるアスナがここで動いていたら確実に目立つ。一応は軍のテリトリーなんだから。

…なんて危惧をしていたんだが、やはり目立っていたため軍の連中に捕まった。

「血盟騎士団の人間が、こんな所で何をしている?」

「別に……人を探しているだけですけど」

鉄色の鎧に緑のマントを纏った3人組に囲まれながらも、アスナは嫌悪を隠そうともせずそう返す。

完全に「ボックス」されてるな……身動き取れない。

「小柄で童顔の、ピンクの髪の女の子を探してるんです。心当たりはありませんか?」

「知らんな、そんな奴」

……まあ、こいつらが知っているとはい到底思えないけど。

用が済んだとばかりにアスナは立ち去ろうとするが、ニヤけ面を隠そうともせず軍の連中は立ちふさがってきた。

「……退いてくれませんか? 邪魔なんで」

「通りたければ税金を払え。血盟騎士団であろうと、ここに来たからにはこのルールに従ってもらわんと」

「急いでいるんですが……」

「だったらさっさと金を置いていけばいいだけだ。ついでだ、お前たちの装備も置いていってもらおう」

「……………」

あ、やばい。今アスナから「ピキ…ッ」ってヤな音が聞こえた。

「落ちて着けアスナ。お前が騒動を起こせば血盟騎士団の方に抗議が行くだろう」

「だ……だけど……」

「まあここは、無所属の俺がどうにかするから……なつと」

言いつつアスナの前に出て、同時に無造作にライトエフェクトに包まれた右腕を突き出す。

《体術》ソードスキル「エンブレイサー」が発動し、真ん中にいた男に直撃。当然《アンチクリミナルコード有効圏内》のためダメージは発生しないが、ノックバックは発生する。

同時にストレージに収納していた「マーヴェルエッジ」を呼び出し、無造作に抜き放つと右側面の男には蹴りを、左側面にいた男にはソードスキル「スラント」を浴びせて吹っ飛ばした。

「うっし逃げるぞー！」

「ええ!？」

「は、はいっー！」

これ以上揉め事はゴメンこうむりたかったから、硬直が解けると同時にその場から逃げ出した。

シリカは予想していたようですぐに追いかけてきたが、アスナは驚いたせいで一瞬で送れる。

「どうせ《圈内》だし、ギルド同士の面倒ごとに発展させるわけにも行かないだろ！ さっさと上のそうに逃げるぞー！」

「そ、それもそうだね……」

走りながら適当に理由をつけると、アスナも一応納得して走る事に専念する。

そして俺たちは転移門にたどり着くと、すぐに上の層を行って1層から脱出した。

「ったく……アスナ、お前な……イライラしてるからって軍のテリトリーで騒ぎ起こすのはまずいつての」

「ぐ……ぐめんなさい」

「ミストさん……アスナさんはお友達が心配だったんですから、そこまで言わなくても」

「けど血盟騎士団副団長がインクラッド解放軍といざこざ起こしたってなれば騒ぎになるだろ。あいつらならイチャモンつけてくることは十分ありえる」

何しろ今の軍は一般プレイヤーから徴税したり、狩場の独占をしたりとやりたい放題やっていて内部は相当腐っている。

そんな中で血盟騎士団の団員……しかも副団長がいさかいを起こしたと言う話が偉い連中の耳に届けば、徹底的に糾弾しかねない。賠償だけならまだしも、アスナの引拔だって想定できる。

「焦ってる気持ちは分からなくもないけど、少しは落ち着け。他人に八つ当たりとかしても何の意味もないだろ?」

「うん……うん、そうだよね。ごめんね2人とも。私どうかしてたみ

たい」

「仕方ないですよアスナさん。気持ちは分かりますけど、少し落ち着いて方がいいですよ」

「そうだね……ミスト君のおかげでちよつと頭が冷えたよ。ありがとう、ミスト君」

「大したことはしてないって。さて、こっちでも聞き込みしてみよう。手がかりがないんじゃないかな」

俺の言葉に2人は頷き、改めて俺たちは聞き込みを始めた。

しかし当然手がかりはなく、上の層に移っては聞き込みをするもの有力な情報はなに1つ得られない。

そして、時間だけが過ぎて35層に来たときのこと。

「ああ、シリカちゃんだ!」

「そして憎き攻略組だ!」

「血盟騎士団のアスナ様もいるぞ!」

「あのやろう! 俺たちのシリカちゃんだけじゃなくアスナ様までもとは許さん!」

『下せ人誅!』

そう言えば……こっつてシリカのファンが大勢いたんだよなあ!

「や、ヤバイ! 逃げるぞアスナ、シリカ!」

「ええっ!? でもリズのこと……」

「聞いている暇があるか! 転移! えーと……ダナク!」

大勢のプレイヤーたちが大挙して押し寄せてきて、俺たちは泡を食って街から逃げ出す。

結局その後も手がかりは得られず、夜になってしまったためアスナは家に帰ることになり、探すのはまた明日という事にして俺たちもダナクの宿に戻るのだった。

そして翌日もリズに関する情報がないか聞き込みをしていたんだが……

「メッセージ……リズから!」

突然アスナは驚いたかと思うと、届けられたメッセージに目を丸く

する。

「どうやらキリトたちは無事に戻って来れたみたいだな。まあキリトなら楽勝だったろうけど。」

「アスナ、どうした?」

「リズから返事が来たの! 今お店に戻ってきてるって!」

「本当ですか!? じゃあ急いで行かないと!」

「うん! 2人とも行こう!」

「言うが否や、アスナは俺の首根っこを掴むとそのまま俺を引っ張って転移門へ。おいこら! 人を猫みたいに扱うな! つていうかアスナの筋力パラメーターで俺を引っ張れるのかああ!」

「バタバタ足掻きを試みるが、今のアスナにはどんな補正がかかっているのだろうか……アスナよりも確実に重いはずの俺を引きずって転移門を使いリズダーズへ。転移してすぐにリズベット武具店に向かうと、ノックもなしに入る。」

「おい、来る途中皆こっち見てたぞ。昨日あれほど言ったのにもう忘れ「リズ!!」

「おごっ!」

「工房に入った瞬間ピンク髪の子を見るやいなや、掴んでいた俺から手を放して柵を飛び越え、そのまま抱きつくアスナ。いきなり支えられていたものがなくなつた俺は頭から床に落ちる。」

「ミストさん!? し、しっかり!」

「ミスト……? え? シリカまで?」

「その声に、工房に居たもう1人の黒いコートを着た男——キリトは俺たちを見て目を丸くし、次いでアスナを見て驚く。」

「え……キ、キリト君!」

「や、やアスナ。久しぶり……でもないか。2日ぶり?」

「皆……もしかして知り合い?」

「あ、ああ……攻略組なんだ俺たち。あそこにいる2人も」

「おい、アスナ……友達が心配なのは分かっていたが、この扱いはぞんざいじゃないのか……」

「あ……あはは……ごめんねミスト君。なんだか色々振り回して。シリ

カちゃんも、今度お詫びにご飯おごるから」

「高くつくからな、これ……」

申し訳なきそうに両手を合わせて謝るアスナに、シリカに起きるのを手伝ってもらいながら、俺は口を尖らせてそう言った。

で、キリトがここに来たのは今使っている「エリユシデータ」に匹敵する強力な剣が欲しかったからで、それでアスナが紹介したという事らしい。

アスナが親友に変なことしなかったのかとキリトに問い詰めると、慌てながらもキリトは否定して夫婦喧嘩に発展したのを見て、俺とシリカはまたかと呆れた。

このバカツプルちよつと自重しろ……と内心突っ込んでいると、隣に居たシリカがリズを見ているのに気がつく。

「そつか……そういうことね……」

「……リズ？」

ひとしきり夫婦喧嘩をしたアスナがリズに声を掛けようとしたら、明らかに沈んだ表情のリズに心配そうに声を掛けた。

……しばしの沈黙。

「失礼も何も、あたしの店1番の剣をいきなりへし折ってくれたわよー！」

「うわっ……ごめん……」

「別に……アスナが謝ることないよ」

そう言いながらリズはアスナに何か耳打ちすると、明らかに動揺しながらそんなんじゃないと否定する。

しかしリズはそのままアスナの横を通って、仕入れの約束があるからと俺たちに店番を頼んでそのまま出て行ってしまった。

「あの人……キリトさんのこと」

「……だ、ろうな」

シリカの独白に俺は同意しつつ、キリトの事を見る。

「行ってやれよ」

「……悪い」

その一言だけでキリトは全て理解すると、リズの後を追って外に飛

び出した。

「キ、キリト君!？」

「やーれやれ……あいつも大変だなあ」

「…ミストさんもキリトさんのこと、言えないですよ」

「え?」

「……なんでもないです」

シリカの言葉の意味が分からず聞き返すと、その反応が嫌なのかそっぽを向かれてしまう。

……俺、シリカの機嫌を損ねるようなこといったらどうか。

「2人とも、何の話?」

「いえ、別になんでもないです。ミストさん、お客さんが来たら大変ですから、お店の方にいてくださいね」

「お、俺が?……しやーないなあ」

まあ、この中で男1人であるよりはいいけど……けどなんでシリカはご機嫌斜めなのだろうか。理由を考えるものの思い当たらず、首をかしげながらカウンターに立つ。

そしたら後ろでボタンと音がして、振り返ると工房の扉が閉じられてしまっていた。

「……………」

何だろう、このボツチ感。俺は別に訓練されたボツチという訳じゃないんだけど。だからと言って工房に戻ったら、シリカだけじゃなくてアスナにも怒られそうな予感がひしひしとする。

第6話 紅蓮の王が眠る地

第6話 紅蓮の王が眠る地

前回のあらすじ：

アスナに振り回された。

「——と、言うわけで紹介するね。こっちの男の子がミスト君で、女の子がシリカちゃん」

「ミストだ。キリトとアスナと同じ攻略組だな」

「シリカです。よろしくお願いしますね、リズベットさん」

「リズベットよ。リズって気軽に呼んでいいわ」

あれからキリトと共に戻ってきたこのリズベット武具店の主、リズベット——愛称はリズ——に改めて自己紹介。

そしてキリトは、ここに居る俺たちに疑問をぶつけてきた。

「それで、アスナはともかくミストとシリカはどうしてここに？」

「お前と同じ理由だ。と言っても俺じゃなくてシリカの短剣をオーダーメイドしに来た」

「そっか……確かに新調するにはいい頃合かもな」

「オーダーメイドって言われても……お金とか性能の目標値とか、色々あるわよ？」

「そうだよなあ……まあ、予算は気にしないで、現時点で最高クラスの物がいい」

「キリトと同じこと言ってるし……短剣ってことはスピード系ってことよね」

「だな。アスナの剣みたいだな」

アスナの細剣「ランベントライト」もリズが打った自信作という話だ。とはいえ作るのなら相応にレアな金属が必要になる。

「そうね……物は試しってことで、これなんてどう？」

そう言っってリズが店内の商品の中から取り出したのは、波打った刀身が特徴の白い短剣。

「攻撃力もあるし、何より敏捷補正が入るから。使ってみてもいいけ

ど……どっかの誰かみたいにへし折ったりしないですよ」
「うぐっ……」

ジロリ、と半眼で睨まれたキリトは後ろめたそうに後ずさる。それにシリカは苦笑いしつつ、リズから受け取った短剣を2度3度と振ってみた。

「どう？」

「あたしはこれでもいいと思いますけど……」

「けどせっかくなら、やっぱいい奴がいいよな」

「何よ。これだって立派にいい奴よ？」

「それは分かるけど……なんて言うかなあ。使うならやっぱ、長く使える奴がいいし……シリカも、遠慮しなくてもって言ってもいいぞ？」

「けど……」

「シリカが払うんじゃないやなくて、俺が払うんだから。もつとわがままに、貪欲に言ってくれても良いんだって」

「……ねえアスナ。ああ言ってるけど彼のお財布って大丈夫なの？」

「え？ うーん……多分、大丈夫んじゃない……かな？」

おい、そのひそひそ話しているようで話してない2人。聞こえてるからな。

「……今置いてあるの以外ってことになると、金属を取りに行くしかないわよ。クリスタライト・インゴットはパワー重視だし……となると、アレかしらね」

「心当たりがあるのか？」

「60層の火山深部に、レアな金属があるの。ただ、それを守っているサラマンダーが居て……」

「……また排泄物ってパターンじゃないよな？」

「さすがにない……わよ」

自信なさ気なリズに、意味が分からないアスナとシリカは揃って首を傾げる。

リズがキリトのために鍛えた剣、「ダークリパルサー」は55層にいる水晶を食らうドラゴンの排泄物……なんだよな。教えない方がこ

の2人にもいいだろう。

「じゃあ、そのサラマンダーのお宝とやらを奪うか……って行きたいところだけど、もう日が暮れるからなあ」

「取りに行くのは明日ってことね」

「ああ……ってアスナ、お前も来るのか？」

「だって3人だけじゃ不安だもん。キリト君は？」

「俺？ 俺は……」

いきなり振られたキリトは一瞬どうしようかと考え込む。

……そう言えば、今更だけどキリトってリズの鍛えた自信作壊したんだよな。

「なあキリト。お前リズの剣折ったって言ってたけど、弁償したのか？」

「あ」

「あ」

ふとした疑問に固まるキリト。リズも思い出し、じつとキリトを見つめる。

「え、えーつと……」

「キリト君……まさか、無かったことにしよう……なんて、考えてないよね？」

「考えてない！ 考えてない！ それは断じて！ 決して！」

ゴゴゴ……と静かにかつて「攻略の鬼」と恐れられていたオーラを出しながら言ったアスナに、キリトはおびえながら全力で首を振る。

……忘れてただろ、俺が言うまで完全に。

「キリトさん……」

そこへさらにシリカの失望するような眼差し。俺も呆れた視線をキリトに送り、4人の視線にキリトの心のHPはガリガリ削られている。

「……仕方ないわねえ。じゃあこうするわ。キリトも金属取りに行くのを手伝うの。それで弁償はチャラにしてあげる」

「喜んで手伝わせていただきます」

「(日和った)」

「(日和ましたね)」

2つ返事で同意したキリト。恐らく1番の決め手は怒ったアスナだろう。確かに怒ったアスナは逆らえないほどの迫力があるから、ここで断れる勇気のある奴は中々いない。

「ミスト君……今変なこと考えてなかった？」

「いえなにも」

おまけに勘も鋭い。やっぱり敵に回したくはないなあ。

とまあこんな感じで、この日は明日の集合場所等を簡単に決めてお開きとなり、俺たちは各々帰路につくのだった。

そして翌日。第60層溶岩地帯移動中。

「……アツイ」

いざ来たものの、その暑さに全員が口を閉ざして歩いている。

確かに昨日火山って言っていたけど……まさかここまで暑いとは。

「これは……さすがに堪えるな」

「考えてみたらあたしたち……雪山からあまり間を置かないでこんな熱いところに来たのよね……。現実世界なら確実に体壊してるわ」

確かに間を置かないで危険地帯に2連続、なんてことは仮想現実でなければやれないだろうけど……しかしこれは。

「……アツイ」

「ミストさん……ずっと同じ台詞しか喋ってませんか？」

「仕方ないだろ……俺はお前たちみたいな軽装じゃないんだから」

「あー……確かに」

「この中だと唯一の重装だもんねえ……しかもフル装備」

「しかも色まで赤だし……ますます暑く感じるわ」

そういう設定なんだから仕方ないだろ！ とリズに突っ込みたいのをぐつと堪える。

しかしこのエリアはかなり厄介だ。ランダムで溶岩が流れている場所があるから普段ある道が塞がれていたり、当然触ればダメージも受ける。

「くっそ……クーラードリンクとかないのかよ。あればこの暑さもマシ

になるのに」

「あつたら苦労しないさ……けど、ミストの次に暑いのは俺だよな」

「黒は熱を吸収するって奴だっけ……」

「あらあ……？ 雪山じゃ「鍛え方が違うからな」なんて言っただけ涼しい顔してたのはどこの誰だったかしら？」

「あの時とは状況が違うだろ……」

なんか、暑さが原因のせいかな全員の機嫌が心なしが悪い。

そんなタイミングで、格好の獲物がポップする。うねうねと黄色い触手をくねらせたぬめりのある赤い体表のローパー型モンスター《レッドローパー》。毒液も吐いてくるから要注意。

「「うわあ……」」

生理的に受け入れがたいモンスターに女子3人は明らかに引いている。はいはい、俺たちで駆除しますよと。

「俺前な」

「わかった」

互いに剣を抜いて——キリトは相変わらず「エリュシデータ」を使っている——、盾で毒液を防げる事から俺が前が出る。まあ、キリトならこいつの攻撃を避けるなんて造作もないことだけど。

左右から伸びる触手を剣で切り払いつつ、盾を正面に構えて毒液を防ぎながら突撃。間合いに入った瞬間、キリトが俺の頭上を飛んで《レッドローパー》の後ろを取ると、俺たちはすれ違いながら《レッドローパー》の胴を斬る。

《レッドローパー》はあの独特の消滅音と共にポリゴンが砕け散り、俺たちは剣を鞘に収めた。

「……動く之余計暑さが増す」

「だな……」

けど女性陣は戦闘に参加する気は……あまりないらしい。ボス戦のときはしつかり戦ってくれるんだよな？ 信じてるよ？

「そう言えばここのエリア、特殊攻撃持ちのモンスターが多いんだっただっけ？」

「ああ。さっきの《レッドローパー》もそうだし、あと2〜3種類は特

殊攻撃持ち……まあ、いわゆる状態異常攻撃をしてくる奴がいるな。解毒結晶かレジストが必須だ」

「……当たらなければいいんだよな、つまり」

「この地形でそれが出来るか……？」

「大丈夫だよ。ミスト君が引き付けて盾で防いでいる間に、私たちが叩けばいいんだから」

「そうそう。期待してるわね、この中で唯一の盾装備なんだから」

「ピナ、ミストさんが危なくなったら回復してあげてね？」

『きゆるるー♪』

「あれ。俺負担でかかないか？」

「頑張れミスト……やばくなる前に片付けるから」

いや、頑張れって……そもそも今使っているのは防御範囲が狭い「デモンズ・クロー」だし。だったら範囲が広い「プロテクションエツジ」を使わないと俺が危ないじゃん！

「今ほど盾持ちが辛いと思った瞬間はないぞ、俺は」

「いやそもそも、それが盾持ちの本来の役割だろ。お前のやり方が特殊なんだよ」

そう指摘されると返す言葉も出ないんだが……とにかく、盾を変更してと……。

「そもそもミストって、なんであんな盾を持ってたのよ？ 普通盾って防御性能を重視するものでしょう？ それもだけど、防御性能より攻撃を重視しているように見えるけど」

「俺のプレイスタイルだよ。詳しい話はNGな」

「ふうん……（ねえ、大丈夫なの彼？）」

「（一時はあたしのレベリングを手伝うために前線を離れてましたけど……でも、ずっと一緒にいるあたしが保証しますよ）」

「（あれで攻撃と防御のどっちもやれるし、何度も一緒に戦ってきたから腕は大丈夫。キリト君もミスト君を信頼してるし）」

「（……ほんとかなあ）」

……？ なにやらリズが疑るような目を俺に向けているんだが。

「（なあキリト。なんか俺怪しまれてるんだけど）」

「あー……リズ以外はお前が『変わった盾』を使う理由を知っているけど、リズは知らないからなあ。だから本当に強いのかって疑われているんじゃないか？」

「(……なるほど)」

確かに、かつての俺ならこんなハイスペック状態は宝の持ち腐れだっただろう。

けれど今は違う。あれから必死に戦い抜いて今は胸を張って攻略組の一員と名乗れるんだ。

前線行けばそこそこ注目されるんだけど、中層は……ああ、うん。別の意味で注目されるな。主に嫉妬の対象で。

「(じゃあ次、俺一人で片付けるか)」

「(そのほうが良さそうだな。この辺りの敵なら、特殊攻撃に気をつける程度で後はレベル的にも苦労しないし)」

一応リズに俺の腕を見てもらおう。という事で、次に敵がポップしたら俺一人で片付けるという事に相成った。

さあて、何が出てくるやら……そう思いつつ先に進んでいくと、4体のモンスターがポップする。最初に戦った《レッドローパー》に火を吐くトカゲの《サラマンダー》、さらにコウモリの《フレイムバット》と大型のサソリ《ブラッドスコルピオン》……どれも状態異常攻撃持ちという厄介な性質を持つ奴らばかりだ。

「手伝うか？」

「いいって。当たらなきゃどうってことないし」

「体力優先のお前が言ってもなあ」

苦笑するキリトに問題ないと手を振りつつ、片手用直剣「マーヴェルエッジ」を抜いて盾を前方に構える。

手始めに狩るのは……空を飛んですばしっこく動き回るコウモリかなつと！

ターゲットを決めると、俺は迷わずモンスターたちに突っ込んでいく。《レッドローパー》の触手を潜り、《サラマンダー》を踏み台にして飛び越え、尾を伸ばしてきた《ブラッドスコルピオン》は尾を両断して使い物にならなくさせた。その上で滞空したまま、左腕を構える

と盾がライトエフェクトに包まれ、タイミングを合わせてソードスキル「ソニック・リープ」を発動。打ち下ろすようなモーシヨンとともに《フレイムバット》を鋭い先端を打ち込み、諸共落下して貫通させるとポリゴンが砕け散る。

残りは3——だが着地するころには既に次のソードスキルの準備が整っていた。

「ソニック・リープ」の硬直を十八番の3連撃ソードスキル「シャーブネイル」で《レッドローパー》を斬り刻みながらキャンセルし、硬直が解けたと同時に離脱。

一旦距離をとって態勢を立て直すと、残りの《サラマンダー》と《ブラッドスコルピオン》の位置を調整しながらさらにソードスキルの発動を試みる。無論、全力は出さないで流す程度で戦っているんだが。

「せいやー！」

ジェットエンジンのような効果音と共に盾と剣を突き出し、「ヴォーパル・ストライク」によって進路上にいた《サラマンダー》と《ブラッドスコルピオン》は見事に巻き込まれてボーリングのピンのように吹っ飛び、そのままポリゴンが砕け散って消滅した。

うん、まあ流す程度だしこれくらいでもいいだろう。自己採点をしつつ、ドロップしたアイテムを確認すると剣を収める。

振り返ってみれば、「まあ、この程度当然」みたいに納得しているキリト、アスナ、シリカの3人と、「うっそー……」みたいな感じでぼかんとしているリズがいた。

「少しは認めてくれたか？ 俺の腕前」

「盾でソードスキル……《盾剣技》って呼ばれるエクストラスキルがちよっと前に発見された、って聞いた事はあったけど……」

「ミストさんは確認された最初の《盾剣技》使いなんですよ」

信じられないようなものを見ているようなリズに、シリカは自分のことのように胸を張る。パートナーを認められて嬉しいのだろうか、シリカだって今じゃ肩書きではなく立派な《竜使い》だ。シリカが注目されてくれれば俺も自分のことみたいに誇らしく思えるし。

「じゃ、リズがミストの実力を理解してもらえた所で、さっさと奥に進

むか」

「余計暑くなるんだろうが……これもシリカの新しい武器のためだし、気合入れていくか」

「おっ、シリカちゃんのために頑張るミスト君カッコいいねー」

「ア、アスナさん！ 何言ってるんですかつ！」

「(バカツプル達ね。完全に)」

「ん……？ なんだよりズー……な、なんでいきなりわき腹に肘鉄をあたたっ！ なんて無言!? 何か言えっつて！」

「贅沢言わないの。ロリコン」

「なして!?!」

何でか知らないが、リズから執拗に脇腹に肘打たれ続けた……なして?」

「ここが最深部か……?」

「みたいだな……」

目的のダンジョンにたどり着き、マッピングもこなしながら俺たちはダンジョンの奥深くへと進み、ドーム上の開けた空間にたどり着いた。

周囲は常に溶岩が流れ込んでいて、落ちたら即終わり……かなり危ないな。

「けど目的の獲物は……見当たらないよ?」

「《サラマンダー》なんですすよね。ここに来る途中にも何度かポップしましたけど」

確かに普通の《サラマンダー》は倒したが……普通に考えるとその親玉みたいな奴ってことだろう。けど、ここにいないってことは他に出現条件があるのか……?」

「規定数の《サラマンダー》を倒す必要があったのか?」

「ないとは言い切れないけど……クエストを受けたわけでもし」

「言いつつキリトは周囲を見回す。」

めぼしい物は何も見当たらない……他に条件があるのか、あるいは道を間違えたか?」

「一旦引き返すか?」

『きゅるる?』

「ピナ?」

俺が言ったまさにその時、ピナが何かの気配を察知し、気づいたシリカが声を掛ける。

ピナの索敵スキルはかなり高い。キリトほどとは言わないが、安全マージン圏内のモンスターなら接近した時にすぐ気づく。

そしてキリトも何かの気配に気づき、手を剣の柄に掛けながら警戒していた。

「気をつける……何かいる」

「……………」

その真剣な口調から事態の重さが読み取れた。俺たちはすぐに身構え、周囲を警戒する。

——そして、それは姿を現した。

「マジかよ……」

さすがに俺も驚きを隠せなかった。

何故なら溶岩の中からゆっくりとモンスターが姿を見せ、オレンジの双眸を俺たちに向けてきたのだから。

そして、右上に表示される5本のHPバー。それは間違いなくフィールドボスと言う事を意味している。

名前は《インフェルノ・サラマンダーロード》……間違いない、こいつが話に出たモンスターか!

「サ、《サラマンダー》ってあのトカゲみたいな姿じゃなかったんですか!?!」

「確か伝承にでてくるファイヤー・ドレイクって言うドラゴンかヘビと同一視されてる……って、何かで見たことがあるな……空を飛んで口から火を吐き、洞窟や火山に棲んでいるらしい」

「まさに伝承どおりってワケね……」

何かの本で読んだ時の記憶を頼りにしてみるが、なるほど。リズの言うとおりに伝承に沿っている。ヒースクリフも味な真似をする。

「なら、あのモンスターを倒せばレアアイテムがゲットできるってわ

けだね」

「つてことだな。っし！ 絶対倒す！」

気合を入れ直し、俺は剣を抜き放つ。

ズンツ、と重たい足取りで《インフェルノ・サラマンダーロード》は足場に降り立った。

改めてみるとやはりボスだけあってかなりデカイ。灼熱の炎を帯びる溶岩をあちこちに纏い、翼を広げた姿は重厚な鎧を帯びたドラゴンのようだ。

『グオオオオツ!!』

《インフェルノ・サラマンダーロード》が咆哮する。それを皮切りに俺とキリト、アスナが先陣を切った。

「まずは手足を切断して機動力を奪う！」

「了解！」

「分かったわ！」

キリトの指示に俺とアスナが応じ、素早く連携を取る。

先んじてアスナが素早く潜り込んで顎を掬い上げるようにレイピアで突き上げる。仰け反ったところへ俺が盾で突き、剣で薙ぎ、さらには回し蹴りの3連撃を浴びせて怯ませた間に、キリトがソードスキルの発動体制に入っていた。

「はっ！——っ!？」

水平斬りの4連撃——「ホリゾンタル・スクエア」が放たれるが、あろうことかその刃が弾き返されてしまう。

目を剥くキリト。だがその目に冷えて固まった溶岩が入り込んだ。

「溶岩の鎧……っ!？」

まさか本当に溶岩を鎧にしているとは……その前肢が迷うことなく振り下ろされるが、キリトは瞬時にステップして回避する。

「プラン変更か!？」

「そうなるな……! 溶岩が柔らかかったらまだしも、今の状態じゃ剣じゃ通りにくい!？」

「なら打撃武器が……」

アスナが言い掛け、ふと後ろに目をやった。

サラマンダーロード』を怯ませる。

相変わらず息の合ったコンビだ。おまけに個人の能力もトップレベル。こんな2人と仲良くなれて本心強い。

硬直している『インフェルノ・サラマンダーロード』の右前肢を覆う岩石を砕こうと、リズが片手棍の垂直単発ソードスキル『パワー・ストライク』を叩き込む。

痛烈な1発が間違いなく岩の鎧を砕き、本来の甲殻を露にさせる。

「スイッチー！」

「はいっ！ やああっ！」

すかさずリズとスイッチしたシリカが「フアッドエッジ」で露出した前肢を突き刺し、硬直が解けた瞬間さらに「アーマーピアス」を叩き込む。

「キリトさん、お願いしますー！」
「任せろー！」

さらにキリトへ繋げると、右前肢に垂直4連撃ソードスキル【バーチカル・スクエア】を放った。手首、肘、肩と的確に関節を狙い、『インフェルノ・サラマンダーロード』の右前肢を斬り刻む。

だが相手は四足歩行生物。手足の1本を叩き斬っても行動に支障はない。

おまけに、相手はドラゴンと同一——空だつて飛べる。

翼を飛ばたかせ、『インフェルノ・サラマンダーロード』が飛翔する。

そしてその口から微かな炎と真紅の閃光が溢れた。

「ブレスだ！ 下がれ！」

その予備動作に気づいた俺は、言いつつ盾を構えようとし——だが直感的に横に飛び込むようにして範囲外へ逃れる。

閃光。『インフェルノ・サラマンダーロード』から放たれたのは放射状のブレスでも火球でもなく、一条の光線だった。

発射された光線は大地をウォーターカッターで切断したかのように切り裂き、そのまま首を上へと上げれば天井も一筋の溝を作り上げる。

文字通り間一髪だった……無理に受けようとしていたら間違いくあれに切断されていた。

「ド……ドラゴンがビームを発射するってどういうことよ!？」

「バサルかグラビ、あるいはアグナかよ……」

某モンスターをハンターするゲームで出たドラゴンの姿を思い浮かべながら、俺はリズの突っ込みに対してそんな感想を言った。ヒースクリフならきつと防ぐんだろなあ……マジ 《神聖剣》 鬼防御。

「厄介だな……」

空を飛ぶ『インフェルノ・サラマンダーロード』を見上げ、キリトが呟く。助走をつけて飛べば届かない距離ではないが、下手に飛べば溶岩に落下してしまう恐れがある。

「ピックやチャクラム投げても痛くも痒くもないだろうな」

「場所が悪すぎるんだよね。閉所で外周は即死エリアなんて……。向こうは飛び回れるのに」

「攻めあぐねるってのはまさにこのことよね」

アスナに同調するようにメイスを担ぎながらリズが呟いた。

『インフェルノ・サラマンダーロード』はフィールドを周回しつつ、最初に放ったものに比べればまだまだ弱い（それでも直撃すれば致命傷だが）ブレスを撃ってきて、俺たちはばらばらになって散る。

……このブレス、地味に厄介だな。地形を変形させる特殊効果でもあるのか、出来た溝に溶岩が流れ込んできて足場が徐々に削られていく。

「……キリト。相当無茶な案だが攻略法が2つほど浮かんだ」

「なんだよ」

「1つは誰か1人が囮になって、注意を引きつけた所で残りが集中攻撃」

「めちやくちや危ないじゃないか……」

「もう1つはあいつに飛び乗って強引に叩き落す」

「もう少しまともな攻略思いつかなかったのか?」

やや半眼気味に突っ込みを入れてくるキリトに、俺は苦笑いを浮かべた。

だって仕方ないじゃないか。空を飛べるなら空中戦するけど、SA
Oには無いんだし。

「2つを合わせる……って第3のプランも用意されてるけどな」

「今考えただろう、それ」

「じゃあどうするよ?」

「……3かな」

「決まりだな」

となるとポジションは……まず囷兼攻撃受け止める役が俺。パ
ワーのあるリズとキリトはサイドから、あと正面と飛び乗り役は
……」

「あたしが行きますっ!」

「シリカ。行けるのか」

「大丈夫です! この中だと、あたしが敏捷高いですし」

確かにシリカは装備の関係でレイピアを使うアスナよりも敏捷値
は上だ。おまけに器用さも匹敵する。けどこの分担の中じゃ、囷に次
いで危険だ。心情的にはダメだと言いたいが……。

「お願いします、ミストさん!」

目を見れば、どれだけ本気なのか分かる。ならきつとやってくれる
はずだ。

「……頼む」

「はいっ! キリトさん、すみませんが踏み台になってくれませんか
?」

「分かった!」

「アスナは俺の後方、リズは左側面に回りこめ! タゲはこっちで取
る!」

「頼んだわよ!」

瞬時にそれぞれ持ち場に着く俺たち。

一方でシリカはキリトからやや距離を置いて向かい合う形になり、
タイミングを計っている。

「あんまり無茶したらダメだよ、ミスト君?」

「ここで無茶しなきゃ男が廃るだろうに……っしやあ来いトカゲー

！」

ガンガンと剣で盾を打ち鳴らして注意をこちらに向けさせ、タゲを俺に設定させる。後ろにはアスナもいるし、間違っても怪我させればキリトとリズからフルボッコされかねな……あれ。俺実際の役割以上に重大じゃね？

「つてアスナさん？ ちょっと近すぎやしませんか？」

「だってブレスに巻き込まれたくないし……大丈夫、私の敏捷はシリカちゃんの次に高いから、何かあればすぐに逃げられるよ」

「そこに俺もついでという選択肢はないんでしょねえ……！」

なんてひどい。悲しみのあまりスーパー○イヤ人に……は、なりたくないなあ。まさかユニークスキルに入っていないよなヒースクリフ？

「いいから、来るよ！」

「うおおっ!？」

アスナに指摘されてみると、『インフェルノ・サラマンダーロード』は空中に留まって力を溜めているような動作に入る。間違いなくブレスが来る。

「——行きますっ！」

だが動きを止めたと言うのはこちらにとつてもチャンスだ。ピナを従え、シリカが全力でキリトへと走る。キリトは浅く腰を落とし、両手を上に向けて重ねて、走ってきたシリカを——重ねてきた手へ足が乗った瞬間、思いつきり上へ押し上げた。

「いっけえええっ!!！」

吠えたキリト。その声に気づいた『インフェルノ・サラマンダーロード』がそちらへ目を向けた時、空に飛翔するするシリカが視界に入り込む。

「ピナ！」

『きゅいー!』

少しだが、届かない。しかしシリカには空を飛ぶパートナーがいた。シリカの襟を銜えたピナが、最後のダメ押しに羽ばたくと、シリカ

は『インフェルノ・サラマンダーロード』の背中を捉える。

「やああっ!!!」

手にした短剣がライトエフェクトの輝きを放ち、シリカは落下の勢いを利用しながら「ラピッド・バイト」を繰り返した。

突き刺さる鋼の刃。ブレスの発射体制に入っていた『インフェルノ・サラマンダーロード』には反撃の手段がない。そもそも背中に乗られればやりたい放題廻られるだけ。

「っ！……のおっ!!!」

悲鳴を上げて背中に張り付くシリカを振り落とそうとするが、シリカは必死に逸れに抗いしがみつく。

おまけにダメ押しにダメ押しを重ね、重攻撃ソードスキル「インフィニット」をその背中に叩き込んだ。

『グオオオオオッツ!!!』

吠えた『インフェルノ・サラマンダーロード』が、力を失い地上に落ちる。落ちる直前にシリカは離脱し、タイミングを狙ってキリトリズが両サイドから走っていた。

「おおおおっ！」

「でええりやああああっ!!!」

共に武器がライトエフェクトで輝き、重攻撃ソードスキル「メテオ・ブレイク」、【トリニティ・アーツ】が炸裂する。

地面を滑りながらも、なおも正面にいた俺を噛み砕こうとその口を開けるが、その口に俺は盾を突っ込ませて黙らせた。

「アスナ！」

更に追撃に、距離をとって助走距離をつけたアスナが、まるで彗星の如く全身から光を発しながら突進。その手に持った「ランベントライト」を突き出す。

細剣最上位剣技、【フラッシング・ペネトレーター】。「閃光」の異名を持つアスナの最強技が放たれ、俺のすぐ横を視認不可能な速度ですれ違い、『インフェルノ・サラマンダーロード』の体を腹から尻尾へと貫通していく。

「スイッチー！」

「だ——ありやあああつ!!!」

更に更に畳み掛けるように俺の追撃。盾と剣がそれぞれ光りだし、先に剣の技が炸裂する。

逆袈裟2連。更に突き、垂直に斬りつけ——1回転から勢いを乗せた一撃を、その体に叩き込む。

アスナが放った「フラツシング・ペネトレイター」と同じく、片手剣最上位剣技、「ファントム・レイブ」……その威力は最上位だけあって下位剣技とは比べ物にならない。

「オ・マ・ケ・だああつ!!!」

だがそれだけに留まらず——赤く光を放っていた盾に力を込めて、思いつきり差し込んだ。

片手剣重単発攻撃ソードスキル「ヴオーパル・ストライク」。ジェツトエンジンのような音と共に力任せに『インフェルノ・サラマンダーロード』の体を貫いていき、赤いポリゴンエフェクトが舞い散る。

突き抜けた俺はアスナの隣に着地し、まだ辛うじて生き残っている『インフェルノ・サラマンダーロード』ヘトドメを刺すべく、最後の1人の名を叫んだ。

「シリカ! スイッチ!!!」

「——はいっ!」

走って勢いをつけたシリカが、短剣を逆手に構え跳躍する。

そしてその身を捻って、さながら小型の竜巻のように回転しながら何度も『インフェルノ・サラマンダーロード』の背中を切り刻んだ。

短剣最上位剣技「エターナル・サイクロン」。その名の如く竜巻のように回転して瞬時に多数の斬撃を叩き込むと言う、短剣の真骨頂とも呼べる奥義。

その連撃が残り数ミリの体力ゲージを一気に削り取り、『インフェルノ・サラマンダーロード』は痙攣して——無数のポリゴンの欠片となって崩壊する。

「……………」

俺たちは顔を見合わせ、そして——

「「「「やったー!」」」」

『きゅるるー♪』

互いにハイタッチを交わしたのだった。

「いやー、一時はどうなる事かと思ったよ」

「まったくよ。キリトの剣が弾かれた時は目を疑ったわ」

「し、仕方ないだろ。俺の筋力値でもあれを一撃では壊せないんだから」

無事に戦闘が終わり、ほっと安堵の色を浮かべるキリトたち。で、俺のほうは――

「やりましたっ、やりましたよミストさん！ ラストアタックボーナスできましたー！」

「お、おお。おめでどう」

初のラストアタックボーナスを達成して嬉しさのあまり舞い上がって、俺の腕に抱きつきながらびよんびよん跳ねるシリカになんとかそう言う。

確かに、ボス戦では威力が低い短剣でラストアタックボーナスをするのって難しいからな……リーチや威力を重視して槍や両手斧、片手剣とかがメインになりがちだし。ボス戦はシリカも機動力を活かした攪乱って補助ポジションだから、当然狙いに行きにくいんだが……いやはや、今回はたいしたもんだ。

「ここら、そのシスコンプラコンの2人。いつまでもいちやついてんじやないわよ」

「シスコッ!？」

「ブラコッ!？」

俺たちの様子を見てからかうように言ってきたリズに、互いに軽くシヨックを受ける。おい、その夫婦笑ってるなよ！

「じゃあなに？ バカップルって言う方がいいの？」

「カツ……いやその前にバカってついてるじゃねえか！」

「違うって言うなら反論してみなさいよー」

うりうりー、と肘で俺のわき腹をぐりぐりしてくるリズに反論できない俺。傍目には見えるかもしれないんですが、まだ告白もしてない

しされてもないんですよ、俺たち！……それなのにこの距離感っておかしいんじゃない？ とは思わなくもないけど。

そもそも告白ってなんだ、告白って……いや、されれば嬉しいけどさあ。

「ごおら、リズ！ まだ全部終わってないでしょ？」

「ああ、そう言えばそうだったわね……で、問題のお宝はどこかしら――」

リズがそう言った直後、地鳴りと振動と共に溶岩の中から岩がせり上がってくる。

その岩は中ほどに空洞が出来ており、そこにはルビーのような赤い金属が転がっていた。

「これが……例の金属なのか？」

取り上げたキリトは、タップして金属の情報を表示する。

「えーつと……名称はルビーブラッド・チタニウム……チタニウムってチタンかな？」

「確か強度と軽さ・耐食性と耐熱性が特徴だよね」

詳しいなアスナ……そう言えばお嬢様だって話だったけど、それでもたまたま知っていたのだろうか？

「まあ現実のチタンと同じってわけでもないでしょうけど、ひとまず目的の品は手に入れたわけだし、早いところこんな暑苦しいところから引き上げましょうよ」

「だな」

リズの意見には全員賛成。ひとまず金属は俺が預かり、一回は来た道に戻って外に脱出する。

長かったなあ……まあ、まだやる事はあるけど、少し休憩挟みたい。

「そう言えばこの主街区、温泉街でしたよね」

「温泉……じゃあ「リンダース」に戻る前に寄って行こうよ」

「賛成――！ さすがに汗流さないと仕事する気にならないわよ」

「えええっ!?!」

何故そこで温泉イベント発生するんすか!?! 前準備も何もしてないから俺もキリトもビックリ仰天してますけど!!

「なに？ 何か文句あるの？」

「い、いえ……」

「文句なんてありません、はい……」

女子3人からの不機嫌オーラに、俺とキリトは一言も反論できずに引き下がってしまう。

もちろん男女別だよなと尋ねたら、「当然でしょ」と若干軽蔑気味の目で見られ俺は軽く凹んだ。だって仕方ないだろお……！ こういうのはきちんと確認取らなきゃ！

もちろん覗くつもりなんて微塵にもないんだが、女子たちは分かってくれているのかいないのか若干冷たい。そんな俺を哀れんで、キリトは何も言わずただ肩を叩いた。

「つたくもう。ほんつとに男子つて分かりやすいわよね」

まだミストさんの発言に怒っているのか、リズさんは頬を膨らませていた。

あれからあたしたちは街に戻り、女子はお風呂に、男子は……なんだか適当に時間を潰すと言って別れて、あたしとアスナさん、リズさんは露天風呂に入っている。

「でも、ミストさん下心あったわけじゃないと思いますけど……」

「そうだよね。もしも覗いていたら……問答無用で突いていたし」

……アスナさん、笑顔で怖いこと言わないでください。

でも、ミストさんもキリトさんもそういうことする人じゃないし……多分大丈夫だと思うけど。

「随分とあの2人に肩持つわよね……2人つて」

「えっ……そ、そう？」

「ああ、あたしはそんな、別に……」

ちとー、と少し妬みも混じったような目を向けられ、あたしもアスナさんもちよつと動揺する。

「そんな反応してもバレバレよ。好きなんでしょ？ アスナはキリト、シリカはミストが」

「うっ……」

やっぱりばれてた……分かりやすすぎたかなあ。

「ア、アスナさんの方はどうなんですか？ 最近キリトさんとよく会うって聞きますけど」

「ええっ!? ま、まあ会うといえは会うけど、別に大したことは何もしてないよ。シリカちゃんはどうなの？ 私の方より一緒の時間が多いでしょ?」

「そ、それは……まあ、そうですね。でも特に何があったわけでもないですし……」

「あんたたちねえ……もうちよつとこう、ぐいぐい押せないわけ?」

「押すなんて……そんなこと」

「別に今のままでも良いかなあ……なんて」

「アスナ。それじゃあキリト他に盗られるわよ」

「そ、そんなことないよっ!」

「どうかしらねえ……」

確かにそれだとキリトさん、他の女の子と付き合いそうな気がするかも……キリトさんって結構女の人に好かれるし。

逆にミストさんはそんなこと無さそうだけど「シリカはそのままじゃ一生進まないわね」——ってえええっ!」

「だってそうでしょ? どう見ても兄妹みたいじゃない。もしくは歳の離れた幼馴染」

「うっ……否定できない」

「シリカちゃんの場合は、ミスト君が尻込みしている風に見えるけど……」

そう。あれで結構ミストさんは奥手と言うか……。

「言っちゃえばヘタレよね」

「リズ……」

バツサリ切り捨てたリズさんには返す言葉もない。実際、その通りだからなんとも……。

「まあ、どっちが先かって言われたらシリカたちのほうが先にくっつきそうじゃないの? アスナ、ぼやぼやしていると置いてかれちゃうわよ?」

「置いてかれるってそんな……べ、別に競ってるわけじゃないってば！」

「ほっほーう？」

リズさん、ほとんどからかってるなあ。だって楽しそうだもん。

けど、あたしもどうしよう。ミストさんに……や、やっぱり告白とか。

「……………」

そう考えたら、この間の夢の事を思い出して顔が赤くなる。そうしたら夢の中でしたことも出来るようになるかな。

「シリカ、聞いているの？」

「ひゃいっ!？」

「その反応は聞いていなかったわね……シリカの場合、もっとぐいぐい押さなきゃダメよ。ミストから何か聞いてないの？好きなタイプとか」

「タイプ……ですか。料理が出来る子が良いみたいですけど」

「ふむふむ。テンプレだけど悪くはないわね。じゃあ手作りの料理とかご馳走してあげればいいんじゃない？」

「でも……あたし、あんまり料理スキル上げてませんし」

「なら私が教えてあげようか？」

「ほんとですか!？」

願ってもない誘いに驚いてあたしはアスナさんを見た。むしろあたしの方から頼み込みたかったし。

「まあ、ほら。似たような人を好きになったから……ね？ お互い応援を込めると言うか、協力していこうと言うか……」

「あ……ありがとうございますっ！ アスナさん!!」

嬉しさのあまりあたしはアスナさんに抱きつく。

いきなり抱きつかれたアスナさんは目を丸くし、困ったようにリズさんに目を向けると苦笑いされた。

「いっほーそのころー」

「ぼー……………」

『ぎゅー』

特にやる事もない俺とキリト、そして俺の頭の上に乗ったピナは、何をするでもなく広場のベンチに座ってただボーっとしていたりするの、まあ別の話。

第7話 黒幕登場

第7話 黒幕登場

前回のあらすじ：

レア金属ゲット！

「えーつと……ベッドはここに置いて、と」

日当たりの良い場所にベッドをオブジェクト化させ、これで家具の配置は全部終わりと。

「ミストさん、そっちは終わりました？」

「今終わったところ。いやー……なんと言うか……」

「？ なんです？」

「一国一城の主になったって感じ」

「……………ぷっ」

俺の感想にシリカは一瞬呆然として……何がおかしいのか突然噴出した。

「な、なんで笑うんだ？」

「だ……だって……ミストさんがお父さんみたいで」

「お……とう」

よほどツボったのかシリカは笑いを堪えられていないが、俺は少なからずショックを受けていた。

いや確かに、世の中のお父さんはマイホーム買った時にそんな事思ふかもしれないけど……俺もそれと同類なのか!?

「そ、そう言うのは俺よりクラインやエギルの方が合ってるだろ!？」

俺まだ学生なのに!」

「……………ごめんなき……………ふふっ……!」

謝ろうとしたシリカだったが、まだ引きずっているのか最後まで言葉に出来ていない。

俺……老けて見えるんだろうか。アバター弄ろうかな。

「ち、ちがつ……! 別にミストさんが年寄りみたいとか、全っ然、そう言う事じゃなくてですね!」

「アスナから色々意見聞いてアバター弄ろうかなあ……この際だから戦闘スタイルも一新して……」

「ち、違いますよミストさん！ 話聞いてくださいよ〜っ！」

「どどんブルーに沈んでいく俺に、シリカは必死になって釈明する。」

この間、キリトたちと火山に潜むフィールドボスを討伐して発見した金属をシリカの武器に加工し、余った資金で俺はマイホームを購入した。

場所は第59層主街区ダナクの端にある、レンガ造りの白い壁と赤い屋根の2階建て。

やや外れの方にあるため中心部に比べて若干安く、すぐに購入を決めた。

けど今までで一番高額な買い物だったな……何しろ家だから。しかも2階建ては1人暮らしには少々広すぎたかもしれないけど。けど。

「……けどなあシリカ。良かったのか？ ここに住むって」

「良いんですよ。最近はホームにも殆ど戻りませんでしたし」

……つまり、そう言う事だ。

シリカも第5層にホームを持っていたが、俺とコンビを組んで以来ずっと戻っていないかったし、俺がここに拠点を置いて距離が空いたから、ならいつそ一緒に住むと。

そのため実際の購入費用は俺7、シリカ3で、さらにお得になったんだが……。

いや、別にシリカも負担しなくても俺だけで買えたからな？ けど一緒に住むならこれくらい当然ですって頑として譲らなかつたんだ。シリカの武器をオーダーメイドしてそこその額はしたが、要らないアイテムを売ったりそれまで大きな買い物はしていなかつたから貯蓄には十分な余裕を持っていたし。

まあ……少し負担してくれて俺としてはありがたかつたけど。

「(けど女の子と同棲なんて……どうせいつて——いかにいかに)」

まだダメージが残っているのか、つまらない親父ギャグが出そうに

なった。これは重症だな……。

ピンポーン。

精神ダメージを寸前で回避した時、下からチャイムの音が聞こえてきた。

「キリトたちか？」

ホームを購入した事は既にキリトたちに伝えてある。そしたらクラインが「じゃあホーム購入祝いでパーティーとやるか！」なんて言っていたんだが、話じや夕方からじゃなかったっけ？

アスナは今日は無理そうって言っていたから、違うと思うし……。首を傾げながら俺は1回に降り、そのまま玄関に向かう。

「はい。どちらさまで——」

鍵を開けて扉を開けた瞬間、俺は思わず固まってしまった。

血のように赤いジャケットに走る白いライン。長身で灰色の髪を後ろに撫でつけた厳格そうな顔立ち。……そしてその後ろで申し訳なさそうに小さくなっている見覚えのある某最強ギルドの副団長。

「失礼。ミスト君で良かったかな。血盟騎士団団長、ヒースクリフだ」

「え……あ、はい……」

凍結した思考でどうにかそれだけを口にする。

な……なんでヒースクリフが俺の家には？ ラスボスがなんだってここへ？

思考する事を拒絶した脳で必死に考えを巡らせる。おかしい、俺とヒースクリフは面識なんてなかったはず。アスナと言う接点があるが、それでもこうして出張ってくる意味が分からない。

「そう緊張しないでくれたまえ。今日は君のホーム購入のお祝いとお詫びに来たのだよ」

「お……お祝い？ お詫び？」

「ああ。先日はアスナ君が軍とひと悶着を起こそうとしたのを、君が止めてくれたそうだね。おかげで大した騒ぎにならなかった、礼を言わせてくれ」

言いつつ頭を下げたヒースクリフ。その後ろではアスナが両手を合わせていた。

……つまり、部下の起こしたトラブルで迷惑をかけてしまったお詫び、と言う事か。ビックリした……。

「い、いや……別に謝らないでくれ。アスナも友達が心配で我を見失っていただけなんだし」

「そう言ってもらえると助かる。それと、アスナ君から君がホームを購入したと聞いてね。つまらない物だが、これはその祝いの品だ」

頭を上げて言ったヒースクリフは、アイテムストレージからその祝いの品とやらを取り出した。……え。なにこれ。

「あの……これは？」

「蕎麦……のような物だ。引越し蕎麦という風習があるだろう？」

「いや……ええ」

確かにそんな風習が日本にはあると聞くけど。けど、「蕎麦のような物」ってなんだ？

「見た目は蕎麦だが、めんつゆがないとやはりね……鰹出汁や昆布出汁もいい、合わせ出汁でも構わない。しかし……やはり醤油がなければそれは『蕎麦のような物』にしかならないんだよっ！」

え。何これ。なんなのこれ。急に熱く語りだしたヒースクリフに俺も後ろのアスナも完全に面食らっている。

「この間はラーメンのようでラーメンでない微妙な料理を食べたが、あれはひどかった……もし、醤油があればと思わずには……くっ」

拳を握り締めて歯を噛み締めるヒースクリフ。顔を背けた際に、一瞬きらりと光る雫が見えたのは気のせいだと思いたい。

「そう言う訳で、めんつゆがなければこの蕎麦も微妙な物にしかならないが……許してくれ、伝統と言う物は大事なのだと思いたいのだよ」

「えっと……これはどうも……丁寧に」

内心ヒースクリフのキャラに引きつつ、ザルにこんもりと盛られた蕎麦を受け取る。

「ミストさん、どうし……ってアスナさん!？」

「あ、シリカ。悪いけどこれキッチンに置いておいてくれ」

「え？ はい……あの、なんですすこれ？」

「詳しく話すとまたスイッチが入りそうだから後にしてくれ」

またラーメンに並々ならないこだわりを持つヒースクリフが語りだすから。

……ちなみに俺は醤油より味噌ラーメンだ。けどうっかり口に出せばどうなるか分かったもんじゃないから黙っておこう。

しかし……これがあのヒースクリフかよ。最強ギルドの団長にして攻略組最強プレイヤー、その真の姿はSAOと言うデスゲームを開発してプレイヤーを閉じ込めた張本人、茅場晶彦が。

……あれ？ つまりヒースクリフ＝茅場ってことは、茅場はラーメンが大す……いや考えるのはよそう。

「……失礼。少し熱くなり過ぎた様だ」

「(まったくその通りだよ)」

熱弁した自分を省みて、ヒースクリフは恥じた様子は見せずに頭を下げる。

奇しくも俺とアスナはまったく同じタイミングで同じことを思っていた。

「あ、あの……立ち話もなんだし、良かったら中にどうぞ」

「いや……。アスナ君、君は厄介になりたまえ。私は少々用がある。ミスト君、すまないが付き合ってくれるかな？」

「俺……？」

「ああ。少し話があるのだよ」

っ……嫌な予感しかしないのは気のせいかな。けどここで断つても変に思われるし……。

……まあ、アスナの知り合いと言う手前、妙な事は起こさないだろうと思いたい。

「……分かった。パートナーに伝えるので少し待ってくれ。アスナ、上がってけよ」

「う、うん……お邪魔します」

来た時からずっと申し訳なきさそうにしているアスナを中に通す。

廊下を真っ直ぐ行くと2階へ、すぐ右手のドアを開けるとリビングとダイニングキッチンがあり、シリカはテーブルの上に置いたザル蕎

麦をどうしようかと首を捻っていた。

「あ、ミストさん。アスナさんも」

「悪いシリカ。少し外に出てくるから、アスナにお茶出してやってくれないか？」

「構いませんですけど……あの人、血盟騎士団団長のヒースクリフさんですよね？ どうしてあの人がここに？」

「えっと……それは私から説明するね。ミスト君、気をつけてね」

「……ああ」

何か良からぬ予感でも抱いているのか、アスナは心配そうに俺に声を掛けるとシリカの元へ。

俺は小さく頷いて、玄関で待っているヒースクリフの元へ向かった。

道中は一言も言葉を交わさず、たどり着いたのはちょうど石垣で仕切られたそこそこ広い草原。

「……人をここまで連れてきて、わざわざ何の用なんだ？ 家主としては、客人をもてなす責任があるんだが」

「いや失礼。ただ、君と2人きりで話をしてみたくなってだね」

……胡散臭い。なんで接点の薄い俺にいきなり興味を抱くのかなんて、すぐに分かる。

多分GMのヒースクリフからしてみれば、俺はイレギュラー。言ってしまえば1万飛んで1人目のプレイヤーみたいな物だ。しかも正規の方法ではない。

結局俺がどうしてここに来てしまったのか、どうやれば帰れるのかなんて分からないから、ずっとプレイヤーとしてゲームに参加していた。

……こうして考えると逆に接触が遅いのかもな。あるいは急に知名度を上げてきた俺だから目をつけられたのか。

「アスナ君から時折話を聞いているよ。ボス攻略でも遠目だが君の活躍は見させてもらっていた。珍しい《盾剣技》を使う変則型の剣士だね」

「……前置きはいいいから、要件だけ言ってもらえるか？ 一応人を待たせているんだから」

「これは失礼。なら単刀直入に言わせて貰おう。——君に、少しばかり興味が沸いた」

そう言ったヒースクリフは右手を振ってメニュー画面を呼び出し、そのまま操作すると俺の視界にウインドウがポップした。

『デュエル申請を受諾しますか？』

対戦者 : ヒースクリフ

対戦形式 : 1vs1

「言葉より剣を交える方がよっぽど伝わると思うのだが……どうかね？」

「光荣だな。まさか攻略組最強の男に勝負を挑まれるなんて。負けたらギルドに入団しろとでも？」

「いやいや。これはあくまで非公式だよ。君を誘うならしかるべき時に、正式な場で勧誘させてもらおう」

「こんな雑魚に目を掛けてもらえるなんて、光荣ですねつと……」

逃げるのは難しい。半分諦めて俺は受諾し、初撃決着モードを選ぶ。

やるならせめて、度肝を抜かせてやりたいが……生憎と俺にはキリトほどスピードがあるわけでもない。おまけにこいつはシステムで保護されてイエローゾーンまでHPバーが減る事はない。

スペックで無理なら、小技で度肝抜かせてやるか……！

素早くメニューから装備画面に入り、装備を身に纏う。使う盾は斬撃に対応する「デモンズ・クロウ」を。

ヒースクリフも血のように赤いフルプレートアーマーを纏い、左腕にはその象徴とも呼べる十字型の盾を装備し、盾には細身の剣「リベレイター」がセットされている。

残り10秒……全ての装備を終えて互いに剣を抜き、ゆっくりと回り込むように歩き出した。

2…1…0！

「はあっ!!」

先手必勝でソードスキル「ソニック・リープ」を発動。ダッシュからの斬り下ろしをヒースクリフは盾であっさり受け止める。返しの一撃を俺も盾で受け止めた。

一瞬の拮抗。だが俺は瞬時にヒースクリフを引き離し、距離を取って再び突撃する。

盾を突き出せば受け流されるが、振り向きざまに剣を叩き込んで弾き、よろけた所へ強引に立て直して追撃。互いの剣と盾が何度も火花を散らせる。

ソードスキルは迂闊に使えない。相手はこのゲームの生みの親。なら全てを知っていると考えるべきだ。

キリトのように反応速度が高いわけじゃないが……この《盾剣技》を駆使してどうにかやってやる！

時折ヒースクリフの反撃が入るが、手数はこつちが勝るため勢いでは押している。それでも繰り出す攻撃の全てはあの盾に阻まれる。

初撃決着モードのデュエルでは最初の一撃を相手にヒットさせた方が勝者となる。だが当たらなかった場合は相手のHPを先に半減させた者が勝者となるモードだ。

俺たちの初撃は互いにヒットしなかった。この場合は先に相手のHPを半減させることになる。

「くっ……そッー！」

これだけラッシュをかけているのにヒースクリフに致命的な一撃を与えられない。

焦るあまり攻撃が単調になった隙を突かれ、ヒースクリフが盾でボディブローを叩き込んでくる。

「ぐっ……いー！」

衝撃に顔をゆがめた俺は容赦なく吹き飛ばされた。そこへ襲い掛かる容赦ない追撃――！

「くっー！」

辛うじて盾を掲げて防ぐ。荒く息をつく俺とは対照的に、ヒースクリフは「ふむ……」と興味深そうに唸った。

「中々面白い戦い方をするな、君は。荒さも目立つが筋がいい」

「それは……どうも。褒められて光栄、だ！」

隙を見て脚を狙ったローキック。ヒースクリフは後方へジャンプして距離を取って避けた隙に立ち上がる。

結論。どうあっても勝てる気がしない。今はどうにか俺がやや押しているが、こんなのがあつという間にひっくり返されるだろう。

「これほどの才能を持つ人間が埋もれていたとは驚きだよ」

「ふ……っー」

意味ありげに笑みを浮かべるヒースクリフを無視し、こっちから攻め込む。

唐竹、袈裟斬り、薙ぎと斬撃だけでなく盾の殴打や蹴りも入り混ぜて攻めてもヒースクリフが応える様子はない。

「(本当、なんだよこのチート野郎め！ お前のほうがチーターじゃないか！)」

このままでは埒が明かない。こうなったら一か八かの賭けに出るしかない……！

盾が青いライトエフェクトを放ち、左から打ち下ろすように叩き込む。当然ヒースクリフの盾がそれを防ぐが、これが狙いだ。

垂直2連撃ソードスキル「バーチカル・アーク」。発動中に俺は右手の剣を構えて、赤いライトエフェクトの輝きを放っている。

逆袈裟……と言うよりはアッパー気味なモーションで力チ上げ、強引にヒースクリフの盾を押し上げた。

「貰……ったアアッ!!!」

すかさず剣で「ヴォーパル・ストライク」を放つ。こんな至近距離からこの技を放たれば回避も防御も出来ない……っ!?

必中を確信した渾身の一撃。しかし目の前でありえない現象が起きてそれを覆す。

弾いたはずのヒースクリフの盾がありえない速度で引き戻されていき、剣先を受け流す。

「(やっぱり……無理か)」

ぼんやりと、まるで他人事のように思う。

せめて破壊不能オブジェクトでも引きずり出してやろうとも思っ

ていたが、そう簡単に行く筈がなかった。

受け流された俺はそのままヒースクリフの横を通り過ぎ、返しの一撃を食らって吹き飛ぶ。

一気にHPが半分に減り、イエローゾーンに。その瞬間デュエルは決着した。

草の上に倒れ伏したまま、この結果に驚きはしなかった。だがシテムのオーバーアシストだけは引きずり出せたんだし、一矢報いた方だろう。

「……いやはや、中々冷やりとさせられた。まさか別々の武器で連続でソードスキルを使えるとは」

「……一応奥の手なだけだな」

感心したように声を掛けるヒースクリフにむつつりと答えて起き上がる。

元々同時に発動できていたならタイミングをずらして使うこともできるんじゃないかと言う発想で編み出したのが《スキルチェイン剣技連携》と呼ばれる技術だ。難点はやはりと言うか、盾の種類によつて発動できるソードスキルに制限があること。けど発想を転換すれば、剣の方でいくらでも補えるわけで。

「なるほど、発想力が戦闘能力を補っていると言うわけだな。中々興味深い」

「あんたの《神聖剣》には劣るさ。想像以上に鉄壁なんだな。俺の不名誉なあだ名はあんたこそ相応しいじゃないか」

「レッドクリフ」だったかね？ いやいや、私はビームを出す事ではできないよ」

「俺だつて出来ないつての」

そんな必殺技、ランドセル背負った小学生がリコーダー吹きつつ下校する片手間に戦車をひっくり返せるような物だ。つまり、ありえない。じゃああの軍師はどうやってあんなビームを出しているんだろう……。それ以前にヒースクリフも知ってたのかあれ。

「さて、手間を取らせてしまったな。ありがとうミスト君、君のことはよく分かったよ。君になら私も背中を預ける事ができそうだな」

「あなたの背後に回りこめる奴なんてそう居ないと思うけどな」
「いやいや、わからないさ。案外後ろからさっくり刺されて死ぬかもしれない」

その破壊不能オブジェクト解除して言えよ、そんな台詞。

嘆息した俺にヒースクリフがハイポジションを差し出してくる。

「受けてくれたお詫び……と言うほどではないが、使ってくれ」

「ありがたく」

蓋を開けてくつと煽ると、甘酸っぱい不思議な味がして半分だったHPが一気に全快する。

「さて、では私は失礼しよう。付き合わせて済まなかったね」

「アスナはいいのか？ 今日は何か用事があったんじゃないか？」

「ああ。それに関しては問題ない。軍と問題を起こした事に関しての事情聴取と注意をしたのだが、もう終わったよ」

ああ、それであんな小さくなっていったのか。

普段のアスナからは想像もつかないほど暴走していたけど……多
少お咎めがあつたつてていどなのかな。

「罰として明日からは迷宮区攻略の陣頭指揮をさせることになった。
何しろ大した理由でもないのに攻略をサボっていたのでね」

「あー……」

虫が嫌いだからあれこれ理由をつけて逃げていたのもバレバレ
だったわけですか。哀れ、せめてコックローチとかに遭遇しない事を
祈るしか俺には出来ない。

ヒースクリフとはその場で別れ、俺は1人帰路につく。

面倒な奴に目をつけられたな……率直な感想はそれだった。

そこまで派手に動いていないとは言え、茅場からすれば俺は立派な
不確定要素。警戒するのも当然だろう。

……けれどゲームマスター権限で強制的にログアウトとか、そんな
ことも出来たんじゃないか？

「いや、あれでフェアを通してはいるし、そんな真似はしないのか」
こつちが妙な行動を取らなければ強硬手段をとる事はないと思

たい。

慎重になりすぎる必要はないけど、心に留めておこう。

家が近づくにつれて、ふと「あ、なんて言おう」と今更気づいた。

「(デュエルしてたなんて正直に言えるわけないからなあ……)」

……仕方ない。ここは責任取ってもらうぞ、ヒースクリフ。

「ただいま。はー…疲れた」

玄関に上がると、すぐにいい匂いが奥の方から漂ってきた。

キッチンの方かな？ と予想をつけて覗くと、シリカとアスナが台

所で料理をしているらしい。

「あ、お帰りなさいミストさん」

「お帰り……団長と何の話してたの？」

俺が帰ってきたことに気づいたアスナが心配そうに聞いてくる。

「いや、「ラーメンで最強なのはなんだ」って熱く議論を……」

「団長……もつとお堅いイメージがあったのにラーメンにそんな拘りがあるなんて」

ああ、やつぱりアスナも衝撃受けていたか。きつとヒースクリフがラーメン好きなんて、俺とアスナ以外知らないんだろうなあ……。下手したら団員の士気にまで影響するんじゃないだろうか。

「ラーメン……ですか？」

あ、しまった。シリカも知ってしまったじゃないか。まあ俺たちは血盟騎士団の人間じゃないし、言いふらすつもりもないから別にいいよな。

「味噌対醤油で一触即発になりそうで……」

「いや、そんなことでならないですよ！ 血盟騎士団団長がラーメンで乱闘騒ぎなんて、他のギルドに大笑いされるよ！」

「??？」

唯一ヒースクリフの意外な一面を知らないシリカだけ、その場で首をかしげていた。

本当は実際に戦っていたんだが……まあ、わざわざ話して心配させる必要もない。

「まあそんなことよりも、聞いたぞアスナ。ヒースクリフに大目玉食

らったそうじゃないか」

「うっ……」

「何の話ですか？」

「この間アスナ大暴走してただろ？ それでヒースクリフに説教食らって、明日から迷宮区攻略の陣頭指揮を執ることになったんだってさ」

「あー……そうだったんですか」

「同情が身に染みるよ……」

苦笑いして同情するシリカにさめざめとアスナは涙を流す。けどこれって完全に自業自得だよな。

「キリトに付き合ってもらったらどうだ？ 虫は平気みたいだし」

「……ミスト君たちは？」

「あたしは…虫はちよつと」

「コックローチの相手はごめんだ」

「コッ——」

ボソツと呟く俺の一言にアスナは表情を引きつらせる。

コックローチ——いわゆる人類共通の大敵G。断じて黒くて口から光線を吐く日本を代表する怪獣ではない。というか本当にそれなら勝てるわけがない。

「……今日、キリト君は来るんだよね」

「そうですよ。皆さん夕方になると思いますけど」

「……よしっ」

何か決意して、ぐっと拳を握り締めるアスナ。俺たちにできるのはキリトが引き受けてくれるように祈るだけだ。

けど俺たちは絶対参加しない。絶対に。虫だけはやっぱりダメなんだよ……。

「ようミスト！ 来てやったぜ、ホーム購入おめでどう！」

「人違いです」

ボタン。バンダナを巻いた無精ひげ面の男が尋ねてきたように見えたが、恐らく気のせいだろう。

「つてうおおい！ 門前払いってどう言うこつたー!？」

突っ込みと共にドンドンと激しくノックされる。

「冗談だクライン。本気になるなよ」

「目がマジだったぞ、マジ」

気のせいだろ、とどぼけて野武士面の男、クラインを家に通した。

既にリビングにはエギル、リズ、キリトも来ており、アスナは必死にキリトを説得してコンビを組んでくれるよう頼んでいる真っ最中だったりする。

「おつそーい！ 何してたのよ、クライン！」

「いやいやすまん！ ちょっと祝いの品手に入れるのに時間かかってな」

「そんな気を使わなくてもいいのにさ、皆」

いや、嬉しいけどさ。

それぞれインテリアだったり食料だったり様々だけど、やっぱりインパクト強かったのは……

「ん……？ なんだよ、この山盛りの蕎麦は」

「ヒースクリフの引っ越し祝い」

「……………え？」

「ああ、やっぱり同じ反応したな」

「あたしたちも最初聞いたときは耳疑ったわよ。あの聖騎士ヒースクリフが引越し蕎麦って1週どころか3週くらい回っても分けわからなかったわ」

「俺だつてわかんないって」

「…………ま、まあ人それぞれ、色々あるよな。つてことで俺の持ってきたものは…………コレよっ！」

威勢よく取り出すクライン。出したのはコルクの栓がされた瓶だった。

「酒かよ」

「へへっ。いい酒が手に入るって言うクエストがあったから祝いの品にはちようどいいと思ってな」

「そうは言っても、あたしたち大半未成年なんだけど」

だよな。

リズの指摘するとおり、ここで成人しているのはエギルとクラインの2人だけだ。本物の酒じゃないといっても未成年が飲んでいいのか……？ 酒飲んで状態異常に陥ることがあったわけ？

「まあまあ、堅いのは抜きにしようぜ」

「……まあ良いかな。俺は」

「え。ミストさんはお酒大丈夫なんですか？」

「いや、分からないけど。親戚とかが集まって無理やり飲まされた程度」

確かお盆で集まった時だったっけなあ……。叔父に日本酒勧められて飲んだら辛すぎて飲めた物じゃなかったっけ。

「バーのマスターとしては未成年に飲ませるのは感心しないんだがな」

「そうよそうよ。それにほら、ご馳走だったたくさんあるんだから。飲むなら大人の2人で飲んでなさいってば」

「そうですよ。ミストさんも飲んでダメです。お酒は二十歳になってからって法律で決まってるんですから」

「うぐっ……ごめんなさい」

「良かれと思って持ってきたのに……」

シリカとリズに咎められて、俺とクラインは小さくなる。

まあ……他に飲める奴がいらないならまだしも、飲める大人が2人もいるんだし大丈夫……だよ、な。

「けど6本くらい調達したんだよな」

「おい……」

いくらなんでも多すぎだろ、と思わず突っ込んだ。

結局酒は飲みたい奴の自己責任と言う事で、パーティーと言う名のどんちゃん騒ぎが始まったんだが……。

「ズズッ」

黙々と蕎麦の山を崩しに掛かる俺。

幸いと言うか、蕎麦が好きだったから食べる事に苦を感じない。さすがに7人と人数が多いためリビングとダイニングの2つに別れて

料理や飲み物が置かれ、皆好き勝手飲んで食って騒いでいる。

ああ、そう言えば皆集まるってことは今まで無かったからな。ちよつと新鮮だ。

あと蕎麦を食べているんだけど、つゆが物足りなくて蕎麦のような物を食べているとしか思えなかったり。まだアスナ醤油を開発していなかったのか。

「……隣の芝生は青く見えるって言葉あるよな」

「言うなよ……」

ボソツと、向かいにいるキリトが蕎麦を啜って呟いた事に俺は突っ込んだ。

皆リビングの方に集中しており、ふと見ればなんだか楽しそうに見える。……なんだろう、胸にこみ上げてくるものが……。

「こらあミストゥ！ 何黙々と蕎麦食べてるのよ〜！」

「結局リズは酒に手を出したのかよっ！」

若干頬が赤いリズに思わず突っ込む。その手にはしっかりとリズが握られていた。

「やくねえ、ちよつとだけよ、ちよつとだけ…ひつく」

「酒弱いんじゃないかお前……」

酒臭いというわけではないが、アルコールに弱い体質なんだろうか。とりあえずリズからグラスを没収し、代わりに水を渡す。

「水でも飲んでちよつと落ち着けて」

「ん〜……あ、キリトオ、楽しんでる〜!？」

「リ、リズ？ 酔ってるのか……？」

ああ、制御不能のリズは止める手段が無い。

次に目を付けられたキリトは酔っ払ったリズとエンカウントしてたじろいでいる。

……ちなみに皆の配置はというと、

ダイニング：俺、キリト（あとリズ）

リビング：クライン、エギル、アスナ、シリカ

ちなみにダイニングには蕎麦しか置かれていない。ある意味忘れ去られているそれを俺たち有志が片付けに掛かっている。

……リビングにはアスナと作るのを手伝ったシリカの料理が並んでいるんだよなあ。

蕎麦の山ももうほぼ崩してあと少しだし、キリトに任せても良いかな……酔っ払いも一緒に。

こつそりと抜け出そうとしたのだが、索敵スキルを鍛えているキリトがそれを見逃すはずも無かった。

「おっ、おいミスト！ 置いてくなよ！」

「後は任せたキリト。リズの酔いが醒めるまで相手してくれ」

酔っ払いに絡まれて助けを求めるキリトを、俺は無常に切り捨てた。

すまないキリト……でも圈内だから死ぬような事はないし大丈夫さ。

キリトに合掌して、ダイニングを出て行く。さて……あつちはどうなってるのか。

「おっ、お前も来たかミスト！」

「クライン……リズになに飲ませてるんだよ」

絡み上戸になっていたぞ、とグラスを赤い液体で満たしているクラインに半眼で突っ込んだ。

「いや、女は度胸よって飲みだしてよ。すぐ酔いが回ったみたいなんだよ」

「なにやってんだよりズの奴……」

勢いをつけて自滅したなら意味が……いや、キリトに絡んでるし計画通り……なのかな？

「いいのかアスナ。キリトが危ないけど」

「分かかって見捨てたミスト君が言う？」

「絡み上戸の相手だけは絶対するなど祖母の遺言が……」

「思いつきりうそ臭いよ。もう……私別に2人の保護者じゃないのに」

言いつつも救援に向かおうとするアスナ。やっぱり面倒見が良いじゃないか。

「アスナも苦労性だなあ」

「ミストさんがけしかけたんじゃないですか。いいんですか?」

「大丈夫……じゃないか? それよりシリカは飲んでないよな?」

「あたしはアスナさんやエギルさんに止められたから、大丈夫ですよ」
「なら良かった」

もしクライインが勧めていたら【ヴォーパル・ストライク】で突っ込んで行くところだった。

「お前はよお、ちよつと過保護すぎないか?」

「そうか?」

「自覚してなかったのか。いや、していたらそこまで過保護にならないよな」

エギルまでそんな事言うのか……。俺は全然意識した事がなかったんだけど。

「シリカもそう思うか?」

「ええっ? えつと……なんと言うか、嬉しいですけどちよつと過保護じゃないかなあ……とは、思いますけど。本当にちよつとだけですよ?」

「ぬう……」

そうか……。俺って過保護だったのか。でも線引きがよく分からないからどの程度が過保護なのか分からないんだよなあ。

「じゃあ中層に行ったらシリカちゃんに見知らぬファンが集まってきた。お前はこの場合どう行動する?」

「即座に蹴散らす」

「それだ」

ズビシツと指差すエギル。え、これくらい当然じゃないか? 俺はシリカの相棒だし、いくらファンとは言え知らない奴が群がってきたら怖がるじゃないか。

「はあ……ミスト、ちよつと座れ」

「? ああ……」

蕎麦ばかり食べていて別の物が食べたかったから、ちようどカナツペがあつたので摘んでいたら突然エギルに言われて正座(なんとなくそうしなきゃいけない雰囲気だった)する。

「お前がシリカを大事に思っているのは分かる。けどそう言う過激な行動に走るのが過保護だつてことなんだよ。お前はシリカの保護者か？」

「えつと……一応年上の立場だし、そうしたほうが良いのかなとは思ってるけど」

「別にそれは構わないかもしれないけどよ、限度つてのがあるだろ。お前、シリカちゃんに彼氏が出来たなんて言われたらどうするんだ？」

「か、かれっ!？」

クラインの例えに、シリカは何故だか過剰に反応して、俺は不思議そうにシリカを見やる。

彼氏……彼氏か。でもシリカが好きになった相手だからなあ。

「色々と思うことがあるけど、やっぱり知らない奴にシリカを持っていかれるのはなんか腹立つかなあ」

「……もうお前がつ「やああっ!」あぶろっ!？」

クラインが何かを口走ろうとしたまさにそのタイミングで、俺の頭上を電光石火の如く飛んだシリカが手にした短剣で「ラピッド・エツジ」を繰り出し、見事クラインの胸部を強打。圈内だからダメーჯこそないけど思いつきり吹っ飛んでいった。

「あ、ああっ! すみませんクラインさんっ! 思わず手が滑っちゃいました!」

なんでか顔を真っ赤にしたシリカは慌てて謝っている。あまりの速さに俺は状況がつかめずただ混乱していた。

ただエギルだけは「自業自得だろ」とクラインを呆れて見ている。ちなみに……クラインを貫いた（厳密には本当に貫いていないが）のはシリカの新武器であるダガー「ブラッド・オン・ファイア」だ。その名の通りベースにしたのが赤い金属だったためそれ自体も真っ赤であり、柄や鏢などは黒くなっている。刀身は両刃で、中心に行くほど細く、先端に行くほど膨らむ形状をしており、見た目に反し耐久値は高く設定されている。

「えつと……生きてるよな?」

「理不尽だ……」

いや、分からないけどクラインに原因があると思う。なんとなく。さめざめと涙を流すクラインに、俺はそう思った。

「じゃ…俺たちも帰るよ」

「ああ。……大丈夫なのか、リズは」

キリトとアスナに肩を貸されて酔い潰れているリズを見て、俺は少し心配になる。

3時間くらい騒いで、9時過ぎになるとお開きになり皆家路に着こうとしていた。

「大丈夫だよ。私たちが送っていくから」

「リズは今後酒飲ませたらダメだな、絶対」

「弱い上に暴走してましたからね……」

ややげんなりした表情でシリカが呟く。

俺たちに気づかれなないようにこっそりと燃料補給したリズはさらに暴走。さながら暴走トラックと化した彼女を俺とキリト、アスナの3人がかりで抑え込み、怒ったアスナに説教されたリズは震え上がっていた。

無論、全ての元凶であるクラインも折檻されたのは言うまでもない。

「つかクラインもエギルもまだ飲めるとか。さすがに大人はアルコールに強いよな」

「エギルさんは見た目からして強そうだったけどね」

「ああ。バーボンのロックを静かに傾けるとか、絵になりそうだよな」
言ってイメージしてみると……ヤバイ、めちゃくちゃ絵になる。ハードボイルドって奴かな。黙っていれば、だけど。

エギルとクラインは「これじゃあ飲み足りない」と言ってお暇するついでにハシゴしに行った。今頃がっばがっばと飲んで馬鹿笑いしているんじゃないだろうか。

「本人は江戸っ子だからなあ」

「黒いスーツよりは法被か」

「法被って……ぶふっ」

なんとなく言ってみると、想像したのかキリトは突然噴出す。俺も同じ物を想像しそうだからやめておこう。

「もう……ほら、そろそろ行くよキリト君。じゃあミスト君、シリカちゃん、またね。今日は本当に迷惑かけちゃってごめんね」

「そんな、あたしは気にしてませんよ。むしろ、お料理のお手伝い……と言うか、あたしが手伝う側でしたけど、とにかく助けてくれて助かりましたから」

「俺も別に気にしてないって。ヒースクリフとのあれは人類が決して相容れない問題の1つだからな……」

「いや、そんな大げさな……」

「きのことたけのことと言う前例があるだろう。ちなみに俺はたけのこな」

「……確かに相容れないみたいだね」

なるほど。アスナはきこの派なのか。たけこの派の俺とは相容れない宿命らしい。

ヒースクリフとの顛末を聞いていたキリトも、その例えに置き換えられれば納得といったように頷いている。

「あのヒースクリフがラーメン好きって言うのは、ちよつと意外と言うかシユールと言うか……」

「俺だってそう思ったさ……1番衝撃受けたのはアスナだったけど」

「だって……団長って結構堅物と言うか、攻略以外に関心事無いイメージがあつたから」

俺だってそんなイメージだったさ。読んでいる限りそんな描写見た記憶なんてなかったし。

これをアスナが広めたら、さらなるペナルティが課せられるかもしれないから黙っておこう。キリトにはついうっかり洩らしてしまつたが。

「と、とにかく！ もう帰るよ！ じゃあね2人とも！」

「わっ、待てよアスナ！ じゃ、じゃあなミスト、シリカ！」

「おう」

「おやすみなさーい」

遠ざかっていく2人（+酔い潰れた1人）に手を振って見送ってから、俺たちも家の中に戻る。

さて……まずは部屋片付けないとな。

「あいつらやりたい放題して行つたからなー……」

主に酔っ払い×2が。せつかくの新居が早速散らかってしまった。

さっさと片付けて……まあ10時までには済むだろ。

「さっさと片付けて休むとするか」

「そうですね。それに、2人で片付ければすぐに綺麗になりますよ」

うん、確かに。

1人だとこの散らかり具合で片付けるのには少し絶望するが、2人ならもつと早く終わるだろう。

「けどシリカは休んでもいいんだぞ？ 料理だつてたくさん作つてもらつたし、疲れてないか？」

「大丈夫ですよ、このくらい。ミストさんに鍛えてもらいましたから」とは言えシリカはもう十分働いてもらつたし……何とか言いくるめる方法が思い浮かばず、その間にシリカは行動を始める。

「まあ、シリカがやりたいならやつてもらうかな」

独りごちて、俺も片づけを始めた。

あんなに大騒ぎした後だからか、人がいなくなると急に静かになつて落ち着かないな。

しかもシリカと2人きり。いや、ピナは既にソファの上で丸くなつているけど、そうでなくても2人で居る機会は今までも数多くあつたし気にする必要は無いはずなんだけど。

「(クラインがあんなこと言つたからかな)」

シリカに彼氏……まあ、好きな人が出来たら、か。

実際、シリカは原作じゃキリトに憧れみたいな好意を持っていたけど……今も持つてるみたいだが尊敬とかその辺りみたいだし。

と言うか、大分原作剥離しちゃっているんだよな。これまでの行動を振り返れば。大筋こそ間違っていないし、所々不明な箇所もあつたけどキリトの交友関係とか、何よりシリカが攻略組に加わっているっ

て言うのが最大の相違点か。

まあ、あの場で怖くて蹲っているよりは全然良かったけど。目の前の事に必死すぎて全体のことなんか微塵たりとも考えてなかったな。

「(えーつと……確か、今が2024年の6月29日……いや、実質30日でいいか。ゲームのクリアが11月の初めだったはずだし……残り5ヶ月……ないし4ヶ月ちよつとで良いよな)」

細かい日付までは忘れたが、大体こんな感じで大丈夫だろう。このまま順調に進めばヒースクリフが75層のボス攻略後に正体を明かし、キリトと戦って結果的にキリトの勝利となるはずだ。

まあそれはまだ先のことだし、当面は目の前のことに集中して片付けていこうか。そう、シリカに好きな人が出来たら。

いまいちしつくり来ない。こうなったら身近の知り合いでイメージしてみよう。

まずは……そうだな、キリトから。

『ミストさん、あたしたちお付き合いまする事になりました！』

『そう言う訳だからシリカの事は俺が守ってみせる。安心してくれミスト』

「お前アスナはどうしたんだよッ！」

「!?」

パリーンツ、と思わず手に入れたら持っていた皿が割れてしまふほどの力を込めてイメージ上のキリトに吠えた。

「ど、どうしたんですか……?」

「い……いや、なんでもない」

突然叫んだ俺におっかなびつくりしてシリカが尋ねてくる。

もしそんな事態になれば俺とアスナで延々と殴り続けているだろう。……おい誰だ『負け組』とか言った奴出て来い！

ええいつ、とにかくキリトはダメだ。そもそもアスナに妄想とは言え知られれば俺が怒られる。

そうなる可他……エギル……って結婚してるとか言っていたよな。

そうなる……ヒースクリ……いやこれもありえないだろ。

そうなるに残るのは1人……クライン。

「いや、そうなら延々と『ソニック・リープ』を連打しているな」
むしろキリトから《二刀流》借りて「ジ・イクリプス」叩き込んでやる。ユニークスキルだから借りるとか無理だけど。

「(そもそも、なんで俺はこんなやきもきしているのだろうか?)」
ふと自分の心境に気づき、これは妙だと首を傾げた。

確かに俺はシリカのパートナーだけど、恋愛まで束縛する権利はないだろう。俺だって親とかにそんな事をされれば嫌だし怒る。

だから、それは本当に何気なく口から出ていた。

「シリカって好きな人とかいたのか?」

「ひえっ!」

突然そんなことを聞かれてシリカは声が裏返り、ついでに洗っていた皿が手からすっぽ抜ける。俺はぎよつとしながらもとつさに落ちようとした皿を受け止めていた。

「ああつ、ごめんなさいっ!」

「いや、ごめん。何言ってるんだろうな、俺。クラインが変なこと言ったからそれが頭から離れなくて」

危ない危ない……食器ブレイカーなんて俺だけで十分だ。

謝るシリカにごまかすように笑い、積み重ねた残りの皿を隣に置く。ちらつと横顔を伺うと、頬が紅潮していて明らかにさっきの質問に困っているようだ。

「えっとだな、別に変な意味で言ったわけじゃなくて……そう、シリカが誰かを好きになっても俺は祝福するとかそんな事を……いや、ちよつと違うな。えーつと、えーつと」

何とか俺の気持ちを言葉にしようと思うのだが、いい言葉が浮かばない。俺が伝えたいのはなんと言うかアレだよ、アレ。わかるだろ?アレってことだから。

「……ミストさん」

「えー……ん?なんだ?」

ふと、シリカの様子がおかしい事に気づく。

俺に体を向けているが視線は下を向いており、明らかにいつものシリカとは様子が違った。

「ミストさんはあたしが嫌いなんですか？」

「え？ な、なんでだ？」

「——だったら！ どうして気づいてくれないんですかっ！ 鈍いにもほどがありますよ！ 鈍感です、キリトさんより鈍すぎです！」

え？ えええ？ なんで？ なに？ どうして俺シリカに怒られてるの？

「あ…あの、シリカ？ 話が見えないんだけど」

「じゃあ、どうしてあたしが無理を言っただけで強くしてもらったり、ここに住まわせてもらったと思いますか!？」

「それは……1人でレベリングは危険だし、俺たちコンビだから近くにいられるほうがいいんじゃない？」

「そうですけど……それもありませんけどっ！ もっと大事な事があるんですよ！」

どちらかと言えば大人しい部類に入るシリカがかなり……いや、本気で怒っている様子に俺は面食らっていた。

なんでここまでシリカが怒っているのか、さっぱり分からない。

怒っているシリカに圧倒されて何も言えないでいると、シリカは密着するほど近づいてきて精一杯背伸びをして俺に視線を合わせようとす。

「好きな人の傍にいたい……力になりたいって思ったら、いけないんですか!？」

「……………え？」

シリカが、俺を好き？ え？ それって……

「お兄ちゃんとかそういう意味じゃなくて、異性として、男性として好きって意味ですよ！」

考えようとしていた事を真っ先に否定された。

そ、そうだよな、うん。それ以外考えられな……

「うえええええいっ!?!」

全てを理解した瞬間、自分でもよく分からない奇声を大声で発してしまった。

第8話 繋がる心

第8話 繋がる心

前回のあらすじ：

シリカに告白された……だと……!?

よくぞ集まってくれた勇者たちよ！ ここに集いしは各々名を馳せた歴戦の勇士ばかり！ そなたたちならば必ずや魔王を打ち倒し世界に光を取り戻す事だろう！

「いやなんだよその語り」

「すまん。寝不足で頭が回らないんだ」

半眼で突っ込みを入れてきたキリトに素直に謝った。

場所はエギルの店。大事な話があるからとクラインとキリトを呼び出し、さらにエギルも加えての4人がこの場に居る。

「寝不足って、俺たちが帰ってから何してたんだ？」

「いやその……話って言うのはその後に起きた事で。相談がしたいって言うか……」

「相談？ まあ聞くだけなら聞くんが」

「助かる。正直この手の話を誰にすればいいのかすぐに浮かばなくて……」

俺が本気で困っているのがそれほど意外なのか、3人とも目を丸くしていた。

「一体どうしたんだ？ 何か謎解きが必要なクエストでも受けてしまったとか？」

「そんなのだったらどれほど気が楽だった事か……。えっとー……あのですね、えー……」

「なげえよっ！」

いざ言葉になるとなるとかなり恥ずかしい。そんなだからうーうー唸っている俺にクラインが一括を入れて来て、俺はびくりと肩を震わせて、思い切って口にした。

「実は昨夜、シリカに「好きです」と告白を受けました……」

うあー！ うあああー！ 言った、言ってしまった！ 改めて口にするともものすごく恥ずかしい！

だってしようがないだろ!? 告白された事なんて初めてなんだから！ もうどうすりゃいいのかわかんないんだよ！ 自分のキャラを自分で崩壊させてるよちくしょう！

「……………」

けど、俺が心の中で身悶えているのとは裏腹に、当の相談を受けた3人はぽかーんと口を半開きにしていた。……え。なにそのリアクション。俺的にはMMRの団員みたいなりアクションが来ると思っていたんだが。

「なんだ。そんなことか」

「え」

「ようやくかよ。もったいぶらせやがって」

「え」

「そうなのか。おめでどうミスト」

「ちよ…ちよつと待てー!」

なんで皆そんなにあつさり塩味!? あとキリト、まだ受けただけで交際には至ってないんだよ!

「なんでお前らそんなに冷静なんだよ!」

「なんでつてそりゃあ、知ってたからに決まってるだろ」

「な、なんだつてー!」

知ってたの皆!? 初耳なんですけどっ!

「と言うかあんなイチャイチャしていながら付き合っていないって言うのが、俺は逆に不思議でならなかったな。シリカのファンもお前がいるから殆ど諦めていったのに」

「…………マジで?」

「つて言うか一見して分かるだろうがよ。シリカちゃん、明らかにお前さんに好意持ってたのによ。な、キリ公」

「え…………いや、うん…………そ、そうだな。うん」

いきなり話を振られてキリトは若干テンパった反応をしたが、一応同調した。

「ごいつ、絶対気づいてなかったな」とキリトを除いた面子が思ったのは言うまでもない。いや、当の本人も気づいていなかったんだが。「そもそも恋愛ごとなら女子に相談するほうが良かったんじゃないか？」

「いや……あの2人に相談すると怖い結果になりそうで」

色々と根掘り葉掘り聞き出して、辱められる結末しか浮かんでこない。

「そ、それに男の意見を聞きたいんだよ。ここにいるのは人生経験ほう……ふ……」

いや……待て。この面子は……。

キリト：人付き合いが苦手。

クライン：彼女居ない。

エギル：唯一の既婚者。

「……あれ。人選ミス？」

「うっせー！」

ボソツと呟いた言葉にクラインが涙目で反論した。

「助けてほしいってメッセージが届いたから攻略投げ出して駆けつけてみたら、恋愛相談を受ける羽目になったこっちの身にもなりやがれ！ つかうらやましいんだよチクショウ！ 俺だって……俺だってなあ！ うぐつ、えぐつ……」

「いい歳した男が本気で泣くなよ……」

エギルがマジ泣きしているクラインに呆れている。おかしい、俺が相談者のはずなのに立場が入れ替わってる。

そつとしておこう……いや、何かしらいい意見をもらえるかもしれないし、ここはどうか宥めないと。

「あれだって、クラインにもきつといい人が見つかるって……なあ、キリト」

「そ、そうだよな。SAOの中だと女性プレイヤーの数が少ないけど、現実の世界ならクラインを好きになる人が見つかるって。うん、きつとそうだ！」

俺の意図を察したキリトが相槌を打ち、2人でどうにかご機嫌を取

ろうと試みる。

だがしかし、それで納得すれば世界のモテない男は納得しない。なぜかと言うと目の前に実例がいるからだ。

「そんなテンプレフォロワー腐るほど聞いたわ！　なんでだ、なんでお前たちはモテて俺だけがモテない！　子供より大人の魅力溢れるのに！」

「無精ヒゲ生やした野武士面が大人の魅力なのか……？」

「ああ、そうだよな。やっぱり第1印象って見た目だし、清潔感がある方が印象良いよな」

「それでもって、大人の魅力って言うことやっぱり多少の事でも動じない余裕を持つこととか？」

「器の広さか……うん、なるほど。……ってことは」

とりあえず大人の魅力とやらで浮かぶ物を手当たり次第に言っていくと、身近に該当者が1人居た。

俺もキリトと同じ結論に至り、揃ってその主に目を向ける。

「……おい、なんで俺を見るんだ？」

「いや……」

「やっぱりエギルは大人の魅力があるよなあと」

「ぐっはあツツッ！」

あ、クライン見事に撃沈した。

「くっ……お前ら揃いも揃って、人の心を完膚なきまでにハートブレイクしやがって」

「そもそも今回の相談者はクラインじゃなくてミストだろう。アドバイスは納得するほどの確だったか」

「ちよつとはフォロワーしてくれよエギル!？」

「まあまあ、クラインの話はまた今度にして、今回はミストの相談を真面目に答えないか？」

うん、そうだ。出来ればそうしてくれ。俺本気で困ってるんだから。

「んなこと言ったってよ、あとはミストの気持ち次第じゃねえか」

「まあ確かにな。シリカはミストのことが好き。だったら後はミストがどう思っているかだ」

「お、俺次第?」

「おう、そうだ。実際ミストはシリカちゃんの事をどういう風に思っているんだ? もちろん異性として。はつきり言ってみるよ」

「いや…そ、それはその……」

さっきの仕返しも兼ねているのか、実に楽しそうに悪い笑みを浮かべてクラインが問い詰める。

なんて言い返そう……意味もなく呻いていると、したり顔でクラインは逃げ道を塞ぎに来る。

「ちゃんと本心で答えろよ。お前は誰とも仲良くしているが、その実本心の本心を晒すってことをあまりしてなかったように見えるんだよな、俺は。意識してるかしてないかは分からんがよ」

「そんな事していたつもりなんて無かったんだけど……周りからしてみればそう見えたのか」

確かに重要な事——俺の事とか、他にもこの世界の事とか——は迂闊に話せないと思つて誰にも話していなかった。

それが結果的に本心を隠す事になって、皆によく思われていなかったのかな。

「ああけど、勘違いするなよ? 本心を見せないから悪人だとか言つてるつもりはねえんだ。誰だって言えないことがあるしよ。けど今回、お前の本心を知らなきゃどうにもできねえだろ」

「クライン……」

クラインにしては珍しく良いことを言つて、俺は多分初めてこいつに尊敬の念を抱いた気がした。

そうだよ、普段女好きでお笑い担当だけど、義理堅いのがクラインだったよな。その一面をもうちよつと押し出せば女性も寄つて来ると思うのに。

「今回は珍しくクラインの言うとおりだな。結局お前がシリカを本当にどう思っているのか……それで決まるんじゃないのか?」

「珍しく、はよけーだ!」

エギルにクラインが突っ込みを入れるのを見ながら、俺は考えた。俺が、シリカのことをどう思っているのか……。

そんなの……そんなの………。

「……………」

もう、隠し通す事なんてできない。3人に顔を見られたくなかった俺は両手で顔を覆って俯いた。

「ミスト?」

「……あーもー……嬉しくないわけねーじゃねえか!」

「え」

「シリカみたいに可愛い子に好きだって言われたら嬉しいに決まってるだろ! 付き合えたらなーとか考えたことだってあるさ! でも兄ポジションでも満足出来てたから別に良かったんだよ!」

「ちよ、おい! いきなりどうした!?!」

「うっさい天然女たらし!」

「たらっ?!」

抑え込めない感情が激流となって言葉になる。自分でも何を言っているのかももうわけが分からなくなつて、キリトたちを唾然とさせていた。

「告白されて驚いたけど内心にやけるのが止まらなかつたわ! ああ、そうさ! そうだよ! 俺だつてシリカの事が大好きだ! 年齢差がなんだ! 文句あるかゴルアーツ!」

「おい落ち着け! お前キャラぶっ壊れてるぞ!」

「ぶっ壊したのはどこぞのクラインさんですかねえ?!?!」

「ひとまず落ち着け、ミスト。クラインは煮るなり焼くなり好きにしていいが、後にしろ」

「俺を生贄にするなよなあ!?!」

ついには暴れだそうとする俺をエギルがどうにか宥め、俺も少し落ち着きを取り戻す。

言った……言ってしまった……めっさ恥ずかしい。穴掘って埋まりたい。誰かスコップ貸してくれ。

思い返してもやっぱりどうしても恥ずかしさしか出てこず、俺は身

悶えていた。

「けど、お互い好きだったって分かったならどうしてその場でOKしなかったんだ？」

「だ……だって……」

「ごもつともなキリトの疑問に思わず唖る。

確かに、実は両思いでしたって分かったならそのときに告白受ければよかったはず……はず、なんだが。

「シリカ怒っていたし、突然告白されてテンパツてたし……」

「あー、なるほどなあ。そりや確かに言えないか」

「あと……」

「あと？」

「なんて返事返せばいいか分からないんだよ！ 告白された事なんて人生で初だし、勝手が分からないんだよ俺！」

それが最大の理由。

告白されるなんて初めての経験にどうしていいか分からず、おまけにすつとぼけを演じていた結果がああ醜態。どんな顔してシリカに会えばいいのかわからない……。

「もうだめだ……シリカに嫌われた……今ならさ○かの気持ちもよく分かる」

「さ○かって誰だよ!？」

「浮き沈み激しいな、おい！」

「俺って、ほんとバカ」

「落ち着けええ!？」

結局「素直に謝罪して、気持ちを伝える」と言うありふれた結論に至ってしまい、解決したのかしていないのかよく分からないまま追い出され、現在はシリカの部屋の前。位置情報は追い出された時に確認済みだ。

……けどいざ前にすると頭の中が真っ白になって、逃げ出したくなる。なんてヘタレだ俺は。

「(大丈夫だ……落ち着け)」

何度も自分に言い聞かせ、意を決して扉を叩いた。

「シリカ。少しいいか？」

返事は無い。直接顔を合わせて言いたかったが仕方ないと諦めて、俺はこのまま言葉を口にした。

「昨日はごめん……俺の鈍感のせいでシリカを怒らせて。——でも、なんとなくだったけどシリカが俺に好意を持ってくれてるって気づいていたんだ。それは嬉しかったんだけど、思い違ったらバカみたいと思つて……今のポジションでも十分満足していた。けどそれが、却つてシリカを傷つけることになつてしまつてたんだよな。本当にごめん、謝つて済む問題じゃないと思うけど」

何をどう言葉にすればいいのか、そんな事分らない。

けど一々考えて口にするよりただ浮かんだ事を言葉にすればとも考えるが、どうしても途中で途中でもつてしまう。

「前にも言ったけど、俺つて彼女もないし告白とかも当然された事はなかったから、シリカに好きだつて言われた時は嬉しかったし、けど驚きすぎてテンパツてしまつて……それで、その……あのだな……」

いぎ、俺の気持ちを口にしようとしても、どうしても恥ずかしくて言い出せなくなつてしまう。ただ一言を口にすればいいだけなのに、今はその言葉を引つ張り出すのがどんなボスよりも強敵に思えた。

手遅れだったらどうしよう……そんなネガティブな事ばかりが頭にちらつく。

けどそれは自業自得だ。俺の振る舞いのせいでシリカに呆れられたなら、それでもうすつぱり……いいや、諦めきれない。

明確に自覚したとたんにシリカと離れたくないという思いが強くなる。これまでも、これからもシリカと一緒にいたい……俺は……俺は……!!

「……俺はシリカの事が好きだ！ まだ間に合うのなら、俺と付き合つてくれ！ お願いします！」

言……つた。ついに言つてしまった……。

生まれて初めて告白したから顔から火が出そうなぐらい熱い。他

の誰かに見られたら、隠居してしまうくらいに。

そもそも告白した所でシリカがまだ振り向いてくれるのか？ あんなに怒らせてしまったのに……。

暫くし待っても反応が無いため、やっぱりダメだったか……と諦めモードでその場を後にしようとしたが、ふと鍵の開く音が聞こえ、扉が僅かに開く。見れば隙間からピナが覗き込んでいた。

「ピナ？」

『きゅるるっ』

どうやら掛かっていた鍵を勝手に開けて出てきたらしい。けどピナが居ると言う事は、シリカも部屋に居ると言う事だ。

「シリカ……」

ピナを抱えて、半開きの扉を開ける。

やっぱりシリカは部屋に居た。と言うより扉の前に居た。

背を向けていてどんな表情をしているのかは分からないが、俺は踏み出そうとした足を止める。

「……シリカ、俺……」

「もう1度……」

「え？」

「……もう1度、聞かせてください。さっきの言葉」

さっきの言葉というのは、俺の告白の事だろう。

恥ずかしいとも思うが、けれどもシリカときちんと向き合わなければならぬ。はっきりと俺の気持ちを伝えるためにも。

「……俺はシリカが好きだ」

一切偽らずに気持ちを口にする。最初に比べて2度目はもつと自然に口に出す事ができた。

今更何を言ってるんだとか、そんな事考えてるんだろうな……。

「……ずるいですよ。あたしの気持ち気づいていたのに、惚けてたなんて」

「本当にごめん。嬉しかったけど……怖かったんだ。女の子に好意を抱かれるなんて初めてだったから、どうすればいいのかわからなくて」

気づいていない振りをして目を背けた結果、シリカを傷つけてしまった。

酷いことをして今更虫が良い話かもしれない。ぶん殴られるのも覚悟している。

「……初めて出会った時のこと、覚えてます?」

「え? ああ、35層の迷いの森だな」

突然訊かれて少し戸惑いもあったが、すぐに答えることが出来た。突然このデスゲームに放り出され、たまたまその場に居たキリトの後をくつついていたら、モンスターに殺されそうになっていたシリカと出くわしたんだっけ。

あれが4ヶ月前になるのか……ずっと昔の事みたいに懐かしく感じる。

「街に戻った後、ミストさん言いましたよね。「ちやほやされていい気になってた報いを受けたんだ」って」

「あー……確かにそんな風に言ったっけ」

考えてみれば大事な友達が死んだ直後にあんな言葉は酷すぎたかもしれないと、今更になって反省する。しかも年下の子供相手にそんなこと言えば、確かにキリトに咎められる。

「でもその後に言ってくれた言葉で、あたし思ったんです。全部あたしを思ってた言ってくれた事なんだって。最初はちよつと冷たい人なのかなどか思ってたんですけど、実際はそんな人じゃなかった。むしろピナに噛まれたら大慌てしちゃうような面白い人でしたよね」

「ぬぐつ……いいや、あの時は俺とピナは互いに探りあい状態だったから」

復活してからしばらくの間、ピナは頻繁に突いてきたり噛み付いてきたりと俺に対して警戒心を抱き続けていたよな、確かに。

現在はすっかり打ち解けて、飼い主ではない俺に対してもこうして抱きかかえられても抵抗しなくなったし。

慌てて弁解する俺に、シリカは微かに肩を震わせた。多分まだ仲が悪かったところを思い出して笑っているのだろう。

「たったの4ヶ月……でも、この4ヶ月で随分遠くまで来た気がしま

す。攻略組なんて、あのころのあたしには想像もしてませんでした。全部……全部、ミストさんが傍にいてくれたからですよ」

「そう……かな」

「そうですね。でなかったら、あたしは今ここに居ません。今も中層に留まっていたら」

確かにシリカは原作では攻略組に居ない。あの後もずっと中層のプレイヤーのままだったはずだ。

けど俺やキリトと出会って、何かが変わった。いや……変わったんじゃない。傍にいたいと思っただけを踏み出したんだ。

「……ミストさん、わざと惚ける真似はもうやめてくださいね？」

「えっと……努力する。もしそんな素振り見たら、遠慮なく突っ込みいれてくれあだっ」

『きゅっ！』

言った傍からピナに顎を突かれた。「言われるまでもなくやってやる！」と言っているのだろうか。突然突かれて思わずピナを放してしまった。

「あたしがしなくてもピナがしてくれるみたいですね」

「ピナの突っ込みは手厳しいから……今まで散々食らってきた俺が保障する」

「ふふっ……そうですね」

肩を微かに震わせ、笑いながら同意するシリカに俺も釣られて笑みを浮かべた。

ようやく振り返ったシリカは怒っている様子もなく、穏やかな笑みを俺に向けてくる。

「結構な回り道しちゃいましたね」

「その原因はほぼ全部俺なんだよな。ごめん」

「もういいですよ、たくさん謝ってもらえましたから。それで、ですね」

言って、何か躊躇うようにモジモジするシリカに首を傾げた。

「その……あたしたち、お付き合いですよ、いいんですよ」

「えっと……ああ。シリカさえ良ければ」

「あ、あたしは構いませんよっ！ 今は凄く嬉しいです！ そ……それ……それで、その……お願い、聞いてもらえませんか」

「俺が出来る事だったらいいけど……え。シ、シリカ!？」

快諾した直後に取ったシリカの行動に俺は戸惑う。

目を閉じて顔を上げ、何かを待っているように見えるこれは……ま、まさかアレか？ アレなのか!？」

い、いや……確かに恋人同士ならそういうことをしても当然なんだろう。けど、けどだからっていざ俺にお鉢が回ってくるとなると恥ずかしいというか、でもシリカにこんな事をさせたなら彼氏としてしっかり責任を取らなければというかああもう自分でも何を言ってるんだ俺は！ おまわりさんこっちですっ！ いや自分で自分を捕まえさせてどうする！

「(ええい、ヘタレ過ぎるだろう俺!)」

頭を左右に振ってヘタレを追い出す。

ガチガチに緊張するのを自覚しながらも、俺はシリカの小さな肩に手を置き、そつと顔を近づけて――

「ん……」

「っ……」

時間に見れば5秒にも満たないような口付けを交わした。そしてゆっくり顔を離すと、自然と目が合う。

「……ごめん。今の俺にはこれが精一杯だ」

「い、いえ……あたしもこれ以上はちよつと……」

どうやらお互いにかなり恥ずかしいようで、見るまでもなく顔が真っ赤になっている。

これは……あれだな、彼氏としてヘタレな性格はどうにかして改善していかないといけない。でないとしりかに呆れられる。

「その……不束者ですけど、改めてこれからもよろしくお願いします、ミストさん」

「い、いや。こっちこそ……それと、さ」

「? はい?」

「ミストじゃなくて……霞だ。白峰霞。俺のリアルネーム」

「霞……さん。あたしは、あたしのリアルネームは綾野珪子です」

「珪子……な、なんだかいぎ女の子の名前を呼び捨てで言うとは恥ずかしいな」

「そうですね。あたしもなんだかすぐったいって言うか……」

結局お互いのリアルネームを明かしたものの、本名だし2人きりの時だけで呼び合おう、という取り決めになった。

今日、この日から俺たちは改めて恋人として付き合うことになる。どうすればいいのかなんてお互い知らない事だらけだが、どうにかやって行けるだろう。

——だが、この時俺は大きな間違いを犯してしまった。

こんなにも苦しい思いをするならば、俺はシリカと付き合うべきではなかったのだと——

——この時はまだ、微塵にも考えていなかった。

第9話 最奥に潜む者

第9話 最奥に潜む者

前回のあらすじ：

俺たち、付き合うことになりました。

2024年 10月18日 第74層カームデット。

「知り合いに合流するために最前線に来たら、なんかそわそわ落ち着かなさそうにしている怪しい集団を見かけたんだが」

「それって俺たちのことかよ!？」

お前ら以外誰がいる。見ろ、他のプレイヤー引いてるぞ。

「待ち合わせ相手じゃなかったら、例え知り合いでも見なかったことにしていた所だぞクライン」

「そう言うなよ……全員今日と言う日がどれだけ嬉しい事かつ……。まさか、女の子と一緒にパーティーが組めるなんてよお」

「ほ・ほーう。その彼氏の前で良くぞそんな台詞が言えたなオイ」

無表情のまま、クラインの腹を何度も盾の先で突く。圏内だから当然ダメージは無いが、静かな威圧は十分伝わっているらしい。

「じよじよじよ冗談だ冗談！ ちょっと浮ついていただけだ。さあお前ら気合入れ直せ！」

「」「おーう！」「」

「……邪念が混じっているような気がしなくもないが、まあいいだろう」

女日照りしているこいつら風林火山には仕方ないか……と半分納得、半分同情の意味を込めて俺は嘆息する。

そもそも何故、風林火山の連中と待ち合わせていたのかというと、この頃2人で最前線に挑み続けるのはいささか厳しくなってきたと感じていて、クラインたちと組んで挑もうと言う話になったのだ。

「えっと、今日は皆さん、よろしくお願いします」

「はあ……ひとまずよろしく頼む。あと、シリカに妙な事をしてみる。俺が目を離していても最終防衛ラインのピナが容赦なく攻撃す

るからな」

『きゅいーっ!』

「へっ。隠れヘタレもちったあマシになったみたいだな」

「誰が隠れヘタレだ誰が!」

「今更隠す事はないだろお? もうお前の知り合いには知れ渡ってるっつの」

「だ、誰が広めた……!」

「リズベット」

あいつかアーツ! 人が真面目に相談したのをからかうネタにしようがって!

バ、バカにするなよ……あれから俺だって少しは成長したんだ。具体的にはキスだってあれから何度か(片手で数えられる程度だけ)したし、同じベッドで寝たり(何もしてないからな!)、膝の上に座らせた(冗談で言ってみただけど)ことだってあるぞ! 参ったか! 「いや、適任っちゃ適任かもしれないけどよ、相手が悪かっただろ」 「仕方ないだろ……女友達って言えば2人しかいないんだから」

その女友達の片割れは忙しかった時期だから、必然的に危険度の高い方へ相談するしかなかったわけ。とは言え迂闊だったか……!」

「リズめ……今度とつちめてやらねばなるまい……!」

「基本的にお前とリズベットは相性悪いと思うがなあ。手を上げれば「ミストに傷物にされたー!」ってアスナさんに言っつて、「フラッシュグ・ペネトレイター」で突撃してくるとか」

ぐっ……その可能性もありえるから手を出しづらい。屈服するしかないのかよ……。

「こうなったら出てきた敵を片っ端から残らず殲滅撃滅撲滅してやる!」

「意気込むのはいいけど役割分担忘れるなよな。お前が最前衛で、シリカちゃんは側面からヒットアンドアウェイでHPの少ない敵のトドメを頼むわ」

「はいっ、がんばります!」

「まあ……何はともあれ、足手まといになるような真似はしないさ」

気を取り直して、真面目な態度で応じる。ここから先はふざけてい
る余地なんてないだろう。

ある意味ここが正念場……今までで一番辛い戦いになるかもしれない。
ない。

「オオオツラアツ!!」

左腕の盾で3度殴りつけ、ガードを固めさせたところへ剣による水
平4連撃ソードスキル【ホリゾンタル・スクエア】を繰り出す。

対峙する敵は《デモニツシュ・サーバント》と呼ばれる骸骨型モン
スターだ。高い筋力値が特徴で、片手剣とバックラーで武装してい
る。

残ったHPを削り取るため、槍を持ったカゲマツとシリカがトドメ
を刺す。

「(やっぱり役割分担できる人間が増えると安定するなあ)」

いつもは俺が最前衛でシリカがアシストのスタイルを取っていた
が、こうやって人が増えるだけでも負担が随分減って安定してくると
実感できる。

「さすが風林火山だな。皆良く鍛えられてる」

「そういうお前こそ、シリカちゃんと2人でここまでやって来ただけ
はあるじゃねえか」

「限界を感じてはいたけどな」

この層に着てから、モンスターのAIに変化が起きている。本当に
ごく小さな変化だが、それに不意を衝かれたことがあった。

だから2人で挑むのは限界と感じ、クラインの手を借りようという
話になったのだ。シリカもそれには異論がなく、段取りはあっさり纏
まった。

「この層は人型が主みたいだな。ソードスキルも撃ってくるし、油断
は出来ない」

種類こそ少ないが武装しているとすれば厄介の度合いはだいぶ
違ってくる。自分たちも使える技を、敵も使えるならそれだけでも十
分手強くなる。やっぱり2人で来なくて正解だった。

「まだボスは発見されてないんですよね？」

「ああ。出てくる敵も厄介だし、なにより停滞気味だからな、前線の空気も」

俺はまだ半年だが、2年もここに閉じ込められていた人々はある意味諦めてこの世界に馴染んできている。そんな空気もあつてか、この頃躍起になって攻略しようとしている人間も減りつつあるように見えた。

……かく言う俺もその1人だった。当初は悲観して一刻も早く抜け出したいと思っていたが……最近はその思うことも少なくなりつつある。

自分なりに原因を考えてみたが……ネットの世界なのにリア充ライフ満喫してればそりゃこっちのほうが良いよな。

けど原作知識も薄れつつあつて、ここでのイベントはうつつすらと記憶しているけど、どんなボスが出てきたのかまでは思い出せない。こんな事なら忘れないように資料でも作成しておくんだ……。

「あと26層だが……数字で言えばすぐだが、実際には先が長すぎるからなあ……」

「みんなの気持ち、あたしも分からなくもないです。いつクリアできるかなんて分からないなら、いつその事ずつとこの世界に……って」「おつ……おいおいシリカちゃん……」

「でもやつぱり、あたしは帰りたい。向こうでミストさんと会いたいですから」

「……………」

心配から一転、明らかに嫉妬を込めてクライン以下、風林火山のメンバーの視線が俺に注がれる。

ここで何か言えば弄られるのは確かだから、絶対に、口が裂けても何も言わない。ただシリカの言葉には「そうだな」と心の中で同意する。

「爆発しやがれリア充……」

すれ違った瞬間、ボソツと囁いたクライン。……かつてリア充たちに吐いたセリフが自分に向けられるとは思わなかった……。思った

より精神的ダメージ大きいんだな。

「ミストさん？　どうかしました？」

「え…いい、いや。なんでもない」

放心していたらシリカに声を掛けられ、ふと我に返る。

慌てて答え、先に行くクラインたちの後を追いかけた。

「おっ、キリトじゃねーか！」

「クライン。それにシリカにミストも？」

迷宮区に入ってから随分な時間が経ち、疲労感も漂いだしていた頃になって入った安全エリアには既に先客が2人も居た。

「キリトさん、アスナさんも。お久しぶりですね」

「うん、久しぶりだねシリカちゃん」

「珍しい組み合わせだな…：2人とも《風林火山》に入ったのか？」

「俺だけならまだしも、シリカもここに入れるのは不安を覚えるっての」

「ど、どういう意味だよミスト!？」

「特にギルマスが女なら誰でもいいような人間だからなあ…：」

動揺するクラインに疑いの目を向ける。きっとNPCにも声を掛けていた事があるに違いない。クラインならありえる。

「えつとですね、ここを2人で攻略するのは危ないだろうって、ミストさんがクラインさんたちに声を掛けてくれたんです」

「そっか。確かに2人で挑むよりずっと安全だもんね。以前なら血盟騎士団も歓迎したけど…：」

そう言っ表情に影が差すアスナ。

どの道、俺が断っていたところだ。団長的には監視の目が届きやすいのが丸分かりだし。

「アスナ、きのことたけのこ、そして味噌と醤油は相容れない存在なんだ」

「…：ぶふっ」

「それまだ引っ張るのかよ…：」

「相容れないって言う割には、2人は仲いいじゃないですか」

至極真剣にアスナへ言うと、突然小さく噴出して笑うアスナ。この意味を知っているキリトとシリカがそれぞれに突っ込みを入れる。

「? きのことだとか醬油だとか、何の話だよ」

「前にちよつとあつてな。それ以来この件では対立が続いてるんだ」
「聞くと実際にはどうつてこと無いんですけど……」

「深く聞いたら消される可能性があるな」

「大した事無いのか重要なのかどつちだよ!」

……どつちだろう? 血盟騎士団の団長が実は麵食いで、副団長はきのこの山派つて言う、対外的には恥ずかしいから公にしたくない秘密は。

『きゅ?』

機密の度合いに首を傾げていたその時、不意にピナが俺たちが来た方へ目を向けた。

一瞬遅れて俺たちも近づいてくる複数の人影に気づく。

「あれは……軍の奴らか?」

見覚えのあるプレイヤーの格好を見てキリトが呟いた。

確かにあの装備は見覚えがある。けど……

「随分疲労してるみたいだな……」

リーダーらしき赤い肩掛けを身に着けた男の後に続く連中は、顔の上半分を覆う兜を被つて入るが明らかに疲労の色が濃く見える。

確かにここまで来る道のりは長かったし、モンスターとの戦闘もあつて疲労は俺たちもあるが、さすがにあそこまで疲れ果ててはいない。

安全エリアまで来た所で、リーダーの「休め」という一言で全員がその場に座り込んだ。男は部下たちを置いて、真っ直ぐに俺たちの元まで歩いてくる。

「私はアインクラッド解放軍のコーバツツ中佐だ」

「……キリト。ソロだ」

「君らはもうこの先を攻略しているのか?」

「ああ。ボス部屋の前まではマップピングしてある」

「ふむ。ではそのマップピングデータを提供してもらいたい」

コーバツツと名乗った男の言葉に俺たちは耳を疑った。
いきなりやって来た挙句、マップデータを渡せだど？　ふざけるのも大概にしろつての。

当然納得するはずもなく、クラインが食って掛かる。

「タダで提供しろだど!?　テメエ、マップピングする苦勞が分かつて言ってるのか!」

「我々は一般プレイヤーに情報や資源を平等に分配し秩序を維持すると共に！　一刻も早くこの世界から、プレイヤー全員を解放するために戦っているのだ！　故に！　諸君が我々に協力するのは当然の義務である!」

「平等に分配……?　秩序を維持?　寝言は寝て言えよ」

「大層な発言に思わず口に出してしまった。」

「なんだ、貴様は」

「俺はミスト。キリトと同じくソロだ」

「我々の行動方針に何か文句があるのかね?」

「文句がない奴なんて居ないと思うけどな?　狩場を独占し、恐喝まがいの徴税なんてしている組織が秩序を維持するだつて?　頭沸いてるのかよ」

「な、なんだと……っ!」

「おまけに女性プレイヤーへのセクハラ行為もしていたよな。これのどこが秩序を維持するのか、生憎と俺は物分りが悪いんで教えてもらえないですかねえ?」

小馬鹿にするように鼻で笑いながら言うと、案の定コーバツツは怒りに顔を歪めている。

「プレイヤー全員の解放のために戦っている、つて言ったよな、お前。ならなんですつと前線に来なかつた?　言ってる事と矛盾してる事に気づいてないのかよ?」

「そ、それは組織強化と下層の治安維持に時間が……」

「時間が掛かって最前線に出れなくなった?　確かに、25層のボス攻略では壊滅的被害がでたみたいだからな。けどな、今更最前線に戻ってきたところで手遅れだつて気づいてるだろ?　どう見ても足

手まといだ」

「わ……我々を侮辱するのか！」

激昂したコーバツツの剣が突きつけられる。だが俺は微塵も動揺していない。こんな事をしたのは凶星を突かれて焦っているからだ。「その連中を見ていれば分かるさ。ここに来るまででそのザマなら、ボスに挑んでも勝てるわけがない」

「キ……サマアツ!!」

ついに限界を超えたコーバツツが剣を振り上げ、そのまま振り下ろす。即座に反応して盾で防ごうとした直前、間に割って入ったキリトがコーバツツの剣を自分の剣で受け止めた。

「落ち着け、2人とも。ミストも……いくらなんでもあの言い方をすれば、誰だつて怒るだろ」

「……悪い。ちよつと頭に血が上った」

前にリズを探してアスナとシリカと1層へ降りた時に、軍の連中に絡まれたことを自分自身でも気づかない内に根に持っていたらしい。

口で言うのは簡単だが、こいつらは口だけだ。どつかで拗れたんだつていうのは分かっているが……自分たちが正しいと思つているその態度に腹が立ってしまった。

「マップデータは渡す。アンタもそれでいいだろう」

「おいキリトよ！ そりや人が良すぎるだろ！」

「どうせ街に戻ったら公開するつもりだったんだ。マップデータで儲けるつもりはない」

クラインに言いつつ、キリトはメニューを開いてコーバツツにデータを渡してしまった。

元々そのつもりだったのかもしれないが、俺のせいで引き下がったように思えてしまい申し訳なくなってしまう。

「悪いなキリト……俺のせいで」

「別に気にしてないさ。クラインに言ったとおり、マップデータはあとで公開するつもりだったんだから。それと、ボスにちよつかい出すならやめておいた方がいいぜ」

「……それは私が判断する」

データを受け取ったコーバッツはそのまま背を向け、部下たちの所へ戻ろうとする。

その背中に向けてキリトは忠告をしたが、返って来た返答にまたも耳を疑った。

「さっきボスの部屋を覗いて来たけど、生半可な人数で敵う相手じゃない！ 初めて見る悪魔型のモンスターだった！ データもないのにそんな消耗した状態で挑むなんて無茶だ！」

「私の部下たちはこの程度で根を上げるような軟弱者ではないツ！」
あのキリトが本気で言っているというのにコーバッツは耳を貸さうともせず、部下たちを立ち上がらせてダンジョンの奥へと進んでいった。

「……今回のボス、かなりやばいのか？」

「ああ……武装は両手剣だけだったけど、特殊攻撃もあると思う」

「攻撃力も防御力も、かなり高そうだったから……情報を集めてしっかり対策を立てた方がいいと思う」

それが攻略組最強の2人の意見だ。

いやそもそも、それがセオリーだろう。初見のボスに何の準備もせずに挑むなんて無謀でしかない。

それを聞いたクラインが、不安そうに呟いた。

「……大丈夫なのかよ、あの連中」

「ぶっつけ本番でボスに挑んだり……」

「しそう……ですよね。リーダーの人、頭に血が上っていたみたいですし」

「——つとに、世話の焼ける連中だよな」

呆れて嘆息し、俺は皆を見た。

どうするのか……なんて、既に決まっている。

「どつちがお人好しなんだか」

「ここにいる全員、だろ？」

あんなことになりはしたが、それでもできれば無茶な真似はしないでほしい。

キリトが呆れるのに俺はニツと笑い、皆も頷いてコーバッツたちの

後を追いかけた。

コーバツツの後を道中出現したモンスターを倒しながら追いかけていく。

今の所、軍の連中に追いついた様子は見えない。俺にタゲを取った《リザードマンロード》を、背後からクラインが斬り付けて倒したところで、楽観的に口を開いた。

「この先はもう、ボスの部屋だけなんだろう？ ひよつとしてももうアイテムで帰つちまつたんじゃね？」

「だといいんだけどな……念のためボス部屋の前まで進んで——」

出来ればそうあってほしいと言う願いは、しかし遠くから響いた悲鳴によって打ち砕かれた。

「アスナッ！」

「うん！」

悲鳴に即座に反応したキリトがアスナに声を掛け、2人はすぐに全力で走り出す。

「シリカツ、お前も先に行け！」

「はいッ！」

この中では最も敏捷値が高いシリカに向けて言うと、すぐに頷いてピナと共にキリトたちの後を追いかけた。

出来れば後を追いかけていが……タイミング悪くモンスターがリポップし、俺たちは《デモニツシュ・サーバント》と《リザードマンロード》の計4体に囲まれてしまう。

「俺が原因で焚きつけてしまったのかもしれないが、だからってバカな真似しやがって……！」

「話は後だ！ さっさとこいつら片付けるぞ！」

刀を構えたクラインとコンビを組み、《リザードマンロード》に挑む。

薙いだ曲刀を盾で受け、カウンターで「ホリゾントル」を放ち防御ごと吹き飛ばす。すかさずクラインが3連撃ソードスキル【緋桜】で追い討ちを掛けてトドメを刺した。

この場を他の連中に任せ、クラインと共に先を行つたキリトたちの後を追う。

だがたどり着いた先に広がっていた光景は……悪夢だった。

「おい、どうなってるんだ!？」

「ここでは転移結晶が使えない……俺たちが切り込めば退路を切り拓けるかもしれないが……!」

目の前に広がるのは一方的な蹂躪。

羊のような頭に、尾は蛇。手には両手剣を持っているが、よほど筋力値が高いのか軽々と片手で振り回している青い巨体。

名前は《グリーン・アイズ》。キリトの言つたとおり初めて見る悪魔型のモンスター。

もはや軍の連中はボロボロで、その上会つた時よりも2人少ない。結晶無効化エリアで転移結晶が使えないなら、つまり……死んだのか。

「ミストさん……!」

「ッ……」

シリカが手を引いて俺を見上げる。

助けに行きたいのは俺だって同じだ。けど迂闊に飛び込めば俺たちも……どうすればいいんだよ!!

「全員! 突撃!」

「!? やめろ!」

コーバツツの命令に全員が《グリーン・アイズ》に真正面から突撃する。

違う、まずは体勢を立て直して、攻撃のリスクを分散させるために囲んで攻撃するんだ。全員で突撃したらスイッチも出来ないじゃないか!

キリトが思わず止めようとしたが、もう遅い。

《グリーン・アイズ》が口から紫色のブレスを吐き出して怯ませ、ソードスキルで吹き飛ばす。

散り散りになったところへ、《グリーン・アイズ》は振り返りながら無造作に剣を逆袈裟に振り上げた。

——コーバツツの体が宙を舞い、俺たちの所へ落ちてくる。耐久値が0になった兜が砕けてポリゴンの欠片となり、その素顔が露になった。

「あ……ありえない」

それは、何に対しての言葉だったのか分からない。

けれど涙を流しながら呟いたその言葉を最後に、コーバツツはこの世界から文字通り『消滅』した。

「……………」

俺の……せい、なのか。

俺があんな言葉を言わなければ、あるいはコーバツツたちはボスの部屋まで来る事はなかったのか。

どう……だったっけ。原作だと実際にはどんな流れだったんだっけ。

分からない……分からない、分からない分からない分からない分からない分からない！

「……………」

頭の中がぐちゃぐちゃになる。そんな中、悲鳴が聞こえて顔を上げると、生き残ったプレイヤーに《グリーン・アイズ》が真っ直ぐ剣を振り上げるのが目に入った。

「——やめろオオツ!!」

頭の中で何かが弾け飛び、俺は叫びながら剣を抜き、踏み込むと同時に「ヴォーパル・ストライク」を発動して《グリーン・アイズ》の背中に剣を突き立てる。

少なくとも貫通力にかけては自信があるその一撃を、《グリーン・アイズ》は微塵にも答えた様子を見せずに振り向いた。

「……………」

その目に射抜かれて脊髄に氷柱が突っ込まれたような錯覚を覚えた。

「まずいと本能が警鐘を鳴らすが、まだ硬直が解けていない。

《グリーン・アイズ》の両手剣がオレンジの光を放ち、技を放とうとした直前、

「ダメーッ！」

横からシリカが俺に体当たりをかけて諸共吹っ飛び、さらに跳んだアスナが落下しながら「リニアー」を連発して《グリーン・アイズ》の顔を刺し貫く。

「大丈夫ですか!?!」

「シリカ……! 危ない!」

俺に覆いかぶさる格好で尋ねるシリカに何か言おうとするが、《グリーン・アイズ》のパンチを受けて吹き飛ぶアスナが視界に飛び込んだ。

《グリーン・アイズ》が倒れて動けないアスナに剣を振り下ろした瞬間、「エリユシデータ」を逆手に持ち替えたキリトがギリギリで軌道をズラし、アスナを守る。

「下がれ! ミスト、行くぞ!」

「っ……ああ! クラインたちは動けない奴らを運んでくれ! シリカ、アスナ!」

「はいっ!」

「うんっ!」

さつきは理性が吹き飛んだが、シリカが庇ってくれたおかげで頭が冷えた。

立ち上がり、体勢を建て直したアスナと合流して、俺たちは《グリーン・アイズ》に挑む。

クラインたちが人が運び出す時間を稼ぐだけでいい……けど、たった4人でそれが出来るのか!?

「ぐうっ!!」

盾で剣を受け止めるが、その圧倒的な力に俺は奥歯をかみ締めて耐える。

俺が攻撃を受けている間にキリトが、アスナが、シリカが《グリーン・アイズ》にダメージを与えるが、ようやくHPバーが3本目まで減った程度だ。

「何なんですかこのフロアボスは!?!」

その異常なまでの耐久力に圧倒的な攻撃力を前にシリカが叫ぶ。

「この巨体の割りに…ッ！ 動きも機敏か——っ!？」

背後に回りこんだ瞬間、尻尾の蛇が牙を剥いて襲い掛かり、それに反応できなかった俺は直撃を貰って吹き飛んでしまった。

「がっ……………」

「ミストさん！ きゃッ!!」

「シリカッ！」

壁際まで吹き飛んだ俺を見てシリカは目を見開き、しかし《グリーン・アイズ》の発動した範囲攻撃ソードスキル「ブラスト」に間一髪で気づいて間合いを取ろうとするが、2撃目の衝撃波に煽られて吹き飛ばされた。

「ぐ…………っ」

すぐにシリカを助けに行きたい……が、あの蛇の攻撃は毒の状態異常を持っていたらしく、アイコンと共にHPが徐々に減っていく。

早く解毒を……いや、ここだと解毒結晶も使えないのか。一度部屋から出ないと……………!

どうにか体を起こそうとするが、思うように体が動かない。クリーンヒットが思った以上に響いているか……………!

「アスナ！ クライン！ 頼む！ 10秒だけ持ちこたえてくれ！」

「わ、分かった！」

「ミスト君はシリカちゃんを連れて一度外に出て！」

どうにか立ち上がったその時、辛うじて《グリーン・アイズ》の剣を受け流したキリトの頼みに2人は答え、下がったキリトに代わって前に出る。

俺はアスナに言われたとおりシリカを担ぎ、その足でボス部屋から抜け出した。

「シリカ、大丈夫か!？」

「あたしより…………ミストさんが…………」

「俺より自分の心配をしろ……! 解毒！」

ポーチから出した緑色のクリスタルを掲げて唱えると、クリスタルが砕けて緑の光が俺に降り注いだ。

HPバーの下にあった毒のアイコンが消え、続けてシリカにハイ

ポーションを飲ませてやる。

その頃には戦闘はもう決着が迫っており、アスナとスイッチしたキリトが前に出て、背中に出現した新たな片手剣を左手で抜き放った。リズが鍛え上げた最高傑作、「ダークリパルサー」を。

「ダークリパルサー」で繰り出した一撃が《グリーン・アイズ》に直撃し、衝撃で大きく仰け反る。

普通両手にそれぞれ異なる武器を装備した場合は、イレギュラー扱いでソードスキルが使えない。

そう、普通ならば。だが俺が覚えていたここでのシーンは、その常識を覆す。

持ち直した《グリーン・アイズ》が両手剣を振り下ろすが、キリトは2本の剣を頭上で交差させて受け止め、そのまま弾き返した。

「スターバースト：ストリーム」!!!」

手にした2本の剣が光り輝き、無数の剣戟を《グリーン・アイズ》の体に叩き込む。

「……凄い」

その圧倒的な光景を目撃し、シリカは目を見開いて呟いた。

攻撃の合間に反撃を受けても、キリトは攻撃の手を緩めない。それどころかますます速度を上げて行き、ライトエフェクトが星屑のように煌いて飛び散り、白光が空間を染めていく。

その連撃回数は脅威の16回。最後の1撃が《グリーン・アイズ》の胸を貫き、一瞬の静寂の後に《グリーン・アイズ》がポリゴンとなって碎け散る。

Congratulations!!

フロアボスの討伐に成功したことを讃える文字が空中に踊り——直後にキリトはその場に倒れた。

クラインや軍の連中が集まり、その中心でアスナが意識を失ったキリトの名を呼び続けている。

すぐに意識を取り戻したキリトは、泣きながら心配していたアスナに抱きしめられると冗談交じりに「あんまり締め付けると、俺のHP

が無くなるぞ」と言っていた。

ボスも倒したし、めでたしめでたし……と言う訳には、やはり行かないだろう。

「コーバッツと、あと2人死んだ」

「……ボス攻略で犠牲者がでたのは、67層以来だな」

「こんなのが攻略って言えるかよ……コーバッツのバカヤロウが……。死んじまっちゃなんにもならねえだろうが……!」

そう言つて、クラインは唇を噛み締める。

確かにコーバッツは愚考を犯した。勝てないならすぐに撤退すればよかったのに、意固地になって挑んだ結果死んでしまった。

「……責任は俺にもあるのかもしれないな」

あの時俺がコーバッツと口論にならなければ、あるいはまだ冷静な判断が出来ていたのかもしれない。

沈痛な面持ちで目を伏せる俺に、シリカは何も言わずに手を握ってくる。

「いや……君のせいじゃない。俺たちは上の命令で最前線に来たんだ。「可能ならばボスを討伐しろ」なんて無茶な命令を受けて」

「命令? 誰がそんな……」

そんな俺に軍のプレイヤーの1人が声を掛けてくれた。

驚いて顔を上げる俺に、彼は目を反らしてその名を口にする。

「……キバオウだ」

「キバオウ……?」

「知ってるのか、キリト」

「ああ……少しだけな」

俺もキバオウと言う名は聞き覚えがある。どういった人物かまでは覚えていないが。

「君の言うとおり、軍……正確にはキバオウのグループは狩場の独占や恐喝が横行していた。だが、ゲーム攻略をないがしろにするキバオウを批判する声が大きくなって、あいつは俺たちを最前線に送り出したんだ」

「体裁のために……その結果がこれかよ」

「ああ……君たちが助けてくれなかったら、俺たちは全滅していた……」

そう言つて深く頭を下げられたが、俺は内心憤つていた。

つまりキバオウが無茶なオーダーをしなければ、ここにいない3人は生きていたし、こんな無茶な形でボス攻略をする事もなかったんじゃないか。

「浮かばれないだろう……コーバツツたちも」

「そうだな……今回の件でよく分かった。キバオウのやり方は間違つていると。どこまで出来るかわからないが、俺たちは軍を本来あるべき形に戻せるよう動いてみる。死んだ仲間のためにも」

「ああ……頑張つてくれ。影ながら応援している」

俺の言葉に残つた軍の全員が頷いた。

これで、少しは変わればいいんだが……そんな事を考えていると、話題を変えるようにクラインがこの場にいる全員が気になっていたことをキリトに聞いた。だした。

「そりやそうとキリト！ おめえなんだよさっきのは!？」

「……言わなきや、ダメか？」

「つたりめえだ！ 見た事ねえぞあんなの!？」

確かにあの光景を見て、知りたくないという奴はこの場に居ないだろう。

圧倒的だったフロアボスを破つた圧倒的な力。隠し通す事は出来ない。

観念したようにため息を吐き、キリトは全て話す事にした。

「……エクストラスキルだよ。《二刀流》」

「しゅ、出現条件は!？」

「分かつてるよ、もう公開してる」

そう言われてクラインはスキルリストを確認するが、いくら探しても記載されていない。

つまりそれは、キリト専用のエクストラスキル……ユニークスキルと言う事だ。

「水臭えじゃねーか。そんなスゲー裏技黙ってるなんてよ」

「半年くらい前、スキルウィンドウ見たら《二刀流》の名前があったんだ。でも、こんなスキル持つてるなんて知られたら……」

「羨望と嫉妬が向けられるだろうな。俺もよく分かる」

《盾剣技》の情報が公開されたとき、最初に発見されたプレイヤーとして奇異や羨望、嫉妬の目が注がれてなんとも居心地が悪かった事を思い出してそれに同調した。

「俺は人間が出来ているからともかく、妬みとか色々あるだろうなあ」

「人間が出来てる……ねえ」

「……なんだよ、その目は」

べつつにー、と文句ありげなクラインから顔を背ける。一応人間は出来てるだろう。女性が絡まなければ、がつくけど。

「まあともかく……苦労も修行の内と思って、頑張りたまえ若者よ」

「——勝手なことを……」

意味ありげにキリトを、そしてまだ抱きついたらままのアスナを見て意味ありげに言ったクラインへ、キリトは僅かに顔を背けて呟いた。

「功労者をそんなに苛めるなよ、クライン。キリト、転移門のアクティベートはどうする？」

「皆に任せるよ。見ての通りへとへとだ」

「そうか。気をつけて帰れよ。クライン、行こうぜ」

「お？ おお、そうだな」

クラインに声を掛けて、俺はシリカと共に次の層へ続く門を開けに行く。

「凄かったですよね、キリトさん」

「ああ。実際目になると圧巻だった」

上層に向かう途中、シリカの言葉に俺は同意する。

読んでいた時に印象に残っていただけに、実際目になると言葉では語りつくせない。あんなに苦戦していたボスを実質キリト1人で圧倒していたのだから。

「しかしまあ、アスナも大胆なこって」

「もう、からかっちゃ悪いですよ。あたしだってミストさんがやられた時、すつごく怖かったんですから」

「いや、それ言ったら俺だってシリカが吹っ飛ばされた時頭の中真っ白になったんだからな？　俺のほうが怖かったって」

「いーえ！　あたしのほうがもっと怖かったです！」

「いやいや、俺の方が——」

もつと心配していた事を口にしようとしたら、誰かに肩を叩かれる。

……恐る恐る振り返ると、クラインがわなわな震えて俺を睨んでいた。

「ク…クライン？」

「爆発　し　や　が　れ　リ　ア　充」

ごめんなさい、無意識にバカツプルの会話をしていたみたいです。

翌日の事。

ホームで新聞を読みながら朝食を食べていた俺は、大々的に新聞の見出しに書かれている記事を読んで思わず噴出した。

「？　どうしたんですか？」

「くつくく……いや、凄いわこれ。『軍の大部隊を全滅させた青い悪魔。それを単独撃破した二刀流使いの50連撃！』だってさ。ぷつくく……」

「あ、あれえ……？　事実と大きく異なってるような……」

どこをどうやったらここまで大きさに出来るのか、壮大なまでにスケールアップした内容にシリカは若干引きつった笑みを浮かべている。

今頃キリトの家には人が大勢押しかけていることだろう。慌てふためいてる顔が目には浮かぶ。

「ついでに『血盟騎士団副団長と逢瀬が！』って垂れ込みしてやるか？」

「ミストさん……」

「冗談だって、冗談。そんなことしたらあの2人に殺される」

「実際そうなくても文句言えませんかよ……ねえピナ？」

『きゅー』

シリカに言われ、同意するように頷く。ピナ。もっとも、俺が言わなくても近いうちに周知の事実になるはずだが。
さて……明日の勝負はどうなる事やら。いや、結果は分かっているけど。

第10話 突きつけられる結末

第10話 突きつけられる結末

74層のボス攻略から2日が経ち、75層の主街区「コリニア」は異様な熱気に包まれていた。

正確に言えば、転移門の前にあるコロシアムの入り口前に多くの人が集まっている。

露店のような物が入り口の近くに設置されており、看板には「生ける伝説ヒースクリフ VS 二刀流の悪魔キリト」と書かれていた。

『二刀流の悪魔』、か。完璧悪者の名前だな」

「うっさいな……他人が勝手につけたんだよ」

通路のベンチに座っていたキリトが不服そうな表情を浮かべている。

何故こうなったかと言えば、キリトがアスナを引き抜こうとしていると言う話がヒースクリフの耳に入り、デュエルに勝てば認めようという話になったそうだ。

負ければ逆に、キリトが血盟騎士団に入る。そこで一部の人間がお祭り騒ぎにして、こんな事になったと言う訳だ。

「実際問題、どうなんだよ。あのヒースクリフに勝つ見込みあるのか？」

「さあな。けど、簡単に負けるつもりはないさ」

それ敗北フラグな。あえて言葉にせず、俺は「そうか」と頷いた。

どうするかなあ……結局どう足掻いてもヒースクリフには勝てないんだし、アドバイスした所で意味ないと思うが。

いや、できれば負けて欲しい。個人的に。

「そう言えばミストさん……ここに来る前に、露店の前で何かしていましたよね？」

「露店で？ 確かタイゼンさんがチケットとオツズを……まさかミスト君、賭けたの!?!」

「お、おいおい……勘弁してくれよ。ますますプレッシャー掛かる

じゃないか」

「いやまあ、賭けたのは事実だけど……あんまり気にするなって。小遣い程度だから」

ここに来る前、シリカに黙って賭けに参加していたのだが、しっかりと見られていたらしい。

アスナとキリトに弁解すると、一応納得してくれたんだが……実際は100万コルくらいヒースクリフの勝ちに突っ込んだのは秘密だ。バレたら折檻される。

「攻略組最強の2人のデュエルってのは、やっぱり見応えあるよなあ」
コロシアムの中央にキリトとヒースクリフが揃い、デュエルが始まると観客は歓声の声を上げた。

攻略組最強の防御力の剣士と、攻略組最強の攻撃力を持つ剣士。《二刀流》の圧倒的な手数を前にしても《神聖剣》の防御は簡単に崩せない。

ちら、と目をやると、アスナは不安そうに2人の戦いを見つめていた。

「……実は以前、俺もヒースクリフとデュエルした事があるんだ」

「え……っ!？」

「ミストさんも……!？」

「ああ。俺がホームを買って、アスナもヒースクリフと一緒に来た時にな。実はあの時、2人には黙っていたけど戦ったんだ」

「……結果は？」

「もちろん俺の完敗」

恐る恐る尋ねてきたアスナへ、俺はあっさりと答える。

元々勝てる見込みはない勝負だったから、負けるのは想定内だった。

「でも……どうして血盟騎士団の団長さんが、ソロのミストさんとデュエルしたんですか？」

「さあな？ 興味本位じゃないか？ 俺はアスナやキリトほど目立ちはしてないけど、ヒースクリフには注目されてたんだろ」

「ギルドに入れとか、そう言う事は言われなかったの？」

「あくまでも非公式のデュエルだったからな。勧誘する時は正式な場で、だそうだ。……キリトが決めに入ったぞ」

デュエルも佳境に入り、俺は観戦に注視する。

キリトの持つ2本の剣が光り輝き、高速の連続攻撃を繰り返す。

【スターバースト・ストリーム】……《二刀流》の最上位剣技。16回と言う他のソードスキルを凌駕するほどの手数を叩き込む最強技。どうにか盾で防ぐヒースクリフだったが、その攻撃に押されて盾が大きく弾かれる。

決まった——キリトが確信したであろうその瞬間、奇妙な現象が起こった。

ありえない速度で盾が引き戻され、技を受け流すと同時に無防備なキリトを剣で突く。

その一撃がHPをイエローゾーンまで減らし、デュエルはヒースクリフの勝利に終わった。

「(やっぱり無理だったか)」

俺の時も同じような状況で負けたから、アスナたちほど驚いていない。

やはりシステムのオーバーアシストを使ってでも防ぎに来た……もしクリーンヒットすれば自分の正体が露見してしまうから。

何はともあれ、これでキリトにヒントを与えてしまって、次のボス攻略で正体を看破。見事キリトはヒースクリフを倒してゲームクリア——

「(……あれ?)」

ふと、違和感を覚える。何だろう、このゾワツとした嫌な感じ。

ゲームがクリアされれば現実世界に戻る……これは、正しい……

いや——。

——その時俺はどうなる?——

「……………」

「ミストさん……? どうかしましたか?」

「いや……」

様子がおかしい事に気づいたのか、ふと俺を見たシリカが心配そうに声を掛けてきた。

シリカは……大丈夫だ。問題なく現実世界に戻る。
けど、俺の場合は？

シリカにとつての現実世界と俺にとつての現実世界は違う。そもそもここは架空の世界……「ソードアート・オンライン」と言うゲームではなく、「ソードアート・オンライン」と言うタイトルの作品が俺にとつての架空の世界だ。

突如この世界に迷い込み、目の前に多くのやるべき事が山積みになつて忘れていた。

……どうすれば俺は、元の世界へ帰れるんだ？

「(ゲームがクリアされれば……いや、そんな安易な結果になるのか？ 来た原因すらも分からないのに、終われば帰れる保証がどこにある。HPが0になれば現実世界でも死ぬ世界だぞ?)」

仮にHPが0になつて元の世界に帰れるのなら、喜んでやってやる。しかしここでは0になれば現実世界でも頭に被ったナーヴギアと呼ばれる機械によつて脳が焼き尽くされる。確証もないのに試す事はできない。

だったらゲームがクリアされれば？ 当然プレイヤーはログアウトされ、現実世界へ戻る事ができるだろう。だが俺はナーヴギアを被つてこの世界にやつて来たわけではない。俺もログアウトされる保証はない。

なら……俺は、どうなるんだ。

「くっそ……。なんだよ最後のは——？ どうしたんだよミスト、怖い顔して」

「……なんでもない、大丈夫だ」

戻つてきたキリトも俺の様子に気づいて声を掛けるが、首を振つて答えると背を向けた。

なんだろう。この嫌な違和感。何か……何か掴みかけている気がするのに。

だけどそれを知つてしまえば……何かが壊れてしまいそうな気が

する。

思い切つて相談してみようか。……でも誰に？ シリカたちに話したところで信じてもらえるはずが……いや、信じてくれるかもしれないがそうなれば全て話す事になる。

「……………」

「本当に大丈夫ですか……？」

「——ああ、大丈夫だ。俺ちよつとぶらついてくる。夕方には家に帰るから、心配しないでくれ」

気遣うシリカへ無理に笑みを浮かべ、俺はその場を後にした。

知らなければいけない。このままではどうなるのかを。

だがこんな話をして、そして確実に答えを貰える人間がこの世界にいるのか……？

「…………いや、1人いる」

ふと、先ほどまで見ていた男の姿を思い浮かべる。

あの男なら俺の求める答えを知っているかもしれない。だがそれは同時に、危険な賭けになる。

「虎穴に入らずんば虎兇を得ず……だっけか」

だがあの男に頼るしか手はないのも事実だ。

……よし、行こう。まだ近くにいるはずだ。

俺は危険を承知の上で、あの男に会うべく走り出した。

「意外だな、君の方から声を掛けてくるとは」

広い室内で、中央の席に座るヒースクリフが俺に対してそう言った。

どうにか戻る直前だったヒースクリフに声を掛け、大事な話があるから時間を貰いたいと言ったところ、こうして血盟騎士団の本部に招かれて対峙している。

「人払いはしてある。重要な話と聞いたが……ギルドに加入してくれるという事かな？」

「生憎だが外れだ。話というのは……」

いざ話そうとしてみると、すぐに口に出せない。……まだ心のどこ

かで迷っているのかもしれない。

ヒースクリフは先を促そうとせず、俺が自分で言うのを待っている。

「……正直、こんな話をしても信じてもらえないかもしれない。だが俺がこれから語るのは全て事実だ。だから、正直に答えてほしい……。ヒースクリフ——いや、茅場晶彦」

「——ほう」

興味深そうにヒースクリフが目を細める。

奥底から湧き出そうとする恐怖心を抑え込むようにぐつと拳を握り締め、ヒースクリフの言葉を待った。

「参考までに教えてもらいたい。何故私が茅場晶彦だと思うのかね？」

「きっかけはデュエルの時……最後の瞬間、明らかに異常なほどの速度で盾が引き戻された。いくら《神聖剣》でも、あんな状態から立て直すのは不可能だろう。あの時あんたはシステムのオーバーアシストを使い強引に持ち直したんだ」

「——なるほど。面白い推理だ」

「——なーんて、な。実際のところはカンニングと言えればいいかな。そんな回りくどい手を使う以前から、俺はあんたの正体を知っていた」

「……ならば聞かせてもらえないかね？ どうして私が茅場晶彦と断定するのか」

「荒唐無稽な話だとは思う……けれど、これから語ることは全て事実だ」

そして俺は、ゆっくりと、順を追って全てを話した。

俺の世界の事……この世界が架空の世界である事……そして、次のボス攻略でキリトが正体を看破する事。俺が知っている、覚えている限りの話を全て。

「……なるほど。つまり君はこの世界——言ってしまうえば平行世界の住人で、我々も我々にとつての現実世界もすべて想像上の存在、と言うわけか。ふむ……信じよう」

「……少しは疑ったりしないのか？ 俺の話が全て嘘かもしれないだろう」

「君が言っただろう。「これから語ることは全て事実だ」と。確かに到底信じられないだが、嘘と呼ぶには事実である点が多い」

意外にもあっさりりとヒースクリフは俺の話信じ、どうせ信じてもらえないだろうと心の隅では思っていた俺は思わず拍子抜けしてしまふ。

「君の言うとおり、確かに私は茅場晶彦だ」

「随分あっさり認めるんだな」

「今更隠した所で意味がないだろう。さて……では茅場晶彦として、君の問いに答えよう。「どうすれば元の世界へ戻れるのか」……だったね」

「……………」

無言で頷く。

ついに……この時が来た。拳に入る力が無意識に強くなっていく。ヒースクリフ……茅場はテーブルの上で手を組み、何か考えるようにしばらくの間口を閉ざした。

「——ハッキリ言おう。君が元のいた世界に戻る方法は、残念ながら私にも分からない」

「ツ……」

告げられた宣告。考えられる答えとして想定しただけに驚きはしなかったが、それでも衝撃は相当のものだった。

だがこれは、まだ序の口だった。

「そしてゲームがクリアされたとしても、君が元の世界に戻る保証はない。無論、この世界で死んだとして、元の世界に戻れると言う保証も、当然ない」

「……………」

分かっている……分かっていた。それも最初に考えていた可能性だ。だけど……っ。

「——そして君には、もっと悪い知らせがある。ゲームがクリアされた場合、プレイヤーは全員ログアウトされるが……最悪の場合、君は

「この世界諸共消滅するだろう」

「なっ……！」

消滅？ それはつまり死ぬって事か？ HPが0になっても死ぬのに、ゲームクリアでも死ぬって言うのか？

「……君にも分かるように例えて話そう」

予想以上の事実を突きつけられてその場で固まる俺に、茅場は言ってから水差しとグラスをオブジェクト化した。

「この水差しが今この世界に囚われているプレイヤーの精神。そしてこちらのグラスが肉体としよう。ゲームがクリアされた場合……」

一度そこで区切ると、茅場は水差しから水をグラスへと注いでいく。

「このように精神は肉体へ戻る。それが本来の形だ。だが君の場合……」

今度は水差しをグラスではなく、テーブルの上に注いでいく。

「このような結果になる。他のプレイヤーと違い、君は水が還るべき器がこの世界——つまり我々にとつての現実世界に存在しないのだよ」

「じゃあ……俺は」

「どう転んでも、待っているのは死^{ゲームオーバー}だけだ」

「そんな……」

……嘘だろ……？ なんてこんな……。

足元から全てが崩れていくような感覚と共に、俺はその場に座り込んだ。

どうしてこんな事になったんだ……俺が何をしたって言うんだよ。発狂してもおかしくないくらい狂いそうなのに、全身を無気力感が襲ってそんな気力も沸き上がらない。

「……君の話の通りに事態が進むのならば、次の75層ボス攻略でキリト君が私の正体を看破するそうだね。そして私と戦い、キリト君が勝ちゲームがクリアされる……つまりその時が、君の最期というわけだ」

そうだ……。

つまり俺が生きられる時間は、あと2週間と数日。

その時になれば、俺は死ぬ……。

「察しの通り、私は以前から君の事を注視していた。突然現れた居るはずの無い1万1人目のプレイヤーだったからね。しかしカーディナルシステムは君を正規のプレイヤーと判断していたし、大きな問題を起こす事も無かったから放置していたんだよ。もともと、システムに原因不明の負荷が掛かっているのだが……君の出現よりもずっと後だし、別の原因だろうがね」

「本当ならもつと早く接触しようと思っていたんだ……でもやるべき事が重なって後回しにして……」

「今になってしまったと。君はこの世界に迷い込んでから間もなく、パートナーのシリカ君と行動するようになったんだね」

「ああ……」

もはや言い返すだけの力もなく、短く答える。

「何もないのか……？ どうする事もできないのか……？ 俺はそのまま消えてしまうのか……？」

「……生きたいか、ミスト君」

「……当たり前だ」

「そうか……」

死ぬために今までを過ごしてきたわけじゃない。生きるために今まで必死になって戦ってきた。

なのにそれを全て否定されて……どうしろって言うんだよ。たった2週間でどう足掻けって言うんだよ！

「俺は……俺はどうしたらいいんだ……」

「……残念だが、その問いに私が答えることは出来ない。見出すのは君自身だ」

気づけばいつの間にかダナクに戻ってきていた。

陽も傾いてあかね色になりつつあり、どうやら今までずっと夢遊病者みたいに彷徨っていたらしい。

『——また何かあればきたまえ。相談くらいには乗ろう』

耳の奥で茅場が最後に語った言葉が蘇る。

そんなこと言われても……どうすればいいか分からない。このまま生きていても死、ここで死んでも死、道は全て塞がれて孤立しているじゃないか。

陽は沈んでいなくても、俺の目に映る物全ては黒に塗り潰されたかのように暗い。それでも足はしっかりと家への道を辿っていき、やがて辿りつくとは半ば自動化された動きで扉を開けて中に入る。

シリカに声も掛けないで部屋に戻り、倒れるようにベッドへ飛び込む。

考える気力もない……。根こそぎ失ってしまった。

……このまま、自分と言う存在は消えていくのか……。

『……ミス……霞さん？ 戻ったんですか？』

ノックがして、扉の向こうからくぐもったシリカ……いや、瑛子の声がある。

俺が帰ったことに気づいたんだろう。……けど俺は何も答える気が起きなかった。

『霞さん？ 開けますよ？』

再びノックがして瑛子の声があると、扉が静かに開かれて、微かな音を立てて閉じられた。

……人の気配が近づいてくる。誰か、と考えるまでもない。

『どうかしたんですか？ あの後からずっと変ですよ？』

「……………」

心から心配してくれる気持ち伝わってくる。けどそれに言葉を返す気力も起きない。

「その……あたしはまだ子供だし、霞さんに悩みがあっても力にならないと思いますけど……キリトさんとアスナさんも心配してましたし、1人で考えないほうがいいと思います。ほら、1人だけで悩むと延々と悩みそうじゃないですか！ だから、その……」

「……瑛子。瑛子は……現実世界に帰りたいか？」

「え？」

必死に励ましてくれる彼女に、俺はただ静かに尋ねた。

意外な質問をされて珪子は一瞬驚いた表情を浮かべる。

「……そうですね。帰りたいです」

「……そうか」

「だって、向こうに……現実世界に帰って、向こうの霞さんに会いたいですから。向こうの『ピナ』も紹介するって、約束したじゃないですか！」

「……そうだったな」

分かりきっていた答えだ。

ここにいる人間全員、叶うならば現実に戻りたいと願っている。その中で俺は唯一の異端だ。今の俺にとってここが現実であり、この世界が終わる事を望んでいない。

珪子が向こうへ帰れば、俺たちはきつと二度と出会うことはない。茅場が死ねばこの世界も崩壊する。そのときには俺も死ぬ。

全てを話すべきだろうか……俺たちは向こうで会うことが出来ないんだと。

いいや……珪子を悲しませるような事はしたくない。

でも時間がない。あと2週間程度が俺に残された猶予だ。たったそれだけの時間で何が出来る？ 75層のボスが倒されればこのゲームは——？

「(75層のボス……?)」

ふと、暗闇の中で一瞬光が見えた気がした。

そもそもこのゲームは本来、100層で茅場を倒さないとクリアにならない。それがルールだ。

けどキリトの想定外の働きによって茅場の正体が露見し、あそこで勝てば全員をログアウトさせる……という約束だったはず。

……つまり、本来のゲームクリアではない……?

だったらキリトが茅場の正体を看破するのを防げたら……いや、既にデュエルは終わっている。もうヒントを与えてしまった。

なら……いや、だがそれは……。

「……………」

「霞さん？」

急に黙り込んだ俺に不思議がり、ベッドの縁に腰掛けた瑠子が顔を覗き込む。

だが俺はそれに答えるほど余裕がなく、必死に頭を回転させた。要は、75層で茅場を殺させなければいい。正体が露見するのは防げないだろうが、茅場を逃がして100層で……本来の最終決戦の場で戦って勝てばいい。

だがそれは同時に、瑠子たちが現実世界へ戻る事を遅らせる事に繋がる。

瑠子の命と、俺の命……どちらも天秤にかけて量れる物じゃない。

「……瑠子は、俺が死ねば悲しむか？」

「な、なに言ってるんですかそんなの！ 当たり前ですよっ！ と言うか、不吉な事言わないでください！」

俺の問いに驚き、慌てる瑠子。

……それが、お前の答えなんだよな。なら、俺が取るべき道は——
「ひゃっ!？」

突然俺に手を掴まれて引つ張られた瑠子はバランスを崩し、そのまま俺の胸に飛び込んでくる。俺はそのまま空いた手を瑠子の腰に回し、強く抱きしめた。

「か、かかか霞さん!? どどっ、どうしたんですか一体! あ、あのあの、さすがにそう言うのはまだ早いんじゃないかなって……」

「……瑠子、聞いてくれ」

「心の準備が……はい?」

顔を真っ赤にして早口で何か言っていた瑠子は、何か盛大に勘違いしていたのだろう。俺の真剣な声に口を開けて見上げていた。

「……この先何があっても、お前のことは俺が必ず守る。絶対、絶対に守ってみせるから……」

「霞……さん?」

その言葉の本当の意味を、当然瑠子は気付いてくれるはずもない。でも……それでいい。

これから俺が行う事は非難されるだろう。けど、思いついたのがこの道だけだ。

俺はきつと、ここに居る住人全てに恨まれるだろう……それでもいい。

これが俺に残された唯一の道だ。人の道を外れ、死んでもきつと地獄に落とされるだろう。6千あまりの人間から希望を奪った大罪人として。

それでもいい。珪子の言葉で決意は固まった。

どう足掻いても消える運命にあると言うのなら、俺は……俺が選ぶ道は――

2024年 10月21日 第55層グランザム。

「意外に早い再会だったな。もう数日は悩み続けるかと思ったが……その目を見ると、何かを決意したようだね」

「……ああ」

俺は再びヒースクリフ……いや、茅場の下を訪れていた。

迷いも、後悔も、全て振り切った。俺の持ってきた答えに興味があるのだろうか、茅場は薄く笑みを浮かべて俺の言葉を待っている。

「まず先に確認がしたい。このまま行けば、この世界は75層で終わる。その事に関しては本意ではないと考えているのか？」

「無論だ。そんな途中でゲームがクリアされるなど、面白くないではないか。いや、それらの想定外もネットワークRPGの醍醐味と言えはそうだがね」

「そうか……なら、俺たちは共通する点を持っているな」

「……ほう。聞かせてもらえるかね？」

「ああ。あれから色々考えた。でも結局、茅場……お前の言ったとおり俺は元の世界に帰る方法も分からないし、このままだと死ぬ運命だろう……そんなの嫌だ。俺はまだ生きていたい」

「それで？」

「でも、その運命を変えられないなら……どうせ死ぬと言うのなら、この世界の最後まで……本当の意味でゲームがクリアされるまで生き抜いてから死んでやる」

「……………」

それは茅場にとって想定外の答えだったのだろう。その顔は珍しく驚きの表情が浮かび上がっており、見開いた目は俺をじっと見つめていた。

「茅場、あんたは言ったな。途中でゲームがクリアされるなんて面白くないと。あんたは100層まできつちり進んでほしいと思つていて、俺もどの道死ぬならこのゲームを最後まで進めて死んでやる」

もう、ここまで言えば後戻りは出来ない。強い覚悟を胸に抱き、茅場に向けて手を差し出す。

「取引だつ！俺が望むのは100層での本当のゲームクリア！この望みを叶えてくれるなら、俺はお前に手を貸してやる！」

「……だが、キリト君が気付くのだろうか？ それについてはどうするのかね？」

「キリトは……キリトの事は——」

当然の疑問に、俺はすぐに答えようとするが躊躇いが間を差した。

どう動いても、結局はキリトが前に立ちふさがってしまう。

この世界に囚われていたプレイヤーを解放した英雄。黒の剣士キリト。最強の敵を倒した最強の剣士。

思えばこの世界に来て最初に世話になったのがキリトだった。

以来何かと付き合い続け……時にふざけ合ったり、時に相談に乗ったり、時には共に戦ったり……きつと『親友』として付き合い合えたんじゃないかと思う。

その親友を……その親友を俺は……俺は——。

「——どうしても立ちふさがると言うのなら……俺が、この手で殺す」
「……………」

暗い決意を込め、俺ははっきりと口にした。

勝てる見込みは、はつきり言つてない。それでも俺は、立ちふさがるとのならばキリトを倒す。

きつとアスナには強く恨まれるだろう……もし、俺を殺しに来たならば、アスナも殺す。

どんな犠牲を払つてでも、俺は100層までたどり着く。

珪子を……珪子だけでも生き残ってくれたのなら、それでいい。

「……良い目だ。実に良い目をしている」

じつと俺の目を見つめていた茅場は静かに呟いて……ゆつくりと席を立つ。

「今……君は目的のためになら形振り構わず、他者の命すら犠牲にする覚悟をしている。さながら人の魂を食らう悪魔のように」

「俺が悪魔なら、あんたは魔王だろう。悪魔との取引って言うのは自覚している」

「そうするだけの覚悟と決意は既に持っているというわけか」

神妙に頷きながら、茅場はテーブルを回って俺の前に立った。

「いくつか確認したいのだが、構わないかな」

「俺に答えられることでなら」

「君のいた世界に……この城は存在したかね？」

「……いいや。そもそも俺のいた世界の年代が、ここよりも10年近く前の世界だった。フルダイブ環境もまだ普及していないところだったよ」

「そうか……どこか別の世界には、存在すると思うか？」

「……断言は出来ない。でも、俺にとって架空の世界だった「ソードアート・オンライン」と言う作品自体がこうして実在したんだ。このアインクラッドも……どこかの世界にあると思う」

否定するだけなら誰にだって出来る。

けど俺は、こうして異世界に渡って実証している。全てを肯定する事はできないが、信じていたいと……そう思っている。

「……なら次に、君はこの世界に憎しみ以外の感情を抱いていたのか？」

「憎しみ……？　そう、だな」

俺は憎んでいるだろうか？　確かにちよつとした出来事で憎いと思つたことは何度かある。けれどそこまで大げさな事ではない。

今は……とても悲しいと思つている。この世界でしか生きられない自分の運命に。でも――。

「そうだな……一言で言えば、楽しかった。この運命を知る前はたくさん嬉しい事や楽しい事もあつたし……何より、俺が心から好きな人

を、俺を心から好きでいてくれる人と出会えた」

だからこそ、消える最後の瞬間まであの子と共に居たいと思う。

俺の全てを賭けて——って古臭い台詞かもしれないが、守りたい。

未練はある……でも、瑠子が現実世界へ帰れたならばそれで良い。

「その笑みを見れば……聞くまでもなかったようだな」

「えっ……？」

指摘されて、初めて自分が笑みを浮かべている事に気がついた。

……ああ、そうだな。やっぱり楽しかった——それが俺の本心だ。

だから——

「——心から笑うのは、これが最後だ」

これから多くの人々のから望みを奪う奴にそんな資格はない。

だからこれは、俺に対しての罰であると同時に、目の前の男への覚悟の証明だ。

「俺の望み……決意……覚悟……代償は全て示した。——お前の答えを聞かせてもらおうか」

「……良いだろう、その取引に応じようではないか。危険を冒し、他者を裏切り、それでもなお悪魔と取引を行おうとする君に私も応えよう」

そう言つて茅場が差し出した手を、俺は握り返す。

これで取引は成立し……この男と同じ悪魔の仲間入りを果たした。皆が知ったらどんな顔をするだろう。

……きつと恨むだろうな。でも、だとしても俺にはこの道しかないんだ。

許されないのは分かっている。だからせめて、この先俺1人だけしか戦う奴がいなくなつても戦い続けていこう。

そして——死ぬ時はこの男も道連れにしてやるのがせめてもの償いだ。

第11話 君臨する神

第11話 君臨する神

「——そんな顔するなよ。これじゃあ出かけられないじゃないか」
「行けなくていいですよ」

随分と無茶な事を言ってくれる……が、無理も無いだろうと俺は納得して嘆息する。

2024年 10月24日。キリトはアスナとめでたく結婚し、血盟騎士団を一時退団したと連絡が来た。

これで2人はしばらく前線に出てくる事は無い。その間に起きる出来事は俺には関係ないことだろう。

この2日間、俺とシリカも攻略を休んで思いっきり遊び回ってきた。……最後の思い出作りのために。

「ソロじゃないと受けられないクエストをするって言うのは分かりますけど……いくらなんでも急すぎですよ」

「それに関してはほんとに悪い」

ご機嫌斜めな理由がこれだ。

「ソロでしか受けられない長期のクエストが見つかったからちよつとやって来る」——と言う胡散臭そうな嘘に、シリカは当然と言うべきか疑っている。

——実際にはヒースクリフからの提案で、俺もまだ詳しい話を聞かされていないんだが。

「俺が留守の間は好きにしているいいけど……もし前線に行くならクラインに連絡してくれ。あいつには俺のほうで話を通してあるから」
「……はい」

当然クラインにもシリカと似たような話を伝えて協力してもらっていた。普段目に余る言動が目立つが、あれで頼りになるから大丈夫だろう。

……問題はふくれっ面の彼女をどうやって宥めるか、だ。

「……珪子、ちよつと目を閉じてくれ」

「? どうしてです?」

「いいから」

促されて渋々目を閉じたシリカに、俺は唇を重ねた。

いきなりキスをされてシリカは目を見開いて、顔を真っ赤にして飛び退く。

「か、霞さんっ!? どどどうしたんですかいきなりっ!?」

「いや、なんとなく。大丈夫だって、無茶だけはしないって約束するから。じゃあ行ってくるな」

「え……ちよっ!」

混乱している隙に俺はそそくさと家を出た。

「……ふう」

扉に体を預け、大きく息を吐く。

普段通りに振舞えただろうか……一応、大丈夫だと思いたいが。

思えば今までいつも2人一緒だったんだよな……不安に思うこともあるかもしれない。でも、後のことは皆に頼んであるから大丈夫と思いたい。問題は俺のほうだ。

「……行くか」

今までの楽しかった気持ちを胸の内に封じ込め、俺は歩き出す。

転移門でグランザムへ向かい、血盟騎士団の本部へ。既に話は通してあったためすんなりと奥へ通された。

「待っていたよ」

「悪かったな。少し別れを惜しんでいた」

待っていたのは俺が契約を交わした悪魔。これから話す事は2人だけの極秘の内容になっているため、当然人払いはされていた。

俺の言葉にこの男――ヒースクリフはいつもの胡散臭そうな笑みを浮かべている。

「それは仕方ないだろうな。人と人の別れはいつも惜しまれるものだ」

「それよりさっさと本題に入れよ。わざわざ長期間時間を作らせて何をやるんだ?」

「いいだろう。ただ少しばかり長い話になる」

別にいいさ、と答えると、ヒースクリフは少し活き活きとした様子で話しを始めた。

「……あまり関わらなかつたし、そもそもどういふ人間なのかと言うのも分かりづらかつたんだが、案外とお喋りで……あと麺類に情熱を注いでいる残念系と言うのがここ最近の付き合いで分かつてきた。これがデスゲームの最後に待ち受けているラスボスとか。

「……聞いているのかね？」

「……いや、もう1度頼む」

少しヒースクリフについて考えている内に少し話を聞きそびれてしまつていたらしい。

もう1度最初から話してくれるように頼むと、俺は改めて耳を傾けた。

「まず君の境遇についてその後検証を続けたところ、今の君は電腦と呼べる状態が近いだろう」

「電腦……？」

「要するに記憶や人格をデジタル信号化させてネットワークに遺した物だ。この世界では大出力のスキャンを行う事のだが、その場合脳が焼き切れてしまうが、可能性は低いものの電腦化する事ができる」

「いや……ちよつと待つてくれよ。俺はスキャンなんてしてないし、そもそも俺にとつてここは本物の異世界なんだぞ？」

「その通りだ。だから厳密に言えば似て非なる物だろう。あるいは、電子生命体とでも言うべきか……」

電子生命体……○ジモンかよ。いや、案外それに近いかもしれな。い。そつちの方じゃなくて、デジタルワールドに入り込んだ人間の方。

「まあ、君の境遇については君自身の情報が少なすぎるから、どれも推測の域を出ないだろうがね」

「結局元の世界に戻る保証だつて無いんだろう。いいさ、悲観ならもうとつくに終えている。今は今後の事だ」

「良からう。では次に……君はユニークスキルについてどの程度の情報を持っているかな？」

「そこまで詳しくは知らないさ。他の奴らが知っている基本的なことだけだな」

「そうか。ではそれに関して話しておこう。ユニークスキルは全部で10種類存在する。今明かされているのは私の《神聖剣》、キリト君の《二刀流》スキルの2つだ。他に《射撃》、《飛行》、《神速》、《絃》、《蛇槍》、《無手》、《斬馬劍》がある」

「へえ……」

それは目から鱗な情報だな。名称からどういうものかはある程度推察できるが、《射撃》に《飛行》って……。

「《射撃》や《飛行》って、そんな凄い物が仕込まれたのかよ。この世界じゃ魔法や射撃攻撃なんて無いはずだろ？ おまけに空まで飛べるなんて……」

「無論どれも習得条件は困難な設定にされてあるよ。《飛行》についても自在とまでは行かないが、フライトエンジンを導入しているから空を飛ぶこともできる。でなければ飛行タイプのモンスターが飛べないからね」

「はあ……」

これは開発者と知り合いじゃなかったら聞けなかった裏情報だ。けれどアルゴには黙っておこう。

「……ん？ ちょっと待てよ。ユニークスキルは10種類あるんだろ？ あと1つ足りないだろ」

「ああ。それに付随して関わるのが、今回の話だ」

「まさか……ユニークスキルの獲得に関わる物か？」

ようやく本題に入ったかと思っただが思わぬ展開に目を見開いて尋ねた。

ヒースクリフはそれに頷き、再び語り始める。

「ユニークスキルはどれも強力だ。《二刀流》は魔王を倒す勇者の役割を与えられたように、それぞれのユニークスキルには役割を与えられている。だが、10番目のユニークスキルはどれでもあってもいい」

「どれでもあっても……どれでもない？」

「例えば、『二刀流』のスキルを持ったプレイヤーが途中で倒されたでしょう。その場合代わりの勇者が必要になる。その時に宛がわれるのが10番目だ。10番目は、他のユニークスキル持ちプレイヤーが死んだ時に、代わりにその役割を果たす……そして究極的には、魔王をいかなる手段を用いても倒す代行者保険であり、最終手段禁手なのだ」

「いかなる手段を……」

つまり、どうやっても魔王を倒せないプレイヤーたちに残された最後の手段。

……けどユニークスキルはプレイヤーの資質に左右されるんだし、そう簡単に獲得できる物じゃないと思うが。

「だから最終手段なのさ。厳密に言えばあるボスを倒す事で獲得できる……だが口で言えば容易く聞こえるが、実際にはその難易度は非常に高い。ミスト君はゲームで最終ボスを上回るボス……俗に言う隠しボスを倒した事はあるかな？」

「えっと……一応ある。倒した後に最終ボスを倒したら味気なく感じるけど」

「つまり、そういうことだ。手に入れるには最終ボスを上回るボスを倒して手に入れなければならぬ。ただ倒すだけではない、ラストアタックも決めなければ全ての条件は揃わない」

「えげつない上に回りくどいな……」

「でなければボスとしての面子に関わるのでね」

確かにそうだ。あっさり手に入れたら「ラスボス(笑)」になりかねないし。

「……けどどうしてその話を？」

「理由は簡単さ。今の君ではキリト君に到底及ばない。いくら決意した所でそれを成し遂げるだけの力が無ければ、ハッキリ言っただけだ」

「ハッキリ言ってくれるな……」

「事実である事には変わらないだろう？」

……確かに、否定できない。

キリトが戦っても、俺が一方的にやられるだけだ。それだけユニーク

クスキルの力は凄まじい。いや、スキル無しにしてもキリトの強さはアインクラッドで最強だろう。

「本来の出現条件は100層に到達して、アインクラッドに生存するプレイヤーが4000人以下にならないければ出現しないんだがね……今回は特別に、君の手向けとして解禁しよう」

「……解禁しても殺されたら意味がないんだろ」

「無論だ。こう言ってはなんだが、どうせ誰も手を出す人はいないだろうと思ってやや強くしすぎてしまつてね。さすがに焦つて隠しボス扱いにしておいたんだよ。あつはつはつは」

「笑い事じゃすまないだろう、それは……」

つまりは、こういうことか。

100層まで来ても一向にヒースクリフを倒せず、プレイヤーの総数が一定以下になれば秘密兵器として解禁されるが、蓋を開ければ超強い隠しボスだから手に入れようとするなら余計人が死ぬと。中々厭らしい仕掛けになっているじゃないか。

「そんなやばい相手に2人だけで挑むつて言うのか？」

「怖気づいたのかな？　だがこれをやり遂げねば、君の目的を果たす事など不可能だと思うがね」

「安全マージンを確実に上回るレベルのボスなんて、死に行くような物だから……」

けどこれは、ヒースクリフが俺に課した試練の意味もあるのだから。

この程度の難題を乗り越えられなければ、協力する意味はないと。

「……良いだろう、やってやるさ」

「そう来なくてはな。では、行くとしよう」

俺の答えに頷いたヒースクリフは、アイテムポーチの中から濃紺のクリスタルを取り出した。

「回廊結晶……」

「ああ。何しろまだ未到達の階層まで行かなければいけないのでね。ひとまず上層に向かい装備を整えた後、目的地へ向かう」

「けどどうやってそんな準備を済ませたんだ？」

「忘れたかな？ 私はこの世界の創造主だよ」

ああ、なるほど。つまりは管理者権限を使って用意したのか。便利
なこつて。

「コリドー、オープン」

掲げたクリスタルが砕け、目の前の空間に波紋が広がる。振り返り
俺を見遣ったヒーフリフに頷き、俺は波紋の中へ足を踏み入れた。

「ここは……」

転移した先の光景に、思わず言葉を失う。

記録先は転移門広場だったらしいが、目の前に迷宮区らしき入り口
が開いていた。

「99層主街区……おわりの街だ」

「おわりの街……」

続いて転移してきたヒーフリフの言葉を繰り返しながら、ぐるり
と周囲を見回す。

これが原作には登場しなかった街なのか……街並みははじまりの
街に似ているように感じる。

「ここから先は少し特殊だね。フィールドは無く、迷宮区に直結して
いる形になっている。ここを越えれば100層の紅玉宮に直接行け
るというわけだ」

「だからおわりの街か。なら、クエストは100層に？」

「いや、ここへ来たのは装備を整えるためだよ。付け焼刃程度だが最
後の街だけはあつて装備品は強力な物が揃っている。マップデー
タを渡しておこう」

そう言つてヒーフリフはメニューを操作し、俺にこの街のマップ
を提供してきた。

受け取つた俺はすぐにマップを開くと、その広さに思わず舌を巻
く。

はじまりの街も広がったが、おわりの街はさらに広い。フィールド
は無くこの階層丸々1個が街になっている。

「そうそう、行く前に1つ良いことを教えておこう。この街の防具屋

では強力なお守りが売っている。余裕があれば購入しておくといい。1時間後にまたここに集合だ」

「情報どうも。じゃあ早速行ってみるさ」

ヒースクリフとは一旦別行動を取り、俺は勧められた物を確認するために防具屋に行ってみることにした。

マップで位置を確認しながらしばらく歩いていると、目的地の防具屋に行き着く。

お守り……って言っていたが……これか？

「インフィニットアंक」……なっ!? 全ステータス+25、攻撃力と防御力+250、命中と回避+10!? なんだこの超絶強化——ぶっ!?」

ダメージカットこそ無いが、全ステータスを強力に強化するとんでもない代物に思わず目を剥き、次いで値段を確認したら思いつきり噴出した。

「え……いち、じゅう、ひやく、せん、まん……ぜ、0がいっぱいあるんだけど。きゅ——9千万コルウウ!?」

能力がぶっ飛んでいるなら、当然値段もぶっ飛んでいて俺は残金を確認する。

2日間遊びで使い込んでいたが、キリトとヒースクリフとのデュエルで賭けにつき込んだ金を合わせても到底足りない……俺がここに来た初期金額よりも遥かに高いつてどう言うこった。

……いや、待てよ。ヒースクリフの奴は確か——

『余裕があれば購入しておくといい』

『余裕があれば購入しておくといい』

『余裕があれば購入しておくといい』

「あ、あのやろう……」

絶対に買えるはずが無いことを知っていてあんな事を言ったのか。どこまで捻くれているんだよ。今頃ぶぎやーでもやって笑ってるのかっ!

「いつか絶対お礼参りしてやる……!」

絶対負けられない理由が1つ増えて改めて胸に誓うと、改めて装備

品のラインナップを見た。

……けど俺と相性が良さそうなのが無い。盾も普通の防御型で《盾剣技》に対応しているようには見えない。

諦めて防具屋を後にし、今度は武器屋に行ってみるがそれほど魅力的なものは見当たらず、道具屋でアイテムを大量に買い込んでからヒースクリフと合流した。

「なんだ、もう戻ってきたのかね？　まだ30分しか経っていないじゃないか」

「アイテムの補充はした。店を覗いて来たけど特にめばしい物はなかったからな」

「インフィニットアंक」はどうしたのかな？」

「あんなクツソ高いお守りなんて買えるか！　なんだよ9千万コルつて！　桁がおかしいだろ！」

「やはりそうだったか。強力すぎるから高く設定したのだが、やはり高すぎたようだ」

やっぱ確信犯だったのかこいつは。

もはや突っ込む気力も起きず、肩を落とした後メニューから装備を呼び出して準備を整える。ポーチには大量のハイポーションも突っ込んであり、こちらの準備は万端だ。

「では行くでしょうか。コリドー、オープン」

再び回廊結晶を取り出してヒースクリフが唱えると、クリスタルは砕けて空間に波紋が広がる。

「地獄への直行便だ。いいかね？」

「……答えなんてもう出ている！」

癪に障る笑みを無視して波紋を潜り抜ける。

転移した先は洞窟のような場所で、辺りには発光するクリスタルがいくつも点在していた。

「ここが……ボスの出る場所なのか？」

剣を抜いて周囲を警戒しつつ、幻想的な風景に思わずそんな感想が漏れた。

続いてやってきたヒースクリフは既に剣を抜いており、真っ直ぐに

一点を見つめている。

「来るぞ」

「……っ！」

反射的に緊張感が最高値に達する。

俺たちの前でいくつもの光が1箇所が集まっていき、その輪郭を形作る。

そして——それは姿を現した。

白い衣の上から黄金の鎧を身に纏い、背には翼を彷彿とさせる2枚に分かれたマントを。

手には黄金の装飾が施された盾と長槍を持っていた。

人型……いや、違う。今まで見てきたモンスターで該当するタイプは無い。なんだこいつは!?

ステータスは……ダメだ。レベルが高すぎて識別できない。けど名前だけは表示されている。名前は——

『The MinerVa……ミネルヴァ!』

確かローマ神話の女神で、ギリシャ神話のアテナに対応する女神の名前じゃないか!

今までのボスはなんらかをモチーフにしたとは言え、ストレートにモチーフの名前を採用したモンスターは居なかったはず。

これがプレイヤーたちにとって最後の希望になるはずだった……最強の敵なのか。

「……………」

こんな化け物に勝てるのか、と言う疑念が心の中で沸き上がる。

俺のレベルは現在88……当然ここでは安全マージン圏外の上に相手は100層で待ち構える最終ボスよりも上のステータスと考えていい。

「攻撃は基本的に私が止めよう。君はその隙に臨機応変に攻撃を繰り返すんだ」

「頼りにしてるからな……っ！」

むしろ盾のダメージカット率が低い俺では一撃で半分以下までHPが削られる可能性がある。

ヒースクリフの防御力ならあるいは、この女神に対抗できるだろうか……どちらにしてもはや退路は無いんだ。だったら――

「手に入れてやる……絶対に！」

その一言を皮切りに戦いは始まった。

『ミネルヴァ』は一瞬にして間合いを詰め、手にした槍を突き出す。その速度に俺は反応し切れなかったが、割って入ったヒースクリフが盾で弾く。

その隙に背後へ回り込んで斬りかかるが、『ミネルヴァ』は瞬時に振り向いて盾で防いだ。

そこへ、ヒースクリフが剣を突き出すがこれも盾で防がれてしまう。

「っ……っ？」

なんだ、今の感覚。

ヒースクリフの剣が防がれた瞬間を見て、何か違和感を覚えた。

それでも戦闘の最中にそんな事を気にしている暇は当然無く、俺はヒースクリフが攻撃をひきつけている間に攻めるが、悉く盾で受け止められる。

「(なんて防御性能だ！ まるで――)」

まるで《神聖剣》のようだ――そう考えて、俺は最初に抱いた違和感の正体に気づいた。

巨大な盾による圧倒的防御力と正確無比な突き……まるで《神聖剣》の特徴に近いじゃないか。

「ヒースクリフ！ お前……『ミネルヴァ』に《神聖剣》の一部を組み込んだな！」

「気付いたか！ なにも『ミネルヴァ』だけではないさ！ 君の《盾剣技》も《神聖剣》の下位互換と呼べる劣化品だ！ しかし『ミネルヴァ』は一部の性能はオリジナルと遜色ないんだよ！」

いくら隠しボスだからってユニークスキルの一部を組み込むとか、どれだけ遊び心を加えたんだこいつは！

「って言うか、やっぱり《盾剣技》って《神聖剣》の劣化品だったのかよッ！」

「そうだとも！ でなければ盾にダメージ判定もつかないし、ソードスキルを使えるわけもないじゃないか！ その代わりにダメージカット率は気休め程度、対応する盾は5種類とマニアックな人向けにしたんだがね！」

「俺はそのマニアックの1人かよ！」

つまりはこいつの遊び心を身に着けていた俺は、キワモノスキルを必死に使っている姿に笑われていたって事か！ マジで腹立つ！

「ぜつつつたいこの女神殺してユニークスキル獲得して、100層でお前殺してやる！」

「その意気だミスト君！ 君がどこまで足掻けるか楽しみにしている
としよう！」

「減らず口をオオ！」

剣戟は『ミネルヴァ』の盾に防がれてしまいが、俺は内から沸き上がる怒りを力に換えて弾き飛ばし、「デモンズ・クロウ」を装備した左手で横っ面を思いつきり殴りつけた。

一瞬だがよろける『ミネルヴァ』。すかさずヒースクリフが【バーチカル・スクエア】に似た垂直4連撃ソードスキル【ゴスペル・スクエア】を叩き込んで追撃をかける。

「スイッチー！」

ソードスキルを叩き込んだヒースクリフと瞬時に入れ替わり、【シャープネイル】から《剣技連携》で【ホリゾンタル・スクエア】へ繋ぐ。

かなりのダメージを与えたはずだが……ステータスが見えない以上実際には分からない。むしろそんなことに意識を割いている余裕はない。

『ミネルヴァ』の槍がライトエフェクトに包まれて、超高速の2撃が襲い掛かる。辛うじて「デモンズ・クロウ」で受けるがその威力は凄まじく、俺は壁際まで吹き飛ばされてしまった。

「がっつ！！」

一瞬意識が持っていかれそうになるが、気力で繋ぎ止める。HPは8割も残っていたのに一気に2割以下まで奪い取られていた。

ポーチのハイポーションを一気に飲んで空になった瓶を捨て、再び『ミネルヴァ』に立ち向かう。途中、「クイック・チェンジ」のスキルで盾を「プロテクションエッジ」に変更した。毛の生えた程度の違いだが防御性能はまだこっちに分がある。

俺は復帰する間にもヒースクリフは『ミネルヴァ』と激しい攻防を繰り返していた。

レベル差はあるはずだが、『神聖剣』の防御性能がそれを埋めている。だが敵も同じく『神聖剣』をベースにした能力を持っている。

故にその空間は余人が付け入る隙などないほどに壮絶な攻防の応酬だった。

ヒースクリフならあるいは、単独でも『ミネルヴァ』に対抗できるかもしれない……だが、

「寄生なんて趣味じゃないんだよ！」

吠え、横から槍を持つ腕を斬りつける。

ヒースクリフに全部任せて勝っても意味がない……これは、俺が力を得るための戦いなんだ！

『ミネルヴァ』の正面ではヒースクリフが、俺は背後から息つく暇もないほどの連撃を掛ける。的確に攻撃を受け、逸らし、かわす『ミネルヴァ』だったが、少しずつではあるが押されて来ている。

「（攻撃を受けようとしてもダメだ！ 流して隙を作り出す！）」

突き出された超高速の刺突を、盾で受けるのではなく滑らせるようにして受け流す。すかさず「スター・Q・プロミネンス」を叩き込みながら離れ、『ミネルヴァ』の反撃をヒースクリフが受け止めた。

まだ……。

まだまだ……！！

「こいつなら——どうだアアアッ!!!」

左右でソードスキルを発動し、突撃。ジェットエンジンのような効果音と共に「ヴォーパル・ストライク」を繰り返す。

それを受け流そうとする『ミネルヴァ』。しかしそこへ、もう一方の「ヴォーパル・ストライク」が貫いた。

——「ダブル・サーキュラー」。

《二刀流》の突撃ソードスキルで、右の剣が阻まれてもコンマ1秒の差で左の剣が敵内部へ襲い掛かるといふ、《二刀流》特有の二段構えの剣技。

当然、《二刀流》スキルを持たない俺には使えない。けど真似事は出来る。

微妙に発動タイミングをずらした【ヴォーパル・ストライク】2連続発動。別々にソードスキルを発動できる《盾剣技》の特徴を活かした方法でなら、再現する事自体は可能だ。

もつとも、再現できるのは極々一部のみになるが——それでも十分アドバンテージになる。

「ぬああああッ！」

吠えながらさらに盾を押し込み、柄頭で『ミネルヴァ』の頭を何度も打ち付ける。

『ミネルヴァ』は強引に俺を引き剥がし、そのまま後方へ飛んだ。

次の瞬間、俺は驚くべき光景を目撃する。

背中のマントが翼のように変化し、着地することなくそのまま上昇する。

「飛行能力持ち……!?!」

「ああ。しかしそれは、同時にHPが残り7割になった証拠でもある」
人型のモンスターが飛行能力を持っていたことに驚きを隠せない俺に、ヒースクリフが『ミネルヴァ』を見上げながら冷静に答えた。
「パターンの変化はもう1つある。HPが残り2割になった時、槍と盾を捨て《二刀流》になる」

「鉄壁の防御を捨てた背水の陣かよ……って言うか《神聖剣》に《飛行》、《二刀流》の3種類のユニークスキル積み込むなんてどんな神経してるんだ」

「ふつ。そう簡単にユニークスキルを取らせたくはなかったのね」

ああ、そうかい。言葉には出さず、俺はハイポジションを口にして減ったHPを回復する。

第1ラウンドが終わり、第2ラウンドの始まりってわけか……。

空に浮かぶ『ミネルヴァ』を睨みつける。女神は斜め後方に一瞬移

動したかと思うと、反動をつけて地上に飛び込んだ。

——一体どれほど長い時間戦い続けただろう。

《二刀流》に装備を変えた『ミネルヴァ』の圧倒的攻撃速度を前に俺は押されそうになったが、ヒースクリフが防御に徹して防ぐ合間に俺が攻撃すると言う作戦に切り替えてから、かなり長い時間が経過した気がする。

もはやポーシヨンは底を尽きつつあり、気力・体力もとつくに限界を超えていた。いくらHPを回復させると言っても、疲労まで回復させるわけではない。

それでも——まだ戦える。戦い続ける事ができる。

《二刀流》になったと言う事は、体力が2割を切った証拠。そこからかなりの時間が経過しているはずだ。

「(決める……決めてやる!)」

ヒースクリフの影に隠れて攻撃をやり過ぎす。『ミネルヴァ』は両手の剣に闇色のライトエフェクトを纏い、防御ごと打ち砕こうと16連撃ソードスキル【ナイトメア・レイン】を繰り出す。

だが、《神聖剣》の防御を崩すことが出来ない。どの道崩したところでシステムの不死になっているヒースクリフを倒す事はできない。

「これで決めるぞ、ミスト君!」

攻撃が終わる寸前、ヒースクリフが叫んだ。つまり、もう一息と言う事か。

16連撃を耐え切り、硬直する『ミネルヴァ』へ十字斬り【ダイバイン・クロス】が叩き込まれる。

「スイッチー!」

「——ッ!」

合図と共に俺は前に出た。

俺の持ち得る中で最高の火力が出せる組み合わせの一つ——【スター・Q・プロミネンス】と【ファントム・レイブ】による合計12連撃!

「どうだ——ッ!」

文字通り切り札を切った俺は『ミネルヴァ』を伺う。

だが、ヒースクリフの攻撃を含めた14回攻撃を食らっても、『ミネルヴァ』はしぶとく耐え抜いていた。

手にした2本の剣が、青い輝きを放つ。こっちはスキルの発動硬直で動けない。

無理なのか……？ あと少し……ほんの少しで手が届くのに……！

——もう1度……もう1度、俺にチャンスを！

「ッ……ああアアッ!!」

あらん限りの力を込めて吠え、再び盾でソードスキルを発動する。

初期に使える基本的な突進技「レイジスパイク」。『ミネルヴァ』の剣が触れるよりも速く先端が胸を抉った。

『ミネルヴァ』のソードスキルが発動するよりも速く俺のソードスキルが命中したことでキャンセルされた。だがそんな事を一々確認する余裕はもう無く、全神経を『ミネルヴァ』を倒す事だけに注ぎ込む。

「レイジスパイク」の硬直を「バーチカル・スクエア」で、その硬直を「スター・Q・プロミネンス」で、さらにその硬直を「ヴォーパル・ストライク」でキャンセルし続け、再び「ヴォーパル・ストライク」で追撃しようとしたら不発した。

だが……それ以上の連携は必要なかったらしい。

合計26連撃……単独では24連続攻撃を全て受けた『ミネルヴァ』は、全身を光り輝かせて——次の瞬間砕け散った。

不発したソードスキルの慣性に逆らえず、俺は地面に倒れてそのまま2メートルほど滑る。

……HPはレッドゾーンに差し掛かっていた。

空中にはCongratulations!! の文字が浮かんでいるが、そんな余韻に浸る余裕も無い。

無我夢中だった。最後の最後で《剣技連携》の連続成功が無かったら、俺は殺されただろう。

むしろ、あれほどのボスを相手にたったの2人で勝つことが出来た

のが奇跡に近い。

「おめでとう。素晴らしい戦いを見させてもらったよ」

ヒースクリフが拍手と共に賛辞している。

「《剣技連携》か。システム外スキルとは言え、凄まじい物だな。ユニークスキルを持たない君が単独で24連撃を成し遂げるとは、開発者としても非常に驚かされた」

「……………」

その言葉に返すだけの体力は、今の俺には無い。

そもそも俺の《剣技連携》は1コンボが今までの限界だった。6コンボなんて今まで出した事すらない。きつとこの先もこの記録を超えることは不可能だろう。

リザルト画面が表示され、大量の経験値とコル、そしてドロップしたアイテムが表示される。トドメを刺したのは俺だから、当然ラストアタックボーナスは俺の物だ。

「これで君もめでたくユニークスキル持ちになったな。喜ぶといい、最強にして最悪の力を君は手に出来た」

「…大層…：な、フリーズだな……」

芝居がかったヒーフリフに俺はどうかそれだけは言い返し、体を起こした。

地面に座り、霧が掛かったような思考の中で改めてリザルトを確認する。

「これが…：ユニークスキルに必要なアイテムなのか」

「ああ。それで無ければ10番目は使えない。無論それ単体でも強力な魔剣だ。しかし、それだけでは真の力を引き出せない。2つが揃う事で、真の力を発揮できる」

リザルト画面には、しっかりとラストアタックボーナスであるボーナスアイテムが表記されている。

魔剣…：レア中のレア武器。有名どころと言えばラフコフのリーダーが持っていると言われる「友切包丁」か。

「魔創剣 テラー・オブ・ジェネシス」…：」

和訳すれば「創世の恐怖」…：って所か。スペックを確認するが

……当然と言えば当然だが、剣の要求値に対して俺のステータスが圧倒的に足りない。まず要求レベルが110とか。

「次は地獄のレベリングになりそうだね」

「……当然協力するんだろ？」

「無論だ。ここで放り出すのは中途半端だからね。私としても、その力を使う人間を間近で見たいとも思っている」

自分を殺す力を間近で見たいなんて、随分変わった趣味の持ち主だ。声には出さずに俺はそんな感想を抱いた。

リザルト画面を閉じ、今度はスキルリストを確認する。

……あつた。確かに。獲得した記憶の無いスキルが最後のほうに表示されている。

「これが……俺の、力」

この力があれば……俺は戦える。誰であつても。

それが——キリトであつたとしても。

第12話 決別の扉

第12話 決別の扉

2024年 10月31日。

「……………」

1人その場に置いてけぼりにされ、俺はしばらく沈黙した後…………。

「……………はあ」

大きくため息をついた。

『ミネルヴァ』を倒してから1週間。ほぼ不眠不休でレベリングを続けた結果、現在のレベル101。「テラー・オブ・ジエネシス」を始めとして、クエストで入手した高性能の装備の要求レベルまで目前に迫った所で、突然ヒースクリフに今日は1日休みを言い渡されてしまった。

理由は単純明快、1週間もギルドを留守にしていたら運営に支障が出るし、何より無茶なレベリングは体に良くないと言われ、半ば強制的にグランザムに飛ばされてしまったと言うわけだ。

こっちとしては一刻も早く要求レベルまで到達して、ユニークスキルの熟練度を上げたいって言うのに…………。いきなりの暇を押し付けられて完全に手持ち無沙汰になっている。

ヒースクリフとは言えば、知らん。向こうは直接ギルド本部にでも行っただろう。明日の朝、ダナクの転移門前で合流すると言っただけ言い残していたが。

…………で、それまでの間どうしよう。

「…………まずは武器のメンテナンスから、か」

街に戻る時間が少しでも惜しくて、あちこちの階層で武器を複数購入しておいてローテーションで使っていた。メインの「マーヴェルエッジ」を含めて合計4本も。さすがに上層の武器だけのことはあつて性能は中々良い。

もつとも全部繋ぎであつて、強化していく予定は今後もないが。かと言って壊して買いなおすわけにも行かない。

…………となると、行くべきところは1つだけだな。

「――転移、リンダース」

転移門で行き先を唱えると、俺は目的地へ向かうのだった。

「リズベット武具店へようこ――ってなんだ、ミストじゃない」

「なんだとはなんだよ、客に向かつて」

リズの店にやって来たたとたん、出迎えたリズのぞんざいな扱いに即座に突っ込む。せめて最後まで営業スマイルを維持してから掌を返せ。

「別にいいじゃない、赤の他人つてわけでもないんだから」

「人の弱みを握った奴は余裕な事で……」

「なんか言った？」

いや、なんでもない。一瞬危ない光を目に宿らせたリズに全力で否定する。

シリカと付き合う上でどうしたらいいのか、色々と相談をしている内に頭が上がらなくなってしまった……これも全部アスナが悪いんだ。

「へくちっー!」

「? ママ、カゼですか?」

「う、うん……? なんだろう、誰かが噂して――ってコラキリト君っ

! 意気揚々とさっきのカエルの肉を見せないで!!」

閑話休題。

「――と、とにかくだ。武器のメンテを頼みたいんだが」

「いいけど――って4本?! いつの間にこんなに手に入れたのよ」

メンテをする武器を受け取ろうとしたリズは、その数に目を剥いた。

メインで使う「マーヴェルエッジ」は当然として、他には現在未到達の層で購入した武器――「クリスタルスパイン」、「テア・フリューゲル」、「ウルティムスウェーリタース」。

どれもAGIやDEXに影響を与える片手剣だ。そして全部耐久

値が半分以下で。

「しかも結構良い装備だし……なにやったらこんなのが手に入るのよ？」

「モンスター狩り続けていたらドロップして使ってた」

ステータスをチェックして、その性能の高さに当然気がついたリズに適当な嘘を並べて答える。

訝しむリズだったが、マナー違反だろうと思ってそれ以上追求はしないでくれた。

「けど4本ともなると、結構時間掛かるけど」

「いい。待ってる」

「……わかった。じゃあ適当に時間潰してて」

そう言つてリズは工房に潜つて行つた。

1人残されて、……どうしようか、と腕組みをして考え込む。

とりあえず店に飾られている武器を見て回る——すぐ見終わった。

「はあ……」

さすがに突然暇を出されたら、どうしようか悩まされる。

考えてみればヒースクリフ以外の人間と話したことだつてかなり久しぶりだ。

……シリカは今、何をしてるだろう。今会いに行けば半端な迷いを生んでしまいそうで出来れば避けたい。

店の隅に腰を下ろし、雑念を振り払おうとする。

……それと同時に睡魔も忍び寄ってきて、うつらうつらとし始めた。

「(そう……いえば、『ミネルヴァ』を倒した後に……宿で休んで……以来、まともに……寝た……こと……)」

さすがに限界以上に疲労を溜めてしまっていた今の俺に睡魔に抗う気力はなく、そのまま意識を手放してしまった。

「(——にしても、やっぱり妙よね)」

回転砥石で刃を研磨しながら、どうにも腑に落ちない違和感に内心首を傾げた。

違和感の理由はミストの武器だ。確かに性能はいい。現時点で出回っている武器と比較すれば優れている事には違いない。ミストが命中率重視の武器を好んでいるから、その希望と合致している武器だと言うのも問題ない。

「（強化可能回数が10回。当然全部未強化。なのに図つたように全部同じ回数……）」

基本的にドロップしたと言うなら、強化可能回数にある程度のバラつきが出来るはず。名称もステータスも何もかも違うのに、強化可能回数だけは全部同じと言うのが引つかかっていた。

「……まるで店売りの武器じゃない」

1番納得できる可能性は、これよね。

砥石から離し、耐久値が完全回復したのを確認してから、あたしは別の武器を手取る。

「テア・フリーゲル」と呼ばれるそれは、敏捷値と命中をそれぞれ+10加算する片手用直剣だ。

別に奇妙な点はない。ごくごく普通の剣だけど……。

「なーんか怪しいのよねえ……」

怪しい。と言うか怪しき満点だ。

つい先日、シリカが迷宮区の帰りに寄って、ミストが今ソロでクエストを受けているとは聞いていた。

けどソロでしか受けられないクエストなんて聞かないし、パートナーであるシリカにも全て明かさないのもおかしいでしょ。

で、ふらりと戻ってきて、妙な武器を引っさげてメンテナンスの依頼……ねえ。

あと、久しぶりに会ったけど……なんかちよつと、様子がおかしかった。

なんて言うか……妙に影があると言うか。普段賑やかなミストからは想像も出来ないくらい暗かったように見える。

何かあったのは間違いないと思うけど……あたしが聞くのもねえ。

「けど見ない振りをするってのも……うーん」

……いいや、ひとまず全部研いでもおおう。話はそれから遅く

ないでしょ。

考えるのはひとまず後にして、あたしは剣を研ぐ事に集中する。残りの剣も研ぎ終えて、全部抱えて店に出るとミストの姿はなかった。

「あれ？」

終わるまで待つてるって言ってたはずだけど……改めて店内を見渡すと、隅の方で蹲っている人影に気付いた。

「なに寝てんのよこいつは……」

人の店で堂々と眠れる神経の凶太さに少し呆れつつ、あたしはミストの肩を叩く。

「ミスト。終わったわよ」

「……………」

声を掛けても返事はない。よっぽど深い眠りらしい。

……かなり疲れてたのかしら。いったいどんなクエストやったのよ。

「あんまり無理はしない方が……って、無理した結果がこれじゃない」心配したあたしだったが、ふと思いついて突っ込みを入れる。

とにかく、ここで寝られても困るのよ。かと言って起こすわけにも行かないし……。

「はあく……仕方ないわね」

ため息をついてミストの方に腕を回して、そのまま工房へ運んでいく。

さすがにあたしの部屋に連れて行くのは無理だし、かと言ってお店の中も……なら工房に運ぶしかない。案外騒音で起きるかも。それはそれで好都合だ。

「よっこいしょ……」

ひとまず石畳の床にミストを降ろし、一旦部屋に戻って毛布を持ってくると上からかけてやる。枕？　そこまで贅沢させる必要なんてあるの？　欲しかったらシリカにお願いしなさいっての。

さーて、お仕事お仕事。メンテナンスやオーダーメイドの依頼が多いのよあたしは。

カンカンカンカンッ!

チュイイイ…ン。

「——ん、だ…?」

なにやらやたらとうるさい騒音の音によって、泥沼に沈み込んでいた意識が僅かに浮かんでくる。

俺…寝てたのか。よほど疲れが溜まっていたのか…眠ったときの記憶が全く無い。どれくらい眠ったんだ。

…つて言うかやけに硬い床だな。床って言うかなんかごつごつしてるし。それとさつきから聞こえる工事現場の作業音みたいな音は何なんだ?

「ん…ん…ん…」

ゆっくりと起き上がると、掛けられていた毛布が滑り落ちた。…毛布?

寝ぼけ眼で周囲を見ると、ここは工事現場じゃなくて工房らしい。熱した金属をハンマーで叩いている人物の後姿には見覚えがある。

「リズ…?」

えっと…寝起きのせいか記憶があやふやだ。

確か俺はメンテナンスを頼みにリズの店に来て、時間がかかると言われて暇をもてあまして…ああ、座ってそのまま寝たんだったか。それで作業が終わったリズが店に戻ったら、俺が寝ていてここまで運んできた。夢遊病は患っていないはずだから。

状況を把握していくと、停滞していた思考が再起動する。

掛けられていた毛布を取って綺麗に畳み、リズを驚かせないように声を掛けた。

「リズ」

「…? あ、ミスト。ようやく起きたわね」

「悪い…。すっかり熟睡してたみたいだな」

「本当よ。もう夕方よ」

うわ、ほんとだ。視界の隅に表示される時間は既に16時を回っている。5時間以上眠ってたのか。

でもぐっすり寝たおかげか、疲れもだいぶ抜けたような気がする。長くても1時間程度しか休憩しなかったからな……レベリング中は。

「武器の全回復って、もう終わってるのか？」

「そんなのとつくに終わってるわよ……ほら、そこにかけてあるの」
リズが指差した先には、確かに俺が使っていた武器が立ってかけられてある。ステータスを確認すると、確かに耐久値はマックスまで回復してあった。

「悪いな、面倒掛けて」

「良いわよ、別に。お詫びは……そうねえ、今度素材の調達行くのに付き合いなさいよ」

「分かったよ。いくらでも付き合ってやるさ。あ、毛布ありがとな」

畳んであった毛布をリズに渡し、武器をストレージに納めていく。
と、収納が終わったところで振り返ると怪訝そうな顔つきでリズが俺を見つめていた。

「な、なんだよ？」

「いやさあ、ちよつと気になることがあったんだけど……」

「気になること？」

「あの武器、全部ドロップしたって言ってたでしょ」

「ああ……それが？」

「その割には強化回数が一律で同じだし、なんか引つかかるなあって」
っ……まずった。迂闊だったか。

基本的に店売りの武器はプレイヤーメイドで無い限り強化回数は概ね統一されている。

そして俺の武器は、その殆どが店売りの品……ドロップ品と言う割りに揃えたかのように統一された強化回数は、確かにおかしい。

どうする……シラを切り続けるしかない。

「偶然じゃないか？ こいつら全部繋ぎで考えていたから、そんな所まで気が付かなかったし」

「そう……？ それなら、別に良いんだけど」

深く突っ込んでくる事にはリズも抵抗があるのか、それ以上の追及は躊躇っている。

……大丈夫だ。俺が普通に振舞っていればリズムも諦めるはずだ。

「それより代金、払わなくて良いのかよ？」

「えっ？ あ……ああ、当然払ってもらわなきゃ困るわよ！」

「逆ギレすんなよ……ほら、確かに渡したぞ」

呆れつつリズムに代金を払い、まだ納得してないような顔を浮かべながらもリズムは受け取る。

「ん……まいど」

「じゃ、色々世話になった。忙しいところ邪魔して悪かったな」

「別に構わなかったけど……何してるのかは詮索しないけど、無茶は程ほどにしなさいよ」

「……善処する」

俺がしていることを知らないはずなんだが、様子から何か感じ取られたのかもな。

心配するリズムに少し堅い口調で答えて、店を出た。

この後はどうするか……今の階層でレベリングが出来そうな場所は思いつかないし。それにヒースクリフに強制転移されそうな気もして迂闊に外に出れない。

となると……やっぱり。

「……帰るか」

もう1週間も戻っていない我が家に行くべく、俺は転移門へ足を向けた。

見慣れた景色のはずなのに、懐かしさを覚える。

……そう言えば、何の連絡もしてなかったが大丈夫か？

いや、自分の家なんだしわざわざ連絡するのも……でも心配を掛けたくはないし。

きつと俺を見たらシリカは驚くと……。

「……サプライズだよな」

うんそうだ。これはサプライズ。驚いた顔を見てみたい。

よって連絡は無しだ。1人勝手に領いて、少し懐かしさを感じる見慣れた道を歩いていく。

案外クラインたちと攻略に出かけてるかもしれない。けど時間を考えれば帰ってきていてもおかしくはないか。

どんな反応をするかな……楽しみの反面、少しだけ怖くもある。

1週間も行方をくらましておいて、シリカはどう思っているだろう。嫌われていたっておかしくはない。

家の前までやって来たところで、臆病風に吹かれてきた。いつその事別の層で1泊していこうかとすら考えてしまう。

でも会いたいという思いが勝り、思い切つて俺はドアに手を掛けた。

「ただいま——」

「……………」

家に入ると、驚いた顔で振り返るシリカ——いや、珪子の姿がある。上に上がろうとしていたんだらうか。

えっと……こういう時なんて言えば良いんだらう。全然思い浮かばん。けどこのなんともいいがたい微妙な沈黙を破りたくて、俺は何とか言葉を紡ごうと口を開いた。

「た、ただいま珪子。1週間も留守にしてごめ「霞さあーんっ!!」んのあっ!」

言葉を遮り、涙目で飛びついてきた珪子に驚いて少しだけよろめく。

「今までどこにいたんですか! メッセージを飛ばしても返事が無いし、位置情報も不明なままだったし! すっごく、すっごく心配したんですよ!」

「ご、ごめんな。ちよつとてこずつてて……」

ああ、そうか。

今まで俺は未到達の層にいたから当然マップ追跡も機能しないし、メッセージも届かなかったのか。

俺が思っている以上にシリカのことを心配させていたみたいで、少し申し訳なくなる。

嘘をついて出て行って、何の連絡も寄越さず、そしてふらりと戻ってきた……泣かせてしまうのも当然だよな。

「大丈夫だつて瑠子。瑠子に黙って死ぬとかは絶対にしないから」
「当たり前ですよっ！」

……怒られてしまった。

これは、このお姫様を宥めるのはかなり時間が掛かりそうだな……と、思っていたその時。

『きゅー！』

「おっ!?」

聞き覚えのある鳴き声と共に何かが顔面に激突。そして鼻に思いつきり噛み付いてくる。

こ、こんなことをしてくるのは1人……もとい、1匹しかない。

「ピ、ピナ！ ピナさん！ 静まってくださいませ、お怒りをお静めくださいー！」

『きゅきゅー！』

誰が静めるものか、と言わんばかりにピナは引っぺがそうとしても抵抗してきて離れない。

結局、2人（1人と1匹？）はその後離れてくれずベツタリしていて、寝るのも一緒になっていた。

別にべつたりなのはいい。それだけ甘えたかったし、心配していたと言う証拠なんだから。

だが、しかし……。

「（俺の理性はボロボロだ）」

どこぞのダディヤナザンを髯髯とさせる台詞を脳内で反芻し、隣で眠る瑠子を伺う。

すっかり寝入っているが、その手は俺の服を掴んでいて離してくれそうに無い。

明日早く出かけるって話してもこれだからな……そして、それをきっぱりと断れない俺は半熟がお似合いだ。

「（そういう弱い心は捨てなくちゃいけないのに……）」

自嘲するように笑みを漏らして、自由に動く方の手で瑠子の頭を撫でる。

明日は早く出ないと行けないってのに、もう少しだけ寝顔を見てい

たい、と思った。

きつと最初で最後の休みで、珪子とこうして寝られるのはもう来ないと思うから。

「甘ちゃんなのは分かっている。けれど、甘ちゃんにだって譲れない物が1つだけある。」

それは、何があっても彼女を——珪子を向こうへ帰す事。そのためなら、俺は鬼に……いいや、この場合悪魔と取引したんだから悪魔になれる、か。

「お休み、良い夢を」

しっかりとその顔を目に焼き付けて、俺は目を閉じる。

昼間にかなり寝ていたはずだが、まだ完全に疲れは取れていなかったらしく、すぐに意識が闇に沈んでいった。

——早朝。まだ日も昇りきっておらず、朝もやが街に立ち込める中を転移門広場へ向かう。

まだ誰も外に出ていない時間の中、転移門の前に人影が立っていた。

「おはよう。ゆっくり休めたかね？」

「おかげさまでな……一応、感謝はしておく」

「なに、大したことはしていないさ。私もたまたま用があったし、ついでという奴だ」

「そういう事しておく。けど、もうそんな気遣いは要らないからな」

「それは失礼した」

先に来ていたヒースクリフは、悪びれた様子もなく肩を竦める。

そんなヒースクリフに俺は軽く鼻を鳴らし、そのまま隣に立った。

「予定がずれた。あと3日でレベリングを片付ける」

「よかろう。とことん付き合うとも。——管理者権限発動、未到達層への移動制限を解除」

管理者権限によって本来まだ到達できていない上層への通行が許可され、続けてヒースクリフは転移先を口にする。

すると、青白い光に包まれて俺たちは別の層へ転移していった。

行き先は98層……主街区名は「ハインシュト」。99層はその構造上、迷宮区はボス部屋に直行する形になっているため、レベルを上げるなら98層で行う事になる。

装備を身に着け、さらにヒースクリフから飲めば一時的に経験値が25%増加する「経験値ポットEX」を受け取り、俺たちは迷宮区に向かう。

ここに出てくるモンスターのレベルは概ね110以上で、骸骨系や幽霊系が主だ。多少厄介だがヒースクリフも居れば問題ない。

あとはとにかく所得経験値+補正が入る装備で固めて、出てくる敵を片っ端から片付ける。

《二刀流》のスキルなら2本分の効果を得られてさらに増強できるんだが、残念ながら俺は《二刀流》になれない。

うじゃうじゃと出てくる骸骨を、幽霊を斬って、斬って、斬り刻む。とにかくポットの効果がある内に多くの敵を倒さなきゃならないという忙しさはあるが、経験値倍率も高いうえに、俺と同じくポットを使ったヒースクリフが全ての経験値を譲渡してくれるから、目に見えてゲージが上昇していくのが分かる。

お互い言葉を交わすのは最小限、街に戻るのもアイテムを切らしたときのみだけと徹底的に戦い抜く事三日三晩――。

「弾け……飛べえッ！」

クモの吐き出した糸を頭上に飛んで避け、上下逆さになって落下しながら左腕を突き出す。

赤く輝く左腕が人を軽々と食らえるだろう大グモの背に触れた瞬間、閃光と爆発が炸裂してクモを木っ端微塵に吹き飛ばした。

反動でまた浮き、逆さの体勢を入れ替える。

着地した瞬間、再び左腕が赤く輝き、腕を振るうと何発もの炎の弾丸を弾き出した。

それらは全て、タゲを取っていない先ほどと同じ名称の大グモに殺到し、ダメージを受けたクモは俺に向き直る。

迫るクモに俺は手にした剣を牙突のように構え、モーションを感知したシステムが剣をライトエフェクトで発光させる。

——踏み込む。あらゆる障害をなぎ倒すほどの突進力を持って剣を突き出し、その切っ先がクモを真ん中から貫き、衝撃で上に打ち上げた。

まだだ。振り向きつつ、剣を逆袈裟で2度振り上げる。

Xを描く真紅の衝撃波が落下したクモを切り裂き、既に息絶えていたクモにダメ押しの一撃を叩き込んだ。

「……………」

あらかた狩り尽くし、俺は一息つく。そして、HPゲージに目をやった。

「3回のソードスキルで半分近くか……」

半分近くまで減少したHPを見てそう呟き、なんともイカれた代物じゃないか、と自虐するように笑みを浮かべる。

ユニークスキル《魔装術》。『ミネルヴァ』を打ち倒した者に与えられる神の力……とでも言うべきか。

その内容は、本来SAOに存在しないはずの《魔法》と呼べるものを限定的に使用可能にするというもの。そして、他のユニークスキルの何らかの特徴を持つということ。

つまり、このスキル1つでゲームバランスを崩しかねない他のユニークスキルの代わりになる事ができる。文字通りプレイヤーに残された最終兵器だ。

……とまあ、ここまでなら聞こえが良いが、その実態は最悪の代物だろう。

《魔装術》最大の特徴……それは、ソードスキルを使うためには自身のHPを対価に支払わなければならない。

この世界で死ねば現実世界でも死ぬという特徴を考えれば、いくら強力であってもそんなデメリットがあるなら誰も欲しがらないだろう。そういう意味でもこれは最終兵器と言うべきか。

まったく……もともとこんエグイ仕様にしていやがる。ここにいないヒースクリフに対し、俺は内心吐き捨てる。

《魔装術》において真に求められるのは、力ではない。

それは……自らの命を引き換えにしてもこのゲームをクリアす

るという覚悟。1を殺して99を救うという自己犠牲精神だろう。

……ある意味、俺に相応しいか。

「解禁されてから2日……熟練度はまだ半分にも届いていない……」

レベリングの用は済み、今俺は76層で熟練度上げをしている。上の層でリスクを犯して細々と上げるより、下で安全に上げるほうが効率的という判断からだ。

だが、思うように熟練度は上がっていない。《魔装術》の性質からソードスキルの乱発が出来ず、頻繁にポジションを補充しに街に戻らなければいけないのが足を引つ張っている。

さらにそれと平行し、戦闘スタイルの一新もやらなければいけなかった。

その理由は《魔装術》がその仕様上、盾を持たない事にある。持てないことも無いが、その場合スキルの1つが潰れるという弊害がある。そのため《神聖剣》だけは代わりになれないらしい。……もつとも、ラスボスと同じ能力を持っているというのも妙な話だからな。

だから今現在、盾持ち片手剣士だった俺は盾無し片手剣士へ移行途中。二刀流公表前のキリトの動きを参考にアレンジ中だ。

「やるが多すぎて目が回りそうだな……」

《魔装術》の性能把握、熟練度上げ、戦闘スタイルの一新……どれも平行してやらなければならない。

モンスターがリポップまでまだ余裕があるか……ポジション飲んでおこう。

「HPリジエネを入れていても……消費が激しすぎる」

回復していくHPゲージを見つめながら、俺はしかめっ面で呟く。

このあたりに出る敵のパターンは全て把握し、その上装備も一新したおかげもあってノーダメージでやれるぐらいにはなった。

当然さつきもノーダメージ。だが《魔装術》でHPを半分近く失っている。

もちろん《バトルヒーリング》も入っているし、HPリジエネの効果を持つお守りもつけている……が、消費に対して回復量が圧倒的に追いつかない……その消費に見合うだけの効果はあると言ってもい

いんだが。

考えているうちにモンスターがポップが始まり、俺は休憩を終える。

「確か1度使えば一定時間効果が維持されるソードスキルがあったな……」

スキルリストを確認してみると、確かにそのスキルはあった。HP消費量は……リポップ前に使ったスキル3回分。一定時間維持されるなら、こつちのほうがコストパフォーマンスは良いかもしれない。

別に火力を求める必要は無いだろう。未強化とはいえ「テラー・オブ・ジエネシス」の攻撃力はこの層で不足に感じるほど低くはないのだから。

スキルが発動し、増えたばかりのHPを消費して能力が発動する。その特異な性質は他と比較しても明らかに異質だった。

感覚としては普段通り……で、良さそうだな。いや、考える前に行動だ。少なくとも4体は倒さなきゃ釣り合わない。

ポップしたばかりのイノシシ目掛け、俺は助走をつけて飛び掛る。そのまま上段から振り下ろした刃が、イノシシを斬り裂いた――。

――75層ボス攻略まで、あと2日。

第13話 最後の戦い

第13話 最後の戦い

——2024年、11月7日。

「さあーで、今日も張り切って仕事しますかねえ」

いつも通りに店を開け、大きく伸びをしたタイミングで来客を告げるベルの音が鳴った。

ちよつとちよつと、まだ開店して10分も経ってないんだけど。最短記録に軽く驚きつつ、あたしは店内を伺う。

「リズベット武具店によっこ——」

いつも通りに笑顔で迎えようとしたあたしは、その人物を見て固まった。

血のように赤い、レザー系のロングコート。肩はさらに黒皮で補強され、さらにリベットで固定されている。

他にも膝まで保護する黒のロングブーツ、左腕を覆う銀色に輝く鋭い爪状の突起を備えた小手、腰に下げた長剣……。

そして、頭上に表示されるキャラネーム——「M i s t」の文字に、あたしは言葉を失ってしまった。

「ミスト……よ、ね」

「……ああ」

半信半疑のあたしに、ミストは簡潔に頷く。

いや……だって、なに？ どうしたのよその格好。

あたしが知っているミストは、どちらかと言うと重装備系で……軽装備系のイメージが思い浮かばない。

それに、身に纏う空気が以前とは明らかに違う。

どちらかと言えば陽気で、騒がしかった印象があるのに……今は氷のように冷たくて、近づきがたい。

「朝早くから悪いが、急ぎで武器のメンテナンスをしてもらいたいんだ。3時間後に75層のボス攻略がある」

「え……いい、けど」

ミストの変わりように理解が追いつかないが、辛うじて頷く事はで

きた。

ボス攻略……だからあんなピリピリした雰囲気になってるの？

75層って事はクォーターポイントだから、殺伐としそうなのは分からなくもないけど……でも、そうじゃない気がする。

歩み寄ってきたミストが、提げていた剣を差し出し、受け取ろうとして——外見からは想像もつかないほどの重さに思わず取り落とししてしまう。

カラーンツ、と音を立てて床に落ちた剣に、あたしはまたも目を疑った。

「何よ、この剣？」「エリュシデータ」や「ダークリパルサー」よりも、ずっと重かった……!?!)」

キリトの愛剣2本も重たいとは言え、持てない重さではなかった。

でも、これは違う……あまりにも重過ぎて、あたしの筋力値では持てるかどうかも怪しい。

「ぐ、ごめんー!」

「……いや、いい。他の奴には重過ぎるみたいだな。失念していた」

謝るあたしにミストは特に怒りもせず、むしろ当然見たいな反応をして剣を拾い上げる。

あたしには重過ぎるそれも、ミストは大したことが無いらしくあっさりホルダーに差した。

「俺が持っていく」

「そ、そうね……じゃあちよっとお願いしようかしら」

なんでそんな物を軽々持てるのか……いや、聞きたいことは山ほどあるのに、どうしても聞き出せない。

工房に入り、そのまま回転式の砥石の前に座ると、あたしの前にミストが鞘から抜いた長剣を差し出してくる。

立ったままだったらまた取り落としそうになったかもしれないが、あれはあの剣が予想以上に重かったこともあった。

受け取ると、改めてそのずっしりとした重さに思わず顔を歪める。

見たこと無い……サイズやデザインは一般的な片手用直剣に通じる。けど、その刀身は内側が真っ赤で、翼の意匠がデザインされた鍰

と拳を保護する護拳が備えられてあった。

剣のステータス呼び出すと、情報がウィンドウに表示され、思わず息を吞んでしまう。

「魔創剣 テラー・オブ・ジエネシス」……プレイヤーメイドや並みのモンスタードロップとは比較にならないレベルの、真正銘の魔剣じゃない。

そもそも魔剣自体、めったにどこるか一生拝めるか拝めないかってくらいレアだし。あたしも当然見るのは初めてよ……。

……？　なんか最後の方に「《魔装術》対応」ってあるけど……《魔装術》ってなに？

「どうかしたか？」

「へっ!?　い、いやなんでもないっ！　じゃあちやつちやとやつちやうわね！」

突然声を掛けられ、あたしは思わずドキリとして上擦った声を出してしまう物の、普通を装って砥石を稼動させた。

回転を始めた砥石にゆっくりと剣を当て、火花を飛び散らせて剣を研いでいく。

「リズ」

「なあに？　今集中したいんだけど」

「悪いが、1時間くらい仮眠させてくれないか。ここ最近殆ど寝てなかったんだ」

「別に構わないけど。今回は毛布とか出さないわよ」

「いい。隅で座ってるから」

……あいつ、また寝ないで何かやってたの。

ちら、と横目で伺うと、本当に隅——売り場に出る階段の陰——に座り込んだミストは、そのまま目を閉じてしまう。

色々聞きたいことが山ほどある。この剣やあの装備、そして明らかに違う様子。

兆候は……あった。1週間前にもふらりとやって来て、武器のメンテナンスを頼みたいと4本の剣を渡してきた時。

「(いったい何をやってたのよ……)」

あの時の出来事も、きつと今のミストに深く関わっているに違いない。

でもそれは、聞いていいことなの？ あの時も結局聞けなかったのに。もしあの時間聞いていれば、こうなっていなかったかもしれないに。

砥石に当てていた剣を少しだけ離れた。

……やっぱり聞くべきだと思う。ミストに何があったのか、何をしていたのか。仲間として。

「……………」

声を掛けようとして、けれど迷ってしまう。

このあとボス攻略があるのに、今までろくに寝ていない状態のミストを起こしていいの？ もし十分疲れが取れずに挑んで、致命的なミスをしてボスに殺されてしまったら……。

あたしが原因、というわけじゃないかもしれない。けれど、ミストが死んだって知ったら責任を感じずにはいられない。

……万全とまではいなくても、少しでも疲れを取ってもらいたいという気持ちが、起こすのを躊躇わせる。

「いや……今無理に起こす必要はないはずよね。起きてからでも、ボス攻略が終わってからでも……タイミングはいくらでもあるはずでしょ」

……うん、そのほうが良いわよ。どうせ攻略終われば、また砥いでくれてやって来るはずだし。

ああ、けど……シリカはどうするんだろう。あたしでさえ気付いたんだから、一番近くにいるシリカが気付かないはずないと思うけど……。

意外とシリカが先に問い詰めて、あっさり白状するかもしれないし。さすがにシリカに対しても冷たく接したりはしないはず。

——よし、そうと決まればこの剣をちやっちやと砥いでしまおう。ひとまずこの問題は棚上げしておいて、あたしは剣の砥ぎを再開する。

……しっかし重たすぎるわよ、この魔剣。他もこんな感じなの？

持ち運べる程度には筋力値上げておかないとダメよね。それこそ、両手剣や両手斧になれば怪しいし。

「ごらー、いい加減に起きなさいよ」

「う……う？」

言いながら軽く頭を叩くと、ミストは小さく呻いて目を開ける。

「終わったのか……随分長かったんだな」

「とつくに終わってるわよ。あんたに気を使って、1時間どころか2時間も寝かせてたわけ」

「2時間……？」

起きたばかりなのか、ミストはあの時みたいな冷たい雰囲気纏っていない。

寝ぼけ眼で状況を確認していつて……徐々にその顔が青ざめてくる。

「しまっ——！ 寝過ぎした！」

「いや、確かにそうだけど……まだ時間あるしそんな慌てなくても——」

「このあとポーションの補充とかもしておかなきゃ行けないんだよ。リズ、剣は!?!」

いや、だからってそんな慌てなくても良いでしょ、と言うあたしの突っ込みはミストには聞こえてないみたいだ。

ため息をついて鉄板の上に置かれた剣を指差す。きちんと黒皮の鞘に収めてある。

飛び上がるように立ち上がったミストは急いで剣を腰のホルダーに差して、代金を払うと飛び出そうと階段を駆け上がる。

「ミストー！」

「っ、なん、なんだよ!?!」

「やっぱそっちの方があんたらしいわよ！ 何あったのか知らないけど、頑張んなさいよ！」

振り返ったミストに腕を振り上げてエールを送る。

その言葉にミストは驚いたような、それでいて何か躊躇うような顔

を一瞬見せ、慌てて顔を逸らした。

「……からかうなよ」

ただ一言、それだけを呟いて工房を出て行く。それから間を置かずにミストは外に出たらしく、くぐもったベルの音が響いた。

「からかうな……か」

あの時、起きてからほんの僅かな間だけど、ミストは本当の顔を見せていた。

……やっぱりあれって表面上そう装っているだけで、根っこは何も変わってなかったんだ。

なんでそんな事をするのか、考えたところであたしには分からない。

出来る事は皆無事に帰ってきてくれるように祈る事だけ……歯痒くも思うが、あたしの戦場はあそこじゃなくてここだから。

だから……帰っていた時はボロボロになってるだろうあいつを、精一杯弄ってやろうと思う。

——だけど、これがあいつとの最後の会話になるなんて……この時は考えてもいなかった。

エギルさんやクラインさんと合流して、あたしは75層の転移門広場までやって来た。

来て真っ先に感じたのが、皆が皆ある一点に目を向けていることと、いつも以上に空気がピリピリしているという事。

視線を辿ればキリトさんとアスナさんの姿があつて、エギルさんやクラインさんと談笑している。

あたしはそれよりもまず、探し人がいないか周囲を見たけど……その人はまだ来ていないみたいだった。

「シリカちゃん」

「アスナさん……ちよつとだけお久しぶりですね、キリトさんも」

「ああ。……ミストは一緒じゃないのか？」

「それが……」

2人にはミストさんのことはまだ話していなかった。前線から離れていたし、余計な心配を掛けなくなかったからだったけど。

けど、あたしがミストさんから聞いた話を聞いて、2人は少し険しい顔つきになる。

「ミストの奴……1人で何をやってるんだ？」

「まったくだよなあ！ シリカちゃんを1人にして、自分はどっかに隠れやがってよ！ 頼まれた時は俺も一言言ってやったんだが、頭まで下げられたら流石にな……」

「ミスト君、今日のこととは知ってるの？」

「はい……時間までには来るって、メッセージが来たんですけど」

「2週間近くも1人で何をやってたんだか……」

エギルさんがそう呟いたのを聞いて、あたしはふと気付く。

キリトさんとアスナさんが前線を離れたのが、今からおよそ2週間前。

そしてミストさんが1人で行動を始めたのも、ちょうど2週間前。

……2人が休んでいた事と、何か関係があるのかな？ でもなんだろう……。

「……？ あ——」

ふと、あたしの後ろで転移の音がして、それに気づいたキリトさんが目を向け、意外な物を見たかのように驚いた表情を浮かべる。

なんだろう、とあたしたちも振り返って——飛び込んできた光景に目を見開いた。

「……………」

無言でゆつくりと、けれどしつかりとした足取りでこっちに来る人物。

特徴的だった赤い鎧ではなく、赤いコートを翻して……腰に下げた黒皮の鞆に収められた長剣が、動きに合わせて微かに音を立てる。

いつもの明るい顔はそこにはなく、人が変わったかのように冷たい気配を纏ったその人は、間違いなく……。

「ミスト……さん？」

「すまない……少し、遅くなった」

大きく変貌した姿にあたしは一瞬息をするのも忘れてしまった。

半信半疑である人の名前を呼ぶと、一瞬あたしに目をやってから皆に軽く頭を下げる。

言葉が出ない。それは他の皆も同じで、何を言えいいのか迷っている。

あたしたちの反応にミストさんは特に気にする風でもなく、怪訝そうな顔を浮かべた。

「……どうかしたか？」

「あ、いや……」

「どうかしたかって言われると……」

「なんと言えはいいのやら……」

「そう、だな……」

聞かれ、しどろもどろになるキリトさんたち。

無言でミストさんのことを見つめていると、視線に気づいたミストさんがあたしを見る。

「どうした、シリカ」

「ミストさん……ですよ、ね？」

「ああ。長い間1人にさせて、悪かったな」

どこことなく哀しげな笑みを見せて、ミストさんはあたしの頭に手を置く。

なんでだろう。今のミストさんは……どう見たってなにかある。けれどそれが何なのか、どうしても分からない。

「……ミスト、シリカから聞いたぞ。2週間もどこにいたんだ」

少しキツイ口調で、キリトさんがみんなの気になっていたことをついに聞きます。

ミストさんはキリトさんを一瞥し、自身の装備に目をやってコート裾を少し広げた。

「この通り、新装備のドロップに精を出していた。今後戦っていくには厳しいと感じていたんでな」

「けどお前……思いつきり変わってるじゃないか。《盾剣技》とかはどうしたんだ？」

「ああ、少しスピード重視にスタイルを変えたんだ。盾持っていると色々和不都合だから」

「不都合だから」と言うミストさんの答えに、あたしだけじゃなくキリトさんたちも驚く。

ミストさんが今まで絶大な信頼を寄せてきた《盾剣技》が、不都合だからとあっさり切り捨てた事に。

盾でも限定的にソードスキルを使えるというアドバンテージがあったからこそ、ミストさんは今まで戦ってこれたのに。

今更盾なしの片手剣士なんて……どうして？

何もかも変わり果てたミストさんに戸惑っていたら……また転移門から転移する音が聞こえ、ミストさんは振り返る。

「来たらしいな」

物々しい集団が歩いてくるのを見ながら、ミストさんは呟いた。

幹部の人たちを従え、先頭を立てて歩く赤い鎧を来た人——《血盟騎士団》団長のヒースクリフさんが姿を見せ、他の人たちも緊張感に包まれるように感じる。

ヒースクリフさんはポーチから回廊結晶を取り出して掲げ、キーワードを唱えると目の前の空間に波紋が広がり、結晶は砕け散った。

「さあ、行こうか」

ヒースクリフさんがその場にいた全員に声を掛け、波紋を通り抜ける。他の人たちもそれに続いて続々と波紋を潜っていった。

キリトさんとアスナさんが潜っていくのにあたしたちも続いている。

転移先のボス部屋前は静かだったが、それが逆に嫌な感じだった。静かすぎて耳が痛くなりそう。

先に転移してきた人たちは最後の準備をしている。

……聞くところによると、ここボス部屋も結晶無効化エリアで、それに1度入ったら扉が閉じられて出られない……つまり、逃げられないってことだね。

不安に駆られるあたしがミストさんを見ると、ただ一人、ミストさんだけは無表情を保っていた。

「……やっぱりおかしいよ。ミストさんに何があったの？」

聞きたいけど、今は聞いている時間がないのがもどかしく感じる。と、視線に気づいたミストさんがあたしに顔を向け、また少し哀しそうな笑みを浮かべた。

「……なんで、そんな哀しそうに笑うんですか。」

言葉にしたくても出来ない。

呆れたり、楽しそうだったり、色々な顔を見せてくれたミストさんだったけど、そんな哀しそうに笑うことは1度だってなかったのに。

「準備は良いかな」

やがて他の人たちの準備が終わり、ヒースクリフさんが全員を一瞥して声を掛けた。

「基本的には《血盟騎士団》が前衛で攻撃を食い止めるので、その間に可能な限り攻撃パターンを見切り、柔軟に反撃して欲しい。厳しい戦いになるだろうが、諸君の力なら切り抜けられると信じている。——解放の日のために!!!」

他の人たちが威勢よく吠える中、ミストさんが「——くせに」と何か呟いたような気がした。

扉が押し開き、ゆつくりと開いていく。各々武器を構え、いつでも踏み込める状態になっていた。

あたしもダガーを構えるが、不意に抱き寄せられて目を丸くする。

「ミストさん……?」

「……ごめんな」

突然抱きしめられて戸惑うあたしの耳に、そんな言葉が届いた。

なんでいきなり謝るのか、いきなりの事に戸惑うあたしは分からなかったが、きつと2週間も放っておいての意味だろうと解釈する。

——そのごめんの本当の意味に……気づかないまま。

「だったら、終わったらまた思う存分遊んでくださいよ」

「……ああ、そうだな」

名残惜しそうにミストさんは手を離し、あたしから離れて剣を抜

く。

翼のように広がる鏢に、赤い刀身の剣。装備が変わっても『赤』がメインカラーなのは、やっぱりミストさんだ。

「戦闘開始！」

ヒースクリフさんの号令と共にあたしたちはボス部屋に流れ込んでいく。

丸く円状に切り取られた平坦なフィールド。暗いけれどボスの姿は見えない。

と、あたしたちが入ってきた扉が勝手に閉じ、そのまま透けるように消えていった。

「……何も、起きないぞ」

誰かが上擦った口調で呟いている。

でも、確かにいるはず……どこに？

「……上よ!!」

突然アスナさんが上を見上げながら叫んだ。

遙か遠い天井。そこに張り付いていたのは――

骨で出来たムカデのように長い体に鎌のように鋭い腕を1対持った、遠目からでも分かる巨大なモンスターだった。

名前は『スカル・リーパー』……。

張り付いていた『スカル・リーパー』が離れ、地上に落下してくる。

「固まるな！ 距離を取れ！」

素早く皆に注意を促したヒースクリフさんに従い、皆落下地点から遠ざかろうとする。

けど、恐怖に足が竦んで動けない人たちがいた。

「こっちだ！ 走れ!!」

とつさにキリトさんが叫び、我に返って離れようと動き出す。

その直後に『スカル・リーパー』が降りて、着地の振動で足元を掬われた。

ダメ――間に合わない！

ギインツ!!!

反射的に目を逸らしたあたしだったけど、鋭い金属音に思わず目を

向ける。

「ミスト……！」

キリトさんも思わず驚いていた。

「っ……！」

いつの間にか『スカル・リーパー』の正面まで接近していたミストさんは、手にした剣を両手で支えるような形で鎌の様な腕を受け止めている。

「早く……下がれ！」

「ひっ！」

その眼光か、それとも目の前の光景に怯えたプレイヤーの2人は脱兎の如く『スカル・リーパー』から離れた。

ミストさんはそのまま刃を下から掬い上げるように跳ね上げ、自身も飛び上がる。

『カカカカカッ』

「煩いんだよ！」

『スカル・リーパー』に向けて言い放ち、握り締めた左手が顔を殴りつける。

一瞬後ろのめりに怯む『スカル・リーパー』にさらに2度蹴りつけ、
「バーチカル・スクエア」を高速で叩きつけた。

「……すごい」

その圧倒的な光景にあたしただけじゃなくてキリトさんも呆然とさせられている。

けど、スキルの発動硬直と着地の隙を狙って『スカル・リーパー』が鎌を薙ぎ払った。

その瞬間、鎌とミストさんの間にヒースクリフさんが割り込み、盾で鎌の一撃を受け止める。

完璧なタイミングだった。ミストさんの動きを読んで、隙を完全にカバーしている。

「ぼさつとするな！ キリト、アスナは2人で鎌を食い止めろ！ 2人がかりなら防げるはずだ！」

立ち尽くしていたあたしたちにミストさんが振り返って一喝する。

我に返ったあたしたちも、ようやく攻撃に参加した。

「残りは側面から攻撃しろ！ 盾を持たない奴は深追いしないで一撃離脱に専念、盾持ちは攻撃を防げるからって油断するな！ 足でもこいつの一撃は重い！」

まるで攻撃パターンを知っているかのような口ぶりで皆に指示を出し、ミストさんは正面から『スカル・リーパー』に挑む。

防御は一切せず、攻撃一辺倒。けれどヒースクリフさんが的確に防御する事でその欠点を埋めている。

「シリカ、あいつの下に潜り込めるか!？」

「や、やってみます！」

ミストさんの指示にあたしは応えようと動く。

スライディングして『スカル・リーパー』の懐に潜り込み、「トライ・ピアース」で下から突き上げた。

さらに足の間を潜り抜けたクラインさんも下から斬り上げる。

それを煩わしく感じた『スカル・リーパー』が足を内側に向け、あたしとクラインさんを攻撃しようとした刹那、「ヴォーパル・ストライク」の音と共に飛んできたミストさんがあたしたちを攫いつつ突き抜けた。

「ミスト……おめえ」

「……油断するな」

降ろされたクラインさんはミストさんを見上げながら呆然としている。

けれどミストさんはクラインさんに目もくれず、すぐに背を向けて走り出した。

ただただ凄いとしか言いようがない。あたしたちの攻撃だと『スカル・リーパー』のHPバーは動いてないのに、ミストさんの攻撃は僅かだけど確実に減っているのが見て取れる。

けれど、『スカル・リーパー』はそれまで戦ったどのボスよりも圧倒的に強すぎて、悲鳴と共に1人、また1人とガラスの砕けるような音と共に砕けて消えた。

ミストさん、ヒースクリフさん、キリトさん、アスナさんの4人が

必死に食い止めているけど、暴れる『スカル・リーパー』を食い止めるのは厳しい。

それでも皆、必死になって『スカル・リーパー』に挑んでいく。座り込んでいたあたしとクラインさんも立ち上がって攻撃を再開した。それから先のことは……あまり覚えていない。

覚えているのは誰かの悲鳴と、ガラスが砕け散るような音の2つ。ただ生き残る事と倒す事に必死になって、気付いた時には『スカル・リーパー』の5つあったHPバーも1本になっていて、残り数ミリ単位まで削られていた。

「全員突撃！」

気付いたヒースクリフさんの号令で、弱りきった『スカル・リーパー』に全員で畳み掛ける。

抵抗する力もない『スカル・リーパー』へ、全員必死の形相で武器を叩き込んでいった。

そして――

最後のHPゲージが削り取られ、最後の悲鳴と共に『スカル・リーパー』はガラスが砕ける音と共にポリゴンを崩壊させて消滅した。

終わった……勝った、けど……誰も勝利の余韻に浸る人はいなくて、地面に座り込んだりしている。

あたしももう、疲れ果ててミストさんの隣で座り込んでいた。

ミストさんも疲れているはずなのに……何故かポーションを飲んでHPを回復している。

そして――

赤と黒の剣がぶつかり合い、火花を散らせた。

第14話 ぶつかり合う想い

第14話 ぶつかり合う想い

誰も勝利した事を喜ぶ奴はいない。

当然だ。いくらクォーターポイントとは言え、異常な強さを誇った『スカル・リーパー』との戦いで多くのプレイヤーが死んだから。

「……何人やられた？」

いつもは明るいクラインの沈んだ声に、俺はマップを呼び出して、この場から消えた人数を確認する。

「……10人死んだ」

「……嘘だろ」

エギルだけではなく、それを聞いたほぼ全員の顔に絶望の色が浮かび上がる。

当然だ。今まで大なり小なりの被害は出たが、ここまで大規模な被害を出したのは久しぶりだったはずだ。

「あと25層もあるんだぜ……」

「本当に俺たちは……てっぺんまでたどり着けんのか……」

諦めるような空気が漂い始めて、俺も後ろにいたアスナも辺りを見回した。

……そんな中、ただ1人ヒースクリフだけが立っている姿を見て、俺は違和感を覚える。

あれだけ激しい戦いだって言うのに疲労した様子もなく、HPゲージは相変わらずイエローゾーンに落ちていない。

——その光景を見て、ふとデュエルした時のあの一瞬が……最後の瞬間、異常な速度で引き戻された盾が脳裏をフラッシュバックした。

……まさか、けど……だとしたら……。

確かめる必要がある。俺は傍らに置いた「エリユシデータ」を拾い上げた。

「——キリト君？」

俺の動く気配に気づいたアスナが振り返る。

けれど、悟られるわけにはいかなかった俺は無言を保ち——ヒースクリフ目掛け飛び出した。

同時に片手剣の基本突進技「レイジスパイク」を繰り出し、気付いたヒースクリフが驚愕の表情を浮かべてとっさに盾で防ごうとする。

だがもう遅い。俺の突き出した「エリユシデータ」の切っ先は確実に捉え——

——捉えたはずの切っ先は、横から飛び出した赤い剣閃によって弾き飛ばされた。

「っ!?!」

読まれていた？ けどヒースクリフじゃない。あのタイミングでは防御も迎撃も間に合わない。

だが、迎撃したのは当のヒースクリフではなく、予想外の人物だった。

「ミス……ト……ぐっ!?!」

赤いコートを翻し、青い光を纏った剣を振り下ろして「エリユシデータ」を弾いた人物に俺は意表を衝かれ、続けて繰り出された蹴りに反応が遅れて直撃を貰い吹き飛ばされる。

「——言っただろうヒースクリフ。ここで感づかれると」

淡々と、静かに語りながらミストは俺の前に立ちはだかっている。

俺を見下ろすその目はまるで氷のように冷ややかな物だった。

「ふむ……確かに君の言うとおりになったな」

「分かっていたなら対策ぐらい取っておけばよかつただろう」

「君ならきつと、こうしてくれると信頼していたのだよ」

「よく言う……」

2人にしか分からない会話に俺たちは完全に取り残されていた。

どうしてミストが……ヒースクリフを庇うのか、シヨックが大きかった俺は言葉を失っていた。

「さてキリト……なんでヒースクリフに不意打ちしたかの理由だが、当ててやろうか？ お前はずっと考えていた。この世界の創造主は

今どこで俺たちを観察し、世界を調整しているのか、って」

「なんで……それを」

誰にも言った事のない事を言い当てられ、さらなる衝撃を受けてしまふ。

「けど、今の今まで単純な心理を忘れていたんだろう。他人やってるゲームを隣で見ていることほど、つまらない物はない……ってな」

「……ああ」

得体の知れない恐怖を抱きながらも、俺は立ち上がって肯定する。「なら、その答えを見せてやる」

言うが否や、ミストはその場で左に半回転し、同時に剣をヒースクリフに叩きつける。

狙い澄ました首を狙った刃は、しかし紫の障壁によって阻まれてしまった。

〈Immortal Object〉

ユイが攻撃を防いだ時と同じ……システムの不死……！

「……いきなり危ないではないか」

「どうせキリトに見破られたんだ。隠し通すのは無理だろう」

「それもそうか……いや、素晴らしいよキリト君。君ならいつか私の正体に気づくとは思っていたが、本当にここで気付くとは思わなかった」

「……それは、自分の正体を認めるということか。——茅場晶彦」

誰もが息を呑む。そして、その男は口角を釣り上げて笑った。

「その通りだ。君の読みどおり、私が茅場晶彦であり、このゲームの最終ボスとなる男だった。だが残念だったね、君よりも早く私の正体に気づいた人間が、1人だけいる」

「それがお前なのか……ミスト」

「そうだ。とは言ってもカンニングに近いが……。付け加えれば、俺はこの男の仲間さ」

「……………」

あっさりとした認めた挙句、この場に居る全ての人間を敵に回す発言に全員に衝撃が走る。

「どうやってミストはヒースクリフの正体を……？」 いや、それよりどうしてそいつの仲間になったんだ……！」

「どうして……！ どうしてだミストッ！」

信じたくない。けれど現実には、ミストはヒースクリフを守った。チラ、と後ろを伺うと、シリカがショックのあまり倒れそうになつてアスナがとっさに支えている。

「利害の一致だ」

「利害……だって？」

「ああ」

それ以上答える気はないのか、ミストはそれっきり口を閉ざしてしまふ。

どうしてヒースクリフの仲間になる事で、2人にメリットが生まれるんだ……？ 茅場から何かを優遇される？ いや、あれでフェアを心がけているあいつが肩入れするとは思えない。

「そんなこと……どうでもいいっ！」

その時、《血盟騎士団》のプレイヤーの1人がゆらりと起き上がった。

「俺たちの忠誠……希望を、よくも……よくもっ……よくもオオッ！」

叫び、剣を振り上げてヒースクリフに飛び掛る。

だがその間に割って入ったミストがあっけなく剣をいなし、そのまま顔を殴りつけて弾き飛ばした。

「ミスト……！」

「悪いな、外野は少し黙っていてくれるか？ 今ここは大事なイベントの最中なんだ。ゲーマーならそれくらい分かるだろ？」

小バカにするように先ほど殴りつけた《血盟騎士団》のプレイヤーを見下して笑う。

未だに信じられなかった。ミストがこんな事をするなんて。

以前のあいつなら、理由もなくあんな風に見下す事はしなかったのに……。

「ヒースクリフ、こいつらを任せる」

「……まあいいだろう」

肩を竦めたヒースクリフは、素早くウィンドウを開いて操作する。次の瞬間、1人……また1人と状態異常が発生して動けなくなつて

いった。

マヒのアイコン……ゲームマスターの権限を使えば他人のプレイヤーの状態異常すら操作できるのか。

気付けば俺とミスト、ヒースクリフの3人を除いて全員がマヒ状態に陥っている。こうなったら自力で解除する事は出来ない。

「ここで全員を殺して……隠蔽するのか」

「そんな理不尽な真似はしないさ。こうなっては仕方ないが、これもネットワークRPGの醍醐味と言えるか……私は最上層の紅玉宮で君たちが訪れるのを待つことにしよう。ここまで育ててきた《血盟騎士団》、攻略組プレイヤーを途中で放り出すのは不本意だが……なあと、君たちの力なら、きつとたどり着けるさ——と、言いたいところだが」

そこで区切り、ヒースクリフは笑う。

「キリト君には私の正体を看破した報酬を与えなくては。だが、ただ与えるのはつまらない。そこで、彼と——ミスト君と戦ってもらおう」

「なん……だと……」

戦う……？　俺が、ミストと？

「これは2人に対する試練だよ。お互いの目的のため、どちらかを殺してどちらかが生き残る。キリト君が勝てば私に挑む権利を、ミスト君が勝てば私は最上層で君たちを待とう」

「ふざけるなっ！　そんなことできるわけ……!？」

拒絶しようとした俺だが、前に進み出たミストを見て最後まで言えなかった。

「良いだろう。俺の目的のためにも……キリト、お前は最大にして最後の障害だ」

「なんでだ……なんでなんだミストツ！　俺たち仲間じゃ……友達じゃなかったのか！」

最初に出会った時は変な奴だと思った。

攻略組という割には動きが素人で、かと思えば珍しいスキルを持っている。

話してみればからかわれたりするけど悪い奴じゃなくて、なんとなく気が合つて。

「ビーターと呼ばれて差別されていた俺に対してもなんにも疑問に思わずに声を掛けてくれて……。」

「数少ない歳の近い知り合いで、一方的でも友達だと思っていたのに……！」

「……お前も、そう思ってくれていたんだな」

「え……？」

その言葉と共に、哀しげな笑みを浮かべたミストに意表を衝かれる。

「なんでそんな顔をするんだ。俺を障害だと言っておきながら。」

「なあキリト。最後に1つだけ聞きたい。お前は向こうへ……現実世界へ帰りたと思うか」

「そんなこと……帰りたいに決まってる！」

攻略前にアスナと話していた。

今、現実にある俺たちの身体は病院のベッドの上でどうにか生かされている状態で、何年も無事に続くとは思えないと。

「ゲームをクリアできないに関係なく、タイムリミットは存在する。」

残り25層……あとどれだけかかるか分からないのに、このチャンスを逃せば……100層に行く前に俺たちは死んでしまうかもしれない。

「お前だつてシリカと向こうで会いたいだろう!!!」

「……そうか」

俺の想いが届いたのか、ミストは剣を下ろして俯く。

「……分かつて、くれたのか。」

「……そうだよな。お前ならきつと、そう言うだろうな」

「ミスト……！」

通じてくれたと思った俺はほっとして安堵の表情を浮かべる。

けれど——顔を上げたミストの瞳には、冷徹な色はつきりと宿っていた。

「なら、ここでヒースクリフを殺させるわけにはいかない」

「え……う？」

はつきりと拒絶の言葉を告げられ、俺は一瞬その意味が分からず呆ける。

「どう……どう言うことだ。なんでそんな……」

「お前の言葉が全てだ。俺とお前の願いは、絶対に相容れることはない」

「相容れないって……なんだよ、なんなんだよ！ どうしてそこまでヒースクリフに肩入れする！ お前の願って何なんだ!!」

「言ったところで理解されないし、何も変わらない。——構えろキリト。俺は……お前の、敵だ」

「ミスト！」

もう……俺の言葉はミストに届かなかった。

赤い長剣を構えたミストは振り被りながら俺に迫る。動揺と混乱から立ち直れなかった俺は回避が間に合わず、「エリュシデータ」で剣を受け止める。

「やめて！ ミスト君！ こんな……こんなのおかしいよ！ なんで2人が戦わなきゃいけないの！」

「やめてください！ ミストさん！ ミストさんっ!!」

「ミストやめるんだ！」

「やめろおー！」

アスナが、シリカが、エギルが、クラインがミストに叫ぶが、全てミストに届かない。俺はといえばミストの猛攻に防戦になるばかりだった。

「(強い……っ!)」

パワー、スピード共に俺が知っているミストとは比べ物にもならない。

ただステータスが優れていると言うだけではない。凄まじいまでの意思の力と呼ぶべき物がミストにさらなる力を与えている。

何度も打ち合うが俺はミストに手を出せず、突き出された剣を受け流して左腕で殴ろうとすると、それを読んでいたミストはバックス

テップで距離を取りつつピックを数本投げつけてくる。

4本のピックを弾き落としている間に2度バックステップで距離を取ったミストは、ようやく立ち止まった。

「何故反撃してこない」

「出来ない……俺にはお前と戦う理由はない」

「理由……か。俺にはある。ここでお前にヒースクリフを殺されるのは困ると言うな」

「だから！ どうしてなんだ！ 理由を言ってくれ！」

「言った所で意味はない……早く《二刀流》を使え。本気で来ないとお前が死ぬぞ？」

「……嫌だ」

俺にはミストと戦う理由も、殺す理由だってない。

もし殺してしまったら……シリカになんて言えばいいんだ。

「嫌……か。甘いなお前は。それでヒースクリフに勝てると思うのか」

「仲間を殺したくないと思っちゃいけないのかよ!？」

「言っただろう、俺はお前の敵だ。——少し、面白い話をしてやる」

構えを解き、剣を肩に担いだミスト。だがその姿には一切の隙は見当たらなかった。

不意を衝こうとしても、間合いに入り込めば即座に斬られる……そんな予感を俺は抱く。

「キリト、お前はこの世界で間違いなく最強の剣士だ。その《二刀流》は最大の反応速度を持つプレイヤーに与えられるユニークスキルで、そしてヒースクリフの《神聖剣》は不死属性を偽装するための物……ヒースクリフ曰く、ユニークスキルは他にも8種類存在し、中でも《二刀流》は魔王を倒す勇者の役割を期待していたらしい」

「……何が言いたいんだ」

「ヒースクリフは言った。ただ唯一、10番目は他とは違う……最後のユニークスキルは魔王をいかなる手段を用いても倒す代行者であり、最終手段だと。——とは言え、それは魔王と手を組んだ1人のプレイヤーが手に入れてしまったがな」

「1人のプレイヤーって……まさか」

その言葉に、俺は1つの可能性にたどり着く。

ミストは静かに剣を眼前に持って行き……刀身の根元に左手を沿え、目を閉じた。

「キリトが『最強』で、ヒースクリフが『最高』なら——魔王に魂を売つても俺はなろう。『最凶』にして『最悪』の剣士に……!」

次の瞬間、剣先に向かって沿えた左手を動かすと刀身に何かの文字が浮かび上がると共に赤い光を纏っていく。

その異様な光景を目にして、俺は息を呑んでいた。

「ミストも……ユニークスキルを……」

詳細不明のユニークスキルに俺は最大限警戒する。

いつたいどんなスキルなのか……皆目見当もつかない。

ミストは左手を握り締め、右肩に持つていくように動かす。

——と、手に赤い輝きが宿り、次の瞬間腕を振るつたと同時に無数の炎が弾き出された。

「なっ……!?!」

なんだよこれ!? 予想の斜め上に行く現象に俺は目を向き、迫る大量の炎を「エリユシデータ」でどうにか弾き落とす。

だが炎に意識を向けていた隙を狙ったミストが、間合いを詰めて左腕全体を赤く輝かせて突き出した。

とっさに身体を後ろに引かせるが、目の前でミストの腕の先から強烈な爆発が起きて吹き飛ばされてしまう。

「がっ……!」

どうにか致命傷は避けたが……あれが直撃していたら危なかった。もしかしたらあの一撃でHPが全損していたかもしれない。

地面に倒れこむ俺を見下ろしながら、ミストはゆっくりと突き出した腕を下ろしていく。

俺だけじゃない。一部始終を見ていた全員がその光景に目を疑っていた。

「なんだよ……そのスキルは……!?!」

《魔装術》。いかなる犠牲を払ってでも目の前の敵を滅ぼす、最強に

して最悪の力さ。そうだな……SAOにはないはずの『魔法』に近い力を使える、って言えば、分かりやすいか？」

魔法……確かに、炎の弾丸や爆発するソードスキルはSAOにはないから、それを簡単に説明するなら魔法と言えば分かりやすいかもしれない。

けど、なんだ……？ ミストの説明にはまだ裏があるような気がする。

……と、意識を逸らしていると突然身体が重くなって身動きが取れなくなった。

「ぐっ……！」

「便利だよなあ？ 範囲内の対象物の動きを抑え込める超重力って言うのは。鍛えれば『スカル・リーパー』みたいに巨大なモンスターすらも押し潰せるらしい。今の俺には中型を抑えるのが精一杯だが」説明しつつ、俺がもぐ様を楽しげに見下ろすミスト。

……気のせいか、さつきよりもHPゲージが減っている気が……。

——いかなる犠牲を払ってでも目の前の敵を滅ぼす、最強にして最悪の力さ。

さつきミストが言っていた言葉の、本当の意味はまさか……！

「ミスト……まさか、そのスキルは……！」

「気付いたか。察しの通りだ」

「まさか……なんで、そんな物を……！」

信じられない。けどミストが肯定したと言う事は俺の推測は事実だと言う事だ。

ユニークスキル《魔装術》……その力は確かに圧倒的だが、力を使うには対価がいる。それは――。

「自分のHPを……消費する……！」

どうにか重力に対抗しようとしながらそれを口にすると、全員に衝撃が走った。

誰だって信じられないだろう。この世界でHPが0になれば本当に死ぬ。いくら入手法が判明し、強力無比であろうとそんな致命的な欠陥があるなら誰も手に入れようとは思わない。

「例え自分の命を犠牲にしても、成し遂げなければ行けない目的がある。これはその『覚悟』を試される力だ。自分の命1つで魔王を倒せるなら、安い物だろう?」

「違う……! そんな力は……邪道、だ……!」

「邪道、か。確かにそうだな、お前の《二刀流》と俺の《魔装術》はいわば光と影。本来いくつもの条件をクリアしなければ解禁されない力を、俺はヒースクリフから与えられた。《魔装術》本来の役目は、他のユニークスキル持ちが倒された時の代わりになる物だったからな」

「どうして……そこまでして力を……求めるん、だ。ミスト……!」

「こうまでやらないとお前を倒せないからだ。その甲斐あって、腑抜けた臆病のお前をこうして圧倒できるんだから……けど拍子抜けだ」

落胆したように肩を落としたミスト。

戦えるわけがない。俺たちが戦う理由なんて……見つからないじゃないか。

ふと、今まで俺を見ていたミストが、俺から視線を外した。

「戦えないなら、戦う理由を作つてやろうか」

「なに……?」

意味深な言葉と共にミストは真っ直ぐ——マヒで動けないアスナとシリカのところを歩いていく。

——まさか。

——まさか。

「戦う気のない奴を殺しても虚しいだけだからな。アスナ、悪いが俺に殺されてくれ」

「ミスト君……嘘、でしょ? 嘘だよね……?」

「や……やめてください! ミストさん! なんでキリトさんを……アスナさんを殺そうとするんですか! こんな……絶対おかしいですよ!」

シリカの懇願をミストは一切無視して、目を見開くアスナの前までやって来ると見下ろし、剣を振り上げた。

本気だ。本気でミストは……アスナを——!

「ぐっ……ううっ——うおおおおおおつ!!!」

その瞬間、俺の中で何か音が立てて切れ、重力による束縛を振り切って跳ね起きて走り出す。

そして背中の「ダークリパルサー」も抜き、ミストに「ダブル・サーキュラー」を放った。

「ミストオオオオオッ!!!」

吠え、2本の剣を微妙な時間差で突き出す。

気付いたミストは振り返り、ニヤリと嗤いながら2本とも見事に受け流した。

「やつとその気になったか……!」

「殺す……! お前に、アスナを殺させはしない!」

今の俺に躊躇いはない。

ミストを完全に『敵』と見なし、間合いを詰めて上下左右から高速の斬撃を繰り出す。

片手剣1本だけのミストは2本の剣を受け、弾き、逸らしていくが、俺の攻撃速度のほうが速い。

けれど、ミストの左腕に装備した小手は盾の性質も持っているのか、かなり硬いそれを巧く使って防いでいる。

「足元が留守だぞー!」

「ぐっ!?!」

そう言い放った瞬間、俺は足元に何か引つかかってバランスを崩した。

一瞬足元に目を向けると、柔道の内刈りをするようにミストの右足が俺の左足を刈って俺のバランスを崩したらしい。

後ろに倒れこみそうになる俺に、左腕を赤く輝かせながら突き出してくるミスト。とっさに「ダークリパルサー」を掲げると構わずそれを掴み、次の瞬間爆発が起きた。

弾き飛ばされる俺。「ダークリパルサー」も中ほどから折れてしまっている。

『スカル・リーパー』との戦いでかなり耐久値が減っていたが……それでもあのスキルは異常な破壊力を持っているらしい。

けど『二刀流』が使えなくても負けるわけにはいかない! 俺が負

ければアスナだって殺される！

「ふっ……」

嘲笑を浮かべ、ミストは別のソードスキルを発動させる。けれどシステムが不発したのか、何も起きた様子はない。

チャンスだ……今なら硬直を狙える！

「はっ!!」

片手剣の上段突進技「ソニック・リープ」を放つ。硬直も短いこれで、さらに追撃を——!?

「なっ!?!」

だが俺の目論見は予想外の結果に終わった。

硬直で動けないと思っていたミストがまさか動き、間合いの外から剣が振り上げたかと思うと、俺の肩口から腰にまで赤いダメージフェクトが発生してHPが削られる。

発動中に攻撃を受けて「ソニック・リープ」は当然キャンセルされ、俺は勢いを急速に失っていき、硬直を狙ったミストの回し蹴りで吹き飛ばされた。

「甘いなキリト。少なくとも《魔装術》を相手に常識的に考えないほうが身のためだ。こいつは他のユニークスキルの代わりになる役目を与えられたんだから、何かしらの特徴を持っていても不思議じゃないだろう?」

「な……じゃあ、1つのスキルで他のユニークスキルを使えるって事か……!?!」

「大体そんな感じだろう。相応の命リスケを払い、相応の力リターンを得るんだからな」

つまり俺は……俺やヒースクリフを含めた、他にも存在するであろう9種類のユニークスキルを相手にしているってことなのか……!?

これが、最終兵器……自分の命を差し出して力を手に入れる《魔装術》……。

けど……だからって負けられない! ミストが言ったとおり、少なくとも反応速度は俺が勝っているなら……!?

起き上がり、再びミストに斬りかかる。だがミストは剣の間合いの

外から振るい、どうにか剣の軌道から見えない攻撃を防いでいく。

射程距離拡張系の能力……しかも拡張したリーチは目視できない。他に使われたスキルといい滅茶苦茶だ！

だがその分対価となるHP量もかなり多いらしく、イエローゾーンを大きく切っていた。

使えば使うほど、死に近づいていくスキル……こんな物を使ってミストは怖くないのか。

「(なんで……なんでそんな哀しい目をしてるんだよ)」

最初はアスナを殺されそうになつて頭に血が上っていたが、徐々に落ち着いてくると時折哀しげな色を宿すミストの目やけに気になつた。

もしかして……ミストはわざと俺を挑発させて戦う気にさせたんじゃないだろうか。

……でも何のために？　もう、それが本当のお前の顔なのか、俺には分からないんだ。

「くうっ！」

「ああっ！」

ぶつかり合う赤と黒の剣。あれだけ多くのソードスキルを使ったためか、ミストはそれつきりソードスキルを使ってくる気配はない。

いや、あくまで振りかもしれない。強力無比で未知数なスキルを相手にこつちがソードスキルを使うわけにはいかない。それを狙って何かを仕掛けてくる可能性もある。

剣の腕はほぼ互角。最初に出会った頃は頼りなく感じていたのに、今じゃ俺と渡り合っていた。

いや、ただ剣の腕だけを比べればまだ俺に分がある。互角に渡り合えているのはミストが蹴りや拳打も交ぜているからだろう。

剣がぶつかり合い、ミストは滑るように回り込みながら肘鉄を繰り出してきて、俺は前に屈むようにして避け、その勢いを利用して右足を蹴り上げる。ミストはそれを左腕の小手で受け止め、サイドステツプで距離を取って体勢を立て直すと、また炎の弾丸を飛ばしてきた。

回避は難しいそれらを、1つ1つの弾道を見極めて「エリユンデー

タ」で叩き落していく。

だがこれは囷だ。弾幕に紛れて接近してくる……そう思っていたら、今度は銀色に光る物体が飛んできた。

「(ピック!?)」

さらに囷を入れられて俺は意表を衝かれるが、ピックの威力は大きくない。それに炎の弾丸よりも軌道が直線だったから迎撃は容易だった。

「——そこか!」

そして今度こそ本命が姿を見せた。

姿勢を低くし、地面を這うように駆けて、ミストが左側から姿を現す。

「こっのおおおおお!」

突き出された剣の切っ先を払い、カウンターで蹴り上げる。辛うじて左腕で防いだミストだったが、衝撃で弾き飛ばされた。

行ける。空中に浮いたミストに「ソニック・リープ」を放とうと剣を背負うように構え、発動する。

だが……ミストはニヤリと嗤うと、突然空中で静止し、体勢を立て直した。

「甘いつて言っただろう!」

振り下ろされた「エリユシデータ」を自身の剣で弾き、そのまま俺の胸倉を掴み上げ、ヘッドバットが炸裂する。

鼻に鈍い痛みを感じ、そのまま数回回転したミストは地表へ投げ飛ばした。

叩きつけられて地面をバウンドし、それでもどうにか受身を取って起き上がる。

残りのHPは少ない……いや、ミストのHPがグリーンゾーンまで回復してる!?! あの弾幕の最中にポジションを使ったのか!

「避けないほうが身のためだぞ!」

「何を!」

言うが否や、青白い光を剣に纏い急降下突撃するミスト。どうにかステップで回避したが、ミストは振り返ると共に剣から衝撃波を2発

連続で放ってくる。

目を剥き、さっきの言葉の意味を理解するとともに回避しようとするが、横のリーチが広い上に背後にいるプレイヤーが巻き添えを食らう。

歯噛みしながら俺は【バーチカル・スクエア】で衝撃波を相殺するが、致命的な隙を晒してしまった。

しまった、と思った時にはもう遅い。口角を釣り上げたミストは助走をつけ、空中に飛び上がると、落下しながら左腕を振り被る。

またあの爆発が来る。あれを受ければ今度こそ俺は——!!!

「キリト君！」

「ミストさん！」

アスナとシリカが叫ぶ。

もうミストの間合いに入った。突き出されようとする左腕。ようやくスキルの硬直が解け、俺は迎え撃とうとするが……もう遅い。

けど——。

「え……？」

腕が伸びる寸前、ミストが躊躇うような表情を浮かべ、一瞬腕が止まる。

その僅かな差で苦し紛れに突き出した「エリユシデータ」の切っ先は、ミストの身体を深く貫いていた。

何が起こったのか、その状況を理解できなかった俺は、折り重なるように寄りかかってきたミストに呆然とする。

「ああ……」

耳元で呟かれるミストの声。俺が良く知る声音で、それはどこか穏やかな物だった。

「やっぱ……キリトは強い……な」

「ミスト……お前……」

最後の一瞬、わざと手を止めただろう。

あの一瞬がなければ、俺はあの爆発を受けて確実に死んでいた。なのに……。

「なんで……なんでだよっ!? どうして……お前、こんな……!」

第15話 終わる世界

第15話 終わる世界

ミストが……死んだ。

俺が……殺した。

お互いに殺すつもりだったのに……。

最後の一瞬、ミストは思い留まったのに……俺は……俺は……。

シリカの悲鳴が……残響のように耳の奥に焼きついて離れない。

俺は目の前でミストを……シリカの恋人を殺してしまった。

友達を……。

仲間を……。

俺は……。

「——いやはや、これは予想外の結果だった。キリト君には本当に驚かされる」

手を叩く音と共に、今まで俺たちの戦いを見物していたヒースクリフが口を開いた。

「まさか《二刀流》を使用不能にさせられながらも、《魔装術》を破るとは。レベルもステータスも、装備の性能すらもミスト君が優れているはずだが……邪道では正道に勝てない、と言う事か」

「……うるさい」

そんな賞賛……嬉しくもない。

「俺は間違いなくミストに圧倒されていた。《二刀流》が健在でも勝てるか怪しかった。でも最後の最後にミストが躊躇わなければ……生きていたのはあいつだったんだ」

「……なるほど、最後の最後に情が湧いたと言う事か。切り捨てたと
言いつつ結局切り捨てられなかったわけだな」

全てを悟ったかのようにヒースクリフは肩を竦め、惜しむような、
それでいて呆れるような表情を浮かべる。

「しかし残念だ。ただ一人になろうとも最上層で私に挑む彼と戦って
みたかったが……」

「ふざけるな………ふざけるなっ！ どうやってミストを引き入れたかは知らないが、あんな力をちらつかせてそれと引き換えに仲間にしたのか、ヒースクリフ！」

「引き入れた？ 違うな、むしろ逆だよ。彼が私に協力を持ちかけたのだ。《魔装術》の存在を明かす以前に」

「な………に………？」

思わぬ返答に俺は動揺する。

どうして………どうしてミストは俺たちを裏切つてまでヒースクリフと手を組んだ。あいつは最後までその理由を話してくれないまま………。

「ふむ………彼は自分が『裏切り者』と呼ばれる事を覚悟して行動した。当然、君たちから見れば彼は紛れもなく裏切り者だ。しかし………私の空想に共感してくれた者として、少しばかり彼を擁護したいな」

「擁護………だって」

「そうだ。あるいは、彼はこの結果すらも予想していたのかもしれない………。君たちには全てを話そう。ミスト君の正体を………存在しないはずの1万と1人目のプレイヤーの話を」

そして………ヒースクリフは静かに語りだした。

俺たちの知らない………ミストが隠し続けてきた秘密を………。

「はあ………」

珍しくお店が暇で、どうした物かとあたしはため息をついた。

多分この後大量の武器のメンテナンスや製作の注文が飛び込んでくるだろうから、いわゆる嵐の前の静けさって奴なんだけど。

新しい階層が解放されれば、その都度レアなアイテムがゴロゴロ出てくるんだし………それはそれで楽しみなんだけどねえ。それよりこの暇を持て余している今が問題よ。

「そろそろ終わった頃かしら………」

あれから結構な時間が経ったし、皆帰って来ても不思議じゃないと思っただけ………。

「………あれ？」

イスの背もたれに寄りかかったところで、不意に通知アイコンが点灯した。

なんだろう、と思いつつアイコンをタップすると、ギフトボックスにミストから何か届けられている。

訝しみながらもそれをタップすると、メッセージ録音クリスタルがオブジェクト化した。

「……………？」

なんでこんな物をわざわざ送ってきたんだろう。あたしは首をかしげて暫し考えるが、正直思い当たる事がない。

さすがにここで聞くわけにもいかないし、あたしは2階のリビングに行くのと、そこで内容を聞くことにした。

『——あ、あー。テストス。えー……ゴツホン。リズベットへ、聞こえてるでしょうか？』

録音されていたのは紛れもなくミストの声。妙に畏まっている声にあたしは微笑する。

……けど、次の言葉に背筋が凍りついた。

『これを聞いていると言う事は、きっと俺が死んでいるということだと思う。死んでなかったらこれ送らないようにキャンセルしてるはずだから。』

なんでかって？ まあ……なんて言うかな。俺は75層のボス攻略で、キリトと戦う事になると思う。

ああ、色々と聞きたいことは山ほどあると思うから、順を追って説明する。これを聞いている頃にはキリトたちもヒースクリフから話を聞かされているだろうから。キリトたちだけに話して、リズだけ仲間外れにするのも嫌だったから、こうしてメッセージを残すことにする』

「なによ……これ」

ミストが死んでいる？ キリトと戦った？ なんで……なんでこんなメッセージを入れたのか、わけが分からない。

一瞬冗談だとも思ったけど、流れてくるミストの声は真面目でいて、それでいてあたしの良く知っている声音だった。

『——まず最初に、俺は皆にとっても大事な秘密を隠していた。それは……俺がこの世界の人間じゃないってこと。』

『え？ 当たり前でしょ』ってツツコミはナシな。なんて言うかな……荒唐無稽って言うか、信じられないような話なんだけど、俺は真正銘、異世界の住人なんだ。この世界……つまりソードアート・オンラインの外にある現実世界とは異なる世界の人間。

信じられないよな？ けど事実なんだよ。どう言えば信じてもらえるか……うん。リズがキリトのために鍛えた「ダークリパルサー」の材料、あれって55層の西の山に住んでいる白竜の排泄物から手に入れたものだろ。確かこの情報って、誰にも教えてなかったはずだからキリトとリズ以外には知らない、2人だけの秘密だよな？』
「ウソ……」

なんでミストがそれを知っているのよ……。

確かにキリトの「ダークリパルサー」の材料になった金属……クリスタライト・インゴットは、ミストの言ったとおり55層の西の山に住んでいる水晶を食べる白竜の排泄物だったものだ。

このことは取りに行つたあたしたち以外、誰も知らない秘密のはずなのに。

『これで一応、信じてもらえたかな。なんでこの事を知っているのかっていうと、小説とかで異世界にトリップしたって話あるだろう？』

俺もそのパターンなんだ。

そして、俺の現実世界にとって、この世界……つまりリズたちが本来暮らしていた現実世界は、「ソードアート・オンライン」と言うタイトルのライトノベルだった。

つまり……俺の現実世界では、リズたちは架空の人物だったんだ。ああ、怒るなよ？ 怒らせるつもりで言つたんじゃない。例えば俺のいた世界でここが空想の世界だったとしても、ここに暮らしている人たちにとっては紛れもなく現実の世界だ。この世界に来た俺も、はっきりとそう答えられる。

俺がこの世界を知つたきっかけは、仲間から面白いから読んでみるって勧められたからなんだけど、読み終えたらどう言う訳かこの世

界に居たんだよ。しかも木の枝に引つかかって寝た状態で。

それが俺とキリトの最初の出会いで、それからすぐにシリカと出会った。

最初はどうかしてこの世界から脱出したいって思っていたんだけどな……誰だつて現実でも死ぬゲームなんかやりたくないだろう？

でもズルズルズルズル先延ばしにして、気付いたらこんなだ。

『レットクリフ』なんてビームブツパするはわわ軍師みたいな2つ名をつけられて、いつの間にもやら攻略組！ どうしてこうなった……つて心境がまさにぴったりだよ』

あつはつは、とクリスタルの中でミストはおかしそうに、呆れたように笑い飛ばす。

……けど、急に今まで明るかった声のトーンが落ち込んだ。

『……俺が攻略組に近づいたのは、ヒースクリフに接触するためだった。信じられないかもしれないけど、ヒースクリフはこの世界の創造主、茅場晶彦本人なんだ。

そして俺は、ヒースクリフに自分から接触した。キリトがヒースクリフと《血盟騎士団》入りを賭けたデュエルをしたことがあつただろ？ そのすぐ後だ。

ヒースクリフの正体を看破して、俺の知っている限りの知識を提供して……その代わりに、俺が俺の居た世界に戻る方法はないのか、聞きだした。

……その結果が、天才にも不明だとき。完全にお手上げ。

——それだけなら、まだ良かった。でも、肝心な問題がある。

俺は皆のようにナーヴギアを被ってこの世界にログインしたわけじゃない。難しい話は分からないけど、ヒースクリフは俺を電脳の状態だろうって言った。

ゲームがクリアされれば、ナーヴギアを被っている皆はログアウトされる。

けれど……ナーヴギアがない俺は、元の世界に帰れる保証はない。それどころか、ゲームがクリアされればカーディナルシステムは自らを消滅させ、俺もそれに巻き込まれて消える。当然HPが0になつて

も帰れる保証はないから死ぬと考えていい』

「そんな……」

ミストが嘘を言っているようには思えない……。

けど、それが全て事実だとしたら……ミストはどうやって、死ぬ以外ないってことじゃない。

『そして……キリトは75層のボス攻略後、ヒースクリフの正体に気づいて茅場晶彦だと看破し、2人はログアウトを賭けて最後の戦いをする……それが、俺の知っている歴史だ。』

……皆、現実に帰りたいよな？ でも俺は……帰れない。帰る手段がない。俺にとってここが全てで、ここが現実なんだ……。

別れたくない、消えたくない。でもこのままだとキリトがゲームをクリアしてしまう……。

……悩んだ末に、俺は決めた。

本来100層でクリアされるゲームを、途中でクリアさせないと。そのために俺はヒースクリフと手を組んだ。裏切り者って呼ばれる事は覚悟して。

皆の希望を握り潰す……つまり、俺がキリトを殺して、途中でクリアさせないと。

だからあれこれヒースクリフの手を借りて、リズにも見せたあんな姿になった。これじゃあ真正銘、俺がチーターだよな。

けどこれを聞いているって事は、やっぱりキリトには勝てなかったってことなんだろうけど』

そうだ。

これはミストが自分の死後に、あたしに宛てた遺言。

つまり……ミストは、もう……。

「っー」

いてもたってもいられなくなって、あたしはクリスタルを手の上に置いたまま外に飛び出す。

今更遅いのは分かっているけど、その場でじっとしていらなかった。その間にも記録されたミストの話は続き、終わりに差ししかろうと

している。

『あ、やつべ……もう時間ないじゃん。えーつと、そう言うわけで、自分で死ぬ前に遺言作るってのも変な感じだけど、こうしてリズにもメッセージを遺しておく事にしました。』

まあ、そんな泣いたりしないでくれ。俺のわがままで帰るチャンスを奪おうとした最低男だから。

たださ……キリトのことは責めないでやってくれると、嬉しい。キリトも知らなかったんだから。

あー……できればこのことは、現実でキリトたちに会ったら言っておいてくれると助かる。二度手間は面倒だろ？

えーつとあとは……最後になるけど、今までありがとうリズベツト。俺、お前のごと結構好きだった。変な意味じゃなくて、友達としてだからな？

できれば結構長めに、俺が確かに存在したことを覚えていてくれると嬉しいかな。

——じゃあ、向こうでも元気で。……つて、俺が心配する必要ないか。リズは元気なのが取り柄だからな。

……うん。それじゃあ——。

——さようなら』

再生が終わり、クリスタルの輝きが失われて手のひらに落ちる。

泣いたりしないでくれ？ 最低男だから？

そんなの……そんなの！

「泣かないはず……ないじゃない……！」

ボロボロと流れていく涙を止められなかった。

なんで……なんで話してくれなかったのよ。

あたしじゃなくてもキリトやアスナ……シリカにクラインやエギルだつていたのに……！

一方的に言つて……迷惑かけて！ 勝手に死んで！ 結構長めに覚えていてくれ!?

「バカ……バカ、バカバカバカ！」

忘れるはずがない。忘れようと思つても簡単に忘れられるほど、あ

たしの中のアんたは影が薄くないのよ！

「このっ……大バカミストオオooooooooooooツ!!!」

やるせない怒りと悲しみを込めて、あたしは空に向かって絶叫した――。

「――これが私が聞いたミスト君の全てだ。多少の独自解釈も入れているが、全て彼の証言を元に推測している」

「……………」

……言葉が出てこなかった。

ヒースクリフから語られたミストの秘密……。

正真正銘異世界の住人で、ログアウトすれば現実世界へ帰れる俺たちと違って、ミストは帰れないと。

しかも、このゲームがクリアできれば、崩壊するこの世界と共に消えると。

「なんで……一言でも、相談してくれなかったんだ……」

「君たちに相談したところで、解決策が出てこないと思ったからだろう。そこで私に接触してきたのは、正しかった。それでも解決策が出ることはなかったがね」

「そうだとしても！ 戦う前に話してくれば俺は戦わなかった！

そうすれば……ミストは、死ななかった……！」

「死ななかった……か。それは少し違う」

「どう言うことだ……」

ハツキリと否定の言葉を口にしたヒースクリフに向け、俺は睨みつけながら問い返す。

「どう言うことも何も、キリト君、君はミスト君の質問に対して答えた言葉が全てだよ」

「な……に……？」

ミストの質問に対する俺の答え……？

あの時……戦う直前にミストが訊いた内容か。

――お前は向こうへ……現実世界へ帰りたいと思うか。

「あ……」

ようやく、全てを理解した。

あの時俺は……帰りたいに決まっていると答えた。

それはヒースクリフを殺してゲームをログアウトする事。

つまり俺は……あの時……。

「気付いたか。君はあの時、『俺たちが帰るためにお前は死ね』と言つたも同然なのだよ」

「ち……違うー！俺はそんなつもりで言ったんじゃ……！」

「ああ、分かっている。それはミスト君も同様だったはずだ。事情を知らない君たちがあの状況下でそう問われれば、当然帰りたと思うだろう。だが……何も知らなかったとは言え、友人から『死ね』と同然の言葉を言われれば、いくら命を捨てる覚悟を持ったとしても傷つくはずだ」

だからミストはあの時……俺たちの願いは絶対に相容れないと、そう言ったのか。

でも……なら俺は、どうすれば良かったんだ？　ここでチャンスを逃したら、クリアする前に現実の身体が限界を迎えるかもしれない。けれどヒースクリフに挑むには、ミストを殺さなくちゃいけないかった……。

……選べない。俺には……どちらかを選ぶ事ができない。

「さて……魔王を守護する騎士は勇者に破れ、ついに魔王と対峙する事になったわけだが……」

ヒースクリフの言葉がどこか遠くで聞こえる。

今更……戦えない。俺は……戦う資格がない。

「いいのかな？　ここでチャンスを逃せば、私は100層に行く事になるが」

「……………」

もう声を出すのも嫌だった。

目の前が暗くなって、全てが黒に塗り潰されていく。

ミストは生きようとしていた……俺を殺してチャンスを奪い取つても、自分1人で最上層を目指して刺し違えてでもヒースクリフを殺そうとしていた。

それがわがままを貫こうとした自分の罰だからと。

ただ生きたいと、少しでも長く皆と……シリカといたかったというミストの願いを、俺は踏みにじってしまった。

そんな俺に……この男と戦う資格なんて――。

「……あ」

ふと、通知アイコンが点灯する。

無視しようかと思ったが、なんとなく気になって俺はアイコンをタップした。

ギフト……ミストから……？

「……………」

一瞬、タップするのを躊躇うが、俺は意を決してアイコンをタップする。

すると見覚えのある細身の長剣がオブジェクト化し、落ちようとしたそれをとっさに両手で受け止めた。

茶色い皮の鞘に納まった、アクアブルーの鏢の中心に、翡翠の宝玉が埋め込まれた……ミストが最初に出会った時から使っていた剣。

名前は……「マーヴェルエッジ」。命中にブーストが掛かる効果を持った片手剣。

続いてメッセージアイコンが点灯し、タップするとミストからのメッセージが届く。

form ミスト

必ず勝て。お前なら勝てる。

「ミスト……」

お前を殺した相手なのに……どこまでお人好しなんだ。

……いや、ミストは例え自分が殺されたとしても、俺がヒースクリフを倒してゲームをクリアすると信じていた。

だからきつと、この剣を託したんだ。あいつの……最後の願いと共に。

「……………」

無言でミストの剣を握り締め、鞘を腰に差す。

ああ……分かったよ、ミスト。

それがお前の最後の願いがなら……俺は必ず、叶えてみせる。

ヒースクリフを倒して……このゲームを終わらせる……！ この世界で、孤独になっても全力で生きようとしたお前に報いるためにも！

「キリト君……」

静かに闘志を漲らせていく俺に、アスナが名前を呼ぶ。

振り返り、安心させるように笑いかけた。

そして、その隣で涙を流しながらも俺を見上げるシリカを見る。

「シリカ……ごめん。俺は君の……」

「何も……何も、言わないでください。あたし……信じてます。ミストさんが必ず勝てるって信じたなら、あたしもキリトさんが必ず勝つって……信じます」

「……ありがとう」

きつと辛いはずなのに、強い光を目に宿した彼女に俺はそれ以上余計な事は言わなかった。

俺はこれから先、ずっとシリカに償い続けなければいけないんだと思う。そのためにも……ここで死ぬわけには行かない。

「エギル、クライン。今までありがとうな、必ず向こうで会おう……」

「キリト……」

「あ……あつたりめえだあ！ 向こうで飯の1つでも奢ってもらおうからよー！」

「そうだな……それであの時置いていったこと、チャラにしてくれ」

エギルたちにも軽く笑ってから、俺は改めてヒースクリフに向き直った。

腰に差した「マーヴェルエッジ」をゆっくりと抜いていく。筋力重視の俺と違ってスピードや正確さを重視していたミストの剣は、「ダークリパルサー」よりもかなり軽い。

けど、手に馴染む。あいつがずっと使い続けてきたんだ。その力に不足はない。

「闘志を取り戻したか。いい目だ、キリト君」

「当たり前だ……大きすぎるものを託されたんだ、投げ出すわけには

行かない」

「そうか……では始めるとしよう。無論不死属性は解除し、HPはお互いイエローゾーンからスタートさせる」

そう言っつてヒースクリフはウインドウを操作し、続いて俺たちのHPをイエローゾーンまで増減させる。

今まで身体にのしかかっていた重圧も暗闇もない。そんなものとはつくに消え失せていた。

「リベレイター」の剣をゆっくりと抜くヒースクリフに合わせて、俺は腰を浅く落とす。

これはデュエルじゃなく、単純な殺し合いだ。

俺は……この男を殺す。そしてゲームをクリアしてみせる。

だから――。

「力を貸してくれ……」

目を閉じると、ミストの背中を幻視した。

振り返り、俺も良く知っている笑みを浮かべて――。

「――おおおおおおおっ!!!」

目を開き、絶叫と共にヒースクリフに斬りかかる。

全てを終わらせるための……最後の戦いが、今始まった。

そーどあーと・おふらいん 番外編

「本番10秒前ー！……5秒前！ 4、3……」

デレレレッツテツテ

アスナ「皆さんこんにちは！ そーどあーと・おふらいんへようこそ！ 司会のアスナです」

キリト「解説の、キリトです」

アスナ「この番組は、アイコンクラッドのあらゆる出来事をお伝えする情報バラエティ番組です。……え？ もう終わったんじゃないのか、ですか？ 今回は番外編と言う事で、特別復活しました。

——けどいいのかなあ？ あんな最終回やった後にこれをやるなんて」

キリト「きつちりやる予算は確保していたみたいだから……それに、アンケートの集計結果もやらなきゃいけないかったし。

けど、落差が酷いのは確かだと思う」

アスナ「原稿も不透明なところが多いよね。今回のゲストって私たちにも知らされてないし……。

えー、それでは、ゲストの方を呼んでみましょう。この方です！

どうぞ！」

ミスト「……………」

キリト「え、ミス……へあっ!!」

アスナ「え？ え？ えええ!?!」

ミスト「——につこにつこにー♪ 待たせたなお前ら、真打登場だ！」

キリト&アスナ「えええー…………」

ミスト「……あれ？ 滑った？」

キリト「なんでラ○ライブネタ使ったんだ」

ミスト「いやー、出る直前まで某イベントでのにつこにつこにー、を見ててさ。マジ可愛いでしょうヤバイ。可愛くないくしやみしても可愛く見える不思議」

キリト「初っ端から飛ばすな！ それと他作品あんまり言うなよ

！」

ミスト「えー？ だって今回おまけみたいなものだろ？ だったら多少弾けたっていいじゃないか」

アスナ「ミストくん……なんていうか、キャラ変わってない？」

ミスト「そうか？ んー、まあそうかも。だってさー、主人公として華々しく活躍できる！ とか思っていたら「死ぬ前提で進んでます」って言われたんだぞ？ 飲まずにいられるかー！」

アスナ「未成年の飲酒はダメだからね!？」

ミスト「大丈夫、ただの場酔いだから」

キリト「いや、場酔いってなんだよ!？」

アスナ「ま、まずい……このままだと番組の進行にも影響が出そう……。ここは司会の私がしっかりしなきゃ！」

え、えー……ミスト君はキリト君の知り合いで、本作「寝て起きたらデスゲームに巻き込まれていたんだが。」の主人公を務めていました。現実世界からトリップしてソードアート・オンラインの仮想世界に迷い込んでしまうと言う、ある意味不幸体質なんですけど最初はポジティブシンキングで前向きに頑張っていたんですよ

ね」

ミスト「結局やさぐれたけどな！」

キリト「なんだかんだで不思議と気が合ったし、話していると面白かったから今までも何度もつるんでいたんだよな。最初は見えて危なっかしかったけど、いつの間にか肩を並べるくらい強くなっていた驚いた」

ミスト「色々とステータスに恵まれていた、って言うのもあったかなあ。その分リアルラックがど底辺だったけど」

キリト「いや、その……なんとフォロースればいいのやら」

ミスト「……でもな、俺、気付いたんだ」

アスナ「気付いた？」

ミスト「ああ。結局こうして死ぬ確定なら——いつその事開き直って散々自虐ネタにしてやろう、と！ そうだ、それがいい！」

アスナ「なんてたくましい……!！」

キリト「けど笑いを取れるのか、これって……」

ミスト「そもそも、あの作者だったら十分ありえた話だった！ 今企画中の資料を持ってきたんだけど、やれ1度殺して転生してパワーアップ、バイクに強制トランスフォーム、前世から虚弱体質持ちのまま転生等々、ロクなことやらない！」

アスナ「それ持ってきてよかったの!？」

ミスト「あとで返せば問題ないだろ。あと、最近某スクールアイドルプロジェクトに嵌りだしてそれも企画進行中らしいけど……」

キリト「さつきお前がやってたよな……アレ、男がやるのはアウトだっただろ」

ミスト「……やっぱりそうだったか？ 無難にハラショーでよかったか……まあとにかく、この作品には珍しく上記のような不幸体質の主人公は、現段階ではまだ出来ていない。できていない、けど……」

アスナ「できてない……けど？」

ミスト「ハーレム系かよ……爆ぜろリア充（グシャアツ、と資料握りつぶして

アスナ「うわっ、視認できるほど濃い嫉妬のオーラが……」

キリト「シリカに後ろから刺されかねない発言だぞ、それ」

ミスト「お前の場合はアスナが後方からフラツシング・ペネトレイターで突撃してくるパターンだな」

アスナ「キリト君、あとでお話。ミスト君も、そんなこと言ってるどシリカちゃんに怒られちゃうよ？」

ミスト「怒られるならまだいいさ……ひっぱたかれたりする程度ならどれだけマシか」

アスナ「……と言うと？」

ミスト「……病んじやう可能性が微レ存」

アスナ「うわあ……」

キリト「ミスト、強く生きろ。俺も影から応援している」

ミスト「よっし、ならこの企画書ちよつと俺たちで書き加えるか！

本〇猛とかどうだよ!？」

キリト「改造人間ネタか！ いいな、面白そうだ！」

アスナ「そのこの2人！ ノリノリで勝手に企画書を変えない！ ああ、もうっ！」（『フラッシング・ペネトレイター発動して2人を吹っ飛ばして』）

キリト&ミスト「どわああああっ?!」

アスナ「次のコーナーに行きましょう、次！」

れつつ☆ぷれいばあーつく!

ミスト「さーやってきましたプレイバックのコーナー！」

アスナ「ちよつと、それ私の台詞！」

キリト「切り替え早いなー……」

ミスト「このコーナーは俺たちで各シーンを振り返るって趣旨のコーナーで、俺の独断と偏見によるシーンが盛り込まれているんだ。さすがに全部をやるわけじゃないから、ごく一部だけだな」

アスナ「司会は私だよー！」

キリト「落ち着け、落ち着けアスナ！ ミスト、アスナに司会をさせてやってくれ！」

ミスト「しゃーないな。じゃあアスナ、ボタンタッチ」

アスナ「もう……それでは改めまして、最初のシーンはこちらです！」

第1話、「デスゲームの世界へようこそ」より。

「っ……」

「ん?」

「こ こ は ど こ だ あ あ あ あ

っ ! ? あっ?!」

「ちよ、おわあっ！」

キリト「あー、このシーンな。あれは簡単には忘れないよ」

ミスト「俺だっけそうだ。寝て起きたら森の中、そして下にはキリトってなんぞこれ？ インパクトは絶大だったけど」

アスナ「ここで2人は出会ったんだね。なんていうか……」

ミスト「ん？」

アスナ「いや、最近はずっとシリアスなミスト君だったから、この頃のミスト君って懐かしいなあって」

キリト「そうだよな。久しぶりに会ったら誰だお前ってくらいイメージ変わっていたから」

ミスト「かもなー。俺もこの頃は楽しかった……終盤はソロで動く事が殆どだったし」

アスナ「ここから最後にあんな風になるなんて、誰が予想してただろうねえ……それでは次のシーンをどうぞ！」

第2話、「黒と赤の剣士」より。

ロザリアの命令に男たちは武器を構えなおし、それぞれが様々なカラーのライトエフェクトを発する。誰かが吠えたと同時に、男たちは一斉に俺に襲い掛かった。

側面からならまだしも、盾持ちの相手に真正面から……馬鹿じゃないのかよ。

けどこつちも、2人にああいった手前引き下がれるか！

ぎゆうつと両腕に力を込めた瞬間、「剣」と「盾」がライトエフェクトの輝きを放つ。これって……!?!

「——はあああああつ!!」

驚きはしたが、そのままにするつもりはない。

俺は吠えながら1歩踏み出し、同時に両手を前に突き出す。

赤いライトエフェクトとジェットエンジンのような音と共に俺は集団目掛け突っ込んだ。

ミスト「俺が《盾剣技》でヴォーパル・ストライクを両腕で発動した所だな」

キリト「あの時は本当に驚かされたな。盾でもソードスキルが撃てるなんて思わなかったから」

アスナ「突破力のあるヴォーパル・ストライクを重ねて撃てば強力だよな。ミスト君のシステム外スキル《剣技連携》も披露されたし」

ミスト「オリジナリティを入れたって考えた結果が《剣技連携》だからな。キリトが使うものに比べればパターンも限定的だけど」

キリト「けれど攻防を両立しているって言うのは強力だっただろ？」

ミスト「ところがダメージカット率が低いんだよ、1ヶタってなんだ1ヶタって。気休めにしかならないじゃないか」

アスナ「確かに盾を持つなら、ダメージカットはやっぱり高いほうが良いよね。そう考えると防御よりも攻撃特化の傾向になるかな」

ミスト「なんだかんだで助けられてきたのは事実だったけどな。それじゃあ次のシーン行くか」

第7話、「黒幕登場」より。

「あの……これは？」

「蕎麦……のような物だ。引越し蕎麦という風習があるだろう？」

「いや……ええ」

確かにそんな風習が日本にはあると聞くけど。けど、「蕎麦のような物」ってなんだ？

「見た目は蕎麦だが、めんつゆがないとやはりね……鰹出汁や昆布出汁もいい、合わせ出汁でも構わない。しかし……やはり醤油がなければそれは『蕎麦のような物』にしかないんだよっ！」

え。何これ。なんなのこれ。急に熱く語りだしたヒースクリフに俺も後ろのアスナも完全に面食らっている。

「この間はラーメンのようでラーメンでない微妙な料理を食べたが、あれはひどかった……もし、醤油があればと思わずには……くっ」

拳を握り締めて歯を噛み締めるヒースクリフ。顔を背けた際に、一瞬きらりと光る雫が見えたのは気のせいだと思いたい。

「そう言う訳で、めんつゆがなければこの蕎麦も微妙な物にしかないが……許してくれ、伝統と言う物は大事なのだと伝えたいのだよ」

「えっと……これはどうもご丁寧に」

内心ヒースクリフのキャラに引きつつ、ザルにこんもりと盛られた蕎麦を受け取る。

アスナ「団長……ここでもやっぱりキャラ崩壊が」

ミスト「ここでは拡大解釈して麺類全般が好きって解釈したから、引越しソバを持ってきたんだよな」

キリト「振り返ってみると、こんなのがラスボスって言うのも複雑だったよなあ……」

ミスト「ああ。そして俺とアスナ、ヒースクリフは対立する宿命にある」

アスナ「うん。いつかはきのこが最強って思い知らせてあげるから」

ミスト「たけのこが最強に決まってるだろ、常識的に考えて」

ミスト&アスナ「むむむ……っ」

キリト「そんなことでデュエルを始めようとするなよっ！ つ、次のシーンはこれだ！」

第14話、「ぶつかり合う想い」より。

「お前だってシリカと向こうで会いたいだろう!!」

「……そうか」

俺の想いが届いたのか、ミストは剣を下ろして俯く。

……分かって、くれたのか。

「……そうだよな。お前ならきつと、そう言うだろうな」

「ミスト……!」

通じてくれたと思った俺はほっとして安堵の表情を浮かべる。

けれど——顔を上げたミストの瞳には、冷徹な色がはっきりと宿っていた。

「なら、ここでヒースクリフを殺させるわけにはいかない」

「え……?」

はっきりと拒絶の言葉を告げられ、俺は一瞬その意味が分からず呆ける。

「どう……どう言うことだ。なんでそんな……」

「お前の言葉が全てだ。俺とお前の願いは、絶対に相容れることはない」

「相容れないって……なんだよ、なんなんだよ！ どうしてそこまで

ヒースクリフに肩入れする！ お前の願いつて何なんだ!!!」

「言つたところで理解されないし、何も変わらない。——構えろキリト。俺は……お前の、敵だ」

キリト「俺とミストの本気の戦いの始まりの所だな」

アスナ「この時の私たちは何も知らなかったけど、後になって団長から話を聞いてようやくミスト君の言葉の意味が理解できたんだよね」

ミスト「そうだろうそうだろう。「俺とお前の願いは、絶対に相容れることはない」は、俺の名台詞100選に入れてもいいレベルだと自負してる」

キリト「結果的に俺がミストに譲ってもらう形で勝ったけど……あのまま続けていたら俺が負けていたからな」

ミスト「戦う前に精神攻撃で徹底的に動揺させておいたからな。メンタルが弱いキリトには有効な戦術だった」

アスナ「そこまで狙ってたんだ……ミスト君あざとい」

キリト「で、でも万全な状態だったら俺が勝ってたからな、きつと！」

ミスト「どうかねえ。戦ってる最中も言葉責めって言う選択肢があつたし」

キリト「純粹に剣の腕で競えよ……」

ミスト「真正面から無策で言ったら勝てるわけないじゃん」

アスナ「あ……あはは……こういう話聞くとあのシーンが凄く残念に見えるのはなんでだろう。以上、プレイバックのコーナーでした……」

アンケート結果発表オオオ！

ミスト「さーて長らくお待ちせしました、前座は終了して本題本命、アンケートの集計結果です！」

キリト「前回のユニークスキルアンケートと比較しても圧倒的多数の投票！ やっぱり皆、あの展開が衝撃的だったからか少しでもハッピーエンドになってほしいと言う思いが多かったみたいだ」

ミスト「だけどそうは問屋が卸さないのがウチの作者クオリティ。結果発表の前に、アンケートの内容をさらりとおさらいするか」

1. 復活ルート：シリカがかわいそうだからフェアリー・ダンスで奇跡の復活！

2. 帰還ルート：ミストがかわいそうだからこのまま現実世界へ帰還！

3. 延長戦ルート：がんばってインフィニティ・モーメント編、ホロウ・フラグメント編を駆け抜ける！

4. IFルート？：んなことよりSAOキャラで男子高校生の日常やろうぜ！

アスナ「見事なまでにハッピーエンドに相当するのではない……強いと言えば4、になるのかな」

キリト「でもこれ、完全なるネタだから……ハッピーエンドなのかすらも怪しい」

ミスト「そもそも4は皆はっちゃけてふざけてしまう内容だからなあ。特にキリトがボコられたり」

キリト「なんでっ!? まだ俺台本渡されてないけど、俺殴られるのか!?!」

ミスト「だってほら、おふらいんで散々殴られてるじゃん」

キリト「あれは不可抗力だああ!」

アスナ「大半はキリト君の自業自得でしょ。話を進めるよ、今回の投票数は重複なしで26の返信があり、合計40票が集まりました」

ミスト「作者的には1人1票1つて考えていたらまさかの複数票が入ってかなり混乱したが、個別にカウントしたらしい。ちゃんと説明に書いておかないとこうなるんだよ」

キリト「そして、投票結果がこれだ」

1. 復活ルート：17

2. 帰還ルート：7

3. 延長戦ルート：12

4. IFルート？：4

アスナ「結果、1の復活ルートがエピローグとして決定しました!」

ミスト「意外にも4に票が入ったのが驚きだったな。あと3もさりげなく1の次に多いし」

キリト「皆かなり悩んでいたからな。「世界統合して再会を！」なんて声もあつたし」

ミスト「けどあの作者はそんなつもり毛頭ない（キリツ）」

キリト「まさに外道……」

アスナ「でもミスト君、これからどうなるの？」

ミスト「んー、とりあえず子安……じゃない、ゲ須郷と台本あわせしなきゃな。俺てつきり帰還ルート行くんじゃないかと思つて台本読んでいたから」

キリト「おい、それってシリカと離別するんじゃないか。お前は良かったのかよ？」

ミスト「いやいや、作者も言つてただろ？ 一握りの救いは用意してあるつて。何も絶望ばかりではなかつたわけだ。具体的にはネタバレするから回避だけど」

アスナ「ミスト君的には、どのルートが良かったの？」

ミスト「後腐れないならやつぱり3かなあ。ヒースクリフとの決着も付けられるし、皆無事に現実に帰すことが出来たし。俺にとつてのハッピーエンドはこれかも」

キリト「なんというか……随分潔いんだな」

ミスト「だつて散々あんなことやつたんだからさ、これ以上多くは望まないつて。むしろまだ生きていたつてだけで十分奇跡なんだからさ、ならその奇跡を最大限活用して皆を助けないと」

アスナ「でも……ねえ？」

キリト「ああ……」

ミスト「じゃあなんだ？ 4を選んでキリトがサチにボコボコにされたり、アスナが鬼の副長改めてアークデーモンと呼ばれて恐れられるような話をしたいのか？ よし、そこまで言うならヒースクリフと打ち合わせしてくる」

キリト「ちよつと待て！ なんだその話!？」

アスナ「私さりげなく扱い酷くない!？」

ミスト「だって……キリトはキリコだし、アスナはバーサクヒーラーだし……」

アスナ「まだALLOもGGOもやってないからネタバレ禁止！」

ミスト「えー。原作ネタバレなんてしても問題ないだろ。アニメもマザーズ・ロザリオがもうすぐ終わるし。アレとかコレとかソレとか出したって」

キリト「待てミスト。色んな方面からお叱り受けるから勘弁してくれ」

ミスト「へいへーい」

えんδειーんぐ

アスナ「エンディングのお時間になりました。はあ……なんだか今までよりも1番疲れた気がするよ」

ミスト「そうか？ 俺は結構楽しんだけど」

キリト「お前のフォローに回ったせいで俺たち疲れたんだよ……お前キャラ崩壊したんじゃないか？」

ミスト「シリアスぶっ通しだった反動、かもなあ。あと死んで途中で一番終わった反動もあるかも。っていうかシリアスなのって大変なんだよ！ しかもほぼ1人だし！ なに俺、某ミツザネさんですか!?!」

キリト「そう言われると似ている点が無くもないけど……この場合残ったのが俺だから、俺がそのポジションか？ いや……」

アスナ「2人とも、話はその位にしてよ。大事な予告があるんだよ？」

ミスト「あ。そう言えばそうだったけ。エピソードの予告だったっけな」

キリト「復活ルートだと全3話という驚異的な短さに……いや、エピソードとしては長いかもしれないけど、フェアリー・ダンス編を考えると3話で纏めるってある意味チャレンジャーだよな」

ミスト「だって俺出てくるのフェアリー・ダンスの最後の最後だし」
アスナ「私もちゃんと出てくるの最後の方だからね……」

キリト「何だろう、2人から恨みがましい目で見られている気がする……そ、それじゃあ予告をどうぞー！」

——ミストを倒し、ヒースクリフとの最終決戦に辛うじて勝利した俺は、現実世界へ帰還することが出来た。

けれど胸に残る喪失感が消える事はない。一緒に帰ってこられたはずのアスナは目を覚まさないまま……アスナだけではなく、他にも300人のプレイヤーが原因不明のまま眠っていた。

そんな時、ある1通のメールが再び仮想世界へ踏み込むきっかけになる。

たった1つの手がかりを求め、偶然知り合った女の子と共に目指す世界樹。そしてその世界の真実を知り、俺は——

「なんで……なんでなんだ」

信じたくなかった。認めたくなかった。

ずっと後悔していたんだ。お前を殺してしまった事を。

「どうして……どうしてお前がここにいる！ どうしてその男といふんだ！」

——ミストツッ！」

アスナを取り戻そうとする俺に、過去からのシ者が片翼を広げ襲い掛かる。

ミスト「……あれ？ 俺復活と言いつつメインキリトじゃん！」

キリト「ああ。俺の立ち直りとミストの復活がテーマらしいから」

アスナ「ここまで来るともう完全にタイトル詐欺になってきたよね、話の内容」

ミスト「……そう言えばシ者ってエ〇ッアっぽいな」

キリト「「死者」と「使者」をかけてるらしいからな」

アスナ「では、エピソードが出来上がるまでしばらくお待ちください」

い！」

ミスト「……今年中は無理だろうな」
ぐふつ。

復活ルートに進むそうです？

復活ルート（フェアリー・ダンス編）第1話 飛翔・片翼の天使

フェアリー・ダンス編

第1話 飛翔：片翼の天使

灯りもない漆黒の空間。

だがそこに、突如光が灯り全景を露にする。

円柱状にくり貫かれた空間は、壁にステンドグラスのようなパネルがまるでハチの巣のように張り付き、それが遙か上空まで続いていた。

そのガラスの1つが光り、中から白銀の甲冑を帯びた人型のモンスターがポップし、それに続くように同系のモンスターが続々と姿を見せる。

次第には空を埋め尽くすほど増殖し、それを見ただけで相手の戦意を失わせるに十分な数になった。

だが——それでも。

地上にただ1人佇んでいた人物は空を見上げ、何の恐れも、迷いも抱かず飛び立つ。

襲い掛かる白銀の騎士。

しかしその刃よりも遙かに早く鎧ごと騎士の体を刃が断ち切り、立て続けに3体の騎士が両断される。

騎士達が後方から放つ矢を掻い潜ってその体を剣で貫き、背後から剣を構えて迫った騎士へ振り向きざまに剣を蹴りで弾き、左腕で頭を掴むと爆発で消し飛ばしてしまった。

倒した敵に目もくれず、翼を羽ばたかせ新たな獲物へと襲い掛かる。

道中、雨のように降り注ぐ矢を赤く光り輝く左腕を振り被り、いくつもの炎の弾丸を飛ばして相殺し、生まれた隙間を縫うように潜り抜

けて何体もの騎士を切り伏せていく。

悪鬼羅刹……阿修羅、狂戦士……その光景を見れば思わずそんな言葉が出てくるだろう。

だがこの場にはたった1人で数え切れないほどの騎士の軍勢に挑む剣士と、圧倒的な物量が意味を成さない騎士団たちの2つの勢力しかない。

誰が見ても勝てるわけがない状況を覆す剣士も異常だが、何よりも異常なのは剣士の表情だ。

汗ひとつ掻かず、眉ひとつ動かさず、まるで能面を被っているかのように淡々と騎士たちを倒していく姿は異様としか言いようがない。しかし……次第に数の暴力に剣士は僅かではあったが押されてくる。どれだけ倒してもそのたびに騎士たちは復活し、終わりが見えない。

囲まれ、四方八方から剣が、矢が息つく暇もなく襲い掛かり、次第に防戦を強いられる。

すると、剣士は何を思ったのか高度を下げて地上に降りてしまった。

そして——顔を上げ、左手を虚空へ突き出す。

刹那、空間が歪んだかと思うと空を覆っていた騎士たちが地面に引き寄せられるかのように次々と地上に落下し、なんとか動こうともがくがまともに体を動かす事すら出来ずにいた。

ただ1人、それをしたであろう剣士は周囲の影響を受けず、ふわりと空に浮かび上がり一気に上まで飛翔する。

アリほどのサイズに見えるほどの高度まで上ったあと、剣士は無表情のまま左手を上げ、ゆっくりと眼下へと下ろしていった。

地上と、そして剣士の頭上に緋色の魔法陣が浮かび上がったかと思うと——その狭間から激しい紫色の瘴気と、荒れ狂う稲妻が噴出し騎士たちを焼き尽くしていく。

魔法陣が消えた頃には残っている騎士は1人としておらず、その空間には空中に佇む剣士1人だけが残されていた。

《デモンストレーション終了。守護騎士生成を一時停止》

《デモンストレーション終了。守護騎士生成を一時停止》

アナウンズと共に空間の明かりが落ちる。

戦闘の一部始終を見ていた金髪の男は、圧倒的な結果に満足そうに頷いた。

「中々のものじゃないか。あれだけの守護騎士を壊滅にまで追い込むなんて」

「けど、少々強くすぎたんじゃないですか？」

同じく状況を見ていた1人……というよりは1匹——例えるなら触手をはやしたナメクジみたいな姿をした化け物だった——が、その結果に一応は進言しておいた。

……もつとも、へらへらと面白おかしく笑っている様子から本気で言っていない事は丸分かりだが。

「いいじゃないか。『グランドクエストに新たに登場した強大なボス。片翼の剣士』なんて、中々ひきつけられそうなキャッチコピーだろう？ 倒せば強力な装備品をドロップできるって付け加えておけば群がるだろうさ」

「倒させる気なんて全然ないじゃない癖に」

「そのためにわざわざワグスタータスを上限一杯まで引き上げているんだからなあ。とは言え『これ』の出自も関係しているんだろうが……いやあ強いこと強いこと。電脳さまさまだ」

「貴重なデータも取れたことですからねえ。頭が上がりませんよ。それに、こうして馬鹿な連中の遊び相手にもなってくれるんですから」「まったくだ。あつははははは！」

マイクがオンになったまま、会話が丸聞こえだと言うのに2人の男は見下すかのような発言をやめる気配はない。

そんな言葉を放たれれば誰だつて怒りを露にするはずだが、剣士は人形のように無表情のままですの場に佇んでいた。

「はははっ……さて、デモンストレーションも終わったことだし、さっさこれを戻してメンテナンス作業に移ってくれよ。メンテナンスが遅れてクレーム付けられると面倒だ」

「分かりました」

ナメクジのような怪物に男は言い残すと、モニターしていた部屋から出て行くようにする。

しかし、最後に顔だけを再びモニターに向けた。

「裏切りの剣士……か。ま、精々客引きになつてくれたまえ」

皮肉るように呟き、今度こそ男は部屋を後にする。

モニターの中で未だに空に佇む剣士が、その背から生える漆黒の翼を羽ばたかせた。

復活ルート（フェアリー・ダンス編）第2話 再臨・片翼の天使

フェアリー・ダンス編

第2話 再臨：片翼の天使

「くっ…………ぐ、う…………っ」

「キ…キリト…君…」

両腕に力を込めて起き上がろうともがくが、目に見えない力はいっそう強く俺に押しかかってきた。

「（ようやく…：ようやくここまで来たっていうのに…：…）」

目の前では同じように地面に押し付けられてもがくアスナの姿がある。

多くの人たちの助けを借りて、ようやくこの世界に囚われていたアスナを見つけ出してここまで来れた。

あと少しで彼女を帰せるのに、こんな所で…：…！

「（けど…：この力は…：…）」

かつて1度だけ、似たような攻撃を受けた事がある。

俺の考えが正しければ、これは…：…！

「へえ〜。重力魔法に耐えるとはやるじゃないか、ゴキブリ君」

聞き覚えのある声から降ってきて、俺はどうにか顔を上げた。

いつの間そこに居たのか、王冠を頭につけて金髪を肩の辺りにまで伸ばした男の姿がある。

「お前…：須郷か！」

「この世界でそう呼んでもらっては困るなあ。妖精王オベイロン陛下と…：…そう呼べえッ！」

「あぐっ！」

頭に蹴りを入れられ、鈍い衝撃が走る。

そのままオベイロンと名乗った須郷は、靴底を押し付けるように俺の頭を踏みしめてきた。

「どうだい？ ろくに動けないだろう。次のアップデートで導入予定の1つ、重力魔法だ。お気に召したかなあ？」

「やめなさい……卑怯者！」

アスナの抗議に須郷は耳を貸す気も無く、面白おかしく笑うと1人で勝手に語りだした。

このアルヴヘイム・オンラインの正体は300人に及ぶ元SAOPレイヤーを実験体として思考・記憶の操作技術を完成させること。

人の魂の直接制御なんて神の領域に踏み込もうとしていた。

当然そんな非合法的な人体実験、赦されるはずがない。そのための隠れ蓑がALOと言う世界だった。

「あなたのした事は赦されないわよ……絶対に！」

「釣れないなあそんな事。むしろ僕は君たちにとつて感謝される存在なのに」

「どういう……ことだ！」

「思考・記憶の操作技術と平行して、僕はもう1つの実験を行っていたんだよ。もつとも、それはいくつもの偶然が重なった結果なんだけどね。……それが——」

『不老不死』——須郷の言葉に俺もアスナも耳を疑った。

かつて多くの人間がそれを求め、結局手に入れることができなかつたもの。そもそもそんなものが現実に存在するわけがない。

「ところがあつたんだよ、不老不死と言うものはね！ 現実の肉体と言う脆弱な器を捨て、電脳世界で永遠に行き続ける！ これが僕の見出した不老不死の技術さ」

「そんなこと……ある、わけがない！」

「あつたんだよなあ、それが。むしろ君たちならよく知っているんじゃないかな？」

「なんですって……？」

思わぬ須郷の言葉に俺たちは目を見開く。

その反応がよほど面白かったのか、須郷は狂ったように笑い出した。

「あつひやひやひや！ 案外冷たいんだねえ君たちは！ これじゃあ

出てきてもらっても浮かばれないなあ」

「何を……何を言っているんだ、お前は……」

「せっかちな桐ヶ谷君……いや、ここではキリト君と呼ぼうか。――

――じゃあ、彼に出てきてもらおうか。感動の！ 衝撃の！ 悲劇の!!!

「再会だアッ！」

腕の上に突き出し、パチンツと指を鳴らす。

……けど何も起きる様子はない、そう思った瞬間。

――空から闇のように黒い羽が舞い散った。

思わず上を見上げると、右側の背中から漆黒の翼を生やした人影がゆっくりと降りてくる。

血のように赤いレザーコートがはためいて、その人影は地上に降り立った。

「なっ……」

「うそ……」

降り立った新たな人物の姿に俺もアスナも目を疑う。

信じられない。信じられるはずがない。

だって……だってあいつはもう、この世にいないはず。

けど目の前の人物は紛れも無くあの時の姿のままに立っている。

膝まで覆うロングブーツ、左腕は銀色に輝く鋭い突起を備えた小手、腰に下げた翼の意匠が施されたハンドガード付きの片手用直剣。

「紹介する必要はないかもしれないけど、一応しておこうか。今度のアップデートでグランドクエストに導入される新型エネミー、「片翼の墮天使」だ」

「……違う」

そいつはそんな名前じゃない。

そいつは……その男の名前は……。

「ミスト……」

「本当に……ミスト君なの……?」

「……………」

俺たちの声が聞こえていないのか、コートの男――ミストは無反応のままだった。

いや、その目は虚ろで、意思と呼べるものをまるで感じられない。

「無駄だよ無駄無駄、君たちがどれだけ呼んでも聞こえないから」

「須郷……ミストに何をした……!」

「何って助けてあげたのさ。データになって漂流していた彼を。SAOから多くコピーした影響からか、彼はここに流れ着いた。助けてやった見返りに色々調べさせてもらった……驚いたよねえ。彼、完全な電脳なんだから。あの時の感動が分かるかなあ……人類の永遠の夢だった不老不死に近づく鍵を！ 僕は手に入れたんだから!!!」

「ふざけるな……! そんなことのためにミストを……!」

あいつが……ミストがどれだけ苦しんでいたのか、知らないくせに……!

ヒースクリフから聞かされたミストの隠された秘密を聞いて、俺はミストの苦悩を、葛藤を気付いてやれなかった。

もし、もし気付いて声を掛けていれば……あんな結果にならなかったかもしれないのに。

けれど最後には、ミストは俺に全てを託して……死んだのに!

「お……まえ、だけは……!」

「へえ。重力魔法を受けてなお立ち上がるか。さすが英雄様だ。――けどね」

立ち上がり、背中の大剣を抜いて須郷に詰め寄ろうとする姿を見て、須郷はニヤニヤと笑みを浮かべ、指を鳴らした。

その瞬間、押し潰されそうな重圧が霧散し、一瞬意表を衝かれた俺はミストの剣戟で壁際まで吹き飛ばされる。

「ぐはっ!」

「キリト君! ミスト君なんで!?!」

突然ミストから攻撃をされ、アスナは目を疑う。

「無駄だよ。彼は今、僕の忠実な騎士。調べるついでに彼も思考・記憶操作技術の実験に使ってね……僕の思いのままさ」

「あなたは……どこまで卑劣なの!」

「卑劣う? 言いがかりはやめてもらいたいな。僕は彼を救い、その見返りとしてほんの少しだけ調査と検証をさせてもらっただけだよ」

「意思を奪っておいでよく言えるわ……！」

今のミストは須郷に操られた状態なんだろう。

なら……須郷を倒せばミストを正気に戻せる！

「須郷ッ!!!」

翅を展開し、壁を蹴る反動も加えて急加速して須郷を狙う。

だが須郷は避ける素振りも見せず、代わりに割り込んだミストが手にした剣で俺の剣を受け止めた。

「ああ、そうそう……言い忘れていたけど、彼……ステータスを弄ったからかなり強いよ?」

「なに……っ!」

意味深な須郷の言葉に追求しようとした瞬間、嫌な予感がして後方に飛ぶ。

銀色に輝く小手をつけた左腕が俺の頭を掴もうとして空を切った。

……今のは、今の動作は……!

あの装備は75層の時のものとまったく同じ。そして今のモーションは掴んだ相手を爆発させるソードスキル……! なら、ミストは《魔装術》を覚えたままこの世界に居るのか!?

「中々苦労したよ、彼の持っていた技を復元するのは。それで試しにグラウンドクエストの守護騎士と戦わせたら、1人で壊滅寸前まで追い込んだよ! けどエグイよねえ。使うたびに命を削るなんて。しかもそんなものに手を出す彼もバカなんじゃないの? クククッ」

「お前……!」

ミストのことを何も知らないくせに……そう叫びたかった俺だったが、間合いを詰めたミストが突き出した剣を弾くので気が逸れた。どうすればいい……須郷を倒すにはミストをどうにかしないといけない。けど簡単に道を譲ってはくれないだろう。

考えを巡らせる間にもミストは仕掛けてくる。

左手を開いたかと思うと、そこへ光の粒子が集まって歪な、それでも「剣」とはつきり認識できる形状へ変化し、ミストはそれを掴んで構えた。

光の剣……《二刀流》のスキルを再現するためのスキルか! ヒー

スクリフの言っていた事は本当だったらしい。

今の俺は取り回しに欠ける大剣一本。それでどうにか二刀流の攻撃速度に食らいつくが……！

「くっ……！」

その反応速度はS A O時代の俺を凌駕しうるかもしれない。ステータスを弄られた影響か、あるいはミスト自身に何の躊躇いもないからか。

「さて、向こうが楽しんでる間にこっちも楽しいパーティーを始めようか」

俺がミストに翻弄されている間に、須郷はどこかから出した鎖にアスナを繋ぎ、そのまま引つ張り上げて強引に爪先立ちにさせる。

「やめろッ！ アスナに手を出すなッ!!」

「ンン〜？ ああ、ごめんごめん。そっちももつと盛り上げないといけないなあ。システムコマンド！ ペインアブソーバー、レベル10から8に変更！」

「あぐ…っ！」

須郷が何かのパラメータを操作したかと思うと、ミストの一閃が俺の頬を浅く斬った瞬間、今まで以上の激痛が走った。

「痛いだろう!? 段階的に強くしてやるよ！ もつとも、レベル3以下にすると現実の肉体にも影響があるようだが……ソレは関係ないよねえ？ だって生きてないんだし！」

「ふざけ…があっ！」

どこまでミストを侮辱すれば気が済むのか、怒りと激痛に顔を歪めた俺へミストは更に腹へ膝蹴りを打ち込んでくる。

「ミス…ト…！…！…！ 頼む…！…！…！ 思い出してくれ！」

「……………」

痛みを堪えながらも必死に呼びかけるが、ミストは虚ろな目で俺を見遣ったかと思うと、無造作に左下から斬り上げる。

一気に3割近くまでHPが吹き飛び、今まで以上の激痛に意識が刈り取られそうになる。

だが、ミストはなおも攻撃をやめる気配は無く……俺の頭を掴む

と、胸に剣を突き立ててそのまま壁際へ叩きつけた。

「——これは、報いなのか。」

薄れていく意識の中で、ぼんやりと思った。

あの時なものも知らないままミストを殺した、その報い。

大切な人を目の前で辱められる。そしてそれに手を貸すのがこの手で殺したと思っていた、意思を奪われ操り人形にされたミスト。

ゲームの世界なら俺は最強の勇者で……。

「(いや……勇者なんかじゃない)」

少なくともあの時のミストは俺よりも遥かに強かった。

それはステータス的な強さじゃない。強い覚悟を宿したあの剣は、あの瞬間確かに俺を凌駕していたから。

「(俺には何の力も……覚悟もない……)」

だから、この結末は当然の結果なんだ。

アスナを助け出す事もできず、俺はミストに殺される——。

『——逃げ出すのか?』

遠くで声が聞こえる。

『——逃げ出すのか?』

もう1度、今度ははつきりと声が聞こえた。

それは抑揚が無く、俺の心が語りかけるようだった。

「(そうじゃない……現実を認識するんだ)」

『——屈服するのかわ? かつて否定したシステムの力に』

「(仕方ないじゃないか……。俺はプレイヤーで、奴はゲームマスターなんだ)」

『——それはあの戦いを、ひいては彼の託した物を汚す言葉だ』

更にはつきりと聞こえる声。それは俺の中からじゃない……。

気付けば、目の前に誰かが立っていた。ミストではなく……。

『私にシステムを上回る人間の意志の力を知らしめ、未来の可能性を悟らせた我々の戦いを……』

両手をポケットに突っ込んだ白衣の男……。

「お前は……」

『——顔を上げたまえ、キリト君』

白い世界が砕け散る中で、あの男は確かにそう言った。

「(——ああ、そうだよな)」

気付けば目の前にミストの顔がある。

さっきの光景が何なのか、今はどうでもいい事だ。

「確かに痛い……でも……!」

所詮こんなものデータ上のもの。

あの時のミストの剣はもっと重く、魂に響いてきた!

「ぐっ!」

「……!?!」

ミストの腕を掴み、左手をきつく握り締めて顔を殴りつける。

衝撃でミストは剣から手を離し、その隙に俺は剣を引き抜いて地面に降り立った。

「やれやれ……妙なバグが残ってるなあア!?!」

須郷はアスナを辱めるのを止め、俺に近づいて腕を振り被る。

殴り飛ばさそうとした須郷の腕を、俺は逆に掴んで受け止めた。

「んなっ!?!」

「システムログイン……ID『ヒースクリフ』」

「な……なに!?! なんだ、そのIDは!」

自分よりも高位のIDを前に、須郷は始めて焦ったような表情を見せた。

「システムコマンド、管理者権限変更。ID『オベイロン』をレベル1に」

「ぼ、僕より高位のIDだとお!? ありえない! 僕は支配者! 創造者だぞ!!! この世界の王!!!」

「なにが王だ……」

未だに事実を認めようとしないう須郷に小さく吐き捨て、俺は顔を上げる。

待ってる……。今、お前を呪縛から解放してやる!

「システムコマンド! エネミー「片翼の墮天使」の拘束を完全解放!

戻って来い! ミスト!!!」

「――戻って来い！ ミスト!!!」

「……へあ?」

突然誰かに呼ばれ、思わず変な声を出してしまった。

な、なんだここ? あれ? んんん???

右を見ても左を見ても見知らぬ場所で、俺は首を傾げる。

えっと……なんだ? どうなってんだ? 確か俺って……。

「ミスト!」

「はい?」

名を呼ばれて、条件反射的に返事をしてしまった。

下を見遣れば、黒いコートを着たツンツンヘアーの男と、あと何かわめいているホストみたいな風体の金髪、あと鎖につながれた女の子。なんだこれ?

「よかった……正気に戻ったんだな」

「正気? えっと……おたく、誰? なんで俺の名前知ってるの?」

「お、俺だよ、俺! キリト! そこにいるのはアスナ!」

「キリトオ? アスナア? 冗談も休み休み言えって」

いやいやいや、何この人俺の友人の名前語ってるんだ。新手の詐欺か?

「本当だ! 信じてくれ!」

「信じてくれて言われてもなあ……俺の知ってるキリトはそんなツンツンヘアーじゃないし、何より……」

「……何より?」

「俺の知ってるアスナはそんな趣味ない」

「え……っ!!!」

いったい何をやっていったのかは知らないが、俺は別に特殊な性癖の持ち主ではないのでそういう物に興味はないです。だから常識的に考えて目を逸らすのが普通でしょう。

俺の指摘によろやくアスナを語る謎の女子も自分の格好に気付いたのか、顔を真っ赤にしてなんとか露出を減らそうとじたばたしている。けど鎖に繋がれているからそんなことできるはずがない。

「ごっ！ これは色々複雑な事情があるの！ っていうか半分ミス
ト君の責任なんだよ!？」

「いや、そんなこと言われなくても……気付いたらこんな場所に居た
んですし。そもそもなんで俺空飛んでるの？ 何この翼!？」

「……さっきまでの空気見事にぶち壊してくれたよなあ」

キリトと名乗った男が呆れて苦笑いを浮かべている。と言うか、右
も左も分からないんだからそんなこと言われたって仕方がない。

「あー。【フォロー・ウインド】を使っけて良かった……っ」と

短時間だがユニークスキル《飛行》と同じ状態になれるスキルを
使った経験が役に立って、どうにか地面に降り立つ。

しかし何なんだよ、この状況？ だって俺、最後の最後にキリトを
殺すの躊躇って刺し貫かれたはずなのに。あとなんだ？ 見覚えの
ないゲージがHPの下にあるんだが。MP？ なんて？

「で？ 改めてお前たち誰だ？ なんで俺の名前を知っていて、キリ
トとアスナの名前を騙るんだ？」

「まだ信じてくれないんだ……」

「何か……証拠になりそうなものがあればいいんだけど」

証拠、か……そうだな。

もし2人が俺の知っているキリトとアスナなら、俺の出す質問に答
えられるはずだけど。

「じゃあ質問。俺の彼女の名前は？」

「シリカ（ちゃん）ー!」

「……正解。だったら、シリカのタイムしたフェザーリドラの名前は
？」

「ピナ!」

「……正解」

見事にハモッて2人は言い当て、さすがの俺も信用せざるを得な
い。

えーつと……つまり……。

「……本当に本人？」

「だから！ 何度も言ってるだろ！」

「だ、だって俺の知っている2人の容姿と違うし……」

「それはアバターが違うからだ！」

「ああ、なるほど」

キャラクターエディットがSAOと違うのか。そのエルフ耳とかなんなのかなあと思っていたけど、これで納得した。

「おいこらア！　いつまでコントやってるんだよ！　僕を忘れるな！！」

その時だった。痺れを切らした金髪の男が地団駄を踏みながら俺たちの会話に割り込んできたのは。

気付いた時からずつと騒いでいたし、最初は別にどうでもいい存在だったんだが、割り込まれると俺は面倒くさそうに目をやる。

「……で、なにあれ。歌舞伎町にいるホスト？」

「あいつはアスナや他の元SAOプレイヤーを仮想世界に閉じ込め、非合法的な人体実験をやっていた。そしてお前にも同じような実験をやっていたんだ」

「つまりは悪党か」

「あ、悪党だど!?　創造主である僕に向かってなんだその口の聞き方はー！」

「知るかよ。何も覚えてないんだし」

けど、この状況から1つだけ俺にもわかることがある。

それはこの男が2人を苦しめていた、ということだ。

だったらここは1発やらないといけないよな、うん。

「くそっ！　くそくそくそくそオツ！　なんで僕の言う事を聞かないんだ！　僕は、お前の救い主なんだ！　お前は僕に大きな恩があるんだぞー！」

「恩……ねえ」

「そうだ！　分かったら僕の言う事を聞いて、そいつらをぶち殺せー！」
「なるほど、大体分かった。——ところで、こんな言葉を知っているか？」

「な……なに？」

ある程度男の話聞き流して、俺は問いかけつつ左手をきつく握り

締める。

「——『恩を仇で返す』!!!!」

「あごべっ?!?!」

口角を釣り上げ、左腕を思い切り振り上げて顎を狙ったアツパーカットを放つ。

完璧な不意打ちに金髪男は反応すら出来ず、強かに顎を打ち抜かれ衝撃で一瞬だけ宙に浮いて、そのまま地面に崩れ落ちた。

「見ず知らずの相手の言葉より、知っている相手の言葉の方がよっぽど信頼できるんでな」

「お前ってやつは……」

「……でも、元のミスト君なんだよね」

振り返り、呆れる2人にふつと笑みを浮かべる。

……とりあえず、アスナさんのそれはどうにかならないのかね？

アスナを視界に入れないようにしながら呟くと、アスナは顔を真っ赤にし、キリトは顔を青くして慌てて黒い刀身の太剣を拾い上げて鎖を切り裂いて解放する。

「うう……ぐううっ！　なんでだ、なんでだよ！」

なんとか言い訳を口にしようとしたら、背後でうめき声が聞こえた。
た。

振り返ればあの金髪男が口元を抑えて蹲りながらわめき散らしている。

「僕はこの世界の神なんだ！　僕の言う事を聞けよ。ポンコツがあつ！」

「違うな！　お前は盗んだんだ！　世界を、その住人を！　盗み出した玉座の上で、1人踊っていた泥棒の王だ！」

「泥棒……よく分らんが、泥棒って言うよりそれって道化じゃね？」

「ドロ……道化だと……！　このガキがあつ！」

今までの経緯から察してそんな感想が漏れたが、逆にそれは向こうの神経を逆撫でするものだったらしい。

男は顔を歪めて手を前に突き出し、叫ぶ。

「システムコマンド！　オブジェクトID、「エクスカリバー」を

「ジエネレート!!!」

「……………」

何をやるのかと警戒するが、結局何も起きずに肩透かしを食らう。けれど男はまだその事実を認められず、辺りに八つ当たりしていた。

「ミスト……これ」

「ん？ あ…………」

キリトから差し出された剣を見て、思わずはっとなる。

「テラー・オブ・ジエネシス」……俺があの世界で手に入れた最強の力。

なんでここにあるのか……そもそもなんで俺はあの時のままなのか、なんて今はいいか。

差し出された剣を受け取り、軽く振るう。何も問題はなさそうだ。

「アスナと話さなくて良いのか？」

「後で……現実世界でいくらでも話せるさ」

「……きつちり説明してもらおうからな、全部」

「ああ。俺も……お前に話したい事が山ほどあるんだ」

短いやり取りで、最大限の意思疎通を図る。

なんだか懐かしいな……2人で戦うつてのは。最初に出会ったとき以来、かも知れない。

「——システムコマンド！ オブジェクトID「エクスキャリバー」をジエネレート！」

「ぬぐっ!？」

キリトの高らかな叫びに金髪男はかなり動揺した顔を浮かべた。

頭上に小さな波紋が広がると、そこから黄金のデータが降り注ぎ、本の剣がオブジェクト化する。

黄金に輝く長剣。……エクスキャリバーって言ってたよな。ってことはあの聖剣なのか。

「コマンドーつで伝説の武器を召喚か……」

それを見て皮肉交じりに呟くと、何を思ったのかキリトは金髪男へ「エクスキャリバー」を投げ渡す。

突然投げられた「エクスキャリバー」を男はビビりながら受け止めるが、初めて剣を持ったのか腰が引けていてまともに持つ事もできないらしい。

「決着をつける時だ。泥棒の王と、鍍金の勇者の！」

「おいおい、すっかり俺の分も残してくれないと困るんだが。コイツ、俺を好き放題使っていたんだろ？」

「ああ……もちろん分かってるさ。システムコマンド、ペインアブソーバーをレベル0にッ！」

「またもキリトは管理者権限を利用して何かを変更する。」

「——これで今から受ける痛みは現実と同じものになった。逃げるなよ……あの男はどんな場面でも臆した事はなかったぞ。あの、茅場晶彦は！」

「か、かやつ、茅場アツ！ そうか……あのIDは茅場の……！ なんと、なんで死んでまで僕の邪魔をするんだよオツ!!!」

「茅場が死んだ……？」

初めて知った真実に俺は眉を潜める。

いや、ここにキリトとアスナがいる時点で悟るべきだったんだ。

ここは……この世界はSAOじゃない。別の仮想現実なのだ。あの後茅場も倒れ、皆解放された——と思っただけは簡単には簡単には転ばなかったらしい。

「……だったら茅場の協力者として、後始末くらいはしておかないとな。大口叩いて真っ先に死んだし、俺」

「ミスト……」

「気にするなよ、キリト。俺はお前のこと恨んでいないし、あの時自分が選んだ選択に後悔もしていない。強いて言えばちよつと恥ずかしかな？ あんな退場したのこのこの戻ってきて」

けどまあ、これは俺らしいといえづらいかもしれない。

だったら次にどうするか……なんて、考えるまでもない。

「来いよ、ホスト被れ。今までの俺たちにやった礼をしてやる。もちろん倍返しだ」

「……のデータごとときがアアッ！」

怒り狂った男ががむしゃらに剣を振り回す。けどそれは剣に振り回されているだけで脅威になりもしない。

余裕の笑みを浮かべながら斬撃をかわしていく。

横薙ぎの一撃を左腕の小手であっさりを受け止めてしまうと、押し返してやってよろけた所を鼻の上辺りを狙って軽く斬りつけた。

「イアツ!? い、痛いイイツ!」

「痛いだ……? お前がアスナやミストに与えた苦しみは、こんな物じゃないだろう!!!」

キリトが吠え、振り上げた大剣を男に振り下ろす。

とつさに両腕で庇おうとした男だが、キリトの剣は剣を握った男の腕を断ち切った。

「いぎやあああつ!? 手がア! 僕の手がアアツ!」

「飛べ、キリト」

「っ!」

俺がキリトの背中に向けて言ったと同時に、キリトは即座にその場から飛び、足元を大量の炎の弾丸が過ぎ去って男に殺到する。

小手調べにと《魔装術》の基本攻撃スキル、「スピット・ファイア」を使ったんだが……なんだこれは?

熟練度次第で最大発射数が増加すると言うのは知っていたが、俺の熟練度では精々20発が限界だったはず。けど今のは明らかに40発以上が発射されていた。

「なんだこれ? スキルがバグッてるのか?」

炎上する男を放置して、右手を振ってメニューを呼び出す。……が、なぜか出てこない。

「左手だ、左手!」

「左? あ、出た」

キリトに教えられるままに左手を振ると、今度こそメニューが表示される。

スキルを選択して、内容を……ってなんだこれ? 《魔装術》の熟練度がカンストしている。

《魔装術》だけでなく、《投剣》と言ったほかのスキルも熟練度がカ

ンストしており、おまけにステータスも異常なまでに高く設定されていた。これは明らかにプレイヤーの領域を超えているだろ……。

「お前をグラウンドクエストの新型エネミーに使うつもりだったらしいからな……高いのはそのせいだろう」

「人で遊びやがって……《魔装術》も仕様が変わってMP消費制にされているし」

これじゃあ真正銘、ただのチートじゃないか。いや……エネミーとして使うつもりだったなら、これくらいが良いのか？

なんにしても都合のいい手駒にしようとして、逆に自分がピンチになるとか本当に間抜けだ。

「システムコマンド。ID「オベイロン」のHPを完全回復。更に自発的ログアウトを不可」

「キリト？」

どう言うわけかキリトは男のHPを完全回復させた上に、ログアウトを不可能にさせてしまう。

意図が見えずにキリトを見つめていると、俺を見返して不敵な笑みを見せた。

「ログアウトして逃げられるのも困るだろ？」

「なるほど、確かに」

納得して男を見遣ると、すぐにでもこの場から逃げ出そうとしている姿が目に入る。

「逃がすかよっ！」

「うぐっ!？」

助走をつけて男の頭上を飛び越え、前に立ちふさがる。「テラー・オブ・ジエネシス」の切っ先を突きつけられて、男は踏みとどまった。

後ずさろうとしてもキリトが大剣を突きつけており、逃げ道は完全に封じられている。

「おい」

「ひっ!？」

「動かない方が身のためだ。ちよつとでも動けばザツクリだから……な」

脅しと同時に剣を振る。

男の頬を浅く斬り、間髪いれず肩、上腕、脇腹、太もも、脹脛と……動作の速度を上げて行きながら斬りつけていく。

それらの全ては浅い。だが、ダメージを与える事よりも恐怖を刻み込む事が目的だった。

すぐには殺さず、じっくり、ゆつくりと。襲い掛かる超高速の斬撃の嵐は少しでも動けば深く斬りつけるギリギリのラインを保ちながら。

不思議な感覚だった。以前の俺ならこんな、アスナ並みの正確さと剣速を発揮する事ができなかったと思うのに……。

「(まだ……まだだ。もつと上がる)」

なんとなく確信すると更にギアを上げる。

恐怖に顔を歪ませる男。その背後にいたキリトは俺の剣速と正確さに驚いている様子だったが、今はそんな事どうでもいい。

やがて、全身が真っ赤なダメージジェフェクトで覆われた奇妙なオブジェが出来上がった所で俺は剣を振るのをやめた。

男は恐怖を顔に貼り付けたまま、その場に崩れ落ちる。

「あ……ひ、い……」

仮想現実には失禁なんてないが、もしそんな機能があったなら男は確実に漏らしていただろう。いや、現実世界では漏らしていてもおかしくない。

「そろそろ終わらせるか？」

「お前はそれでいいのか？」

「んー……まあ、個人的にはもうちよつとこいつをボコリたい所だが、後がつかえてるからな」

「……悪い」

「気にするな。じゃあ最後にハデな花火を上げるとするか！」

ボロボロと涙を流す男の髪を掴んで強引に立ち上がらせ、そのまま上に投げ飛ばす。

浅く腰を落とし、剣を構えるとシステムがモーションを読み取り、大量のMPを代価にその技を発動させた。

「スターライト・エクスプロージョン!!!」

飛び上がり、男を斬りつけると同時に鮮やかな青白い爆発が起きる。

「あぼっ!? ぶべっ!? がべっ!?!」

更に斬り続けて行くとその度に爆発が起き、暗闇の空間を青白い光が染め上げて行った。

《魔装術》最上位剣技の1つ、「スターライト・エクスプロージョン」。爆発属性を付加した剣による超高速の11連撃。爆発は当然独立したダメージ判定を持ち合わせており、実質22連撃を与えるに等しい。

凶悪な破壊力を持ちながらも、鮮やかな青白い爆発が暗闇の中で咲くのは花火を連想させる。

「……ま、消費MP666なのは良いことなのか悪い事なのか」

最後の1撃を終えて着地してぼやくと、上から両手両足を失い、更に上半身だけの状態になった男が振ってきて、無造作に左手で掴む。

「あ……が……ああ……」

白目を剥いたもはや意識があるのかすらも怪しいが、このままで終わらせるつもりはない。

「正直、お前の事なんか知らないし、お前が具体的に俺に何をやったのかも知らん。けど……お前はキリトやアスナを苦しめた。だから――」

――地獄に落ちろ、クソヤロウ。

左腕が真っ赤に光り輝き、男を紅蓮の爆炎が跡形も残さずに焼き尽くした。

「……終わったな、これで」

「……みたいだな」

男がこの場から消滅し、辺りが静寂に包まれる。

改めて俺は、キリトとアスナと面と向かう。

……けど、今更どんな顔をして2人を見ればいいんだよ。2人を散々苦しめてきたのに。

今さっきの事だっけそうだし、あの時だっけそうだ。俺と戦う事を

拒否していたキリトを本気にさせるために、アスナを殺そうとしていたのに。

「今更遅いけど……すまなかった、2人とも。俺は——」

「……いいんだ。いいんだよ、ミスト」

謝ろうとした俺を、キリトが優しい声で留めた。

「団長が教えてくれたの。どうしてミスト君があんな事をしたのか、その理由を……それと、ミスト君の身体のことも」

「……そっか。全部知ってるのか」

アスナの言葉にそれほど驚きはしなかった。

別に伝える事を頼んでいたわけでもない。だったら善意から……と言う訳でもないだろう。

「……キリトの精神を完膚なきまでに叩きのめしたのか？」

「ああ。立ち直れないくらいにな」

その時のことを思い出し、キリトは苦笑いしながら頷く。

けどすぐに真顔に戻り、どういうつもりか深々と頭を下げてきた。

「謝らないといけないのは、俺のほうだったんだ。何も知らなかったとは言え、俺は……ミストに酷い事を言ってしまった。ヒースクリフにも指摘されたよ。『友人から『死ね』と同然の言葉を言われれば、いくら命を捨てる覚悟を持ったとしても傷つくはずだ』……って」

「キリト……いや、違う。そんなことはない！ あれは……あれは俺のわがままだった。現実にあるみんなの身体が限界に近づいているのを知っているながら、俺は自分の命を優先した。だから……」

誰が正しくて、誰が悪いのか……そんな事俺にはわからない。

「……多分、あの時の言葉は全てだったんだ。最後のあの一瞬、もう一度自分の命とみんなの……シリカの命を天秤にかけて、悩んで……やっぱり、シリカに生きていてほしいって思った。あの世界でしか生きられない俺よりも、現実の世界で生きられるシリカに」

だから最後の最後で、死んでも後悔しなかった。俺が死んでもキリトがきつと何とかしてくれると信じていたから。

「——だってのにこれじゃあカッコ悪いよな。死んだ時のために色々備えたのが馬鹿みたいだ」

「いいや……そんな事はない」

情けなくって笑う俺にキリトは首を振って否定する。そして空いていた俺の左手を掴んで、さらにアスナも上から重ねるように握ってきた。

「生きていてくれてよかった……少なくとも、俺はそう思ってるんだから」

「そうだよ。もう1度会えて嬉しいって、私も思ってるんだよ。ミスト君」

「キリト……アスナ……」

目尻をうつすらと潤ませて言ってきた2人に、思わず俺も目の奥が熱くなる。

あんな酷いことをして、裏切ってしまった俺を、2人は生きていてくれてよかったと……またあえて嬉しいと言ってくれた。

「許して……くれるのか？」

「当たり前だろ……ヒースクリフと戦うとき、お前が後押ししてくれたから俺はまた立ち上がったんだ」

「私もだよ。だって、ミスト君はただ皆と一緒にいたただけなんだよね？ そんな事知ったら、恨むなんてできないよ」

「お前ら……つとに、夫婦揃ってお人好しだな」

あんな仕打ちをしてなお、2人は俺を許してくれた。

その優しさが何よりも嬉しく、同時に眩しい。2人を直視できず、俺は手を振り払って顔を背を向けてしまう。

「ほ……ほら、俺のことなんて良いだろ、もう。早く現実世界に戻れよ」

「ああ……そうだな。アスナを向こうへ帰してやらないと」

「どうとう……終わるんだね、帰れるんだね」

アスナの言葉にキリトは相槌を打ちながら、メニューを操作して口グアウトを選択する。

「現実世界は多分もう夜だ……でも、すぐに君の病室に行くから」

「うん、待ってる。最初に会うのはキリト君が良いもの」

待ってる……か。

アスナの言葉を聞いて、俺はシリカの事を思い浮かべた。

彼女は今、どうしているだろう。……落ち込んでいるだろうな。ヒースクリフから聞いたとは言え、俺が何も言わなかったんだから。

「ミスト君」

「ん……？」

「バイバイ、また会おうね」

にっこりと笑って、全身を光り輝かせたアスナがそう口にしたのと同時に光の粒子となって消えてしまった。

「また……か。いいのかよ、またお前たちと一緒にいても」

「当たり前だ。友達だろ？」

「本当、お人好しだよな、お前ら」

「そう言うお前は、少しだけ皮肉れたよな」

「う、うっさいな……」

お前らが素直に喜んでくれるのがただ恥ずかしいだけだ。

でも、アスナを無事に助け出して……これで全部、終わったんだよな。

「ああ。後始末の方はこっちに任せろ。けど、その前に——そこにいるんだろ、ヒースクリフ」

キリトが突然、何も無い虚空へ声を掛けた。すると俺たちの上から何かが実体化し、ゆっくりと地面へ降りてくる。

「久しいな、キリト君。そしてこの姿で会うのは初めてになるな、ミスト君」

「ヒースクリフ……？」

俺たちの前に降り立った白衣の男に、俺は眉根を寄せた。

俺が知っているヒースクリフとは姿や声が違う。『茅場晶彦』本来の姿がこれか。

でもどうしてキリトはヒースクリフがここに居るって……そもそも死んだって聞いたのに。

「生きていたのか」

「そうであるとも言えるし、そうでないとも言える。私は、茅場晶彦という意識のエコー……残像だ」

「相変わらずわかりにくい事を言う人だな」

「なら分かりやすく言うと、今の私は彼……ミスト君という存在に近い存在だ」

「俺に……？」

例えに俺を引き合いに出され、少し戸惑う。

「ミスト君、以前私は、君を電脳に近い状態……と言ったのを覚えているか？」

「……ああ。確か言っていたな」

「私も今はそれと同じ状態だ。君と言う可能性を見て、私もこの姿になる決意が出来た」

「じゃあ、お前も電脳になったってことなのか？　けど待てよ、俺はあの時キリトに貫かれて死んだはずだろう？　なのにどうして生きているんだ」

そう。あの時、俺は確かに死んだ。

SAOと言う世界での死は現実での死に直結する。それは俺も例外ではなかったはずだ。

なのになんで生きている？　そもそも俺は生きているといえるのか？

「幸か不幸か、君はあの瞬間『死』を迎えたのだろう。だがそれは同時に、君の居た世界との繋がりを断ち切るきっかけにもなった。その結果、半端な電脳状態だった君は真の意味で完全な電脳と化した……と、私は考える」

「……じゃあ、俺の世界にあった俺は死んだのか？」

「それは分からない。元々死ねば元の世界に帰れるという保証すらなかった。運が良ければ君の意識は君の居た世界にある君の肉体へと戻った……という可能性もある。今ここに居る君はその時残された意識の残像か、あるいは否か……そこまでは分からないがね」

つまり今の俺は、死んだ衝撃で帰ったかもしれない意識から残った一部……かもしれない、ってことなのか。

「須郷に操られていたお前を助けるのに手を貸してくれたのが、ヒースクリフだったんだ。まあ、なんにしても礼を言っておくよ」

「礼は不要だ」

あつさりど、そし少しだけ困ったような表情を浮かべて拒否した
ヒースクリフに、キリトは不思議そうに首をかしげた。

「君と私は無償の善意が通用する仲ではなからう。もちろん代償は必
要だよ、常に」

「……何をしろというんだ？」

キリトが問い返した直後、頭上に眩い光が差し込んだ。

黄金に輝くそれはゆっくりと落ちてきて、キリトの両手に収まる。

見た目は黄金に輝く卵……といえれば良いだろうか。

「これは……？」

「それは世界の種子、《ザ・シード》だ」

「《ザ・シード》……？」

「芽吹けばどういふものか分かる。その後の判断は君に託そう。消去
し、忘れるも良し。しかし、もし君があの世界に憎しみ以外の感情を
残しているのなら……」

そこから先をヒースクリフは敢えて口にしなかった。

けど、『それを世界に広めてほしい』……なんとなくだけど、そう言
うんだと俺は感じ取る。

憎しみ以外の感情、か……。最初は悲観したけど、それでもあの世
界で過ごした日々は楽しかったな、俺は。

「では…私は行くよ」

「あ……待ってくれ！」

去ろうとしたヒースクリフに、俺はとっさに声を掛けて引き止め
る。

俺の今の状態は分かった。それには納得した。けれど……。

「俺は……俺はこれから、どうすればいいんだ？」

やるべき事、やりたい事……何も思い浮かばない。

これではまるで最初にSAOに放り出された時と同じだ。けれど
あの時は「生きて、この世界から脱出する」と言う明確な目的があっ
た。

でも……今の俺には、何も無い。

「……………それは君自身が見出し、決める事だ。ミスト君」

「俺が……見出す」

「だが、いつの日かまた会うことがあるだろう。それまで暫しの別れだ、キリト君、ミスト君」

最後にそう言い残し、ヒースクリフは地面を蹴って闇の中に紛れる。

瞬間、目の前に縦に亀裂が走り、そこから黄金の光が差し込むと一気に視界に広がった。

思わず腕を目の前に掲げてやり過ぎすと、いつの間にか見覚えのない、周囲が柵で囲まれた鳥かごのような場所に立っていた。

「ここは……………?」

「アルヴヘイム・オンラインの中だ。ユイ！ 大丈夫か!?!」

アルヴヘイム……………? どこかで聞いたことがある気がする。

それを思い出そうとしていたら、突然上から小さな女の子が姿を現したかと思うと、そのままキリトに抱きついてきた。

「パパッ!」

「ユイ！ 無事だったか!」

「はいっ! パパのナーヴギアのローカルメモリに退避したんです!」

「パ…: パパ?」

いや待てキリト。お前俺と大して歳変わらないだろう。それなのに小学生くらいの子供が居るってどういうことだ?

……………待てよ。ユイって名前にも聞き覚えがあるな。えつと……………だめだ、1度に色々な事が起こりすぎてこんがらがってる。

「おい、キリト。その子って……………」

「あ? ああ、そう言えば紹介してなかったな。この子はユイ。俺とアスナの娘だ」

「初めましてっ! ユイといます!」

「ああ……………これはどうもご丁寧に。キリトのとも……………友達の名で……す」

「なんで友達って言おうとして口籠るんだよ」

「は、恥ずかしいんだから仕方ないだろうっ!？」

不満そうに口を尖らせるキリトに、慌てて答える。

なんて言うか、あんな事をやった後だからキリトの『友達』とはつきり答えづらかった。

そんな俺たちのやり取りを見て、ユイと名乗った腰まで伸ばした黒髪が印象的なワンピースを着た女の子はくすくすと笑う。

「2人とも、とっても仲良しですよね」

「まあな？」

「でも、1番仲良しなのはママじゃないとダメですよ？ パパ」

「ちよつと待て！ 変な風に捉えないでくれるか!？」

ミスキリつて誰得なんです!？ そんなの夏と冬の大イベントくらいでしか需要が……あつてたまるか！

「パパとママから聞いていた通りですね、ミストさんって」

「だろ？ やっぱりミストはこっちの方が良いって」

「な……なんか納得いかねえ」

果たして2人がこの子にどんな話を吹き込んでいたかは知らないが、俺の名誉だけは守られているはずだと信じた。

「……でも真面目な話、どうなるんだろうな。この世界も、ミストのことも」

「……正直、色々起こりすぎて整理して考える時間がほしいって言うのが俺の本音だ」

「それでしたら、パパのナーヴギアにしばらく移るのはどうでしょう？ 今のパパには管理者権限が残ってますから」

「ユイをカーディナルから切り離れたのと同じ要領か……俺は構わないけど、ミストはどうする?..」

「良いのかよ、そこまで厄介になっても」

「今更遠慮なんてする必要ないだろ。それに、ユイの話し相手もしてもらえるし」

「はいっ！ 私もミストさんの考えを纏めるお手伝いが出来ますよ!..」

それは何よりもありがたい話だ。

……しばらくの間俺は考え込み、考えを纏めると頷いた。

「じゃあ……少しの間、厄介になる」

「ああ。じゃあちよつと待ってくれ、今ミストをシステムから完全に切り離すから。ユイ、ちよつと手伝ってくれ」

「はいっ」

言いつつ管理者用のメニューを呼び出したキリトは、そこから俺をこの世界から切り離そうと試みる。

それを横目に見つつ、俺は外に広がる景色に目をやった。

正確な時間は分からないが、茜色の空を考えると夕方なんだろう。

俺がアインクラッドで死んで、どれだけの時間が経ったんだろう

……調べることもか、考える事が沢山ありすぎる。

「これでよし……と。完全にシステムから独立されたな。ミスト、終わったぞ」

「……………」

「ミストさん？ どうしました？」

「あ？ あ、ああ。なんでもない」

ユイちゃんに呼ばれて我に返る。少しだけ感傷に浸ってしまったみたいだ。らしくないよな、こんなの。

「じゃあ俺は、ログアウトしたらアスナの病室まで行ってくるから」

「そうだな。早く会ってやれ……」

「……？ どうした？」

「いや……杞憂だったら良いけど、あのホスト被れって強制ログアウトされたんだろ？」

「ホスト……須郷の事か。HPが全損したのならそうだろうな」

「だったらキリトに復讐する事だって考えられるし、用心はして置けよ。スタンガンの1つくらいは持ってけ」

「そんな物騒なものはないけど……でもミストの言うとおりでな、用心する」

俺の言葉に頷き、キリトはログアウト画面を呼び出す。

「ユイ、ミストの事をよろしくな」

「任せてくださいー！」

「じゃあミスト、またな」

「……ああ、また」

別れの言葉を口にして「本当にログアウトしますか？」の確認に○をタップして、キリトは光に包まれていく。

その光に俺たちも巻き込まれ、世界は暗転したのだった。

復活ルート（フェアリー・ダンス編）第3話 再会・片翼の――

フェアリー・ダンス編

第3話 再会：片翼の――

あの後現実世界では、当然と言えば当然なんだが大騒ぎになっていったらしい。

まずアスナに会いに行つたキリトが俺たちがフルボッコしたホスト被れに襲われて、俺の忠告を受けて持って来た竹刀（キリトの家、剣道場があるんだと）で撃退、当然お縄についた。

最初は茅場に全て擦り付けようとしていたがそうは問屋が卸さず、部下が重要参考人として連れてこられてあっさり自供。

あの世界――アルヴヘイム・オンラインに囚われていた元S A Oプレイヤー全員は無事ログアウトされ、人体実験中の記憶や後遺症も残っておらず、現在も元気にリハビリをして社会復帰を目指しているらしい。

だが後に「ALO事件」と呼ばれるようになったこの出来事でVRMMOと言うジャンルは回復不可能な打撃を被り、アスナの父親がCEOを務めていた「レクト」の子会社で、ALOを運営していた「レクト・プログレス」は解散。本社も社長以下経営陣は引責辞任してしまふ。

当然ALOも運営は中止。他にも展開されていたVRMMOも中止は免れないだろう……はずだった。

2025年 5月9日。ALO内、ユグドラシルシティ。

「……で、いいんだよな」

キリトに指示された場所までやって来て、伝えられた場所と現在位置が間違っていないかを確認して、俺はきよろきよろと周りを見た。

「とにかくここまで来てくれ」と理由を告げないままALOに放り

込まれ、なんなんだよ……とも思ったが、特に用事もなかったし、いつまでも居候するのも悪いと思っていたから良いけども。

「……やっぱり、この姿にはまだ慣れないなあ」

ぼやきながら「紫」の前髪を摘んで弄る。このエルフ耳といい、キャラを作ったばかりだから違和感が拭えない。そもそも妖精ってなんだよ、妖精って。むしろ経歴的に悪魔ポジションじゃないか？ 俺。

いや、ALOの設定的には仕方ないけどさ。なら今の俺の状態を考えると「電子の妖精」ですか。バカばっか。

「……ま、別にいいけどな」

見上げれば太陽が眩しく輝いている。

ここが仮想世界だとしても、その眩しさは本物となんら変わらないだろう。

——この仮想現実^界は、今も変わらずここにある。

それはキリトが茅場から託された世界の種子……《ザ・シード》のおかげだった。

《ザ・シード》とは茅場が開発したフルダイブ型VRMMO環境を動かすプログラムパッケージで、そこそこ回線の太いサーバーを用意して《ザ・シード》をダウンロードすれば、誰でもネット上に異世界を作ることができるんだという。

キリトはそれを、エギルに依頼して誰もが《ザ・シード》を使えるように世界中のサーバーにアップロードした。

これによって死に絶えるはずだったVRMMOは蘇り、ALOも「レクト」から全ゲームデータを無料同然で譲り受けたベンチャー企業「ユーミル」によって《ザ・シード》規格のVRMMORPGとして復活した。

それだけに留まらず、《ザ・シード》によって大小様々な仮想世界が生まれ、それらは同じ《ザ・シード》規格のVRMMOなら、あるVRMMOで作ったキャラクターデータを別のVRMMOにコンバートする事ができる機能を持っている。

俺もまた、このALOでキャラクターを新規に作成した。このALOは他と違ってSAOのキャラクターデータも引き継ぐ事ができ、一

応それを引き継いだ上で闇妖精族インプを選択している。

この世界でキリトと再会した時にはステータスが異常なまでに強化されていたが、システムから切り離されたら元に戻っていたのは喜ぶべきか、嘆くべきか……ユニークスキルもないらしいから《魔装術》も消えているし。

……でも考えてみれば、結果的にこれでよかったのかもしれない。あの力はもう必要ない。友達と本気で殺しあう理由も無くなったからな。

こんな状態になつても……いや、こんな状態になつたからこそといふべきか、俺は電腦世界を動き回る事ができるようになった。

もちろんロックが掛かっているエリアは原則行けないが、《ザ・シード》規格の仮想世界ならコンバートの要領で自在に行き来は出来る。当然接続料も掛からず、購入する必要もない。なんか卑怯だよなあ。今の所それを有効(?)活用する方法は浮かばないし。

「いや、そんな事よりもここで何があるんだよ、しかし」

考え事に没頭していたら10分くらい経とうとしているが、別段何も起きる気配はない。

からかわれただけか……? メッセージ飛ばして問い詰めるか——ん?

「……………」

メニューを呼び出そうとした所で、背後に人の気配を感じて振り返る。

いつの間にやってきたのか、背後に立っていたのは頭の上に突き出たネコ耳が特徴の、俺より年下っぽい女の子だった。他の種族がエルフ耳の中、猫妖精族ケット・シーはネコ耳なのが特徴だから分かりやすい。

他に目に付くのは赤いリボンで左右に結んだツースайдアップの髪、装備はスピードを重視しているのか青いコートタイプで、胸にはシルバーの胸当てをつけている。

生憎だが猫妖精族ケット・シーに知り合いは居ない。そもそもALO自体が始めてから日が浅いから知り合いなんて極僅かだ。

でも、彼女は俺の姿を見て信じられないように目を大きく見開いて

いる。……どこかで会った事があったか？

「……ほんとに」

「え？」

「ほんとに……キリトさんの言ったとおりだったんですね」

キリトの……言ったとおり？ この子、キリトの知り合——。

「——まさか」

目の前の女の子と記憶の中の彼女が重なる。

よく見てみればあの頃の面影がある……じゃあ彼女は……。

「シリカ……なのか？」

「……!!」

俺がその名を呼んだ瞬間、彼女は俺の胸に飛び込んできた。

事態を飲み込めず一瞬反応が遅れたが、とっさに彼女を抱きとめる。

「ど……どうしてここに？」

「キリトさんが会わせたい人が居るって……それでここまで来たんです」

「キリトの奴が……」

じゃああいつがここに呼んだのは、シリカと引き合わせるため……なのか。

「良く俺だって分かったな。SAOの中と姿違うのに」

「分かりますよ……面影残ってますから」

シリカだって面影がある……そう言おうと思ったら、ぎゅつと強く俺の服を握られる。

「生きて……生きて、いたんですね」

「……なんだか死神に嫌われてるみたいでさ、追い返されたんだ」

「……そういう冗談を言う所、やっぱりミストさんです」

嬉しさの余り、シリカの頬を涙が伝う。

俺だってまた会えて嬉しい、彼女が生きていて良かったと思う。けど……。

「俺は、お前の傍に居ても良いのか？」

「どうしてですか……？」

「また会えて嬉しい、それは俺だって同じだ。でも俺は……シリカに何も言わなかった。そしてあんな事をした。止めてって言われても、俺は止まらなかつた」

そんな俺が、また傍に居ても良いのか？

生きていた、なんて言ってもこんなの生きていると言えるのか？

現実世界には存在せず、この電腦世界でしか存在できない俺が……資格があるのか？

沈んだ表情で問いかける俺に、シリカはゆっくりと顔を見上げ、俺の目をじつと見つめる。

「……ヒースクリフさんから、話は全て聞きました」

「だろうな……キリトたちから聞いている」

「信じられなかつたけど、でも色々な事に納得が出来たんです。どうして出て行つたのか、会うたびに雰囲気が変わっていったのか……」

正直に言えば、一言話してほしかった。力にはなれなかつたかもしれないなかつたけど、そんなに大事な事ならパートナーのあたしにも話してほしかった」

「……黙っていてごめん」

「それはもう良いんです。あたしだって少しでも長く一緒にいたかった。現実で会えないならなおさら……！」

向こうで会うことが出来ないから、少しでも長く一緒に居るために考えうるあらゆる手を尽くして……選んだ答えが皆を裏切ることだった。

他にも方法があつたかもしれない。それこそ攻略組を抜けて残りの時間をシリカと過ごす事だつてあつただろう。

でも……残されていた時間はあまりにも短くて。それで焦つた結果があれだった。

「シリカの言つたとおり、俺は現実世界に存在しない人間だ。いや……そもそも人間なのかも怪しい。俺自身、この先どうすればいいのかを考え続けているんだ。あんな事をした俺を、こんな存在になった俺を、シリカは——!？」

最後まで言おうとしたら、シリカの唇が俺の唇に重ねられて阻ん

だ。

いきなりの事に俺は目を見開いたまま硬直し、ほんの数秒のキスの後、ゆっくりとシリカは顔を離す。

「——これがあたしの気持ちです。ミストさんがどんな存在になっても、あたしがミストさんのことを好きなのは変わりません。ミストさんは……あたしの事をどう思っていますか？」

「シリカ……俺は……」

問われるが、そんな事決まっている。どんな存在になっても、この気持ちだけはずっと変わらないのだから。

「俺もシリカの事が好きだ。これまでも、これからもずっと……。こんな俺でも、まだ好きでいて良いのか？」

「もちろんですよ。——おかえりなさい、霞さん」

「——っ」

俺の本当の名前を呼び、シリカは笑いかける。

もう、堪える事ができなかった。

情けない姿を見せたくなくて、シリカを——珪子を強く抱きしめて、ボロボロと大粒の涙を流す。

「ただいまっ……ただいま、珪子……!」

「——はいっ」

まるで年下の子供をあやすように、優しい声で答えると頭を撫でてくる桂子。

失ったものは、払ったものは大きかったかもしれない。

けど、それでも……この世界の中だけだとしても、もう1度彼女と会うことが出来た。

今は……今はそれだけで良い。それ以上に嬉しい事なんてない。

「きゆうーきよくうー!」

「……うん?」

「リズベット! キーック!」

空から何か聞こえた瞬間、殺気に反射的にシリカを突き飛ばした。いきなり突き飛ばされて小さな悲鳴が聞こえた直後、見上げた空か

ら人が降って来て、その足が俺の顔面に突き刺さる。

「もばふっ!？」

「かすっ!?! ミストさんー!?!」

衝撃で吹き飛ばされる俺にシリカが悲鳴を上げ、3度地面を跳ねた末に柱に叩きつけられ、そのまま剥がれ落ちた。

「……よっし、絶好調」

「リ……リズさん!? なんでもここに!?!」

「アスナたちから「シリカがミストに会いに行った」って聞いて、大急ぎで追っかけてきたのよ。あー、すつきりした」

「ぐ……げふっ」

いきなり人を蹴り飛ばしてきたのは、ピンクの髪とそばかすに見覚えのある少女だった。

いや、見覚えあるって言うかさつき自分で正体明かしていたよな。

「リズベットキック」ってなんだよ。「○シユペンストキック」の帕クリか。

晴れ晴れとした表情のリズに、俺は鼻を押さえて忌々しげに睨み付ける。

「おい、そこのピンク女……感動のシーンブチ壊しにしてどういうつもりだ」

「はあ? 人のこと心配させておいて良く言えるわね。とりあえず再会を祝して1発殴らせなさいよ大バカ男」

「蹴った後で何を言ってるんだ……」

はて、俺の知っているリズはこんな強暴だっただろうか。思い返してみても記憶にな……いや、散々人の弱みを握る悪魔みたいな女だ
が。

やっばこいつ、俺の天敵だ……などと思っていたら、いきなり寂しげな表情を見せてグクリとしてみよう。

「あんな遺言残して……確かにのけ者にされるのは嫌だったけど、だからってあんな大事な事ちゃんと言っておきなさいよ、バカ」

「……すまなかった」

ああ……なんだ。

さっきのあれは俺が生きていて嬉しかった事の照れ隠しみたいな物だったのか。

確かに心配をかけたんだよな、俺……。だったら蹴りの1発くらい我慢しなきゃいけないだろ。

「まあ、生きていたならそれで良いけどね。色々小難しい話是要らないわよ。ミストが生きてここにいた。あたしはそれだけで十分だから」

「そう言ってくれると助かる」

「けど、それはそれ。これはこれよ。1発殴らせなさい、無駄に心配させた罰として」

「なんでそうなるっ!? 大体さっき蹴ってきただろ!」

「あれはほら、挨拶代わりにやつ? 本命はこつちよ。リズベツト必殺の鋼鉄粉碎ゴルデイオン・ハンマーで叩き潰してあげるから」

「どこの勇者王だお前は!?!」

「って言うかお前、あの作品知ってるのか。いやいやそんな事よりも!」

「につこり笑ってメイスを振り上げてくるリズに俺は顔を青くする。マジだ。こいつマジでやる気だ。本気と書いてマジと読んで、やる気と書いて殺る気と読む。」

「リ、リズさんやめてくださいっ!」

口角を引き攣らせて動けずに居た俺の前に、シリカがリズの前に立ちほだかった。

シリカ……。ありがとう、助けてくれて本当にありがとう!

「せっかくミストさんと再会できたからもうちよつとイチャイチャさせてくださいよ!」

「……よし、やっぱり天罰光臨ゴルデイオン・クラッシュャーで光に昇華してやるわ」

「あんなえー? 火に油注いでないですか!?!」

「キリトとアスナといい、シリカとミストといい、イチャコライチャコラ見せつけんじやないわよ! なに? 厭味? 厭味なんですか?」

相手の居ないあたしに対する!」

「いや、イチャコラしてたつもりはないけど……」

「当事者は無自覚とはよく言ったものよねえ?!?」

ヤバイ、今のリズムには何を言っても地雷にしかならない気がする。

「独り身の辛さを思い知れえええ!」

「に、逃げるぞシリカ!」

「えっ!? は、はいっ!」

シリカの手を引きバーサーカーから必死の逃走劇を試みる。

……なんか色々ぶち壊しにされたが、これはこれで俺たちらしいかもしれない。

息を切らせて走りながら俺は笑みを浮かべ、引っ張られているシリカもそれを見て笑っていた。

その世界において彼は異端だった。

『銃』が支配する世界で唯一『剣』を用いる剣士。

それを見て酔狂だと見下す者がいる。愚かだと蔑む者もいる。

もちろん……私もその選択を愚かだと思っていた。

けれど……周囲の評価を、彼は実力で覆して認めさせてしまう。

『ラストフェンサー』……その力を思い知らされた人たちは彼をその名で呼んだ。

あまりにも荒唐無稽、常識外れの力に、多分私も魅せられたんだと思う。

飛び交う銃弾の中で笑みすら浮かべて敵を斬る彼の姿は、硝煙が煙る世界でなお輝いて見えた。

知りたかった。その力の秘密を。

知りたかった。戦場で笑みを浮かべられるその理由を。

だから、今日も私は――。

銃が支配する世界で、剣を振るう彼の背中を追いかける。

Next World Gun Gale Online……?

フアントム・バレット編

第1話 Gun & Sword

第1話 Gun & Sword

2025年 9月14日 GGO内・SBCグロツケン・地下ダンジョン。

「つたく……嫌になるな」

角に隠れて自動戦闘機をやり過ごして、安堵と共に俺はぼやいた。さすが最高難易度の地下ダンジョン。まともにやり合ったら痛み分けて済みそうにないエネミーがうじゃうじゃ蔓延っている。

「ごめんなさい……私の軽率なミスので」

それが厭味に聞こえたのか、隣に居たスナイパーライフルを担いでいた少女が申し訳なさそうに謝って来た。ショートのパールブルーの髪に猫を思わせる藍色の瞳をした少女は、ただでさえミリタリー好きの男が多いGGO内でも珍しい上に、容姿も相まって誰もが目で追うだろう。

「いや、シノンだけの責任じゃない。トラップに気づかなかった俺にも責任がある」

実際俺にもこの状況を招いた責任はあった。

きっかけは彼女が気まぐれで地下ダンジョンに潜らないかと言って来た事だ。俺も断る理由が無かったから快諾して2人で潜ったら、トラップに嵌って地下ダンジョンの最奥、しかも最高難易度の所まで落ちてしまった。

当然誰も到達した事のない未踏エリアでマップ情報も無く、おまけにうろつく敵は真正面からやりあうには厳しい相手で交戦を避けつつなんとか脱出を図っている。

とは言え未踏エリアとなればまだ誰にも発見されていないお宝が眠っている可能性もあるわけで、それが最高難易度のダンジョンならなおさら可能性も高い。

故に、脱出よりも探索メインにシフトしつつあるが……気にしたら負けだ。もとより死ぬつもりは毛頭ないから。

「けどこれじゃあ、迂闊に探索も出来ないな……」

「諦めて出口を探す?」

「出来れば苦労しないさ」

隠れて行動するから移動にも時間が掛かる。

見つかってしまったから交戦、と行けば良いが、俺はともかく弾薬に限りがあるシノンを考えてと余計な戦闘は避けるのが最良だろう。

「……ありがとう、クラウド」

「なんだ? 改まってどうしたんだ」

「私一人だけじゃ、死んでも良いやって諦めていたから……」

「おいおい、出来れば死なない方が良いだろ。死ねばランダムでアイテムをドロップするんだから」

「分かってる。分かってるけど……さすがにこんな状況になれば、ね」
さすがのシノンもこの状況には弱音を吐いてしまいうらしい。

俺は彼女を励ましてどうにか再起させると、彼女と共に探索を続けた。

やがて円形のスタジアムの上に行き着くと、下を覗けば見たことのない大型モンスターがうろついているのを発見する。

「なんだあのアルマジロ……」

「このダンジョンのボス……かしらね」

ボス……ってことは倒せばレアなアイテムを落とすってことか。

大変魅力的な話だが、たった2人で初見の大型ボスを倒すのはかなり無謀だ。

強さにしてもこのエリアの難易度を考えれば相当なものはずだし、よしんば倒したとしても帰り道に遭遇した敵と戦うときにどれだけ弾薬が残っているか……。

シノンの方もそれを考えているのか、顎に手をやって考え込んでいた。

俺も同じように考えつつ、双眼鏡でモンスターの動きを観察する。

「……クラウド」

「なんだ？」

「ダメ元で挑んでみない？」

「マジか……」

玉砕コースを選んだシノンの選択が信じられず、思わず双眼鏡から目を離してシノンを見る。

どう考えても倒せなかった場合のリスクより倒した場合のリスクの方が大きすぎる。あのアルマジロと戦ってどれほどの弾薬を消費してしまうか。その状態で帰るにはここは危険すぎる。

乗り気になれなかった俺はシノンを諭そうとするが、シノンは口元にかすかな笑みを浮かべ、このタイミングで最悪のカードを切つてきた。

「あの時の『借り』、ここで返してほしいんだけど？」

「げっ……」

思わず唸り、腰の後ろに手を当てる。

偶然だったとは言え、シノンとあるボスに挑んだ際に撃破して入手したのが『これ』だ。シノンからのアシストが無ければ入手は難しかったのは間違いない。

感謝して礼を言ったら、「じゃあいつか、この借りを返してもらおうから」と実に素敵な笑顔で返され、思いつき顔が引き攣つたのを今でも忘れていない。

さて……こうなってしまった以上、あのアルマジロに挑む以外の選択肢は残されていないだろう。

しかし、だ。シノンはここから狙撃できるから良いとしても、俺は接近しないとイケない。……あんなデカイアルマジロを前に大立ち回りつてマジか？

いや……どうにかなるか。もつと凄まじい修羅場を潜ってきたことを考えれば、この程度可愛く思える。

「オーライ、仰るとおりにする。具体的なプランを出してくれ」

「見た感じ、あのモンスターの弱点は額みたいね。私はここから狙撃するから、クラウドは白兵戦でアレを攪乱。可能な限り顔をこっちに

向けさせて」

「わかったよ……まあ、そこまで心配はしていないけどな。シノンの腕なら安心できるし」

「私もあなたを信用してるわよ、『ジエダイ』」

「だからそれで呼ぶなっ！」

からかうように数ある俺の異名の中からいろんな意味でアウトの名で呼び、即座に俺は突っ込みを入れた。

こんな特殊すぎるくらい特殊な戦闘スタイルなせいかな、俺には幾つもの異名が周りから勝手に付けられている。

その中で最も有名なものは——『ラストフェンサー』。

「じゃ、ミッシヨンスターといくか」

嘆息して腰に下げた金属棒を掴み、カラビナのロックを外す。そしてその反対側にあるホルスターからはかなり小型のSMGサブマシンガンを左手で持ち、セーフティを外してセレクターをフルに切り替えた。

縁から飛び降り、落下しながら縦に1回転してきれいに着地する。ちようど、アルマジロとは真正面。

「来やがれ、アルマジロ」

『ギャロロロッ！』

左手に持ったSMGを突き出し、右手に持った金属棒の上部にあった電源のスイッチを入れる。

すると先端から灰色に光り輝くエネルギーブレードが形成され、起動させたそれ——『光剣』を軽く振るった。

その直後、頭上から銃声が響き、モニスターの額にある黄色いダイヤのような部分で火花が散る。

／ 怯むモニスター。その瞬間俺は走り出した。

「すうー……はあー……」

緊張に支配された身体を解すために大きく深呼吸した。

スコープ越しの世界ではクラウドがアルマジロを思わせる大型ボスモニスターを相手に大立ち回りを演じている。

GGOで唯一にして最強と謳われる光剣使い、クラウド。銃が支配

する世界で剣を使いその名を馳せているのだから、その実力は本物だ。実際「理解のある」トッププレイヤーの何人かも彼の実力を認めてトッププレイヤーの1人と見ているが、本人は謙遜して「良くて上の中程度」と過小評価している。

ボスの踏み付けや噛みつき、あるいは尻尾の先端から発射される高出力レーザーを前にしても怯まず、動き回り左手の《M10》^{イングラム}のバースト射撃や長大なエネルギーブレードを形成した光剣《MURAMASA》による斬撃を繰り返している。

しかも作戦通り、私がボスの弱点を狙撃できるように真正面の位置取りを心がけてくれているのだから、本当凄まじい技量の持ち主だ。

「……………」

呼吸を整え、ボスの弱点に狙いを定めてトリガーを引く。

額を寸分変わらず撃ち抜くとボスは怯み、その隙を狙いクラウドが更に追撃を仕掛けた。

飛び上がり、私が射抜いた弱点部分目掛けた水平高速4連撃。

普通の光剣だったら飛んでもあそこまで届かせるのは難しいが、クラウドの持つ《MURAMASA》はその辺の光剣と一線を画す。威力も強力だが、何より最大の特徴は形成するエネルギーブレードの長さは通常の2.5倍だということ。もはや剣ではなく槍として扱う方が正しいとさえ言われる。

普通の光剣を使って接近戦を仕掛けるよりもより遠くの位置から攻撃できるアドバンテージは計り知れない。だが、それでもGGOでは圧倒的不利であることには変わらない。

GGOは銃をメインにしたVRMMORPGだ。その射程は有名な銃である《ベレッタM92F》を例に挙げると有効射程50m前後。実際の交戦距離を考えれば更に短い、それでもリーチの短い光剣よりもずっと長い。

ならなぜ、クラウドがGGOで最強の1人に名を連ねるのか。

それは――。

「シノン！ レーザー来るぞ！」

クラウドが叫び、柱の陰に隠れる。モンスターの尻尾の先端が開

き、中から赤いレンズ状の物体が露になるとそこから高出力のレーザーを発射した。

私の所までレーザーは届かないが、白兵戦を行うクラウドは射程圏内だ。対光弾防護フィールドがあっても距離があれだけ近ければ効果は薄れる。

すかさず私がライフルでモンスターの弱点を狙撃。弱点を撃ち抜かれてモンスターは怯み、レーザー照射が止む。

その直後、モンスターの足元で強烈な衝撃と青いエネルギー流が炸裂した。クラウドがモンスターにプラズマグレネードを投げ込んだらう。

大ダメージにスタン状態になり、この隙を逃さず私は額の弱点を連続で狙撃する。クラウドもほぼ至近距離からM10のフルオートを叩き込んでいた。

《M10》の特徴は、小型軽量なサイズ以上に凄まじい連射速度に尽きる。毎分1000発という驚異的な連射速度は32連マガジンを1.5秒で空にしてしまうほどだ。

当然それほどまでの連射速度は命中精度に期待できないが、白兵戦を行うクラウドには最適な銃だった。ハンドガンよりも連射速度・火力ともに上で、アサルトライフルや他のSMGよりも小型軽量な《M10》は牽制に適し、瞬間火力にも優れている。

……最初はそんな装備で通用するのかもしれないが、実際通用しているんだから認めるしかないのだけだ。

スタンから回復したモンスターが起き上がろうとし、すかさずクラウドは6つあったモンスターの目を、右側の3つを切り裂いて潰した。

悲鳴を上げ、めちやくちやに動き回るモンスターをクラウドは慌てることなく動きを見切つて光剣で斬り付けて行く。

——その口元は微かに笑みを浮かべていた。

単純なステータス上の強さじゃない。クラウドは戦場で笑えるだけの強さを持っている。

その強さの理由が知りたかった。倒せばその理由が分かるかもし

れなかったけど……その強さを知る前に、私は彼と友達になっていた。

聞いてみても「なんだろうな？」とはぐらかされて、ならばと私は彼の背中を追いかけて、今も追い続けていて……。

「シノン、残りHPが1割を切った。畳み掛けるぞ！」

「……了解」

インカムから聞こえてきたクラウドの言葉に返し、私は狙撃に集中する。

「——氷。私は冷たい氷でできた機械」

頭の中で唱え、トリガーを引き絞る。

愛用の狙撃銃《FR—F2》の銃口から弾丸が打ち出され、モンスターの額を射抜く。

ボルトアクション式ゆえに速射は出来ないが、それをカバーしてくれるのがクラウドだった。

怯んで仰け反ったモンスターへ、助走をつけて軽く跳躍すると、驚異的な速度と正確さの高速突き5連打を額へさらに叩き込む。

ボルトを引いて薬莢をはじき出し、押し込んで新たな薬莢を装填すると、若干の銃口の位置を修正してトリガーを引いた。

クラウドが着地したと同時に弾丸がモンスターの額を正確に射抜き、その1射でモンスターはどうとう倒れて動かなくなると、ガラスが碎けるのに良く似た音を立ててポリゴンを碎け散らせた。

「……はぁ」

ようやく倒れた……倒すのに2時間も掛かったけど。

ラストアタックを決めて、私にボーナスが贈られてくる。

タップしてそれをオブジェクト化すると、《FR—F2》よりも遙かに大型のライフルが出現し、受け止めようと思った以上にならずつしりと重みがあつて驚いた。

《ウルティマラティオ・ヘカートII》……GGO内サーバーでも10丁しかない、超レアなアンチマテリアルライフルだ。

「お疲れシノン。何が出た？」

「《ヘカート》よ。私も実物を見るのは初めてだわ」

「《ヘカート》!? マジかよ！ 俺だつて見たことない……み、見せてくれ！ ああでもどうやってそこまで行けば……」

子供みたいにはしゃいでいるクラウドに思わず笑みがこぼれる。

あんなアバター——長身痩身で腰まで伸びた綺麗な銀髪に、エメラルドグリーンの切れ長の瞳——は、クールビューティーな女性を思わせるけど、れっきとした男性だ。

普段はどちらかと言うと落ち着いているけど、今みたいに子供っぽい一面を覗かせる事もあって見ていて中々飽きない。

「ロープとかって持ってないよな？」

「お生憎。持ってないわ」

「じゃあ……壁走って、アルマジロが切断した柱に飛び移って更にジャンプで……いや、うん行ける。あいつも似たようなことやったんだし」

いくらクラウドが常識外れだからって、さすがにそこまでは無理だと思ふ。

諦めるように声を掛けようとしたら、クラウドは本当に壁を走っていた。……ほんつと、ありえないんだけど。

そしてボスモンスターのレーザーで切断された柱の断面に飛び移って、さらに飛んで——高度が足りずにそのまま落っこちた。

「ぐへっ！」

「やめておけばよかったのに……」

呆れて下を覗き込む。ここから見るとクラウドが潰れたカエルのように見えた。そう言えば実家は田舎だったから、時折見かけたけ。

「もう少し高さがあれば届いたと思うんだけど……」

「いくらなんでも無理よ。諦めたら？」

「でも、合流しないといけないだろ？」

「それはそうだけど……」

ロープも無い、飛ぶのも無理、他に方法なんて……。

「……あった」

あった、1つだけ。けどこれって私もかなり恥ずかしい。

問題はクラウドのSTR値ね……SMG持ちアタッカーをベースにしているけど、光剣を使うにあたって上げてはいるし、大丈夫だと思うけど。

「ねえ、クラウド」

「なんだよ?」

「ちゃんと受け止めなさいよ」

「は?」

なにを、と聞かれるよりも早く。

私は《ヘカート》を抱えて、そこからピョンツと飛び降りた。

口を半開きにし、唾然とするクラウドの姿がみるみる近づいてくる。

そして、慌ててその場を走り回って位置を修正して、落ちてきた私を見事にキャッチした。

「おっ……も——イエ、ナンデモナイデス」

「……よろしい」

何か大変失礼な事を言いかけたクラウドにサイドアームのグロツク18Cを向けると大人しくなった。

重くない、断じて私は重くないわよ。そう思ったのは《ヘカート》の重さと落ちた高さが重なっただけ。

半眼を向ける私にクラウドは小さくなり、黙って地面に下ろす。

……見た目がカッコいいだけに中身が残念で仕方ない。

「ほら、これが《ヘカート》よ」

「おお……」

黙っていたのが一転し、私が抱えていた《ヘカート》を見せるとクラウドは目を輝かせて見ていた。

「こいつが《ヘカート》か……実物は初めて見るな。売るとかなりの値段で売れるだろ?」

「そうね。オークションにかければ相場以上になるとは思うけど……」

月々のお小遣いが3千円の私には、それはかなり甘美な誘惑だった。でも……。

「……私、これを使おうと思うの」

「使うって……《ヘカート》を？ 確かにシノンはスナイパーだからステータス的に使えると思うけど」

私の意向が意外だったのか、半分納得、半分疑問を抱いた目でクラウドは小首をかしげる。

確かにお金にすれば自分の弾薬代などに困る事はないだろう。《FR―F2》も悪い銃じゃないし。

でも……私が潜っている理由は強くなるため。そして……なんとなくだけど《ヘカート》に何かを感じたから。

「……まあ個人の戦闘スタイルなんて自由だからな。俺も人のこと言えないし」

それ以上クラウドは理由を問いたさず、おどけるようにしながらも納得してくれた。

それでも結構人の心情に機微な所もあって、話したくなかった気持ちを汲んでくれるのは有り難い。

「……ありがとう」

「別に礼を言われるような事はしてないだろ？ それに、礼を言うのはまだ早いと思うけどな。ここから脱出しなきゃいけないんだから」

「あ……」

そうだった。

改めて思い出すと、私たちは今地下ダンジョンの最奥部分に取り残されている。

ここで死んで、せつかく手に入れた《ヘカート》を失ってしまったら当分立ち直れない。

「シノンの残り弾薬は？」

「《FR―F2》が残り20発。《グロック18C》が67発ね。クラウドは？」

「《M10》が残りマガジン1本、あとプラズマグレネード1つだな」

お互いに弾薬が心もとない、か……。クラウドは光剣でどうにかなるけど……あとは私も《ヘカート》に弾が入っているけど、それでも安心できるとは言えない。

「交戦は可能な限り避けて……万が一戦闘になった時は逃走優先しかないな」

「出来そう?」

さすがに不安になって尋ねると、クラウドは微笑する。

「どうにかしてみせるさ」

／
「あー! やっぱりシャバの空気はうまいなあ」

「……………」

ピンシヤンしているクラウドとは対照的に、私はぐったりしていた。

いくら彼が常識に当てはまらないって言っても、限度があるでしょう……………」

「…………私、金輪際アンタの背中に乗らないから」

「なんで?」

「なんで? って…………」

心底不思議そうに首を傾げるクラウドに大声で理由を語ろうとした時、

「シノン! クラウド!」

「ん? よお、シユピーゲル」

銀灰色の長髪を束ねた男性が私たちに気付いて、走り寄ってくる。

「どこに行ってたのさ? 急にマップ追跡から消えたときは驚いたじゃないか」

「あー、ちよつと地下ダンジョンでトラップに引つかかって、そのまま最高難易度の最奥部まで真つ逆さまで…………」

「…………それとシノンを背負っているのとどんな因果関係が?」

「うっ…………」

目を少し細めて、私とクラウドを交互に見てくるシユピーゲルに少しだけ私は唸った。

別に変なことはしていない。けれど、女が男に背負われていたら何か勘ぐるのが当然だと思う。

「ちよつと、いい加減降ろしてよ!」

「はいはい……ほら」

私が文句を言うと、いい加減な返事をしながらも腰を落として私が降りやすい様にしてくれる。

もうちよつと文句を言いたかったけど、今は事情を説明しないと誤解されかねない。

「勘違いしないでね？ 地下でボスとやりあった後弾薬が少なくなつて、じゃあどうするかつてことになったら……」

「俺がシノンを負負つて地上を目指したつてわけだ」

「……最奥部から？」

「ええ」

「ずつと背負いっぱなしで？」

「ああ」

……やっぱり。シユピーゲルも呆けて口を半開きにしてる。

私だつて信じたくなかつたけど、事実その通りだつたんだから認めるしかない。癩だけど。

確かにSTR優先でステータスを上げている私と違い、クラウドはAGI優先だが、同時にSTRもそれなりに上げている。

だから、武装を《グロツク18C》以外全部ストレージに収納した私を負負つて、地下を駆け抜けた。

あれはちよつとしたジェットコースターに乗っている気分だつたわ……横の壁だけじゃなくて天上まで走つて逃げていたし。当然途中遭遇した敵は全部無視で。

「シユピーゲルも体験するか？ クラウド超特急in地下ダンジョン。今ならボス部屋まで運んでいくぞ」

「い、いや……遠慮しておくよ」

クラウドの誘いにやんわりとシユピーゲルは断る。ハッキリ「嫌だ」つて言えば良いのに……。

「そ、そう言えばボスを倒したんだよね？ 何かドロップした？」

「聞いて驚くなよ？ なんとあの《ヘカート》だ」

「へ、《ヘカート》!? 《ウルティマラティオ・ヘカートII》!?」

「ええ。GGOでもまだ10丁しか見つかつてないアンチマテリアル

ライフフルよ」

「いやー、中々しんどかった。ソロで挑みたくなかったな、あのアルマジロは」

「アルマジロ？」

「ああ……ボスが見た目アルマジロみたいだったから。詳しい話はどこか落ち着ける場所でしない？」

「あ、そうだね。2人とも疲れてるみたいだし……」

「ほんとだって。人を背負って全力疾走は重くて疲れ……イエナンデモアリマセンヨ、シノンサン」

「……よろしい」

私が《グロツク18C》をクラウドの脇腹に押し当てると、すぐにクラウドは大人しくなった。

重くない。私は重くないわよ、絶対に。って言うか女の子に向かって失礼でしょう。

第2話 ALOでのある1日

第2話 ALOでのある1日

傍から見ると今にも魂が抜け出してしまいそうな勢いだな、シリカの奴。

チラツと横目でシリカの様子を窺ってから、俺はそんな感想を抱いた。

場所はイグドラシルシティのリズベット武具店。今日は皆でリズの強化素材集めに付き合うことになっている。

メンバーは俺、アスナ、リーファ、リズ、シリカ。そして――

「……ミストさんまだかなあ」

ポツリと呟き、シリカはそのままこてんと横になった。

そう。あと1人はシリカの恋人、ミスト。

まだ約束の時間まで10分はあるのにこれってのは……大丈夫なのかと俺はシリカ以外の面子とアイコンタクトを交わす。

アスナ、苦笑い。

リズ、呆れて肩竦めてる。

リーファ、どう反応すればいいか分からず曖昧な笑み。

俺はため息をついて、最近のミストについて振り返った。

半年くらい前――海底ダンジョンをクリアしたのと前後して、ミストは「色々見て回ってみる」と言って他のVRMMOにダイブする旅みたいなことを始めから、めっきりALOに来る機会も減っている。それでも定期的には――1週間に1度のペースだが――来ているから余り問題はないんだが、リアルで同じ学校、あるいは家族いつでも顔を合わせられる俺たちと違って、ミストの場合は立場が特殊だからここでしか会えない。

おかげでシリカは「ミストニウム」なる物を著しく欠いて、あんな風に今にも口から魂が抜け出て行きそうな状態に陥っていた。

「そりゃ、2度と会えないと思っていた所にひよっこり顔出されて嬉しいとは思うけどさあ……」

「あれはちよつと……ねえ?」

「依存しすぎだろ……」

基本、ミストがいればいつものシリカになるんだが、いないとたんにミストニウムが減少して徐々にあんな状態に陥っていく。大体6日目にあんな状態になるから、目安が分かりやすい。

……こうしてみると種族も相まって完全に主人とペットだよなあ。今の状態のシリカって飼い主が2、3日家を空けていて早く会いたくて待っているって感じだし。

これは一刻も早くミストに来てもらって、シリカにミストニウムを補充してもらわなければ……。

「ちーっす」

「!!!」

来客を告げるベルの音と共に店に誰かがやって来た。

声を聴いた瞬間、シリカの耳と尻尾がピーンツと立って一目散にダツシユ。

「ミストきーん!」

「おわっ! ど、どうしたんだよシリカ!」

……どうやらミストニウムを補充する事ができたらしい。って言うかミストが入ってきてからシリカが動くまでがあまりにも早すぎた。

周りも俺と同じ意見だったようで、顔を見合わせると呆れながらもその光景を見て微笑ましく感じる。

入り口へ行ってみると、シリカに抱きつかれたミストが困ったような笑みを浮かべていた。

「遅いぞ、ミスト」

「遅いって……約束の時間5分前だっただろ?」

「シリカ的には1時間くらいの大遅刻だったってことだ」

「そこまでか……?」

「だって1週間も会えなかったんですよ」

そりゃそうだけどさ……と俺たちに助けを求めてくるミストを、俺たちはそっぽを向いて知らん振りする。

ま、クラインとリズに殺されないように気をつけることだ。特に前者には。

「じゃあ始めるか」と言いつつ自分たちは暢気に休憩か、おいそのバカツプル夫婦。

草の生えた高台つばい岩の上で寝転がっているキリトと、その隣に座っているアスナ夫婦を一瞥して、髪を掻き揚げながら俺は嘆息した。

「へっへーん！ 以前の私とは違いますよお！」

なんだか見覚えのあるパツクンみたいなモンスターの触手が足に巻きついて、そのまま持ち上げられそうになったシリカだったが、翅を展開して自慢げに浮く。

随意飛行を完全にマスターするのに半年かかったのにまあ……。

「シリカ、それフラグな」

「え？——え??？」

ボソツと突っ込みを入れた直後、パツクンモドキが触手を束ねて翼にして、浮き上がる。

顔を青くして、またもひっくり返るシリカ。なんかこれ、どっかで見たことのある光景だなー。

「ミ！ ミストさん助け！ 見ないで助けて見ないで助けてー！」

「どっちですか……」

ギリギリスカートを押さえてブンブン短剣を振り回しているシリカに、俺は隣に居たりーファにアイコンタクトを送る。

すぐに意図を汲み取ったりーファが長刀を抜き、翅を展開して飛ぶとシリカに巻きつく触手を切り裂いた。

パニックを起こして落ちそうになったシリカを、俺も翅を広げて飛ぶとすかさず受け止め、遅延させておいた3発の火炎弾を発動させてパツクンモドキに叩き込むと、すかさず頭上からリズが脳天にメイスを叩き込んで粉碎した。何度見ても痛そうと思わず顔を顰めてしま

う。

「大丈夫か？」

「はいいい……見て、ないですよね？」

「見てない見てない」

そんな事したらリズとリーファに「変態！」って言われて殴られ斬られますってば。

顔を真っ赤にしていたシリカは俺の言葉にほっとして、俺が地面に降り立つとそのまま下ろしてやる。

「いやー、やっぱ攻撃魔法使える人がいると安定感が違うわねー」

「私もどっちかって言うのと補助がメインですから。攻撃専門の人がいてくれると助かります」

コンビプレーでバックンモドキをのしたリズとリーファがハイタッチを交わして降りてきた。

リーファの言い分は、まあ……分からなくもない。リズも基本鍛冶職人だから攻撃系のスキルよりもそっちを育てているのは分かる。……だが、敢えて言わせてもらおう。

「脳筋特化過ぎるんだよお前はー」

S A O 生還者の皆はあそこで暮らしていた癖と言うか、経験から物理攻撃特化型にしすぎる傾向がある。よくてちよつとした補助程度。

この中で魔法スキルを習得しているのは俺、シリカ、アスナ、リーファ。その内攻撃魔法専門が俺のみと偏りすぎてるだろ。俺だってメインは白兵戦なんだから。

「なによ、女の子に向かって脳筋つてのは失礼じゃない？」

「そんな物騒な鈍器を振り回してよくいうおおおお!？」

口を尖らせて文句を言ってきたリズに突っ込むと、問答無用でメイスを振り下ろしてきて間一髪白羽取りで受け止めた。こ、こいつ……目がマジだ。

「大体、そう言うミスはどうしてあたしたちと同じ傾向にならなかったのよ？」

「元々魔法剣士系に憧れていたんだよ……！俺のは一般的なイメーシとだいたいぶかけ離れてるけどっ！」

ギリギリの所で拮抗しながら言い返す。

魔法剣士に憧れていたって言うのは嘘ではない。MMOに限らず、

魔法剣士系のジョブがあるゲームだったらそれを選んでいた事もある。

一般的な魔法剣士といえば剣と魔法を使いこなして、盾も加えた安定の防御力とオールマイティなものをイメージするが、今の俺はそれとややかけ離れている。

まず、補助・回復は全部捨てた。だって担当者が大勢いるから。

次に、盾も捨てて拳術スキルを上げた。だってこっちの方が今は馴染んでるから。

結果、出来上がったのが斬って殴って蹴っては魔法を使う攻撃偏重型の魔法剣士。今ではパーティーで貴重な攻撃魔法担当だ。

「まあまあリズさん、実際ミスト君のおかげで楽になってるのは確かなんですし」

「そりゃまあ、そうだけど……」

リーファに仲裁されてリズは渋々ながらも引き下がる。

「それで、肝心の素材は集まったんですか？」

「はいはい、ちよつと待ちなさいよ……んー、大体は足りたつて所ね」

「まだまだいけるから、遠慮しないで言つてね。リズベツト武具店にはいつもお世話になってるし」

「……つて言つても、このエリアは狩りつくしたぞ？」

周りを見ればモンスター影も形もない。さっきのがラストだったみたいだな。

「休憩がてら、リポップするまで待とつか？」

「リーファに賛成。次はあそこでサボってる奴らも手伝わせるぞ」

くいつと上でサボってる2人を顎でしゃくる。聞いた話によると、学校でもあんなイチャコラしてるらしい。

まったくけしからんとリズが言っていたが、本当にその通りだ。

「ちよつくらからかつてやるか」

「や、やめておいた方がいいんじゃないかな？」

「いいや、甘いぞリーファ。俺たちがリズのために身を粉にして手伝っているのに、向こうはただぼけーつと空を見たり旦那を見たりするだけ……正義は俺たちにあると思わないか？」

「え？ ええ？ えええ??？」

俺の悪魔みたいな囁きにリーファの気持ち激しく揺らいだ。

今頃「お兄ちゃんたちをラブラブさせてあげたい！」って天使と「アスナさんばかりズルイ！」って悪魔の戦いが繰り広げられていることだろう。

「ほんと、やっぱりこのミストの方が似合ってるわ。ちよつと悪戯好きで茶目っ気ある感じの」

「でも、少し変わったと思いますよ」

「変わった？ どの辺が？」

「えつと……隠し事が無くなったからか、あんな事があった反動かどうか分からないですけど、昔よりふわふわしてるって言うか。ね？」

『きゅいー♪』

「……そう？」

ん？ なんだよ、2人して俺の方見て内緒話なんて。

「別にー？ ただ、あんたの彼女は彼氏をよく見てるなーって感心しただけよ」

「えへへ……♪」

「なんだかよく分からんが……まあいいけど」

妙にご機嫌のシリカと呆れるリズ。この短時間の間で何があったのか不明だが、今はリーファを陥落させるのが重要だ。……別に楽しんでるわけじゃないぞ？ これはあの夫婦がサボっているのが悪いんだ。俺は！ 悪くねえー！

「さてリーファさんや。俺は何も押すだけ押しはいさよならとはしないぞ。ナイスなお膳立てをしてやろう」

「お、お膳立て？」

「おう」

目をぐるぐる回してどつちかに傾こうとしているリーファへ、俺なりの最大限の援助を送ろう。

頷いてキリトたちのいる方へ向き、大きく息を吸い込む。

「その夫婦ー！ サボってないでいい加減こっち手伝えー！」

「?!?!」

ガタンツ、ズルツと言う音が聞こえた気がした。ここからじや離れていて聞こえないけど。

顔を真っ赤にして上にいた2人は慌てふためいて、そのままダツシユで俺のところに来て来て詰め寄る。

「ミミ、ミミミミミミスト!?!」

「大声で変なこと言わないでよっ!」

「変なこと? ああ、まるで縁側でのんびり寛いでいた熟年夫婦に対して言った事か?」

「熟年!?!」

からから笑って言っていると、よほどショックだったのか2人はかなり落ち込んでしまう。

すると、キリトの肩に乗っていたピクシーモードのユイちゃんが浮き上がって俺の前までやって来た。

「もう、ダメですよミストさん。パパたちは真面目な話をしていたんですから」

「いやいや、悪い悪い。俺たちが真面目に狩りしてたのに2人がサボっているのが理不尽だったもんで」

「それは悪かったけど……熟年夫婦は酷いよお」

「俺……そんなに老けたのか……?」

「ほれほれ、凹んでないで話聞けって。えー、次にモンスターがポップしたら、ちよつとしたゲームをやりたいと思います。ルールは単純明快で、3 on 3のチームに分かれてどっちが多くのモンスターを狩れるか。相手チームへの妨害は無し、最後の1体は早い者勝ちで。負けたチームは勝利チームにドリンク奢るってことで」

「……お前まさか、それを見越して先に精神攻撃しかけたのか?」

「勘ぐりすぎだろ」

いつぞやの決闘のことを思い出したのか、キリトは半眼で尋ねてくる。

確かにあの時はどんな手段を使っても勝つって思っていたから、先に精神的に叩いておいたんだが。

「つていうかキリトよ、お前俺をどんな風に見てるんだ?」

「普通に戦っても充分強いのに、小技ばかり使って勝つイメージだな」

「ほうほう……」

「こいつめ……そこまでして俺を本気にさせたいか。」

「……いや、やっぱダメだ。どうあつても全力は出せない。出しちゃ、いけない。」

ギリギリの所で踏みとどまって、キリトの言葉を水に流す。例え全力を出さない事が相手にとって失礼に当たるとしても、絶対に出したらいけないんだ。少なくとも、皆の前では、よほどのことがない限り。

「……ま、実際その通りだしな」

「……怒らないのか？」

「否定はしないさ。先に自分が有利な状況を作って勝率を上げたりするってのは」

意外そうに首を傾げるキリトに肩を竦めて答える。

「それより、チーム別け発表するからな。えーっと、そっちがキリト、アスナ、リーファ。こっちが俺、シリカ、リスで」

「おいおい、勝手に決めるなよ」

「何か問題でも？」

「いや……ないけど」

事実戦力バランスは互角だし、皆もこれで不満はないだろう。

不満はないが、ちよつとだけ納得がいかない、と言った感じにキリトは唇を尖らせているが、まあそっちの都合は関係ない。

チームごとに分かれようとして、俺はリーファに近づいて肩を叩く。

「グッドラック」

「……へうっ!？」

左手をサムズアップした俺を見て、全てを理解したリーファは顔を真っ赤にして変な声を出した。

「いやいや、弄りがいがあるのはお兄さんと一緒ですな。いや、正確には従妹なんだけど。」

頭から煙が出そうなくらい顔を真っ赤にして、金魚みたいに口をパ

クパクさせているリーファに激励してシリカたちの所に行こうとする、唐突にキリトの呼び止められた。

「ん？ どうした」

「ちよつと話があるんだが……少しいいか？」

「いいけど……改まってどうした？ あ、八百長やってくれって言うなら勘弁な」

「そんなんじゃないって。——ガンゲイル・オンラインってVRMMOを知ってるか？」

「ガンゲイル？ ああ、GGOね。知ってるけど」

あの世界は別の意味で有名な所だからな。

ガンゲイル・オンライン。その名の通り銃を武器に戦うALOやSAOとはジャンルが大きく異なるサイバー系のVRMMOだ。

開発したのはアメリカの企業で、日本にもサーバーを置いている。

最大の特徴はゲーム内で稼いだ金を現実に還元できるシステムで、俗に「プロ」と呼ばれるヘビーユーザー連中は月数十万も稼いでいるとのことだ。

「行つた事はあるか？」

「ああ、あるぞ。なんていうか、ミリタリーとかガンマニアが多い所だったな」

「殺伐としていてすぐ抜けたけど」と肩を竦めて付け加える。

「で、GGOがどうかしたのか？」

「……関連性はまだ分からないが、GGO内のトッププレイヤーが2人死んだ」

「死んだ？ どうせずっとログインし続けて飯も食わずにプレイしていたんだろ？」

「死因は心不全だ。餓死とかじゃない」

「心不全って……また妙な話だ」

それは少なくともフルダイブマシンによるものじゃないな。あれは脳に作用するが、他の内臓とかには作用できないはずだ。

それに、現実世界ではナーヴギアに代わるアミューズファイアと呼ばれるフルダイブマシンが普及していて、おまけに厳重なセキュリティを

講じている。マイクロウエーブの出力も弱められているから脳を焼き切る事もできない。

それから色々キリトから話を聞いたが、俺も同じ結論にたどり着いた。つまり――。

「不可能だ。仮想世界から現実世界に干渉し、人体に何かしらの影響を及ぼす事は」

「そうだよな……」

「でも、なんでその話を？　って言うかどこで仕入れたんだよその情報」

「実は……クリスハイトって知ってるだろ？」

「あのメガネかけた頼りなさそうな感じの？」

「確か、多少話した記憶はあるけど……。そこまで親しいって間柄でもないな。確かりアルでは総務省でネットワーク関連の仕事をしているって聞いたが。」

「あの男に頼まれて、今度GGOの内情をリサーチに行く事になって」
「確かにGGOは黒に近いグレーなゲームだけど……そもそも2人が心不全で死んだからってなんでリサーチに行くんだ？　フルダイブ中の変死なんてそこまで珍しくないと思うが」

別段VRMMOに限った話じゃない。あまりにも物事に熱中して飲まず食わずになった結果死んでしまった事故はネットのニュースでちらほら見かけている。

「《死銃》^{デス・ガン}って奴が、2人の死に何かしら関わっている可能性があるらしい」

「《死銃》？」

「ああ。2人はそいつの銃で撃たれて、直後に死んだそうさ。因果関係は不明だけど、接点がないとは言えないんだ」

「ふうん……で、クリスハイトに「GGOに行つてちよつと撃たれてきて」とでも言われたか？」

「まあ……そんな所」

「あのなあ……」

それでほいほい首を突つ込もうとするキリトに呆れ、何も言えなく

なる。キツパリ断ればいいものを……。

「大体、その《死銃》って奴がほいほいお前に接触してくるとは限らないだろ?」

「それで近々開催される「バレット・オブ・バレッツ」って言うイベントに出ることになったんだよ。わざわざコンバートまでして」

「おいおい……コンバートするってことはALOでのアイテムとか全部捨てるってことになるじゃないか」

「いやいや、もちろんエギルの店に全部預けて出るつもりだから。そのあたりは大丈夫」

本当に大丈夫なのかよ……さすがに俺も不安を覚えるぞ。

「って言うかその話、アスナにはちゃんと話したのか?」

「触り程度だけだな。さすがに《死銃》の存在は不確かだから、そういう事は伏せたんだけど」

「だったらどうしてその話を俺に?」

「ミストならGGOの事を少しは知ってるんじゃないかと思って。どんな所だった?」

「どんな所って言われても……最大の特徴はSAOやALOみたいなファンタジー要素は一切ない、純粋なSF物だったってことだな。PVPが盛んで、銃がメインになる」

「銃……か」

「俺も触り程度だから詳しくは知らないが、「着弾予測円」^{バレット・サークル}って言う攻撃的システムアシストと、「弾道予測線」^{バレット・ライン}っていう防御的システムアシストがあった。他には銃は大別すると2種類あって、実弾銃と光学銃があるってことだな。どっちにもメリット・デメリットがある」

他にもいくつか俺の知っている基本的な知識を教えると、キリトは眉間に皺を寄せて難しそうな顔をする。

GGOはSAOほど単純な戦闘システムじゃない。難易度的にはVRMMOでもかなり難しい部類に入るだろう。

それでも人気なのはリアリティとゲームをしながら金を稼ぐことができるから、と言うのが大きい。GGOにいるトッププレイヤーのプレイ時間は他のMMOプレイヤーとは比較にならないほどだ。

「今からでも遅くないんじゃないか？ 断るのは」

キリトの身を案じて、俺は不安を抱きながらも提案する。

《死銃》の話は根も葉もない噂と言うのが実際の所だろう。仮想世界からどうやって現実世界に干渉する事は不可能だと、キリトも結論を出したじゃないか。

「ああ……でも、引つかかるんだよ。勘って言うか……」

「勘……ねえ」

「それに調査協力費も揭示されたし、以前色々無理を聞いてもらった手前、引き下がるわけにも……」

それが本音か、と内心ツツコミ、同時にジロリと半眼でキリトを睨む。

睨まれたキリトはバツの悪そうな顔をする。はあ……もう言った所で聞きそうにないな、こりゃ。

「分かったよ。俺からはこれ以上何も言わない。けどくれぐれも無茶はするなよ？ 俺だけじゃない、アスナや皆が心配するんだからな」

「ああ、わかってる。ちよつとした観光感覚で行ってみるさ」

「おい、その2人ー！ いつまで話してるのよー！」

話が終わった所でリズに呼ばれた。

見ればフィールドのモンスターはあらかたポップを終えて、うろろろとエリアを徘徊して回っている。

「色々話してくれてありがとな、参考になった」

「ああ……」

肩を叩き、自分のチームに向かっていくキリトを釈然としない思いを抱いて見送る。

キリトの話に出たプレイヤー2人——ゼクシードと薄塩たらこ——が死んで、噂の《死銃》が関わっている……か。それでキリトがGGOへ調査に、ねえ……。

「——つたく、仕方ない奴だな」

あんな話を聞いて、知らん振りなんて出来るはずないだろ。

そこまで乗り気じゃなかったが……ついでに上位入賞でも狙ってみるかな。一気に稼げそうだし。

「ミストきーん！ 始めますよー！」

「今行くー！」

シリカに呼ばれてチームに合流する。開始の合図はユイちゃんが仕切ってくれるようだ。

「じゃあ、行きますよ？ よーい——スタート！」

ピナの背に乗ったユイちゃんの合図と共に俺たちはそれぞれ狙いを定めていたモンスターに飛び掛った。

「じゃ、また後でな」

「あいよー」

キリト、アスナ、リーファ、リズたちは夕飯の時間と言う事で一旦ログアウトする事になって、俺たちはその場で別れた。

「シリカも行かなくていいのか？」

「うう……行かなくちゃいけない、ですけど」

で、残ったシリカも同じように夕飯の時間なんだが、どうやらもう少し一緒にいたいご様子。なんだかんだで皆と一緒にいたから2人きりって状況にはならなかったからなあ……。

「じゃあこうしよう、戻ってきたら2人きりで出かけるってことで」

「えっ、それって……」

「まあ、うん。デートだな」

はつきり言うのがちよつとだけ恥ずかしく、シリカから目を逸らしながらデートと口にする。

再会してからも何度かデートはしたことがあるが、まだまだ照れくさが抜けない。それでキリトたちにからかわれるのがお約束だった。何も言い返せないのが悔しい。ぐぬぬ。

「早く戻らないとデートの時間が減ってくぞ？」

「うう、ずるいですよそれ！」

慌ててシリカはウィンドウを開いてログアウトを操作しようとする。

「約束ですよ？ 絶対絶対、デートしてくださいね？」

「分かってるよ。親御さんによろしくな」

「はいっー」

上機嫌になったシリカは嬉しそうに頷いて、ログアウトボタンを押してALOから出て行った。

皆がログアウトして1人だけ取り残されると、俺は笑みを消した。1人……か。今更何てことないが、どうしても寂しさが拭えない。

「俺……いつからこんなに寂しがりやになっただんだ？」

自嘲するように呟いて、自分の手を見つめる。

皆は昔と変わらず接してくれているのに、どうしても距離を感じてしまっていた。

「ああ……やめやめ。どうにも1人になるとナーバスになりがちなんだから」

頭を振って思考を切り替え、戻ってくるまでにどこに行くか考えておくかと思いつながらその場を立ち去った。

さて、どこに行くか……と言ってもリアルはまだしもALOの内部だとなあ。狩りやクエストなんてデートっぽくないし。新生アイコンラッドもフローリアはおろかダナクすら解放されていないからなあ。

……こうして考えると、やっぱり俺って彼氏が限りなく低いと痛感してしまう。

もつとぐいぐいリードできればいいんだが、いかんせん経験値が限りなく低い上に仮想世界限定って言うのがまた難しい。

ここはアスナとキリトに教えを請うべきか。あの2人自重という言葉を知らないみたいだし。リズにはこれ以上弱みを握られたくないし。

そもそも最近はALOを離れていて内部事情に疎くなっているからな。やっぱり人に聞くのが手っ取り早い。

「……って完全に後手に回ってないか？」

そもそもこの後デートするのに聞いている時間なんてあるだろうか？ いや、ない。

……ド定番だけどウィンドウショッピングで今日は凌ごう。何か良さ気なアクセサリーがあったらプレゼントしよう。

「ああ……情けないなあ、俺って」
自分のヘタレっぷりに呆れて、俺は肩を落とすのだった。

ミスト君、第1級フラグ建築士疑惑（バレンタインネ
タ）

「どうも。みんなの兄貴クラインだ。

『バレンタインチョコを1個しかもらえなかった。お母さんから』
とか、

『勝った。俺は2個。ねーちゃんから』とか、

バレンタイン翌日に教室で嬉々として喋ってる奴ら——来年から
お前たち死刑！

そんなネタもう何万年も前からカカオとお母さんが誕生した時か
ら使い古されてんだよ。

鬱陶しいんだよ、ネタにしてるくらいなんだから俺たちぜーんぜん
気にしてないよね的なやつすい虚栄心がうんざりなんだよオオ！

義理だの本命だの今年は義務だの下らねーやりとりしてるバレン
タインという悪習そのものがアア！

やめるべきだろこんな茶番！ 来年からチョコ送った奴も！
貰った奴も全員死刑で！

ファイナルアンサー?!?!」

「ファイナルアンサー！」

そうだ、よくぞ言ったクライン！ そこに痺れる！ 憧れるツツツ
！

「……………」

「あ…あれ？ どうしたクライン？ 元気ないぞ？」

「——ファイナルアンサーじゃ、ヌエエエイツ!!!」

「げほあつ！」

テーブルを乗り越えてクラインの放った飛び蹴りが俺に炸裂する。
逆ギレされて蹴られる事なんて予想もしてなかった俺は受身も取
れずひっくり返った。

「1個くらい誰か持って来いよ！ なんだよこの銀○のノリはよオオ！
やって泣きたくなかったじゃねえか！」

「ぐ…ふっ。クライン、それは間違ってる！俺たちは愛を捨てた修羅だろう！」

「あと何よりもお前が賛同するって言うのが許せねえわッ！」

「うわっちよそれ真剣!!」

哀と怒りと悲しみの涙を流しながら抜刀し、問答無用で振り下ろされたクラインの刀を辛うじて白羽取りしてキャッチする。

何故だ!? 俺はお前の理解者にして同志のはず!

「お前今年は確実に本命貰えるだろうが！」

「あ。そっか」

言われてあっさり納得できた。

そうだよ、俺もう年齢〓彼女いない暦デッドスパイラルから脱出できたんじゃない。ありがとうシリカ。

「そのにやけっ面がさらに腹立つぜチクショー！」

「うおおっ…バレンタインが血のバレンタインに変わるうううっ！」

「なーに男同士でバカやってるのよ」

スパーン、と乾いた結構良い音が鳴って、クラインの頭が横にスライドした。

その背後、つまり俺から見れば正面なんだが、その手にハリセンを装備したリズが呆れ顔で俺たちを見下ろしている。

「た…助かった…ありがとなりズ」

「クラインには少しだけ同情してあげなくもないけど、ミスト…アంతはなにやってんのよ」

「いや…長年の習慣からついダークサイドに堕ちて」

何しろ今まで貰ったチョコなんて家族(母親から)だけだったから。

「はあく…ミストらしいといえばらしいかもしれないけどねえ」

「面目ない…」

「だったらこれ受け取っておきなさいよ」

はい、と素っ気ない感じでリズが差し出してきたのはラッピングされた四角い薄い板みたいなものだった。

メガテン…じゃない。目が点になった俺は、リズの差し出したも

のが分からずじつと凝視する。

「何よ。受け取れないっての?」

「いや……なにこれ?」

「チョコに決まってるでしょう、バレンタインなんだから。もちろん義理のね」

「……………」

ほら、と強引に受け取らせられ、俺は手元のチョコとリズを何度も何度も繰り返し交互に見てしまった。

「なによ。嬉しくないっての? そりゃ義理だけど……ってクラインもいつまでも不貞寝してないで受け取りなさいって」

「え……お、俺にもか?」

「当たり前でしょう。義理だけど」

言いつつリズはクラインの分もチョコを渡し、俺みたいに目を点にしてチョコとリズを交互に見てしまう。

「あのねえ……いくら実感沸かないからってノーリアクションは、つてええええ!?!」

何か言いかけたリズは次の瞬間目の前の光景に仰天し、驚きのあまり飛び退いてしまう。

俺とクラインの間に言葉は何も要らなかった。ただお互いにするべきことは知っている。

だから——リズの前にひれ伏した。

「あなたが神かつ!」

「ちよ、さすがにそんな事されるとあたしも困るんだけど!」

「だってよう、生まれてこの方母親からしかチョコ貰ったこともないし、社会人になってからはそんなこともなくなっただけ……ずっと……うおおおんっ!」

「俺だってそうだ! 生まれて……生まれて……」

「……生まれて、なに?」

「いや……俺の場合一度死んだから、この場合カウントをリセットする方がいいのかなって考えて」

「どうでもいいわっ!」

ですよー。

義理だけど人生初の家族以外からチョコを貰えたぜひやつほう！
あまりにも嬉しくてテンションがおかしいね！

ああ……思えば俺って不幸な道のりしかなかつたからなあ。上
がったかと思つたらさらに底へ底へと繰り返して地球換算で言えば
核に突入してるくらい。ザ・コアって映画知ってる？ あ、知らない
？ そっかー……。

「だがしかし！ 俺には本命のチョコがある！ 我が世の春がキ
タアアア！」

「ひやつ!？」

嬉しい余り叫んだ所、後ろで小さな悲鳴が。

振り返るとアスナが俺の奇行に目を丸くしていた。

「お、おお。どうしたんだアスナ？」

「ミスト君に渡すものがあつただけ……突然どうかしたの？」

「いや……今日くらい俺、幸せになる権利があつてもいいよね？ つ
て天に叫んでただけだ。ところで渡すものって？」

「あ、うん。私からのバレンタインチョコなんだけど……もちろん義
理のね？」

「……マジで？」

「うん、大マジ」

……なんということでしょう。まさかアスナからも貰えるとは。
絶対手作りの予感がする。だってアスナだから間違いない。

感激する余り言葉を失つて、俺はアスナから渡されたラッピングさ
れているチョコを受け取ると深々と頭を下げた。

「感謝の言葉もごいません……」

「そんな気にしなくていいよ、義理なんだから。それより開けてみて
くれる？ きつと気に入ってもらえるから」

「喜んで！」

ニコニコとやたら上機嫌なアスナが引つかかったが、そんな事より
も頼まれたならば引き受けるしかない。

ラッピングの紙を剥ぎ、中身を取り出して——俺は固まった。

——夕焼けをイメージした黄色いパッケージ。

——のどかな農村をイメージしたイラスト。

——そしてでかでかと書かれた『○治チヨコスナツク　きのこの山』。

「きのこの山……だと……」

おい……これは何の冗談だ？　何故仇敵が俺の手元にある。

愕然とした思いで手にした箱を見つめる俺に、怪しげな笑い声が響いた。

「ふっふっふ……騙されたねミスト君」

「アスナ……」

「この時が来るのを待ち望んでいたわ！　なぜ憎きたけのこ派にチョコをやらなければいけないの!?　それでも食べて悔し涙を流しているといいわっ！」

くっ……ぬかった。俺と奴は永遠に相容れない仇敵。このイベントに乗じて何か仕掛けてくると予想できなかつたとは！

「今日こそきのことたけのこの戦いに終止符を打つ！　勝つのは私たちきのこの山よ！」

「ぬかせ！　たけのこの里が唯一にして至高！　それは天地宇宙の理が変わったとしても永遠に代わることは無い不変の摂理だ！」

レイピアを抜いて構えるアスナに俺もテラー・オブ・ジエネシスを抜き、《魔装術》を起動させて迎え撃つ。

「今こそ決着の時！　たけのこの里覚悟——っ！」

「この命を糧とし、彼の者の魂すらも焼き尽くせ——！　轟け、黙示録の黒雷！　【アポカリプス】!!!」

「きゃあああー!?!」

助走をつけて一気に突撃したアスナを瘴気と荒れ狂う雷が飲み込んだ。

攻撃が止むと、そこには悔しげに顔を歪ませるアスナが倒れている。

「く……っ。開幕でいきなり大技使うなんて、卑怯な……」

「そう言うお前だって開幕【フラッシング・ペネトレーター】使ってきただろ」

人の事言えないだろ、と突っ込みつつ剣を収める。代償？ ギャグだから気にするな。

「ら……来年こそはきのこの山が、勝つから……がくつ」

捨て台詞を残してアスナは気を失ってしまった。

……虚しい戦いだった。俺たちが分かり合うことは永遠に出来ない事を感じつつ、それでも虚しさが胸に去来する。

「……………」

せめてもの情けだ……それにせつかくのバレンタインチョコだったんだし。

箱の封を解き、中を覗き込んだ。

「ああ……やっぱり」

あれだけ激しい動きをしたからあってもおかしくは無いと思っていたが、やっぱりあって俺は虚しくなった。

俺がきのこの山を敵視する最大の理由が、箱の中にはあった。

突然だがきのこの山がどういう構造をしているかはご存知だろうか？

軸の部分はクラツカーで、傘の部分は2層のチョコレートになっている。

で、このクラツカー部分が問題だ。構造上どうしても脆くなり、箱に衝撃が加わると中で衝突して折れることがある。

想像してほしい……中を開けたら1つだけぽつんと軸の折れたきのこの山があった時の光景を。虚しさしかない。

「……………」

折れた軸と軸の無いきのこ部分を取り出し、口に放り込む。

さくつとした軽い歯ざわり。そして口の中で溶けていくチョコ……これを気に入ると言う人もいるかもしれない。

「けどやっぱ俺、たけのこ派だわ」

うん、あとでたけのこの里買おう。俺はそう心に決めた。

「あ、ミストさん！」

きのこの山を食べ終えてまたブラブラしていたら、よく知る声に声を掛けられた。

声のした方へ振り返ると、シリカが俺のところへ小走りで行ってくる。

「どうした？ そんなに慌てて」

「ミストさんのこと、探してたんですよ……渡したい物があつて」
結構探し回っていたのか、シリカは少し息を切らせてる。

渡すもの……つて、やっぱアレだよな？

「あの、えつと……今日つて2月14日ですよ？」

「ああ。バレンタインデー……だな」

ちなみに昨日は13日で金曜日だったから、あのジェイソンが暴れまわる日だ。いや、詳しくは知らないけど。

それはともかく、少しだけ緊張気味のシリカに俺はふざけることなく真面目に答えた。

「そつ、そうですね？ それで——あ、あたしのチョコ、受け取ってください」「ここにいたのミスト」いいいつ？」

哀れ、シリカの決死のアタックに誰かが割り込んで、勢い余ってシリカは倒れこみそうになる。

幸い俺が受け止めたから無事だったが……にしても誰だ？

「シ、シノンさん!？」

「シリカ……？ なに、やってるのかしら。2人して」

振り返ればそこにシノンがいて、抱き合っている俺たちを目にした瞬間冷ややかに俺を睨む。

「いや……これはなんと云えばいいのか……」

あかん。(確信)

さつきまでの少し嬉し恥ずかしなムードから一転、場に少し張り詰めた空気が漂いだした。

この2人、仲がいいんだよ。本当だよ？ けどちよつとしたきつかけ(主に俺絡み)で犬も食わないどころかヘルダルフも尻尾巻いて逃げ出すつてくらい急に仲悪くなるんだよ。

見える……見えるぞ。俺にもシリカとシノンの中で火花が飛び散ってるのが。

この2人、どうしてこうなった……俺が原因？ デスヨネー。

「ああ、シノンさんじゃないですか。どうかしたんですか？ まさか、誰かに本命チヨコを渡すつもりだったとか」

「そういうシリカこそ、こんな時間から彼に抱きついて何やってるのかしら？ あんまりイチャイチャしてると御両親が泣くから自重した方がいいんじゃない？」

あかん。(確信)

どうしようか策を講じる前に2人の間でバトルが勃発してしまっただ。

え？ 普通の会話に見えるだつて？ お前の目は節穴かつ！

「いいじゃないですかこれくらい。『メ・イ・ン』ヒロインの特権ですよ」

『「アインクラッド編の」が抜けてるけど？ ファントム・バレットでは私がメインなんだから……ミストもいつまで抱き合っているつもり？」

「はっ、はいっ！ 大変申し訳ございませんでした！」

「あくん！ ごめんなさいミストさん、さっき倒れそうになった時に足を捻ったみたいで……もう少しこのままでいいですか？」

「(ひいひい!?)」

甘えた声でさらにしな垂れかかってきたシリカに内心悲鳴を上げた。

どうしてこうなった!? 最初の話じゃ「ヒロインはシリカ1人だけですよ」って話だったのに、気付いたらあれよあれよと1人2人3人と芋蔓式に増えていった！ おまけにSAOからも飛び出しちゃったし！

昔は「ハーレム形成する奴なんて爆発すればいい」とか笑って言ったのに気付いたら俺が笑われる側になっていたよ！ ハーレム系主人公って実はすつごく苦労してるんだね、イッセーとかワンサマの苦労が分かったわ！

「……ミ・ス・ト？」

「まままっ、待て落ち着けシノン！ 冷静になれ、普段クールなお前はどこへ行った!?」

「ええ……、十分落ち着いているわ」

「落ち着いてないだろお前！ 明らかに界〇拳みたいな赤いオーラ出してますけど！」

「やめてー、マジでやめてくれこういうシチュエーション！ 俺苦手なの、弱いのがダメなの。『称号・絶園のテンパリスト』ってあるんだよ？ グニャアリベサモンさんと同類なんだよ!？」

「ミストさん…あたし、ミストさんのために頑張ってチョコを作ってきたんです。貰ってくださいますよね？」

「っ……！ ミスト！ 私、ミストのためにチョコを作ってきたわ。初めて作ったから美味しくないかもしれないけど、気持ちだけはたっぷり籠ってるから受け取ってくれるでしょう!？」

「(ぎゃー!)」

もはや口からは声にならない声しか出ず、内心では絶叫していた。ついに全面戦争始まったよ、俺じゃ止められないって！

誰か助け……おお、心の友キリトじゃないか！ よっしや目が合った助け……って有無を言わさず逃げ出しやがった薄情者め！

「ミスト(さん)！」

「あたしのチョコ、貰ってくださいますよね!？」

「私のチョコ、貰ってくださいますよ!？」

あかん。(血涙)

やっぱり俺の人生がハーレムルートに入ったのは何かの間違いだと信じてる。……こんなタイトルのラノベ、あつたら俺迷わず手に取ってるね。きつと共感できるから。

もはや骨を埋める覚悟で2人からチョコを同時に受け取るしか、道は……！

「あ、居た居た。おーい、ミストー!」

だがそこに舞い降りたのは天使か悪魔か。

明るい声と共に正面から走って来る人影。あれは間違いなく……。

「ユウ、キ……う？」

「こんな所にいたんだ。探しちゃったよ」

こんな状況にも拘らずユウキはいつもの屈託ない笑みを浮かべている。

突然の介入者に少し毒気を抜かれたのか、今にもバトリりそうだった2人はぽかんとしてユウキを見ていた。

ユウキ……お前マジで救いの女神だなあ。感激の余り涙が出てしまいそうだよ。

「探してたって、俺を？」

「うん。ほら、今日ってバレンタインでしょ？ だから大好きな人にチョコを送ってみたいなーなんて思ってた」

てへへ、と少し照れくさそうに笑うユウキに、俺は一転して嫌な予感を抱き始める。

「けどボク、料理ってやったことなかったからさ……チャレンジして失敗するなら、最初から美味しい物を渡す方が良いよねって思ってた、買ってきたんだ」

そう良いながら後ろに隠していた小箱を前に出すユウキ。

なんだろう……周りで「ザワ……ザワ……」って○イジっぽいサウンドが聞こえる気がする。

「これ、チョコレートケーキがすごい美味しいって評判のお店で買ってきたチョコレートケーキ！ アスナにも普段お世話になってるから友チョコってことで渡してきたんだよ。あと2つはボクとミストの分で、一緒に食べようねっ☆」

ピシッ！

あ……あかん。(震え声)

救いの女神かと思われたユウキは実は、掬ってまた落とす無自覚な悪魔だった。なんていうかニトログリセリンを搭載したタンクローリーで石油精製プラントに突撃するとか、そんなレベルの。

「……………」

は……背後からものスッゴイプレッシャーを感じる……。

これって振り返ったら絶対ヤバイフラグだよな。でもどうしても

振り返りたくなって結局振り返っちゃうの。見るなよ！ 絶対見るなよ!!! つて言われるとどうしても見なくなる人間心理って奴。

「ミストさん……」

「ミスト……」

ボソリ、と地の底から響くような声に俺はついに振り返った。

顔を俯かせ、どす黒いオーラを放つ女の子が、2人。

「あの……2人とも？ 落ち着こうじゃないか。落ち着いて話し合わないか？ な？ あ……あれ、シノンさん？ どうしてヘカートのセイフティー外して？ シリカさんもスコープオンとダガーなんて用意して……」

「どうしてだと思えますか？」

「どうしてだと思う？」

につこりと、菩薩のような笑顔を浮かべて問い返す2人。が、次の瞬間鬼に豹変した！

「あなた（アンタ）を修正するためです（よ）！ この第1級フラグ建築士！」

「お……俺は……俺は悪くヌエー!!!」

もはや話し合いの余地など彼女たちには無く、俺は血相を変えてその場を逃げ出す。

当然悪鬼羅刹に豹変した2人は各々ライフルをぶっ放し、あるいはフルオートで銃を撃ちかける。

マジだ、この2人本気で殺すつもりだ！ どうしてこうなった！

「ひいいい！ お助けえー！」

「待てえー！」

立ち止まるな俺！ 止まれば死ぬ！ もう1度死ぬのはやだよ！

ちくしよう！ やっぱバレンタインなんて悪習撤廃で！ ファイナルアンサアアア！

「あーあ……行っちゃった」

どうも渡すタイミングが悪かったみたいで、ミストはシリカたちに追われて逃げていった。どうしてこういう時だけ情けないくらいへ

タレになつちやうのかなあ？

「結局ケーキ渡しそびれたし……あれ？」

少しだけ残念に思っていたら、知り合いが何か探しているらしくきよろきよろ周りを見て歩いていった。

「フィリア、どうかした？」

「あ、ユウキ」

声を掛けるとようやくボクに気付いたみたいで、アンケート結果でルートが潰れて出番が見送りになったフィリアが「ちよつと待つてよ！」

「どうかした？」

「ようやく登場できたと思つたらいきなり弄られるの!？」

「ごめんねー。こう言えつて書いてあつて……」

「うう……確かに否定できないけど。おかげで私、ことある毎にこうやって弄られる運命になつたし……」

「うん、本編だともう出るタイミング無いからね……」

そればかりはボクもフィリアに同情してしまう。

あれこれと考えられていたイベントだったけど、アンケート結果でフェアリー・ダンス編に行つちやつたから全部パーになつちやつてある意味で主人公のミストより不幸かもしれない。

まあ……あれは常に不幸を地で行くつて言うか、不幸の星に生まれたとと言うか……天の采配が面白おかしくなるのを優先してミストを幸せにする気が無いと言うか、そんな感じだけだ。

「それでどうかした？ ミストならついさつき、シリカとシノンに追われて逃げていった所だよ」

「うっ……またしても出遅れ……ううう」

うん……フィリアもフィリアでやっぱりミストに劣らぬくらい不憫かも。

「すいませーん。○マト運輸ですけど、白峰霞さん宛ての荷物が届いているんですが」

「あ、はいはい」

同情していたら宅急便がやつて来た。本人は居ないけど別にいい

よね？

伝票にサインすると、配達人の人（なんか某アイドルのリーダーっぽい）は一礼して去っていく。

「良かったの？ 勝手に受け取っても」

「いいんじゃない？ 後で本人に渡すから。えーっと……差出人は、と……」

伝票を見ると、そこには「商人ギルド セキレイの羽」と書かれていて、さらに連名でアリーシャ、ライラ、エドナ、ロゼとある……。

「これって……いいの？」

「さあ……」

隣から覗き込んできたフィリアが尋ねてくるが、ボクもなんとも言えない。

そもそもどうしてセキレイの羽名義なのか、あとゼステイリアチームの女性しかいないのかってツツコミが色々あるけど……気にしたら負けなのかなあ。ボクたちだってまだ本編に登場してないし、そもそもフィリアは出番すらなかったのに。

「だから！ いちいちそれを言わなくてもいいからっ！」

「ごめんごめん。ちよつと中身、見てみよつか？」

「でもいいの？ ミストに怒られるんじゃない？」

「多分大丈夫じゃないかなあ？ それにやっぱり気になるでしょ？」

「そ、それは……気にはなる、けど」

余りはつきりと言えないあたり、フィリアも中身が気になるってことなんだよね。

と言う事でフィリアのナイフで封を切って、中身を開けてみる。中に入っていたのは……

「何かの飲み物と……あとこれ、饅頭、かな？」

容量的には500ミリリットルくらいの瓶にこげ茶色の濃厚そうな液体が詰まっていて、一方の饅頭みたいなものも似たような色合いをしていた。

「あ……底に手紙が入ってた。多分説明書とかかな」

中身に首を傾げていたら、底にあった折りたたまれた紙を見つけた

フィリアがそれを手にとって声に出して読み始める。

『本日はバレンタインデーと言うことで、セキレイの羽の新商品のサンプルを送ります。ボトルの中身はアンマルチア産チョコの噴水から汲んだ生チョコ。ホットドリンク、チョコレートフォンデュと色々な利用が出来ます。もう一方は『チョコまん』で、生地にもココアパウダーを練りこんだ中華まんです。通常のスタンダード、男性向けのビター、子供や女性向けのスイートの3種類を取り揃えました。出来れば試食した感想をもらえるとありがたいです』……だって」

「商い魂逞しいねえ……」

わざわざこつちにも引つ張ってくるなんて逆に感心するよ。商品の狙い目は悪くないかもしれないけど。

でもこの生チョコって大丈夫？ 明らかに産地がグレイセスだったよね。業務提携でもした？

「あ……まだ続きがある。『追伸、ホワイトデーのお返しは婚姻届がほしいってアリーシャが』『冗談だからな！』 エドナ様のいつもの悪戯だからな!』『と言うのが冗談でやっぱ婚姻届がほしいって』『ライラ様の悪戯だからな!』 勘違いしないでくれ!』『ミスト、アンタ風の骨のブラックリフトに入れておくから。『女の敵』ってことで』……」

「はは……は」
ミスト……なんだか君の知らないところで大騒ぎになってるみたいだけど……この先大丈夫なのかな？ ボク、結構心配だよ。

「俺は悪くねえ！ 悪くねえんだー！」

「逃がすかー！」

と言うわけで、来年からバレンタイン撤廃でファイイツナルアンツサアアア！

その後のおまけ。

「あれ……ミスト？ どうしたんだそんな荷物背負って」

「キリト、か……ちよつと自分を見つめ直す旅に出てくる。——ネク

ロゴンドまで」

「ネクロゴンドってどこだよ!?!」

今度はロンダルキアに流れ着くフラグ（えー）

第3話 GGOでのある1日

第3話 GGOでのある1日

スコープ越しに見える光景は、ある意味人間離れた光景だろう。いくら予測線が教えてくれるとは言っても、飛んできたレーザーを剣で撃ち落とすなんて人間技じゃない。

けどそれを成してしまうのが私の相棒であり、最強の光剣使いとして『ラストフェンサー』の名で轟かせるクラウドだ。——親しい人は冗談の意味で『ジエダイ』と呼ぶ事もあったりする。

防護フィールドを所持しているといっても万能じゃない。距離が近ければ近いほどその効果が弱くなってしまい、白兵戦を行うクラウドには実質意味の薄い物だ。

「……………」

それでもクラウドは口元にかすかな余裕の笑みを浮かべてレーザーを悉く斬り裂いている。

あんな風に強くなりたい——しばらくその光景に見入っていた私だったが、思考を切り替えて狙撃に集中した。

トリガーに指をかけるとスコープに予測円が現れ、不規則に大きさを変えながら揺れ動く。

けどこの程度の狙撃なんて……造作もない。

トリガーを引き絞ると弾丸が撃ち出され、銃口から噴煙が噴出す。

——ビンゴ。

発射された弾丸は寸分変わらずクラウドにレーザーを撃っていたプレイヤーの1人に命中。身体を真つ二つに吹っ飛ばした。

予想外の攻撃を受けて敵スコードロンに動揺が走る。そんな風に慌てていたらクラウドの餌食になるのに。

攻撃が止んだ一瞬の隙を突いてクラウドは敵スコードロンとの距離を縮めて行き、《MURAMASA》の間合いに入った瞬間、3つの剣閃が煌いた。

クラウドの得意技、『シャープネイル』。斬撃の跡が獣の爪痕を思わ

せる高速3連撃。

3つの剣戟でプレイヤーの1人がバラバラにされると、不利と判断した残りの3人は離脱を試みる。けれど私の《ヘカート》による狙撃がそれを許さない。

「ツードウン！」

背中を向けた大口徑レーザーライフル持ちのプレイヤーを狙撃で撃ち抜く。

その間にもクラウドは次のターゲットに《M10》を撃ちながら接近し、ブラスターで応射したプレイヤーのブラスターを腕ごと斬り裂き、首を刎ねる。最後の1人も私の狙撃であっけなく吹き飛んだ。

「……スリーダウン」

「さすがシンノン」

「あの程度の狙撃なんてことないわ。それに、クラウドの方がよっぽど神業じみている思うけど」

「そうかあ？」と大したことなさそうに言ったクラウドに、「そうよ」と私は答えた。

距離1500メートル先の動くターゲットを狙撃するのと、4方向からランダムに撃たれた銃弾を全て剣で撃ち落すのとどちらが難易度が高いか、と聞かれれば、私は間違いなく後者だと答える。

逆にクラウドは前者だと答えるのは分かっている。それは互いの戦闘スタイルの違いや経験など、複数の要素を踏まえた上での答えだ。

でも……クラウドの戦い方は余人には到底真似できる芸当じゃないと思う。あの反応速度は人間の域を超えていると思うから。

実際、クラウドの戦い方は注目度が高いから、大勢がこぞって真似ようとしてすぐに挫折している。

「それほどの腕ならB.O.Bに出場すればいいのに……。クラウドなら確実に上位に入賞できると思うし、何より私が戦える口実になるから」

「別に名声に興味なんてないんだよ。毎月稼げればそれで十分」

こんな風にクラウドはあれほどの力を持ちながら、自身の力を証明

したがらない。それでもそれなりに有名なのはGGOでも数少ない
スナイパーの私がコンビに選んでいる（実際遠距離狙撃の私と近接白
兵戦闘のクラウドとは相性が良かった）のと、その常識外れの腕前を
持っていたからだ。

クラウドはPvE、PvPどちらも行う。本人としては「稼げるか
否か」が大事らしく、強い拘りは持っていない。稼ぎはプロの連中
には及ばないが、それでもリアルマネー換算で10万前後は稼いでい
らしいけど。

BoB——正式名称は「バレット・オブ・バレッツ」。GGOで行わ
れる最大規模の大会だ——だけじゃなくても大小幾つもの大会があ
る。上位入賞すればレアな武器が手に入るし、そこで稼ぐ方がより早
くて確実だ。

でもクラウドは「これ以上目立ちたくない」と言っただけでそう言っただ
会に参加する気は皆無で、こうしてPKしたりモンスターを狩ってい
る。

「そもそも、俺なんて大した事ないさ」

——少しだけ哀しげな色を含んだ声で呟いたクラウドが、妙に印象
に残った。

／
首都のグロッケンに戻ってきて、俺はシノンと今回の稼ぎを分配し
た。

さすがに2人でやると格段に楽だ。モンスターならまだしもプレ
イヤー相手だと1人で挑むのは遠慮したい。

理想を言えば戦力と稼ぎのバランスを考慮すると、3人でPKする
のがちょうどいいくらいなんだがな……度々シユピーゲルを誘って
みるんだが、「2人の実力が違いすぎて追いつけない」って遠慮してい
るし。

別に遠慮する事はないんだが、どうにも卑屈な所があるのがあいつ
の悪い所だよなあ。

「——ねえ、聞いてる?」

「あ? 悪い、ちよつとボーつとしてた。もう1度言ってくれるか?」

「だから、クラウドもB O Bに出場してくれないかって言ったのよ」
他の事を考えていたら少し拗ねた口調のシノンの声に我に返った。
謝りつつ聞き返すと、口を尖らせたシノンから出てきたのはいつもの
勧誘で、俺はまたですか、と溜め息をつく。

「良いってそんなの。俺別に最強の称号とか興味ないし」

「けど上位入賞すればレアな武器や賞金も出るんだから、出ても損はないでしょう?」

「別に今の稼ぎでも十分満足してる」

あれやこれやと手を変え品を変え、しつこく勧誘してくるシノンの
のらりくらりとかわし続ける。

実際問題、最強なんてどうだっていいし、今のやり方で10万前後
は稼いでいるから満足もしている。

別にPKが嫌いと言うわけではない。でなければPVPメインの
GGOでやって行くことなんて無理だろう。当然最初は抵抗があっ
たが、今はもう慣れた。

それにあれこれ理由をつけて参加させようとしているシノンだが、
本音は別の所だろう。

「なあ……なんでそこまでして俺と戦いたがるんだよ?」

あえて今まで避けてきた話を、俺は切り出すことにした。

どうにもシノンは俺と——と言うより、GGOのトッププレイヤー
と戦いたがっている。

誰だってトップを目指すのは当然……とも思うが、シノンの場合は
別の意味があるように思える。

そもそもただ倒すだけと言うのなら、バディを組んでいる時にいく
らでも狙う機会はあった。背後から闇討ちするとかされれば、俺も警
戒していなかったらやられるだろうから。

けどシノンはそんな卑怯なマネはしなかった。真つ向から戦って
勝たないと意味がないと言って。

「……………」

俺の問いにシノンは口を閉ざす。余り踏み入ってほしくない話と
言う事か、と解釈した俺は肩を竦めた。

「別に話したくないって言うのなら、無理に聞き出したりはしないけどな。事情聞いてもそれでB O Bに出る、って事にはなりにくいだろうし」

「……ごめんなさい」

「別に謝らなくても良いって。誰だって人に話したくない事の1つや2つ、抱えているものだろう？——俺だってあるから、さ」

「クラウドにも何か悩みがあるの？」

「そんな意外そうな顔されると逆に傷つくんですが……」

心底意外そうに目を丸くしたシノンに俺は若干頬を引き攣らせる。

シノンさん、あなたは普段俺のことをどんな目で見ているんですか？ 年中お気楽極楽れっつごーごーな能天気だとても？

「ううん、そうじゃなくて……クラウドってあまり悩んでるとか顔に出さないタイプだから、少し意外で……」

「あつそ……ま、俺の悩みなんて俺自身にもどうにも出来ないし、他人にもどうにも出来ない問題だからずっと棚上げにされてるんだけだな」

「そう……なんだ」

「別にシノンが責任を感じる事はないからな？」

自分のせいだと思いつつもとしたシノンにあらかじめ釘を刺す。

彼女に言ったとおり俺の抱えている悩みは自分にも他人にもどうにも出来ない問題だからどうしようもない。

それに『問題』なんて言っているが、客観的に見ればこれはメリツトみたいなものだろう。かと言って使うのはよっぽど切羽詰った状況になった場合に限るが。

……まあ、仲間内には見せられないよなー、と思いつつ、ソフトドリンクのメニューを呼び出すとジンジャーエールをタップし、すぐに注文したドリンクがテーブル中央からせり出してきた。

それを飲みつつ、若干沈んだ空気を切り替えるように俺は別の話を切り出す。

「B O B、使うのは当然《ヘカート》なのか？」

「ええ。そのつもり」

「別にそれでも問題ないと思うけど……やっぱりサイドアーム考え直すべきじゃね? 《グロック18C》はまともに当たらなければ牽制にもならないだろ」

「そうかしら……取り回しを優先して選んだのだけど」

「確かに大容量マガジンの割りに超小型軽量なのは認めるが……反動がキツ過ぎて使いづらいだろ」

「普段《M10》を撃ちまくってるクラウドが言うと余り説得力が無いけど……そこまで言うならどの銃を選ぶ?」

「そうだなあ……」

腕を組み、脳内データベースでシノンのスタイルに合致しそうな銃を検索する。

あれこれ浮かんでは消えるが、最終的にはシノンの好みということに落ち着きそうだった。

「いくつか候補はあるけど、実際にマーケット覗いてみるのがいいかもな」

「それもそうね。もちろん付き合ってくれるんでしょう?」

「ご所望とあらば喜んで」

胸に手を当てて恭しく一礼してみせると、シノンは小さく笑いながら「あんまり似合わない」とツツコミを入れる。けどシノンの気は紛れたみたいだし、何はともあれ良かったかな。

シノンと共にマーケットにブロッケンで一番大きいマーケットまで来ると、俺たちはスクリーンに表示される銃器を見てあれこれ話しかつていた。

ある程度絞り込む事が出来たが、あとはシノンとの相性と好みって所になるな。

「やっぱりハンドガンなら《M93R》、SMGだと命中精度重視なら《MP5K》系列、取り回し重視なら《Vz61》系列って所に落ち着くよな。それぞれにメリットもあるし、デメリットもある」

「そうね……」

簡単な説明と共に3つの銃をピックアップしてみたが、やっぱりシ

ノンには難しそうに眉根を寄せて考えているようだった。何しろ優勝を目指すんだっいたらいい加減な選択は出来ないだろう。

「……やっぱり《MP5KA4》かしら。機能的にも他を補えるし」
「確かになあ」

シノンが選んだ《MP5A4》と言うのは高い命中精度を誇る《H&K MP5》の小型モデルの1つだ。中でも《MP5KA4》は《MP5A4》をベースに製作されており、セミ、3バースト、フルオートを切り替えて撃つ事ができる。

ピックアップした中だと大型だが、シノンの求める能力は満たしているしこれなら問題ないかもしれない。

「けどたっかいよなあ。さすが高性能なだけある」

「いつその事クラウドのそれとお揃いにしてみる？」

「やめとけて。振り回されるのがオチだ」

「冗談よ。それじゃあ早速買うわ」

悪戯っぽくシノンは笑ってから、コンソールを操作して購入ボタンをタップすると、すぐにロボットがやって来て最終確認画面が表示され、これをタッチすると購入した銃がオブジェクト化された。

浮いているそれをシノンが手に取るとやって来たロボットは帰っていき、試しにとばかりに構えてみる。

「どんな感じだ？」

「当然と言えば当然だけど、《グロック18C》よりは重いわね。でもこっちの方が断然扱いやすそう」

「そりゃあんなじゃじゃ馬と比較すればなあ」

「同じじゃじゃ馬使っているクラウドが言っても、説得力無いわよ」

「俺のはバラ撒きがメインだからいいんだよ」

口を尖らせ、俺は拗ねたようにシノンの突っ込みに言い返した。

そもそも命中精度を重視する《MP5》系と速射による瞬発的な面制圧を重視する《M10》とでは同じカテゴリーでも土俵が違う。

「それよりこの後試射するんだろ？」

「当たり前じゃない。すぐ実戦に使うわけにも行かないわ」

それもそうだよな、と俺も同意しつつ、俺たちは屋外射撃場にやつ

てくる。

相変わらずここは買った銃を試射しに来た連中がやかましく銃を撃ちまくっていて、会話してもまともに聞こえやしない。

空いている射撃スペースに到着すると、早速シノンは《MP4KA4》の試射をした。最初は単射による精密射撃、さらに3点バースト、フルオートと順に撃ってターゲットに命中させる。

さすが、高精度を謳っているだけのことはあって弾はシノンの狙った所に高確率で命中しており、間近でそれを見て俺は改めてその精度の高さに唸らされた。

「俺のじゃここまで狙って当てられないよなあ」

俺の《M10》であそこまで狙い通りに当てるには、よっぽど接近しなきゃ当たらない。その頃にはすでに剣の間合いだからなおさら意味がない。

ちよつとだけ羨む様に見ていると、その視線にシノンは困ったように見返してきた。

「そんな風に見られても困るんだけど……」

「悪い……いいなと思つてつい」

「だったら改造するなり買い換えるなりすればいいじゃない。《M10》だって改造すれば《MP5》クラスの命中精度まで引き上げられるでしょう？ クラウドのそれって——」

「グリップ変更してストック外したし、あとはセレクトターやセーフティーの配置を左用に変更したけど、それ以外はほぼノーマルだな」
「……それでよくやって来れたわね。サイドアームだからいいのかもしれないけど」

「あくまでメインは剣だからな。それにコレには思い入れがあるし」
「漫画とかゲームの影響って言ってたわね。○イオとか、なんとかって……でもそれって何十年も昔のゲームでしょう？ よく知ってたわね」

「不朽の名作なんだよ、不朽のー」

とは言え俺もやったのがゲーム○ユーブのリメイク版だったけど。それでも当時からしたらかなり古かったからなあ。

最初に《M10》を使う理由を聞かれて答えたら目を点にされ、「いつの時代の人？」と突っ込まれた時のショックは大きかった。これが世に言うジェネレーション・ギャップと言うものか……!」

「確かにあのシリーズが人気作なのは認めるけど」

私は普通かな。と感想を口にしたシノンにそりやそうだよな、と内心納得する。こんなゲームをやっているとは言えシノンも立派な女の子なんだから、ああいうサバイバルホラーは好みじゃないだろう。「やっぱホラーとかは苦手なクチか？」

「苦手……ってほどでもないけど、かと言って好んで見たりはしないわね」

確かに……シノンが一人でそう言う物を好んで見ている、と言うのは余りイメージしがたいものがある。どっちかかって言えば図書館の窓側の席で一人静かに読書している方がしっくりしそうだ。

「……なに？ そんなじーっと見て」

「いや。シノンって文学少女なのかなあって」

「それは……あながち間違っていない、けど」

あれ。どうやらイメージ通りだったらしい。

シノンの方は若干頬を染めつつ、もごもご口の中で何か言い訳しているがまったく聞き取れない。当てられて恥ずかしかったのかな。

「いや、悪い。詮索するつもりはないから。リアルのを聞くのはマナー違反なんだし」

「ううん。別に気にしてないから」

謝るとシノンは本当に気にしていないようだったが、なんだか微妙に気まずい空気になってしまった。

試射もそこそこに俺たちは射撃場を後にして、気まずい空気のまま街を歩いていく。気にしてないと言いなながらもシノンは少し気にしているようで、一言も話さないのはかなり居心地が悪い。

「ん……？ やあ、クライドにシノンじゃないか!」

「げっ……」

何かきつかけがないものかと考えをめぐらせていた所に、妙に親しげな声が掛けられる。

声のしたほうへ目を向けると、つい唸ってしまった。いや、本当に相手に聞こえない程度だけど。

長身に白いコートを纏い、サングラスを掛けた青い髪の男性プレイヤーが俺たちに近づいてくる。

「こんな所で会えるなんて奇遇じゃないですか、GGOでも最強と言われるほどのコンビと会えるなんてツイてるなあ」

「……こんにちは、ゼクシード」

シノンも男の姿を一瞬だけ見ると、余り関わりたくなさそうな雰囲気を出しながら一応挨拶をする。

この男、ゼクシードはGGOでもトップクラスのプレイヤーの1人で、実際に第2回BOBでも優勝していて第3回の優勝候補として名が上がっている。

確かに、プロ連中の1人というだけあって腕は一流。おまけに頭もキレル……のだが、同時に狡賢い。そのおかげで第2回BOBにおいて優勝できたと言っても過言じゃない。

と言うのも、ゼクシードは初期にアジリテイ万能論を提唱していて、それに多くのプレイヤーが追随。ところが当の本人はアジ万能論をあっさり非難し、多くのプレイヤーを騙してかなり恨みを買っている。

まあ、騙された方も騙された方で悪いとは思うけど、知り合いにこいつに騙された奴がいるからなんとも複雑なんだよなあ。

「ちようど良かった。あの話を考えてもらえたかな？」

「あー、パス。スコードロンは興味ない」

「ごめんなさい、私も今のところ入るつもりはないわ」

シノンと共にあっさり断ってしまった。

ゼクシードはトッププレイヤーであると同時に、最大規模のスコードロンのリーダーでもある。で、前々から俺たちをスカウトしているんだがごらんの通り。

「どうしてですか？　いつまでもコンビやソロで動くよりもずっと効率的なのに。2人ならすぐにナンバー2とナンバー3に迎えられますよ」

「……地位とかそんなものに興味ないんだよ、俺は。それに目的は俺たちの情報収集だろう？」 B o B に向けての」

「っ……何のことです？」

「惚けるならそれでいいけどな……あと親切心からの忠告だ。お前は結構恨まれてるんだからそれなりに気をつけとけよ」

頬を引き攣らせるゼクシードに一方的に告げて、シノンの肩を叩き歩こうとする。

が、背後から誰かが肩を掴んできて、振り返ると怒りを抑えているが頬がひくひくと痙攣しているゼクシードの手が俺の肩を掴んでいる。

「まだ何か用か？」

「こつちの話はまだ終わってないんですけど……！」

「クラウ……」

冷ややかに問う俺とは対照的に、ゼクシードは声に怒りを含んでいて今にも爆発しそうな様子だった。

思わずシノンが割って入ろうとするのを手を上げて制す。

「用件なら終わっただろ？ これ以上何があるんだ」

「どうして僕のスコードロンに入ろうとしないんだ！ これだけ好条件をつけているのにどこが不満なんだ!？」

「なんだ……理由なんて簡単。1つ、そんな条件出されても興味はないから。2つ、正直お前が好きじゃない」

「なっ……!？」

はつきりと言葉にすると、ゼクシードは絶句した。

別に狡猾な所とかはまあ、目を瞑る事もできる。他人のことは言えないからな。ただこのキザな態度が一々鼻につくのが鬱陶しい。

それにスカウトする本当の理由も、B o Bに出た際に要注意人物になるであろう事から監視しておきたい、つて言うのが実際のところだろう。俺は出る気なんてサラサラないけど。

「安心しろよ。シノンはともかく、俺はB o Bに出るつもり無いからお前に当たる事もない。良かったな」

「ふぎげ……っ！ 僕をバカにしてるのか？ 例え君が出場した所で

「僕が勝つ、間違いなく！」

「いや、俺が勝つね」

齒に衣着せない物言いにゼクシードの眉間に皺が寄る。

別にブラフではなく、客観的に判断した結果から口にしたただけだ。確かにゼクシードはB0Bで優勝できるだけの實力を持っていて、間違いなくトップレベルといって過言ではないだろう。

だが、それでも――。

俺より上とは到底思えなかった。どれだけプレイ時間をつぎ込んでも、ただの人間には。

「なんだったら決闘スタイルでハッキリさせてみるか？」

「ああ、望む所だ。君たちが勝てば今後一切勧誘はしない。だが僕が勝てば2人ともスコードロンに入ってもらおう。それだけじゃない、今後ずっと所属して活動に参加してもらおうぞ」

「ああ、それでいい」

「ちよつ……！ 私まで巻き込まないでくれる!？」

話を進めていると、勝手に巻き込まれたシノンは慌てて俺の袖を引っ張りながら抗議する。

けどシノンだってゼクシードの勧誘には辟易していたからいい機会じゃないか。有力候補のプレイヤーの情報を集めるつもりだった彼女の的には少々問題かもしれないが。あとで改めて謝るとしよう。

「方法は簡単。互いに背を向けて10歩歩いて距離を取ったあと、破壊不能エフェクトを早く相手に発生させた方の勝ち。立会人はシノン……異論はあるか？」

「こっちはそれで問題ない」

「はあ……分かったわよ」

提案した決闘の方法にゼクシードは同意し、シノンは諦めたように肩を落とす。

そんな事をしていっていると、なんだなんだと野次馬が遠巻きに見物するようになってきたけど、別にいいだろ。危険はないんだから。

ゼクシードと背中合わせになり、腰の光剣の存在を確かめる。向こうはサイドアームの拳銃を使うはずだが、俺はこっちで問題ない。

「良いわね？……1！」

確認するシノンに頷き、カウントダウンと共に1歩踏み出す。

2歩、3歩、4歩……8歩、9歩——。

「——10！」

「……！」

10歩目を踏んだ瞬間、ゼクシードは振り向きながらホルスターから銃を取り出した。

H&K USP……その中でも先端がネジが切られたバレルが特徴なそれはタクティカルモデルと呼ばれ、サプレッサーの装着を可能としてより大口徑の・45ACP弾を用いている。

だが——どちらにしてもこっちのアタックが圧倒的に速い！

「うっ……！」

照準を向けようとして、ゼクシードは眼前に浮かび上がる紫の壁に呻いた。

その壁はブオン……と駆動音を唸らせる光の刃の先端からゼクシードを守るかのように表示されている。

光刃の元を辿れば……カラビナを腰に引っ掛けたままで光剣を起動させている俺の姿があった。

「後学のために1つ、良いことを教えてやる。接近戦なら銃より剣の方が早い」

淡々と、動きを止めたゼクシードに説く。

確かに光剣は接近しなければ真価を發揮できない。逆に言えば剣の間合いの中でなら銃よりも圧倒的なアドバンテージを持つということだ。

GGOは銃火器が主流だ。それは認めよう。けど、万能と言うわけではない。

「さて、勝敗はこの通りだが……不服ならまだやるか？」

「くっ……いい、いや。僕の負けだ……」

苦虫を噛み潰したような顔を浮かべながらも、ゼクシードはすんなり負けを認めて銃をホルスターに戻した。

それを見届けてから俺も光剣の電源をオフにし、光の刃が消えると

手を離す。

「約束どおり、今度一切俺たちをスコードロンに勧誘するなよ？ もし反故にすれば……そうだな、お前がフィールドに出る度にPKしに行くから、覚悟しろよ？」

「わ、分かっている……僕も君たちを敵に回してずっと付きまとわれたくはない」

「にっこりと笑みを浮かべてゼクシードを脅してやると、奴は冷や汗を掻きながら後ろに下がった。

ハツタリではなく本当にやることを理解しているだろうし、これですつこい勧誘とはおさらばできるだろう。

「ならよかった。それじゃあこの話は終わり。俺たちは失礼するから」

最後にもう一度笑みを浮かべ、ゼクシードに背を向けて歩き出す。

それに一瞬遅れてシノンも駆け出し、隣に來るとジロツと睨みつけてきた。

「勝手な事して……」

「はは……悪い悪い。いい加減うんざりしてたから、つい」

「まったく……。けどさすがクラウドって言うべきかしら。あのゼクシードを相手に圧倒した上に瞬殺なんて」

「まあ、対等なように条件的には俺が若干有利だったからなあ」

悪戯っぽく笑みを浮かべ、シノンにだけはタネを明かす。

まず今回の決闘のポイントは、攻撃に移るまでの時間だろう。

銃火器の場合、構え・狙い・撃つという手順を経るが、格闘武器の場合は構え・打つ（斬る）だけで済む。この動作の差は結構大きい。近接戦闘は一瞬の駆け引きが勝負を決めるのだからなおさらだ。

最初の距離こそまだ銃が有利だが、それでも大股で詰めれば間に合わない距離じゃない。特に俺の場合、圧倒的に長いリーチを持つMURAMASAなら2、3歩歩いただけで間合いに入り込める。おまけに普通の剣と違って、所謂抜刀に掛かる時間も若干短い。

——と、このように蓋を開ければ若干天秤が俺に傾いている内容だったわけだ。後は反応速度とかも影響するが、ポイントさえ押さえ

ておけば俺以外の人も出来る。

「あと、ゼクシードの奴は若干俺のこと見くびっていたからな。その油断が勝機を逃した」

「クラウドもクラウドで、そう言った小技が好きよね……。普通に戦っても強いのに」

「確かに小技を多用するけど、ゼクシードほどえげつなくはないと思うけどなあ」

あいつが詐欺師なら、俺のはいたずら小僧の範疇だろう。

……まあ、多少同属嫌悪的なものを抱いていたから嫌いでもあったんだけど。

「……一応ありがとうは言っておくわ。ゼクシードの勧誘には正直うんざりしていた所だから。データを手に入れるのは難しくなったけど、あいつのことだから直前で裏を搔く可能性もあったし」

「ない、とは言いい切れないなあ」

アジ万能論で多くのプレイヤーを釣って、結果的にそれがBOBでは有利に働いたから。ただそれをやるには相当な情報操作も必要になるし、ゼクシードには前例があるから参加者は警戒しているだろう。

「もし手を貸してほしいって時には声掛けてくれ。今回はシノンに迷惑かけたし」

「別にあなたがそこまで責任を感じる必要はないけど……。いいわ、もし手伝いが必要になったら声掛けるから——あ」

言いかけたシノンは、俺の背後を見て少し驚きながら言葉を止める。

なんだと振り返ってシノンの視線を辿ると、空中に表示されている時計の時刻——18時40分を過ぎていた——に目が留まっていたようだった。

「もうこんな時間……。夕飯の支度しない」と

「そっか。それなら今日はお開きだな」

「ええ。じゃあクラウド、また明日」

「ああ、またな」

話しながら右手でメニューを呼び出し、ログアウトの操作をするシノンに別れを告げると、その後シノンは光に包まれてゲームからログアウトしていく。

その場には俺だけがポツンと残されたんだが……このあとどうするか。

「……もうひと稼ぎしに行きますかね」

今から地下ダンジョンに長時間潜れば結構稼げるだろうと判断すると、俺は装備を整えるためにマーケットに赴き、1人でグロツケン地下ダンジョンに潜って行った。

第4話 バレット・オブ・バレッツ

第4話 バレット・オブ・バレッツ

——2025年 12月13日。

首都グロツケンは普段以上に熱気に包まれていた。

それも当然と言えば当然。今日からはGGOで最大のイベント「バレット・オブ・バレッツ」……通称BOBが開催され、腕に覚えのある連中は揃ってグロツケンの総督府に行っており、そうでない連中も完全なお祭り騒ぎ。お前らノリノリだねえなんて暢気に考えながら、総督府に入る。

辺りを見回して受付端末を見つけると、端末の所まで行つてちよいちよいと受付を……つてリアルの情報必要なんだっけ。上位入賞だとレアアイテム貰えるんだっけ……そうでなくても別途賞金貰えるんだしそれで十分か。

エントリーを済ませ、エレベーターで待機エリアの地下20階へ。ドアが開いた瞬間、その場にいた人間たちから一斉に鋭い視線を向けられた。

「うおう……」

その圧力に思わず後ずさる。ごく一部を除いて参加者なんだから殺気立っているのは当然だが、始まる前からそんな状態で大丈夫なのかと思う。

つて言うか息苦しいんだよ、仮想現実の中とは言えこうも殺気立ってるようじゃ。換気しろ換気。

「あれ……クラウド？」

「ん？ ああ、シユピーゲルか。よっす」

誰かに名を呼ばれた気がして、辺りを見回す。

すると人の間を掻き分けてシユピーゲルが来ようとしていて、俺は軽く手を上げて挨拶した。

「珍しいね、クラウドがここに来るのつて。ああ——シノンの応援に来たの？ 彼女はまだ来ていないみたいだけど」

「んー……そうじゃなくてだな。俺もエントリーした」

別に隠すほどのことでもなく、正直に打ち明けると鳩が豆鉄砲を食ったように呆けるシュピーゲル。気のせいかな周囲もシーンと静まり返る。

「え——えええええっ?!?!」

少し間を置いてから返ってきたシュピーゲルのリアクションは、それはもう初めて聞くんじゃないかというくらいの驚きの声だった。

／
「つたく……ほんつとうサイアク！」

総督府に向かっていている途中、道に迷っていた女の子を助けて色々世話を焼いていたら、そいつが実は男だったって私が着替えてる最中にバラしてきて！

なんでこのタイミングでカミングアウトするのとか、その見た目で男ってどういうことな……いや、それを言ったらクラウドだってパツと見は女に見えなくもないけど。

そのまま付いてきた男女に一言言っつてやろうかと思ったその時、馴染みの声が掛けられた。

「シノン！ シノンッ！」

「ああ、シュピーゲル……慌ててどうしたのよ？」

「大変なんだよ、クラウドがB O Bに出場するって！」

私のことを探し回っていたらしいシュピーゲルから飛び出した衝撃の一言に思わず目を見開く。

クラウドがB O Bに……？ どんなに誘つても言っつて断り続けたのに？

突然すぎる報せに呆然としていたら、件の人物が長い銀髪を揺らしながら近づいてきた。

「よーっすシノン。結構ギリギリだったみたいだな？」

「クラウド……本当なの？ B O Bに出場するって」

「ん？ ああ。色々と思うところがあつてちよつと出ることにした」

戸惑っている私たちとは対照的に、クラウドは普段通り飄々としていた。

確かに参加してくれるのは私にとって願ってもない話だけど……何の前触れもなく出場すると言う動揺は大きい。

と、そのクラウドが向かいに座ってる女みたいな男に目を留めた。「そっちの人は？」

「……ちよつと色々あつて、詐欺師みたいなやつよ」

「詐欺師は酷いなあ……」

「事実でしょう。性別偽ってたじゃない」

「いや、あとでちゃんと明かすつもりだったんだ」

ふん、どうだか。私たちの間に起きたことを知らないクラウドとシュピーゲルは顔を見合わせて不思議そうな顔をしている。

「なんか、事情は良く分からないけど……俺はクラウド。シノンの友人だ」

「初めまして。キリトと言います」

「……キリト？」

「はい……そうですけど、なにか？」

自己紹介した女みたいな男——面倒だからキリトでいいわねもう——にクラウドはなぜか驚いたように少し目を見開く。

驚く理由が分からないクラウドに、キリトは不思議そうに首を傾げる。それに気づいたクラウドは「ああ、ごめん」と前置きした上で言葉を紡いだ。

「いや、男っぽい名前なんだなってちよつと驚いて」

「男っぽいもなにも正真正銘男よ、コイツ」

「えっ」

「あははは、そうなんですよ」

なにを暢気に肯定してんのよっ！ と言いたかったけど、唐突にフロアが眩しい明かりで照らし出されて遮られてしまった。

《大変長らくお待ちせいたしました。ただいまより第3回バレット・オブ・バレット予選トーナメントを開始いたします》

フロアの中央に設置されていたクリスタルが回りながら光を放ち、同時にアナウンスが響き渡る。

その開幕の合図にフロアに居た参加者は威勢を上げたり、あるいは

景気づけに銃を撃ち鳴らしていた。

……思いつきり文句言いそびれたけど、まあいい。私は威勢よく立ち上がるとビシツとキリトに指を突きつける。

「決勝まで上がってくるのよ！ その頭、すっ飛ばしてやるから！」
「……よっぽど恨んでるみたいだなーこいつの事。具体的に何やったの？」

「えーっと……彼女の名誉のために黙秘ってことで」

「そっかー。シノンって1度狙いをつけるとしつこいから気をつけろよ？」

「クラウドはどっちの味方なのよっ！」

なんでかあつさりと仲良くなっているクラウドに思わず吼える。

……けど1週周って冷静になって、そう言えばクラウドはどうなんだろうと気になった。私とキリトは同じブロックだったけど。

「俺？ 俺はCブロック。お前たちより先にエントリーしたか——」

そう言いながら前触れもなくクラウドは白い光の球体に包み込まれて、次の瞬間別のフィールドに転送されてしまった。

クラウドはCブロックって言いかけたわね……Cブロックには——なんか、癖のある連中しかいないわね。けどクラウドが負けるって事はまず無いか。

私と当たるのは本戦……まずはその前に、宣言どおりこいつの頭すっ飛ばしてやるわ！

「……ってどこ行ったのアイツ」

「今さっき転送されていったよ」

さつきまでそこにいた黒づくめ男の姿が影も形もなくなっているのに気付くと、シユピーゲルが同情するような目で私を見つめながら教えてくれた。

……クラウドのせいでどうにも締まらなくなったじゃない。

／
いやあ……驚いた。会えるだろうとは思っていたけど、こんな偶然もあるんだなあ。

試合開始前の準備時間中、武装を終えてバトルフィールドに転送さ

れる前の僅かな時間の間に俺は感慨に耽っていた。

「しつかし……あの姿はなあ」

あれって確かかなりレアなアバターだったはず。コレクターの間じゃかなりの額で取引されているんじゃないやなかつたっけ？

俺も見るのは初めてだったが、あんな女の子みたいな外見とは……スクショ撮ればよかった。

いやそれより、今は目の前の試合だ。俺の対戦相手は……えーつと、ポーク……スープ……？

「……えつ。それって豚汁だろ？　なんでわざわざ英語にしてるの？」

そりやあ薄塩たらこなんて名前を使っていた人も居たけどさ。いや……うん、突っ込むのはやめておこう。なんか踏み込んだじゃいけない気がする。

「まあさっさとスライスしてやりませんかね」

豚汁だけに、とあんま面白くも無いダジャレを呟いた直後、俺は光に包まれてフィールドに転送された。

場所は廃棄湾岸地区……。時間帯は夜間のためか視界はやや悪い。遮蔽物も無数に詰まれて並ぶ大型コンテナもあって隠れる場所には困らないだろう。プレイヤー同士は最初500m離れているというし、すぐに会敵はない……？

「えっ、おいマジで？」

ぶっちゃけて言う俺にはステルス迷彩で隠れている相手であっても視認できる。故に驚いた。

だって、隠れるとかそういうの一切棄てて一直線に俺に突撃して来ようとしている奴がいたから。

よほどの自信家か、あるいはバカなのか、俺はどう動くか考える前にそいつは姿を晒す。さらに斜め上の方にぶっ飛んだ行動を伴って。

「ヒヤッハー汚物は消毒だーッ！」

「へあっ!？」

奇声を上げながら両手で持っていた軽機関銃——多分ミニミ——を撃ちまくりながら接近してくる人影に思わず変な声を上げ、大慌て

でコンテナの陰に飛び込んでやり過ぐす。

びつくりした……なんだアレ？ えっ、意味わかんない。自信家じゃなくてただのクレイジーサイコ野郎だったのかよつ。めんどくさっ！

「けど、何はともあれ向こうから出向いてくるなら手間が省けたつと！」

腰にぶら下げた光剣のグリップを握り、電源スイッチを弾くようにオンに。鈍い灰色に光り輝く長いエネルギーブレードを展開する。

「オラオラどうしたあつ！ 俺のすげエ弾幕に声も出せねえのかあ？ そうだよなあ！ 『ラストフエンサー』だか『ジエ〇イ』だか知らねえが、大層な名前の割りに大したことねえじゃねえかあつはつはつはつはあつ！」

「(……イラツ)」

ああ——うん、ちよつとそのやかましい口、閉じようか。

瞬間、急激に頭の中が冷え切つて同時に物陰から飛び出し、無数の予測線が身体にポイントされ——ミニミからマズルフラツシユが何度も瞬いたと同時に、放たれた弾丸を悉くMURAMASAで打ち落としました。

「——えっ？」

その光景を見たたん、ポークスープはまるで鳩が豆鉄砲を食ったかのように呆然となる。それは目の前で起きた出来事に頭が追いついてこないとか、そんな感じに。

対する俺は至極平然と、当たり前前のようにその場に佇み——ゆつくりと光剣の切っ先を相手に突きつける。

「は、はははははっ！ おおおお思ったよりもやるじゃねえかつ！ だがなあ！ 俺の弾幕はこんなんじゃねえ！ もつとすげエ弾幕を見せてやるぜ……トリガーハッピーエ「うっさいわ」——えっ」

頬を引き攣らせながらもなおも喚いていたポークスープの台詞を遮りながら、間合いを詰め一閃。両手で保持していたミニミの銃身の中ほどから叩つ斬つた。

使えない鉄くずと化したミニミに目を落とす、またも呆然とする

ポークスープ。直後にその身体に2つの斬撃が縦に走り、3分割されてポリゴンの結晶が砕け散る。

同時に勝利のアナウンスが表示され、俺はそのフィールドから転送されて……ああ、次の対戦相手が決まったのか。相手は——

「ユナイト☆ペンギン?」

……追求するのはやめよう。これ以上の突っ込みは無駄に疲れるだけだと嘆息と共に放棄する。

予選2回戦のフィールドは大渓谷だった。谷に巨大なアーチ状の橋が架かっていて、対岸へ向かうにはあそこを通るしかないらしい。

……と言うか谷が巨大すぎるから実質的な主戦場はこの橋の上で事になるのか。1回戦とは違って夕方で遮蔽物もほとんど無いから隠れる場所も無い。

これは真正面からの撃ち合いかなあ——なんて考えた直後、ずっと遠くで噴煙が上がり、煙の尾を曳きながら何かが飛んでき——ロケットオオ!?

「うおおおっ!?!」

飛んでくるものを認識した瞬間、全力で回避行動。緩やかな螺旋を描いて飛んできたロケット弾に対して斜め前方に走ってヘッドダイブ。数瞬して爆風が後方から襲い掛かる。

「ぺっぺっ——個人戦で対戦車兵器持ち込むか普通!?!」

口の中に入った砂利を吐き捨て、素早く起き上がる。

ロケットランチャーを持ち込んできたのは驚いたが、外してしまつたなら詰みだ。いくら威力が高くても単発式の携行火器じゃあとはいサイドアームぐらいしか……と考えていた時期が俺にもありました。「うっそだろお!?!」

遠方で再びロケットが発射、しかも3発連続で発射されさすがに俺も度肝を抜かされる。

ちよつと待て、なんでロケット砲が連射できるんだおかしいだろ!?

心の中で激しく突っ込みながらも予測線を頼りにロケット弾を連続で回避。歯噛みしながら前方を睨みつけ、一気に走り出した。

あれで打ち止めか否かは知らないが、どちらにしても接近しなきや

始まらない。向こうの迎撃が整う前にこっちの間合いに持ち込んでやる！

相手の姿を鮮明に視界に捉え、担いでいた兵器に走りながら唾然とする。それは確かにロケットランチャーだが、9門の発射口を備えた多連装ロケットランチャーというとんでもない代物だった。

えっと……今まで飛んできたのが4発。あの発射口は9門と言う事は――

「火力は偉大！　つまり火力は正義だよ兄貴！」

多連装ロケットランチャーを担いでいた男が、ナニカ良く分からない事を口走る。

その直後、再びロケットランチャーが火を噴いた。しかも残った5発全部を同時発射――ああっ!?

「うわエッグ……」

思わずシユピーゲルが漏らした呟きを私は聞き逃さなかった。

画面が爆炎に覆われ、濃密な白煙が画面を遮る。

次の試合が決まるまでの僅かな空き時間に待機ホールに戻ってきたら、ちやうどクラウドの試合がモニターに写っていたからシユピーゲルと一緒に見ていたのだけど……。

「対人、しかも個人戦で多連装^{フリ}ロケット^{ラン}チャー^{チャー}はかなりインチキ紛いね……」

「だよね。クラウドもかなり面食らっていたみたいだから」

あんな物を相手にする事になったらクラウドでなくても度肝を抜かれるわよ。

クラウドが配置されたブロックに参加するプレイヤーは、B O Bに参加するに当たって情報を集めていた私も知っているプレイヤーがそこそこ所属していた。

と言うより、さつきクラウドに瞬殺されたミニガン使いと今戦っているフリーガー^{ハマー}使いを含めて、同一のスコードロンに所属しているプレイヤーが集中している。きつと同じタイミニングで手続きをしたからね。

確か名前は——『正義の光』……だったかしら？ どちらかと言うと集団戦に強い連中だつて聞くけど、こうしてみると……まあ、個人でもそれなりに強いけど、どっちかって言うとな集団戦で実力を発揮するタイプだ。

まあ基本的にフリーガーハマー相手にしたら勝ち目無いわね。長射程・広範囲・高火力と来ているから。

「でもアナウンスはされてない……クラウドはどこに？」

確かにまだ勝敗のアナウンスがされず、ユナイト☆ペンギンは不審に思いながらもサイドアームズであろうミニウージーを取り出して周囲を警戒している。

アナウンスがないという事は、まだ勝負がついていない。あのクラウドがあれば終わるとは到底思えないし、クラウドなら絶対に勝つと言う信頼だつてあつた。

だから——

モニターの上に人影が映り、そのまま落下してその下にいたユナイト☆ペンギンを手にした光剣で脳天から貫いたのを見たとき、私は思わずニヤリと笑みを浮かべていたのだった。

「あーっ……しんどかつた」

ロケット、しかも多連装ロケットランチャーの相手をした精神的疲労は半端じゃない。幸い次のマッチには時間があるのか待機ルームに転送され、俺は大きく息を吐きながらテーブル席に腰を下ろす。

「お疲れ様、クラウド。なかなか苦勞しているみたいね」

「まったくだ。ミニミヤ多連装ロケットランチャーで武装してる相手と連続で当たつたんだぞ」

何がおかしいのか微笑を浮かべているシノンに口を尖らせて突っ込む。

個人戦と言う事なら基本的に取り回しやすい小銃で武装するのがセオリーだと思っていたが、なんで俺だけやたらぶっ飛んだ相手が出てくるんだ。しかもやたらと濃いし。

内心グチグチと突っ込みながらドリンクメニューを呼び出し、ジン

ジャエールを注文するとすぐに中央からボトルが競り上がってきてそれを取るとぢゅーつと音を鳴らして中身を吸った。

「いやでもすごいじゃないか。けどフリーガーハマー相手にどうやって?」

「ん? ああ、アーチ部分からワイヤーが垂れてるのを見つけて、間一髪で飛んでそれを掴んで上に飛び移ったんだよ。あとは頭上からブスリと刺した」

いやあ、あれはギリだった。あんなフィールドの条件であんな武器持ったプレイヤーと当たるなんて。ワイヤー見つけてなかったら本気出すしかなかったし。

「俺よりシノンはどうなんだよ? あとあのキリトつてのも」

「私は当然連戦連勝よ。あいつは……」

言いよんだシノンに俺は首を傾げた。

聞けば俺が戻ってくる少し前に声をかけたら様子が妙で、まるで何かに怯えているようだったらしい。

だがその理由を聞くことができないままキリトは次の試合に出場して、それからは破竹の勢いで勝ちあがっているが、試合を見ていたシユピーゲル曰くめちやくちやな戦い方を続けているようだ。

「ああ……ちようど彼の試合が始まる所みたいだ」

モニターを見ていたシユピーゲルがふと呟いて、俺たちもモニターに目を向ける。

試合開始と同時に相手に突っ込み、相手の銃撃を……俺と同じく光剣で防ぎながら接近する。

まあキリトならこのくらいコツ掴めばいけるよな……なんて考えていたが、シユピーゲルの言葉にすぐ納得した。

多少の被弾なんて無視した、ほぼ捨て身の特攻戦法という無茶苦茶な戦い方は実にらしくないな……普段ならもうちよつと落ち着いて動きを見切ってるだろうに。

「なんか……危なっかしいな」

試合はすぐに決着がついたものの、その特攻戦法には俺も不安を抱いた。

突然こんな戦い方をするようになった理由は……さっきのシノン
の話と何か関係があるのだろうか。

ただそれでも実力に関しては何となく、このままなら順当に勝ち上
がって決勝でシノンと対決になりそうだが。声をかけてみようにも
なかなかタイミング合わないのがなあ……。

「他人の心配より自分の心配したらどう？」

「あー……俺の次の相手は——ダイヤモンド◆ノリンとウルバ？」

「前者はさっきクラウドが連続で葬ったスコードロンの1人よ。確か
スナイパーだったはずだけど」

「それは対処しやすいな」

普段から狙撃手と組んでいるから行動パターンは把握しやすい。

そう考えていたらシノンが転送され、続いて俺も転送されていつ
た。

「えーっと、次はダイヤモンド◆ノリン。場所は廃墟市街か」

装備に関してはこのままで問題無い。シノンの話じゃ相手はスナ
イパーだって言ってたからな……なら広い視界を確保するために高
い場所に行くはず。

周囲を確認し、警戒しながら一番高い建物を探し回る。あるいは裏
を搔かれている可能性も捨て切れないが……スナイパーが市街地戦
をするならなんにしても視界を確保しなきゃいけないだろう。最適
な狙撃位置を確保し、獲物が間合いに入るまでじっと耐える。それが
スナイパーの戦い方だ。

今までの経験則から相手が陣取っているであろう狙撃位置を予測
し、近くまで来るとビル陰の様子を窺う。

……居るな。隠れているようだが、どれほど巧妙に姿を隠してい
ても俺には見分ける事ができる。

けどどうやって接近戦に持ち込むか……確認したっていつてもこ
れじゃ予測線まで表示されない。

「いや、ウダウダ考えるだけ無駄か」

条件で言えば向こうが圧倒的に有利なんだ。なら俺にできる事と
言えば、真っ向から跳ね返してやるしかない。

「……………っし！」

己を鼓舞し、ビルの陰から飛び出す。今回ばかりは小細工無用、最短で最速で一直線に距離を詰める！

まさかの正面とは相手も不意を衝かれたのか、すぐに狙撃は飛んでこなかった。

——が、直感的に気配を察知して左に飛ぶ。その直後に肩を風圧が掠め、弾丸がアスファルトを穿つ。

初弾は避けた。これで予測線も視認可能になる。スナイパーなら連射もし辛い……その考えが脳裏を過ぎるが、間髪いれず複数の予測線が出現して反射的にMURAMASAのグリップを掴んだ。

一閃。身を振りながら振り抜いた光刃が迫る弾丸を弾き、続けて2度の連続射撃も回避を交えて凌ぐ。

「セミオートマッチクスナイパーライフルかよっ！」

この連射速度を考えればそれ以外は考えづらい。

けど普段からアサルトライフルが連射されるのを真正面から呐喊しているから、この程度……！

「ふっ！」

足を止めることなく5発目を防ぎ、強く踏み出してMURAMASAを突き出しながら突っ込んでいく。

窓ガラスを突き破って内部に侵入。乗った勢いを前転して殺してから立ち上がると上の階を目指した。

直前まで屋上から撃って来ていたと言うことはまだ屋上か。降りてくるにしても室内戦になるならMURAMASAは光刃の長さから取り回しづらい。イングラムにスイッチして階段を登る。

聴覚には俺の生み出す音しか聞こえない……ならダイヤモンドノリンは屋上に居座ったままか？ 待ち伏せて俺が姿を見せた瞬間を狙う算段か。どの道屋上への道は1つだけなんだ、このまま行つてやるっ！

「…はあっ！」

屋上へ出る扉を視界に納めたと同時、俺はドアを蹴破った。直後に幾つもの予測線が俺を狙う。

瞬時にイングラムを腰溜めで牽制と言う名の全弾発射。毎分1000発と言う超連射が降り注ぎ、ダイヤモンド◆ノリンは射線を避けながらサブマシンガンで撃ち返してきた。

すぐにMURAMASAを展開しつつ弾丸を光刃で弾き、一気に間合いを詰める。

「させる——っ!？」

サブマシンガンを連射して接近を阻もうとしたダイヤモンド◆ノリンの顔が、驚愕に固まった。

ダイヤモンド◆ノリンの左後方へ回り込んだ俺は、連続ステップと共に水平に4連続の斬撃を叩き込む。

「良かったな……ポークスूपじゃなく、て……がくっ」

「……意味わかんない」

なんか良く分からない捨て台詞と共にダイヤモンド◆ノリンの身体がガラスが砕けたような音を立てて砕け散る。

さつきからどいつもこいつも濃い面子で疲れてきたんだけど……転送された先は準決勝の待機空間だった。

さつき撃ち尽くしたイングラムのマガジンを交換し、対戦相手とフィールドを確認するためにウインドウを見上げる。

「フィールドは樹海、相手は……破産？」

あー……このゲームって毎月接続料取られるからなあ。

なんとなく同情しつつ、鬱蒼とした森が広がるフィールドに転送される。

今までで1番視界が悪い……視覚には頼れないか。

「……あ？」

どうやって相手を探そうか考えていると、繁みの向こうから物音がして灰色の戦闘服を身に纏った男がゆつくりと姿を現す。

……驚いた。真正面からやってくるなんて。どっかのポークスूपのように突っ込むだけのバカかとも思ったが、様子を見る限り違うらしい。

『ラストフェンサー』のクラウドで間違いないか？」

『ジェ〇イ』じゃなくていいのかよ」

「どっちでもいい。噂は聞いている。B O Bに出てくれたのは予想外だが僥倖だった……ニン」

「……ニン？ 今語尾に「ニン」とかつけたか？」

「えっと……それで？ わざわざ姿晒した理由はなんだよ？」

「真剣での果し合いを」

そう答えながら破産は背中に背負っていた得物を引き抜いてその武器に少し驚かされた。

反りの無い真つ直ぐなブレード。一見すればナイフを大型化したようにも見えるそれは時折スパークを放っている。

「高周波ブレードか。俺以外にも酔狂な人間が居たなんてな」

「ああ。だからアンタと戦いたかった。俺と同じ剣士として……ニン」

「なあるほどね……俺としては別に問題ないけどな」

言いつつカラビナを外し、MURAMASAから光刃を展開する。

こつちで斬り合いするなんてな……なんて思いながらも、俺は瞬時に破産へと駆けた。

間合いに踏み込んだ瞬間袈裟懸けに光剣を振り下ろす。それに対して破産は高周波ブレードで凌ぎ、カウンターで突きを放つ。

顔を狙って突き出した切っ先を首を傾げる事で紙一重で回避し、再び間合いのギリギリ外まで離脱する。

「(こいつ……結構できるな)」

この世界でこんな武器を使っている奴はよほどの物好きか酔狂なやつだ。現代戦において銃火器が主流になっているように、それほどに銃と剣では大きな隔たりがある。

そうでありながらあくまで剣を使い続け、最強のプレイヤーを決める大会に出場し、なおかつ準決勝まで勝ち進んできたのなら……偽りない強者だつてことだ。

「……………」

破産は不用意に近づいて来ない。

それも当然だ。向こうの高周波ブレードが約1メートル弱に対してこつちはその倍以上のリーチを誇る。同じ近接格闘武器ならより

リーチの長い方が有利だ。その辺りを弁えて迂闊に踏み込まず、カウンターを狙いに行くのは当然か。

……じゃあどこまでついて来れるか、遊んでやるかなっ。

「ふっー」

「っー」

切っ先を突き出し、即座に払う。破産はそれに素早く反応して顔を逸らし、身を屈めて斬撃をかわし踏み込みながら斬り上げる。

それをサイドステップで避けながら同時に斬り払い、破産は高周波ブレードで受け止め、即座にカウンターを返す。

息すら忘れてしまうほど激しい攻防の応酬。それはやはり、GGOと言う世界で考えれば異様な光景ながらも俺にとっては馴染み深い。

刃がぶつかり合うたびに閃光が瞬き、視界を一瞬だけ白に染める。

より深く踏み込もうとする破産に対し俺は光剣のリーチと剣速を以って阻み、絶妙な立ち位置を保ち続けていた。

「(GGOにもこれほどの技量を持った人間が居たなんてな……っ)」

本気を出していないとは言え、俺に対してここまで追従できるというのは中々驚嘆だろう。

——けどやっぱり、俺には追いつけない。諦観しながらも決着をつけるべく俺はさらにギアを1段階上げる。

さらに速度を増す斬撃の嵐に破産は徐々に追いつけなくなり、その身体に赤いダメージ痕を刻み付けていた。

「ぐっ……っー」

これ以上の接近戦は危険と踏み、破産は斬撃を後方へ飛んで避けながら太ももから何かを引き抜いて投擲する。

鋭く風を切り裂いて飛んでくる3本の切っ先。その内2つを光刃で弾き、残った1本を回転しながら掴んで同時に投げ返した。

「なっっ!？」

その離れ業に破産は反応し切れず、胸にナイフの切っ先が突き刺さる。

全てを叩き落す事もできたが、あえて投げ返したのは破産が投げたのがスタンナイフだったからだ。命中すれば一定時間相手を麻痺さ

せる効果を持っている。

驚愕を顔に貼り付けたまま破産は殆ど身動きをとれず、そのまま地面へ叩きつけられた。

破産の取った行動は悪くない。接近戦で不利を悟り、瞬時に離脱。牽制と後の攻撃のためにスタンナイフを投げた一連の流れは淀みなく、普通の相手なら反応できずにスタンナイフを食らっていただろう。

ただあいつにとって誤算だったのはご丁寧にスタンナイフ2本を叩き落して残りの1本を飛んできたのをそのままキャッチ。拳の間髪入れず投げ返してくるような常人離れした離れ業を軽々で行える相手と当たってしまったと言う事だ。

「はあ……これで終わりだな、つと」

溜め息をつきつつ、俺は光剣を振り上げた。

「ああ、ちよつと待ちなさいよ」

予選Fブロック決勝——つまり私とキリトの試合が終わって転送され、さつさとホールを出ようとしたキリトをつい呼び止めた。

呼び止められたキリトは不思議そうな顔をして、素直に私の所へやってくる。

「えつと……まだ何かあったかな？」

「別に。ただこの試合は見て行ったほうがいいんじゃないかって思っただけよ。クラウドの決勝戦」

「ああ、さつスキの銀髪の。けどなんで？」

「奇しくも同じバトルスタイルで、おまけにアンタよりも全ツツ然強くて上手いから」

「はあ……」

断言する私にキリトは若干引きながらも、惹かれるものがあつたのかモニターを見上げる。

クラウドの最後の相手はダディみたいね……今までの相手もかなり癖のある連中だったけど、この男は名前に反し前回の本戦では20位にランクインしている。メインアームにH&K HK417、サイ

ドアームにレア武器のトーラス・レイジングブル^{S0S10M}で武装したストレンジスアジリティ型。キリトと能力構成は同じだけどこっちはスタンダードなアタッカータイプって呼ぶ方が良いわね。

前回だけでなくそれまでのBOBでも本戦に出場し、さらには上位にランクインしているから実力はかなり高い。間違いなく難敵と呼べる相手だけど——

「うわ……凄いな」

試合の様子を見ていたキリトが思わず口に出した。

既に試合は始まっており、相手を見つけた両者は片や大口径のアサルトライフルをバースト射撃。片や光剣を振り回し、時に踊るようにして銃撃を凌ぐ剣士。

「さすがの上位入賞者もクラウド相手には形無しね……」

観戦しながら私は口の中で呟く。

そもそも（条件的にはクラウドが若干有利だったとは言え）あのゼクシードに勝ったこともあるんだから、こと近接戦闘と回避・射撃防御スキルに関してはGGOで間違いなく最強のプレイヤーだと私個人は確信しているから別段驚くほどの事じゃなかった。

と、ダディが弾切れでリロードを行おうとした瞬間を狙ってクラウドが仕掛けに行く。強烈な踏み込みから光剣を突き出しての高速突撃。クラウドが得意とする剣技の1つ、『ヴォーパル・ストライク』。ただでさえ長い射程と高い威力を併せ持っているそれが光剣カテゴリーでも上位の威力と最長のリーチを兼ね備えるMURAMASAで放てばまさに一撃必殺。

だけどダディはギリギリで突進をかわし、サイドアームの500SS10Mを抜いて片手で発砲する。500S&W弾……あの有名なデザートイーグルと同じく拳銃用の弾丸としては最大最強クラスの50口径の弾は、あの距離なら必中だしおまけに50口径弾を使う銃にはインパクト・ダメージと呼ばれる足や腕に当たろうが範囲攻撃力を丸々被ってHPゲージが消し飛ぶ効果がある。当然拳銃弾と重機関銃弾では射程と効果範囲に差があるけど、あの距離でなら必中する事には変わらない。

——けど。

「——避けた」

クラウドは危うい所で避けて、素早く立て直してダディに肉薄する。強力な威力を誇る500S&Wだけどその威力に伴う反動は強烈で、それを無理やり片手撃ちしたのだから大きく体勢を崩していた。

その致命的な隙を決して見逃さず、クラウドは離れた間合いを再び詰め、剣閃が3度閃いた。『ヴォーパル・ストライク』と並ぶ、クラウドのもつとも得意とする技『シャープネイル』。斬撃の痕が獣の爪を想起させる3連撃が叩き込まれ、ダディの両腕が宙を舞う。

最後には無造作の横一閃が炸裂し、首が跳ね飛んだ。

勝利のアナウンスがクラウドの目の前で表示され、ホールでは歓声が沸いている。

ただ私はクラウドなら予選突破くらい余裕だと思っていたから、そこまで感動はなかったんだけど。

「……とまあ、こう言うことよ。クラウドはアンタと同じ光剣使いで普段は私の相棒。同じスタイル同士少しは参考になる物があるんじゃない——」

言いながら隣にいたキリトを見て、つい口を噤んだ。

「さっきのは……けど、それじゃあ……いやだけど……」

心ここにあらず……と言うよりも何かに怯えているようにブツブツと呟いている。

それはさっき告白していた時のようだった。

けどどうしてまた？ クラウドがその時のことに関わっているとしても言うの？

——昔2人……いや。4人、人を殺した。

あの時キリトはそう言っていた。その中にクラウドが？ 確かにキリトが名前を名乗った時少し意味深な反応をしていたけど……。

クラウドとは長いとは言えないけど、かと言って短い付き合いと言わねじやない。戦闘中は物凄く強くて頼りになるけど、普段はどっちかって言うとな残念ではつきり言っちゃえばお調子者なバカっぽい

人なんだけど、時折不思議な雰囲気を漂わせていたりもしている。もちろん、それがクラウドの全てじゃなくて別の面も持っていたりするかもしれないけど……キリトを恨んでいるとか、そういう風には感じなかった。

「ボロマントの中身はあいつ……なのか？」

恐れるような独白。その視線は既に何も映さないモニターをただ見つめ続けていた。

「あー終わったー」

最後の試合も無事終了。フロアに転送されてようやく一息つくことができ、俺は思いつきり伸びをする。

なんとさえいえばいいのか、とにかく濃い面子ばかりだったから疲れた。つつかかなんでこうなったのか小1時間ほど問い詰めた。いや誰にだよ。

「(とりあえず第1段階はクリア、か。先は長そうだなあ)」
遠くを見ながら嘆息して——目を、細めた。

「さつきから無言で人の背後に立って、何のつもりだお前」

いつからそこにいたのか——いいや、最初からそこにいたのか。

ボロマントを被り、腕に包帯を巻き付けたスカルフェイスのプレイヤーが無言で佇んでいた。

普通のプレイヤーとは明らかに異なる雰囲気に俺は警戒しながら光剣のグリップを掴み半眼でスカルフェイスを見据える。

「……………」

「おい、なんとか言ったらどうだ？」

「お前は、誰だ？」

「はあ？」

「試合を、見た。あの、剣技……………お前が、本物、か？」

何を言っただこいつは？ 本物だとかなんとかって。

言っている意味がまるで分からず、俺は警戒も忘れてきよんとんとしてしまう。

そんな俺の反応にスカルフェイスはまた無言になってしまった。

「まず人に質問をする時は、名乗ったりするのがマナーってものじゃないのかよ?」

「俺の名は、——《死銃》」

「っ……!?!」

《死銃》? こいつが例の……!

まさかこいつから接触してきたとは思わず不意を衝かれた。

「キリトでは、なく、お前、が、奴、なのか?」

「……言ってる意味が全く理解できないんだが。本物とか奴とか、何を指している?」

「——黒の、剣士」

《黒の剣士》、って……あの世界でのあいつの2つ名じゃないか。

と言うことは、こいつは俺と……いいや、あいつらと同じ、あの世界の生き残り……? キリトの名前を出したって事は少なからずこっちのキリトを知っていて、接触もしたのか?

「……知らないな、黒の剣士って何のことだ?」

「……」

「それに、仮に何かを知っていたとしても見ず知らずの相手に言うわけないだろ」

「……まあ、いい。どのみち、明日、わかる、こと、だ」

結局お互いの探り合いはこれ以上難しいとでも考えたのか、《死銃》はそこで引き下がってしまった。

得られた情報は少ないが、それでも必要最低限の物は得ることができた。《死銃》の姿、その過去……これだけ確認出来れば十分。

「待て。最後に1つ聞きたい。お前もB o B本戦に出るのか?」

「……ああ」

エレベーターに向かおうとする《死銃》に向けて問うと、少し間を置いてから肯定を返し、そのまま《死銃》はエレベーターへ乗り込んでフロアを後にする。

「……」

《死銃》が消えたエレベーターを、俺は険しい表情で睨み続けた。

第5話 本戦開幕

第5話 本戦開幕

2025年 12月14日。

BoB本戦当日。装備の確認と弾薬の補充を済ませ、そのままつすぐ総督府へ。

前日……予選の最後にはひと悶着あったが、考えるのは辞めた。《死銃》の調査はキリトの役目であって、俺はそれを手助けするだけだから。

とりあえずまあ、出会った相手はシノンとキリト以外見敵サーチャ・アンド・デストロイ必殺の精神で行けば問題ないか。なんて樂觀的に考えてホールに入る
と、噂をすれば何とやらと言うかホールの真ん中で睨み合う知り合い
2人が。

「おーい、シノン、キリトー」

「っ……なんでいつも気を削ぐのよクラウドは」

「なんでって、偶然見かけただけなのにその言い方は無いだろ……」

「クラウドが絡むと何でか空気が緩むのよっ、せっかくコイツに宣戦
布告してたところなのに……」

ただ声をかけたただけなのに舌打ちされるのは傷つくんだが、キリト
に宣戦布告って……何の布告だ？

「別に……予選の借りを返したかっただけよ」

「借り、ねえ……これは執拗に狙われそうだなあキリト？」

「えっと……そう、ですね……」

同情しながらキリトに振ると、何故か余所余所しいと言うか、固い
感じの答えが返ってくる。

昨日は結構親しく話せていたのに、一転して今日は何故か警戒され
て俺は少し戸惑った。何かやらかしたかと考えてみるが、予選が始ま
る前に話したつきりでそれ以降顔を合わせていなかったし……。

「……なあシノン、キリトの様子ヘンじゃないか？」

「知らないわよ、そんなの」

シノンにもさり気なく訊いてみるが、取り付く島も無くてがつくりと肩を落とす。

2人はそのままエントリー端末で登録を済ませ、エレベーターに乗って地下に降りていく。酒場に付いてドアが開くと、付近にいた人間の目がいつせいに俺たちに注がれた。

「おい、シノンにクラウドだ……」

「あそこにいる黒髪ってキリトちゃんだろ？ 好き好んで銃じゃなくて剣振り回して予選勝ち抜いた……」

「両手に花とかうらやましーじゃねーかクラウドめ……」

「けど本人なんか凹んでね？」

外野が騒がしいけど突っ込む気力が沸かない。

そのまま流れで2人についていき、席に座っているとキリトの無知に呆れたシノンが本戦について改めてレクチャーしていた。

それを聞き流していたら、ふと気になる話題に入って耳を傾ける。

「……ヘンなことを聞くけど、BOB初参加の連中に、シノンの知らない名前はいくつある？」

「？ なにそれ？」

「頼む、教えてくれ。重要なことなんだ」

「……まあ、名前だけなら別にいいけど。初めてなのは——どっかのムカつく光剣使いときつきから構われなくて凹んでるクラウドは例外として、4人ね。っていうかクラウドはいつまで凹んでるのよ」

「凹んでないやい」

シノンが突っ込むころには隣で参加者の一覧を覗き込んでいた。事前に情報収集していたシノンと違って、俺はぶっつけ本番で殴りこんできたから情報はほとんど持ち合わせていないから聞いておきたい。

あの時、《死銃》は本戦に参加するって言っていた。ならこの中に奴もいるはず……ってあれ？ 《死銃》の名前が無い……。

「えつと……Pale Riderと銃士X、それに——
Blackyに、これはSterben……かな」

「ブラツキー？」

シノンが挙げていった名前にはやたらと特徴的なネームを聞き、反芻しながらキリトを見やる。

それってキリトのあだ名だったよな……と思いつながら視線に気づいたキリトと目が合うが、疑われていると思ったのかぶんぶんと首を振って否定していた。

そうだよな、現にブラツキーなんて名前だったら目の前にいるキリトは何者なんだって話になるんだし。

「けどこれってステイブンって読むのか？」

「多分……スペルミスとかじゃないの？」

「俺『すてるべん』って読んだんだけど」

「それじゃあローマ字じゃない……」

「英語は苦手なんだよ、悪かったな」

「……ぷっ」

冷ややかに突っ込むシノンにムキになって言い返していると、俺たちのやり取りを見ていたキリトが不意に噴出した。

「なに笑ってんのよ」

「あ、いや……俺の友達みたいなやり取りしていたから、つい思い出し笑いが出て」

「ふーん……その友達がどの誰かは知らないけど、振り回される周りは苦労するでしょうね」

「あー……」

なんだよその反応は。肯定とも否定とも取れないキリトの反応に俺は半眼で睨んだ。

「その友達とかはどうでも良いけど、さっきから説明も無しに何なのよ？ それとも私をイラつかせて本戦でミスさせようって魂胆？」

「いや、そうじゃなくて……」

「落ち着けてシノン、気持ちは分からなくも無いけど、説明したくてもどう説明すればいいか分からないんだろ？ それにそんな小技は俺のやり方じゃないか」

「……それもそうね。正攻法で戦っても強いのに、小技使って勝つの

はクラウドの専売特許だったわ」

困っているキリトに助け舟を出すと、ひとまずシノンも少しだけ引っ込んだ。

けど少しは説明が欲しいところだよな。予選中に様子がおかしくなったってシノンから聞いていたし、さつき会った時もなぜか俺が警戒されているようだったし。

「話せる範囲で話してくれても良いんじゃないか？ 言い辛い部分は適当に捏造すればいいんだし」

「……分かった」

俺の提案に話す決心がついたのか、キリトは少しずつ事情を話してくれた。

昨日、予選の途中で昔同じVRMMOをやっていた奴に突然声をかけられたこと。

そいつとキリトは完全に敵対し、かつて本気で殺しあったことがあるのに当時の名前すら思い出せないこと。

そいつとそいつの属した集団は許されないうことをし、和解はありえなかったこと。

剣で決着をつけるしかなく、それ自体に後悔は無かった。だが、自身が負うべき責任から目を背け続けてきたこと。

「——だけど、もう逃げることは許されないう。今度こそ正面から向き合わなくちゃいけないんだ」

「——なるほど」

キリトの話からおおよその事情は掴めた。

たぶんそいつはSAOに囚われていたユーザーで、さつきのリストの中の誰かがそれなんだろう。

けど……と、俺は内心首を傾げる。キリトとはSAO時代からの短くない付き合いだし、その割りに俺は全然心当たりが無いんだよな。トラウマになるほどの出来事って言えば、覚えている限りだと俺が裏切った時くらいだし。いや、俺が関わっていない出来事があったら当然知るはずが無いけども。

「——それでも君は引き金を引けるか」

「っ」

「? それってなんだ、シノン」

「昨日コイツに言われたの。『もし、その銃の弾丸が、現実世界のプレイヤーを本当に殺すのだとしたら、そして殺さなければ自分が、あるいは誰か大切な人が殺されるとしたら……その状況で、それでも君は引き金を引けるか』——って」

「ふーん……俺だったらそうだな——迷わず引く。後悔もせず」

その言葉の意味を理解した上で、俺はごくあっさり——まるで明日の天気について話すかのように簡単に——はつきりと答えた。

2人が驚き、視線が集まる。それを気にするでもなく、ドリンクメニューからコーラを呼び出し、すぐに注文したドリンクが中央からせり出してくる。

「俺の命や、俺の大切な人たちの命を奪う奴がいたなら、俺は躊躇うことなく、後悔せずに殺す。少なくとも喪うよりは生きていてくれる方がずっといい。——なーんて、カツコつけて言ってるけど、昔盛大にやらかしたから説得力無いんだけどな」

最後にけらけらと笑い飛ばし、頼んだドリンクを手にとって暢気に吸う。

本気なのか冗談なのか、どちらを受け取るかは2人次第だが少なくとも本気で言ったつもりだし過去にやらかしたことだって事実だ。

「……本当だったらキリトに全部話せばいいんだけどな」

と、シノンに促されて行った待機ドームで残り時間を待ちながら思う。シノンとキリトとは途中で別れ、俺は1人適当な待機室で残り時間を潰す事になっていた。

実際、俺の事とか全て打ち明けたら色々と楽になるだろうとは思う。ただ込み入った話で時間がかかる上に、俺がここにいる理由も明かさなきゃいけないのに加えて、シノンにも事情を話さなきゃいけなくなる。

「(面倒なもんだなあ……)」

内心嘆息するが嘆いてもいられない。《死銃》は間違いなく俺とキリトに狙いを定めている。

あの時キリトの話した事が事実だとしたら、俺はともかくキリトには万が一の可能性があるかもしれない。

「……させつかよ、そんな事」

モニターに目を向ける。カウントダウンが開始されていて、もうすぐ始まる。

3……2……1……。

バレット・オブ・バレッツ、本戦開始——！

／

B o B本戦は専用のステージで行われる。

プレイヤー30人は直径10キロのほぼ円形状のステージにランダム配置され、最終的に最後に生き残っていたプレイヤーが優勝となる……という実にシンプルな物だ。

ステージには山や森、砂漠に廃墟都市などいくつもの地形が存在し、開始位置は最低1000メートルは他のプレイヤーと離れている。

俺が最初に配置されたのは東部にある田園地帯。遮蔽物は比較的少なく、待ち伏せには向きそうに無いな。

「さて……どうするかな」

とりあえずはシノンとキリトと合流するのが最善だろう。けど肝心の居場所が分からないんじゃないや合流のしようもない。

配布されたサテライト・スキャン端末を使うにはまだ時間が——っ。

「いきなりかよっ」

吐き捨てると同時に低く身を屈める。頭上を予測線が貫き、数拍の後銃声と共に銃弾が予測線を過ぎった。

そりやそうだ、本戦のルールは言ってしまったえばサバイバル。優勝するには出会った片っ端からヘッドショットしていけばいいと言う実にシンプルなもの。

「(どこの誰かは知らないが、やられるつもりは無いんだっつーの!)」

《MURAMASA》を掴み電源を弾くようにオンに。最初の1発で相手の方角は分かった。後は距離を詰めて叩き斬る！

俺の接近に気づいた相手プレイヤーがすぐに応射する。無造作に飛んでくる弾丸を光刃が弾き、速度を緩めず呐喊。

テンガロンハットを被ったカウボーイ被れを視界に捉えた瞬間、地面を蹴った。

高く跳躍し、そのままカウボーイ目掛け降下する。膝立ちで応戦していたカウボーイが立ち上がって俺にライフルの銃口を合わせるが、放たれた銃弾は光刃に阻まれ次の瞬間には真つ二つに斬り裂かれていた。

「はあっ……つたく、ちよっかい出さなければ殺られずに済んだのに」
えっと……誰だこいつは。「Garrett」……が、がれつと？
って読むのかこいつ？

むう……名前は分からないけど、装備を……と。

「ウインチェスターのレバーアクションライフル……だっけ？」

がれつと（正しい呼び方は分からない）某の持っていたライフル——
《ウインチェスターM94》——を拾い上げて、さらに弾薬もいくつか拝借する。

このステージだと長期戦が予想される。なるべく自前の弾薬は温存しておくに越したことは無い。いくら携行数が多いSMGのマガジンって言っても撃ちまくっていればいつかは弾切れになる。

それにこのフィールドじゃ射程の長いライフルが有利だし——

——？

「……………？」

不意に視線を感じ、俺は周囲を見回した。

だが周辺に隠れる場所は無く、人の影も無い。ステルス迷彩を使っていたとしても俺には見えるんだから意味が無い。

この大会ってMMOストリームでも中継されているし、中継カメラを勘違いしたか……？ あるいは、よほど遠くから俺を見ているか、とか。けれど何のために？

「（いや……ここで考えていても仕方ないか）」

少なくともちよっかいを出すつもりは無いようだし、ひとまず放置しておこう。

「そろそろ時間か……」

時計を確認するとそろそろ《サテライト・スキャン端末》が使える頃合になり、俺は端末を起動した。フィールドマップが表示され、さらに無数の光点がマップ上に浮かび上がる。

「田園エリアには俺とあと1人……こいつが見ていたのか？ いや、距離が開きすぎているから違うか」

念のために光点をタップしてみると、「J I G E N」と言う名前……どこぞの怪盗の一味ですか？

いやいや、それよりシノンとキリトは……森林地帯には居ないな。都市部……は4……5人か。

「ああくそつ、時間が……」

カウントダウンが始まり、全て調べる前に光点が消えてしまい俺は嘆息して端末をしまう。

近くにはいないか……森林地帯にいなかったことは他のエリアで戦っているか。けど他のエリアなら都市区画経由する必要がある。

「……行くか」

ライフルを担ぎ、遠くに見えるビル群に向かって歩き出す。途中にいるプレイヤーとは遭遇する可能性もあるし、用心しておくに越した事は無い。

ちよつと急いで都市部まで行って、次のスキャンでシノンたちの位置を調べることにして駆け足気味に走り出す。

J I G E Nが俺のことを警戒している可能性は十分に考えられる。けど知ったことか。お前に構うつもりは無いんだ。

しばらく走り続けていると小さかったビル群が近づくにつれて大きく見えてきた。あと少し——と言うところで予測線がポイントされて横っ飛びに射線を避ける。

瞬いたマズルフラッシュ。やはり俺を待ち伏せていたか……っ！

走って射線を逃れつつ、即座に奪ったウインチェスターライフルを構えて応戦。だがレバーアクションは初めて触れたからコツキングがやり辛い……！

「使えるかこんなのっ！」

不慣れなせいでボルトアクションよりも遅い連射に痺れを切らした俺は、持っていたライフルを相手の方目掛けてぶん投げた。

不意の攻撃に虚を衝かれた相手は驚いて横っ飛びに避ける。同時に2本の予測線が俺をポイントし、2発の銃声が轟いた。

——けど遅い。苦も無く銃弾を掻い潜り、そのまま一気に距離を詰める。

……相手はスーツを着崩した男で、手には案の定のリボルバー。多分J I G E Nだろう。

銃口を向け、即座に発砲。だが瞬時に《MURAMASA》を掴んで振り上げながら電源を入れると、形成された光刃が銃弾を斬り裂いた。

さらにそのまますすぐ距離を詰め、弾丸を斬り裂かれた事に驚愕している男に光刃を振り下ろし、リボルバーを握る腕を斬り落とす。間髪入れずに首を跳ね飛ばす。

驚愕が顔に張り付いたまま、ごとりと音を立てて頭部が地面に落ち、少し遅れて身体も倒れる。

【DEAD】の表示が浮かんで俺は息をつき、《MURAMASA》の電源を切ろうとした——だが。

「……………」

また誰かに見られているような感覚を覚え、電源のスイッチにかかった指が止まる。

さつきは気のせいかと思ったが、気のせいじゃない。間違いなく誰かが俺を監視している……。

しばらくその場で立ち尽くして相手の出方を伺うが、何かをしてくる気配は無い。気味が悪い……。

「……………」

逡巡は一瞬。俺は倒した相手から装備を漁らずに都市に向かって走り出した。

都市に入り込んだ瞬間、ビルの角に身を隠して気配を殺す。

少なくとも都市側から監視されている……と言った感じじゃない

かった。なら俺と同じ田園地帯から。遮蔽物の多いここからストーリーの正体を暴いてやる。

「っ——！」

だが、待ち伏せして間も無く予測線が顔に当たり、反射的に仰け反って予測線から逃れる。

間髪入れず銃弾がコンクリートの壁に穴を穿ち、俺は仰け反った勢いを利用して片手でバク転から立ち上がった。

「見つけたぞー！ お前は俺の獲物だアツ！」

「ああ？ 誰だよこんなタイミングで……っ！」

苛立ち紛れに吐き捨て、仕方なく応戦する。

アンダーが赤いBDUに大型ライフル……どこかで見たような気がするが、今はそれどころじゃない。

何本もの予測線がポイントされ、銃口が火を噴く。最小限の回避と防御で銃撃を掻い潜りながら接近しようとするが、向こうも同じように接近を試みていた。

離れるじゃなく、接近してくる……？ その選択に僅かだが疑問を抱くが、逆にやりやすい。

迷い無く光刃を振るう……が、赤い男は斬撃を間一髪でかわすと、さらに前へと踏み込んでくる。おまけにライフルを持っていた腕は《MURAMASA》を握る俺の腕の間に挟まっていた。

「銃が撃てないのにゼロ距離って、どういうつもりだ？」

「だがお前も、この距離なら剣は振れないな！」

ああ、確かに。

勝利を確信して勝ち誇るように笑みを浮かべる赤い男に、俺は軽く鼻で笑い、相手がリボルバーを抜いてハンマーを起こすよりも早く《M10》を抜き、セイフティを解除するとどてっ腹に銃口を押し付けてトリガーを引いた。

ややくぐもった銃声が轟き、毎分1000発という非常識な連射速度で銃弾が赤い男に殺到してその勢いで弾き飛ばす。

「いっふ……っ！」

「悪いな。剣ばっかりじゃないんだよ！」

離れた瞬間を狙い、《MURAMASA》による四方からの水平4連撃を浴びせて残りのHPゲージを一気に吹き飛ばした。

「ザヨッ、ゴォー……！」

……最後に断末魔みたいな何かを残し、男は倒れると【DEAD】と表示された。

《M10》のマガジンを交換してからホルスターに戻し、赤い男の落としたライフルを拾い上げる。

「《H&K HK417》……それにこいつのリボルバーは《トーラス・レイジングブル 500SS10M》……あつ」

思い出した。こいつって昨日の予選で最後に当たった奴だ。あー、だからリターンマッチ決めてきたのかあ……見事に返り討ちにあつたけど。

まあ、いいか。けど邪魔されたせいで待ち伏せはできそうに無いな……あれだけ派手な銃声が鳴っていたんだ、ストーカーも警戒しているだろう。

仕方ない、当初の予定通りシノンとキリトとの合流を優先するか……そろそろスキャンができる時間になる。

「えっと……ここには俺と銃士X、ノココに……キリトとシノンもいるのか。けど2人一緒に……ん？」

2人が一緒に動いていることに驚くが、少し引つかかった。

おそらくノココか銃士Xのどちらかを狙っているんだろう……けど俺の周囲にプレイヤーの反応が無い？

「(いや、間違いなく視線を感じた……でも周囲どころか俺のいる範囲にプレイヤーは居ない。つまり——)」

何らかのトリックを使って自身を隠蔽し、俺を監視し続けている……か。けど何のために？

誰かと考えて真っ先に浮かぶのは例のスカルフエイズだ。奴は俺をキリトなのかと疑っていた。

なら合流するのは逆に危険かもしれない……いや、キリトの方だつてマークされている。名前と戦い方からキリトの方が優先順位は高いはずだ。そう考えるとキリトたちの方が危ないんじゃない……。

「だったら合流するほうがマシか……」

えっと、2人の位置は反対方向か。回り込むようなルートになるけど走っていけなくは無いな。

「できれば足があればいいんだが」

周囲を見回して何か無いかと探してみる。が、都合よくそんなものは設置されていないか。

……しやーない。ここはひとつ走り行くとするか——！

第6話 雲は霞む

第6話 雲は霞む

「っ……」

なんで、なんで……っ、今になってあの銃が——！

追いかけていたはずの《死銃》、そいつが私の前に姿を現して、黒い拳銃を見せつけるように取り出すと、グリッパパネルにある特徴的な黒い星の紋章に思考は凍結し、全身の力が抜け出ていく感覚を私は覚えていた。

——黒星 五十四式。忘れるはずもない……あの時私が撃った銃がなんで、今、ここに、あの銃が……っ。

混乱する私の前に、フードの下の仮面が“あの時の男”と重なって見える。

あいつは私に復讐するためにこの時を待っていたんだ。どんなに足掻いても逃げることはできないんだ。全部、全部無駄だったんだ。どこにいてもこの男に追いつかれて……殺される。

強さの意味、戦うことの意味……クラウドと一緒にいれば分かると思っただのに。

……いつからだろう。最初はただ分かりやすい目標だったのに、頼れる相棒と思えるようになったのは。

けれど彼と一緒に戦って、肩を並べられるくらい強くなれば……追い越せるくらい強くなれば、弱さを克服できると思っていた。

「イヤだ……イヤだイヤだイヤだ！ こんなところで死にたくない！」

まだ死ねない……死にたくない。その必死の思いが動かない身体をどうにか動かそうとする。

諦めたくなかった。この大会で正々堂々と戦って勝つことができれば、何かが変わるはずだから。

キリトとも、クラウドとも、まだ約束を果たしてないのに……！

《死銃》が黒星のスライドをコッキングし、弾を込めると両手で銃を

構え、その銃口が私を捉える。

「(クラウド……助けて)」

こんなのを願っても叶うはずはない。

「——りやああああああっ！」

——なのに、雄たけびと共に彼は本当にやって来た。

愛用の光剣から灰色に輝く刃を伸ばし、ジェットエンジンに似た音を響かせて。

声に気づいた《死銃》はすぐに離れて柱の影に身を隠す。

私に背を向けて黒いコートを風にはためかせて、《死銃》の前に立ち
はだかつて。

「クラ……ウド……」

「——間一髪、クラウド超特急で来て正解だったな」

顔が見えなくても分かる。いつもと変わらない、背を向けていても
思い浮かぶ能天気な笑って明るく言うクラウドの声。

けどいつも聞いているトーンよりも少し低くて、微かな怒りを含
んでいるように聞こえた。

でもなんで？……なんでクラウドがここに？

「おい《死銃》、お前の狙いは俺かキリトだったはずじゃなかったのか
？」

「……そう、だ。お前、たちは、最後の、お楽しみ、だ」

「はっ。あいにくと俺は好きなものは先に食べるタイプでな。それに
1つ勘違いしている。確かに俺はご同輩だが、お前の知っている
《黒の剣士》とは別人だ。お前が探しているのは黒髪の方だよ」

「ほう……。なるほど、やはりお前も、俺たちと、同じか」

私に背を向けたままクラウドはボロマントと何かを話しているけ
れど、抽象的過ぎて理解できない。

「ここでぶっ飛ばしてもいい……んだが、それよりも優先することが
あるんでな。とつととんずらさせてもらう」

「できる、と、思っている、のか」

「やってやるさ——」

次の瞬間、少し離れた位置でカンツ、と何か音が立てて落ちる気

配。

すると青白い閃光と大音響が炸裂し、思わず目を瞑る。

ふわりと誰かが私の身体を抱きかかえて走る感覚。目を開けるとすぐ近くにクラウドの顔があつて、私だけじゃなくヘカートも担ぎ街中を走っていた。

いくら筋力も上げているって言っても、20キロ近くあるヘカートまで持っているとは少し苦しそうな顔をしている。

「もういい……置いていって……」

「はっ！ だが断る！」

こんな時なのにふざけた返事をするクラウド。だけどその目は真剣で、同時にどこか安心感を私は覚えていた。

と、その時、背後から1発の銃弾がクラウドの肩を掠めて看板の固定具に着弾すると音を立てて落下する。

いくらクラウドでもこんな状況は無理。だからもう1度、私を置いていくように言おうとしたのをエンジン音が遮った。

「2人とも乗れ！ 早く！」

「おっせーよ！ 今までどこほつつき歩いていたんだ！」

バギーに乗って乗り場から飛び出してきたキリトにクラウドは一瞬足を止めて嬉しそうに笑い、すぐに後部座席に私とヘカートに乗せ、自分も飛び乗ると腰からプラズマグレネードを取り出してバギー乗り場に投げ込み、「出せ！」と合図する。

キリトがアクセルを回してバギーを発進させて数秒後、起爆したグレネードが激しい爆発が起こして駐車していたバギーやロボットホースを吹き飛ばした。

「悪かった、《死銃》だと予想したプレイヤーを倒そうと別れた所を狙われて……」

「迎えに来たからチャラにしてやるよ！ 足は潰したしこれで……いや、待て」

言いかけたクラウドの顔から笑みが消えて後ろに振り返る。耳を澄ませると、私たちの乗るバギーとは違うエンジン音……。

「くっそ、追ってきた！ スピード上げろキリト！」

スタンバレットの効果切れ、ようやく身体が自由に動けるようになる。後ろに振り返る。

そこにはあのボロマントが誰かの運転するバギーに乗って私たちを追跡していて、また『あの男』の顔が浮かんで……っ！

「いや……追いつかれるっ！」

「もつとスピード出ないのかよ?!」

「無茶言うな! こっちは3人だぞ!」

苛立ちをぶつけるクラウドにキリトも同じように返す。

少しずつ距離が詰まって、ボロマントが黒星を取り出した。

予測線が、私の頬に当たる。

「右!」

「っ!」

クラウドが私を抱き寄せて叫ぶと、キリトも即座にハンドルを右に切った。

バギーが右に寄り、直後に発射された銃弾が私の前を過ぎる。

さらに発砲。その銃弾はリアタイヤのカバーに当たって、ボロマントは銃をホルスターに戻した。

「やだよ……たすけて……たすけて……!」

「っ……シノン、お前のクルツ貸してくれ!」

「えっ……?」

「早く! このままじゃ追いつかれる!」

戸惑う私は言われるがまま、震える手で腰のホルスターから《MP5 K A 4》を取り出すとクラウドに渡す。

するとクラウドは右手にクルツを、左手に自分の《M10》をそれぞれ持ち、ボロマントに銃口を向けた。

「当たらなくても牽制くらいは……っ」

毒づきながら2つのSMGをフルオートで斉射。だけど元々精密射撃に向かない暴れ馬の《M10》と、精密射撃は可能だが不規則に揺れ動くこの状況、しかもフルオートではその力を発揮できない《MP5 K A 4》では命中率はほとんど期待できない。

仮に当たっても、威力の低い9ミリパラベラムではバギーの車体も

貫通すらしなかった。

「くっそダメか……！」

「シノン、このままだと追いつかれる！ 君が奴を狙撃するんだ！」

「むりだよ……！」

「当たらなくてもいい、牽制だけでいいんだ！」

「むり……！ あいつ……あいつだけは……！」

「だったら俺が降りてあいつらをぶった斬ってくる！」

怯える私にクラウドはいきなり言い放ち、《MP5KA4》を私に渡すとバギーから飛び降りようとする。

その瞬間、急にクラウドがどこか遠くへ行ってしまいそうな錯覚がして反射的にその腕を私は掴んだ。

「ダメ……あいつは、あいつは本物なの……！ いくらクラウドでも殺されちゃう……だから絶対ダメ……！」

「けど、他に方法が無いだろ！」

……ううん、ある。

あいつが怖い。向かい合う勇氣なんて無い。……けど、このままクラウドを見殺しにしたら、私はずっと後悔したまま生きていくと思う。

……それだけは絶対にイヤだ。

「……………」

恐怖に竦む身体をどうにか動かして、ヘカートを構えてスコープを覗く。

けれどトリガーだけはどうしても引けなかった。

「撃てない……撃てないの。指が動かない……ごめんなさい……私もう、戦えない……」

「だったら俺と一緒に戦ってやる、俺と一緒に撃つから！」

その言葉と共にクラウドの右手が、グリップを握る私の手に重ねられた。

彼の右手の温もりが、氷のように動かなかった右手に動かせるだけの力を与えてくれる。

だけどそれだけじゃどうにもならなかった。

「ダメ……！　こんなに揺れてたら照準が……！」

「おいキリトツ！」

「5秒後に揺れが止まる！　2、1……今！」

次の瞬間、バギーが路面に転がっていた車をジャンプ台にして高く飛び上がった。

一瞬の滞空——その僅かな瞬間に私はクラウドと一緒にトリガーを引く。

強烈な反動が肩に掛かり、マズルブレイキから盛大な噴煙を上げて大口径の弾丸が撃ち出された。

けどあれはボロマントには当たらない。ボロマントたちが乗るバギーの右に大きく逸れていく。

「(外した……)」

ぼんやりと思っていると、逸れた弾丸は大型トラックに命中し、残っていたガソリンに引火。弾痕から炎が吹き上がるとボロマントたちが乗るバギーが通りかかった瞬間大爆発を起こしてバギーを爆炎が飲み込む。

バギーが地上に着地してから改めて炎の中を見ると、ボロマントたちが乗っていたバギーもガソリンに引火して誘爆を起こして炎を吹き上げるのが見えた。

偶然なのか、それともヘカートが外すことを許さなかったのか……私には分からない。

「——グッジョブ、シノン」

ただそう言っただけでもみたいに笑いかけるクラウドの顔を見て、胸の内に安堵が広がっていた。

その後キリトは私たちを乗せて北上し、いつの間にか砂漠地帯まで進んでいた。

流星に時間も経って落ち着いたから、追われていた最中に考えていた事も冷静に考えてそんなはず無いとはつきり断言できるようなものになっている。

——むしろ「そう思い込んだ」のは黒星が原因で、《死銃》は「あの

男」と同一人物のはずが無いのに……。

「……ここじゃ場所が悪すぎないか？」

「仕方ないだろ、街中にいるよりはマシだと思っただよ」

呆れるクラウドにキリトもむっと口を尖らせて返している。さっきまでの緊迫感は一和らいでいたけど、警戒は怠っていないかった。

けど確かにここじゃ見晴らしが良すぎて、格好の的ね……？

「ねえ。あそこ……たぶん洞窟がある」

何か無いかと周りを見回していた私は、右手の先に段差になっている地形を見つけて指差した。

洞窟の中だと衛星スキャンは避けられる。あるいはキリトがやっていたように水中に潜っていても。

ひとまず次のスキャンを避けるのならあそこが良いかもしれない。

「よし。行こう」

私の提案をキリトは受け入れ、バギーを洞窟に向かわせた。

洞窟内部は3人が隠れるには十分な広さで、私はバギーを降りるとそのまま壁際に座り込む。

けどクラウドだけは仏頂面を浮かべ、ずいっとキリトに顔を近づけていた。

「で？ 何があったか話してくれるんだろうなあ？」

「だから、《死銃》だと予想していたプレイヤーを倒そうとして別行動を取ったら、その隙を突かれたんだよ。シノンの近くに突然現れたんだ」

「メタマテリアル光歪曲迷彩って言うアビリティよ。衛星スキャンもそれで回避しているんだわ。……私たちは橋に現れた《死銃》を追って、川沿いを監視しながら街まで来たの。そうしたら……」

「ところがどっこい、光学迷彩で隠れていてシノンが1人になったのを狙われた、か……でも銃声くらいあるだろ？」

「無理よ、相手の使ってるのは《L115A3》……サイレントアサシンよ。よほど近距離じゃなきゃ発砲音は聞こえないわ」

「ステルスにサイレンサーつきライフルって……最強の組み合わせだなそれは」

私の説明にクラウドも納得して肩を竦め、そのまま私の隣に無遠慮に腰を下ろした。

「ここなら大丈夫だと思う。下は粗い砂だし、透明になっても足音は消せないし足音も見えるから。さっきみたいなのに、いきなり近くに現れるのは無理」

「なるほど。それじゃあ精々、耳を澄ませてないとな」

キリトもそれで納得し、クラウドの隣に腰を下ろした。

「にしても……あのボロマントと一緒にいた奴は何なんだ？」

「恐らく、《死銃》の協力者だと思う。たぶん……いいや、間違いないあいつも《死銃》と同じだ」

「厄介の種が増えたって事か……なら俺を監視していたのはあっちの方だな」

「監視？」

「ああ。本選が始まってからずっと、誰かが俺をマークしていた。姿こそ見えなかったが常に視線だけは感じていてな。正体を暴いてやろうと思っただが……邪魔が入ってしくじっただ」

「ごく普通に話しているクラウドに、そう言えば……と私は今の今まで忘れていた疑問を思い出した。

「ねえクラウド。クラウドはどうしてあそこに居たの？」

「あー、元々2人と合流するつもりで探していたんだよ。《死銃》がキリトを狙っているみたいだから、ちよつとやばいんじゃないかなって思っただ」

「……ごめん。俺、《死銃》の正体がお前なんじゃないかって疑ってたんだ」

「俺が？ 《死銃》??? はは、似ても似つかないって」

「……確かにクラウドと《死銃》は似ても似つかないわね。なんでキリトはそんな風に考えていたのかしら。」

「……そう言えば予選の時、クラウドの試合を見て何か言っていたけど。それでクラウドが《死銃》と何か関わりがあるって思ったの？」

「《死銃》たちがあの爆発で死んだって……可能性は？」

「いや、トラックが爆発する直前、バギーから飛び降りたのが見えた。」

無傷とは思えないけど、死んだとは思えないな」

「つてことは俺たちと同じようにどこかに身を潜めて、ダメージの回復に努めているって事か。それが終わったら——」

「ああ。今度こそ俺たちを殺しに来る」

はつきりと、その言葉を口にする。

「でも、俺がやらないとな」

「——自分1人でやる、なんて水臭いこと言うなよ」

「え……でも、無理に付き合う必要なんて……」

「何のために俺がB○Bに出たと思ってるんだ。手を貸して欲しいなら、言ってくれば喜んで手を貸したっての」

「クラウド……なんで？ あなたは怖くないの？ 相手は本当に人を殺せる力を持つてるかもしれないのよ？」

「仮想世界から人を殺すことなんて出来ない。仮に出来たとしても、そんなの俺に通じないからな」

はつきりと《死銃》の力を否定するクラウドに、私は呆氣にとられた。

なんでこうも……なんでこんなにも、この2人は強いのか。それに比べて私は……5年前の私よりもずっと、ずっと弱くなっていたのに……！

「……私、逃げない」

「シノン？」

「私も外に出てあの2人と戦う」

「シノンまで無理に戦うことなんて無いぞ？」

「クラウドだつて言っただじやない。『仮想世界から人を殺すことなんて出来ない』つて。もし仮に《死銃》にそんな力があって、殺されるかもしれないとしても……私は構わない。さつき、すごく怖かった。死ぬのが恐ろしかった。情けなくて、悲鳴を上げて……そんな私のまま生き続けるのなら、死んだ方がいい」

「——それ、本気で言ってるのか」

静かに、感情の込められていない平坦な声でクラウドが呟く。

私はそれに答えず、立ち上がって洞窟を後にしようとしたけどクラ

ウドの手が私の肩を掴んで止める。

「……離してよ」

「シノン、お前……自分が何を言ってるのか本当に分かっているのか？」
「ええ。もう怯えながら生きるのは疲れたの。別に付き合ってくれなんて言わないわ。1人でも戦えるか——」

その瞬間、クラウドが強引に私を向き直らせると手を振りかぶり、パアンツと乾いた音が洞窟内を反響した。

何をされたのか一瞬わけがわからなかった。頬が熱を伴う痛みがして、クラウドが私を打つたのだと気づくと痛む頬に手を触れながらクラウドを見上げる。

「寝ぼけたこと言ってるなよ、お前……。死んだ方がいい？ 何も知らないくせに死ぬなんて口にするなよ。死ねばそこで終わりなんだ、残された人たちはずっと喪った悲しみを背負って生きていくんだぞ？ お前があいつに殺されたら、俺もキリトも悲しむし一生悔やみ続けるんだぞ？」

「……そんなこと頼んでない。1人で戦って1人で死ぬ、それが私の運命なのよ」

「そんな運命なんてクソ食らえだ！ 犬でも食わないほどクソマズイ代物だよ！」

「クラウドには関係ないじゃないっ！ 偉そうに説教して何様のつもりよ!？」

「俺はお前の相棒だ！ それ以上のことが必要あるか!？」

相棒……。

そう、私とクラウドは相棒。

最初は倒すべき相手だった。次は越えるべき目標だった。その次は互いを預けられる相棒だった。

でも……それだけよ。

私は彼のことをほとんど知らない。

彼は私のことをほとんど知らない。

ここでしか繋がりが無い、蜘蛛の糸みたいに細くて切れやすい繋が
り。

「ッ……！ ならっ！ ならクラウドが一生私を守ってよ！」

押さえ込んでいた感情が一気にあふれ出し、クラウドの襟首を掴むと涙を流しながら叫ぶ。

「何も知らないくせにつ！ 何も出来ないくせにつ！ 勝手なこと言わないで！ そんなこと言って、私のことを知ったらどうせ離れていくんでしょ!?! 私……私の罪を、あなたが背負ってくれるの!?! この……この、人殺しの手を、あなたが握ってくれるの……!?!」

「——なんだ、そんな簡単なこと」

握り締めた右手が、暖かい感触に包まれる。

ごく自然に、クラウドは笑いかけながら両手で私の右手を包み込んでいた。

さつきまで怒っていたのに、いつものように笑みを浮かべるクラウドに思わず虚を衝かれる。

「守る……か。 そうだな、それが出来たら本当に良いだろうな。でも

——仮想世界が俺にとっての現実だから」

違う。 いつもみたいなお笑みじゃなかった。

なんでもない話をしている時、彼は時々どこか哀しそうに笑うことがあった。それが妙に印象に残っていたからずっと気になっていた。溢れ出していた激情が、そのどこか哀しげな笑みで冷えていく。

私は言葉を紡ぐことも忘れて、その笑みを見上げていた。

散々泣いて、散々叫んで疲れきったシノンはまた壁際に腰を下ろすと、隣に座った俺の肩に頭を載せてきた。

「ごめん……少し、少しの間だけで良いから」

「ん……別に構わないけど」

そのまましばらく、誰も口を利かなくなる。けれど静寂を破ったのはシノンだった。

「……私ね、人を……殺したの」

ゆっくり、その言葉を口にするシノン。

それから少しずつ、ゆっくりと自分の過去を語りだした。

——それが起きたのは5年前、東北の小さな町で起きた強盗事件。

報道では犯人は銃の暴発で死んだことにされていたが、真相は違った。

本当はその場にいたシノンが強盗から拳銃を奪って、撃ち殺したのだという。

「5年前……？」

「11歳の時……。私、それからずっと銃を見ると吐いたり倒れたりしちゃうんだ。銃を見ると、殺した時のあの男の顔が浮かんできて……。怖い。すごく、怖い」

「けど……」

「うん。この世界なら大丈夫だった……。だから思ったんだ、この世界で一番強くなれたら、きつと、現実の私も強くなれる。あの記憶を忘れることができる……。って。なのにさつき、《死銃》に襲われた時、すごく怖くて……。いつの間にか“シノン”じゃなくなつて、現実の私に戻つてた。本当はね？ 本当は、死ぬのは怖いよ……。でも、それと同じくらい怯えたまま生きるのが辛いんだ。《死銃》と、あの記憶と戦わないで逃げちゃつたら、私きつと前より弱くなっちゃう……。」

きつと妄想と現実と同じようできて違うからシノンは平気だったんだ。

たぶん無意識の自己暗示みたいなもので、現実の自分と仮想世界の自分は別人……。と考えることで銃を見たり触ったりしても平気だったんだろう。

けど、そうか……。シノンはずっとそれを引きずっていたのか。

「……俺も、人を殺したことがあるんだ。4人も」

あの時シノンが取り乱していた理由に納得していると、隣にいたキリトがポツリと呟いた。

その言葉を聴き、えつと驚いたようにシノンは息を呑み、俺越しにキリトを見やる。

「前にも言ったろ？ 俺はあのボロマント……。《死銃》と他のゲームで顔見知りだったって。そのゲームのタイトルは——ソードア—ト・オンライン」

「じゃあ、あなたはやっぱり……」

「ああ。SAO生還者^{サブバイパー}ってやつだ。そしてあの《死銃》たちも。それに――」

そこで一旦言葉を区切ると、ジロリと半眼を俺に向けてくる。

「……そろそろ話してくれても良いんじゃないのか？ ミスト」

「……ミスト？」

「……………」

キリトが何を言おうとしているのかさっぱり分からないシノンは、きよんとしながら俺を見る。

俺は長い溜息をついて天井を見上げた。そして――

「大せいかい☆」

それまでのシリアスムードを修復不可能になるまでブチ壊すように、にっと笑って明るく答える。

その反応にぎよっとして言葉を失うシノン。対するキリトは完全に呆れていた。

「やっぱり……」

「参考までに聞くけど、どうやって気づいた？」

「色々あるよ。まずはプレイヤーネーム……クラウドは雲で、ミストは霧とか霞だろ。そして雲が地表面に接触している状態だと『霧』って呼ぶそうじゃないか。それに戦い方……システムアシスト無しにSAOのソードスキルを使っていたなら、まず間違いなくSAOにいた人間だ。

そして最後に、『何のために俺がBOBに出たと思ってるんだ』……って、俺がBOBに出場した理由を知ってる上で言っただろ。俺がGGOにダイブした本当の理由を知っているのはミスト以外知らない。

ならクラウドは俺の知り合いで、しかも理由を知っている人間……ミストに限られるんだよ」

「あー……まあ隠すつもりは無かったし、別に今更バレてもいいんだけどどうおっと」

「で？ 何でお前がGGOにいるんだ。しかもシノンの口ぶりからすると結構前から居たみたいじゃないか」

「いやー、はは。それは何というか説明すると長くなるんだけどなあ」
ぐいっと襟首を掴んで顔を引き寄せてきたキリトに、目を逸らして
適当にはぐらかす。

いや嘘は言っていないんだ、本当に。ただ俺がここで何をし続けて
いたのかを話すとなると……少し、困る。それは本当に。

「ね……ねえ、ちよつと待って。さつきから2人で何の話をしているの
？ クラウドとキリトは知り合いだったの？」

「ああ。こいつはミストって言って、俺と同じSAO生還者の1人だ
よ」

「いや、それはちよつと違うだろ。俺死んでるんだし」

「死んでる？ クラウドが？ でも……」

「……彼女には何も話していなかったのか？」

「話せるわけ無いだろ、大体こんな話したところで信じるか普通？」

「だから、2人だけで勝手に進めないでくれる!? どう言うことか説
明してよクラウド!」

肩を掴んで振り向かせるシノンに困ったように頬を搔く。

説明……説明かあ。ここまで聞いたらシノンにも話さなきゃいけ
ないんだろうけど、ややこしい上に突拍子もないし長いんだよなあ全
部話すと。

「えーつと、それもまた別の機会に……ってことで」

「ご・ま・か・さ・な・い・で」

「いや、本当、話すと長くなるんだって。BOBが終わったら改めて、
きちんと説明するから!」

「……絶対よ？ 絶対に、全部説明しなさいよ？」

しつこく念押ししてくるシノンにわかったわかったと約束してか
ら、話を戻すべく改めて真剣な顔を浮かべてキリトに尋ねた。

「それで……《死銃》は何者なんだ？ SAO生還者って言うのは間違
いなさそうだが」

「——ラフコフ……《笑う棺桶》。奴はその1人だ」

「ラフコフ——って、本当かそれ？」

「ああ、間違いない。あいつの腕にラフコフのタトゥーがしてあった」

……信じがたい話だが、キリトの目は真剣そのものだった。

《ラフィンコフィン笑う棺桶》。SAOに囚われた人間たちの間でその名を知らない

人間は居ない。無論、この場合は悪い意味で。

SAOではどんなことがあってもHPを全損させてはいけな
いと言ふ不文律があった。0になったら現実の自分も死んでしま
うから当然だ。

だがラフコフの連中は違った。奴らはシステムの抜け穴を利用し、
ありとあらゆる手段で積極的にPKを行っていた。奴らに殺された
人間は何百人にも上るらしい。

最期は攻略組が動き、討伐隊を作って捕獲しようとした、らしいが
……。

「だけど情報が漏れていて、逆に奇襲を受けたんだ。物凄い混戦の中
で、俺はラフコフのメンバーを2人、殺した。確かあの時、ミスは
……」

「ああ、討伐隊に参加していなかったからな。参加していたとしても
ステータスにプレイヤースキルが伴っていなかった俺じゃ、足手纏い
にしかならなかっただろうし」

当時の俺は弱くて、それでも一応攻略組だったから参加要請が来て
いたんだけど断っていたんだ。だからラフコフの人間とは面識が無
い。道理で心当たりが無いはずだ。

「……じゃあ、あのボロマントと一緒に居たやつも？」

「きつと同じラフコフのメンバーだろうな。《死銃》と同じで、討伐戦
で捕まった後に牢獄に送られた」

「はー……まったく、ここに来てあんなのが出てくるなんてな」

呆れて何も言えなくなり、俺はため息をつくと両手を組んで頭の後
ろに回した。

いまさら何でまた殺人を……いや、頭のイカれた奴らの考えなん
て理解できるはずも無いか。

「キリトはその記憶を……どうやって乗り越えたの？ どうやって過
去に勝ったの？」

「いや……乗り越えていないよ」

シノンの問いに、キリトは静かに首を横に振ると否定した。

「昨夜、俺はその剣で殺した人たちの事を繰り返す夢に見て殆ど眠れなかった。アバターが消える瞬間の彼らの顔、声、言葉……俺はきつと、2度と忘れられないだろう」

「そ……そんな……じゃあ私、どうしたら——」

「……なんかさ、小難しく考えすぎじゃね？」

失意に落ち込むシノンや、悲観的に考えるキリトを見てやや間を空けて口を挟んだ。

「殺してしまった事は仕方が無い。その事実を変えられない。けどその結果、2人に救われた命だって確かにあるだろ？」

「そんな軽々しく……人を殺したことも無いのに、気軽に言わないでよ」

「人殺し……人殺し、か。そうだな、シノンの言うとおりだな」

「ミスト、お前……」

俺が何を言おうとしているのか、察したらしいキリトに手を挙げて止めた。

「じゃあシノンに質問だ。えつと……シノンの場合なら1人を殺してその場に居た数十人の命を救った罪と、殺しはしなかったが6000人あまりを見殺しにしても生きようとした1人の罪……どちらが重い？」

「えつ……？ それは」

「そう、後者の方が罪は重い。こうなってくると単純な数の問題さ。だからさ、そんなに悲観的に捉えなくてもいいんじゃないか？ こうしてここに、大切な人たちすらも見殺しにして生きようとした男がのうのと生きているんだし。そんなやつと比較すれば、シノンはまだ救いがあるって」

「——」
あまりにも想像を絶する話の内容に、シノンは絶句していた。

それもそうだ。あまりにもスケールが違う上に、自身の想像をはるかに上回る事を明かされれば言葉も出ないだろう。

「……本当、なの？ 本当にクラウドは……」

「……ああ。結果的にミストは、当時S A Oに囚われていた6000人あまりの人間を見殺しにしようとした。それを俺が止めて、殺した」

「あのなあ、まだあの時の事を気にしているのか？」

「当たり前だろう。もつと早く知っていればあんな事にならなかったかもしれないのに……！」

「……無理だよ、それは。遅かれ早かれあなるのは避けられなかった。けど俺は自分の選択に後悔はしなかったし、あの時お前に討たれたのも受け入れていた」

「またもネガティブに嵌ろうとするキリトに釘を刺すと、キリトは気まずそうに目を逸らしてしまう。」

「良いか悪いかで言えば、結果的に言えばあの結果は良かったんだろう。あの世界を最後まで戦い抜いても、隣に大切な人が居なかったなら何の意味も無い。」

「その結果シリカ……瑠子に悲しい思いをさせたのは、今でも悪いと思っっているが。」

「クラウドは、その……どうしてそうしようと思ったの？ 大切な人たちを見殺しにしてまで、何をしようとしたの？」

「……生きたかった。それ以外に理由が要るか？」

「でも、それじゃあ……！」

「そう。俺がやろうとした事は結局矛盾なんだ。大切な人たちと少しでも長く同じ時間を……なのをやっている事はその逆だ。だけど俺には、これ以外方法が浮かばなかったんだ」

「あの世界でしか……いいや、今もこうしてここでしか存在できないから、例え誰かを見殺しにしても最後まで進むしか無かった。」

——その結果がこれなんだから、自業自得だ。

「要はさ、もう過去は覆せないんだからそれを受け入れて、殺した人たちの分も生きていく。それが贖罪なんじゃないか？」

「じゃあクラウドも……？」

「俺の場合は今ここに存在していること、それが贖罪なんだろ」

「なによそれ……答えになってない」

「……全部終わったたら、全部話す。俺に……俺たちに何が起きたのか」
明らかに落胆した様子のシノンだが、こればかりは仕方が無い。全てを話すには時間がかかるから。

ただまあ、他にも自分なりに贖っている方法があるんだけど、これは伏せておこう。

「それで、また話を元に戻すけど《死銃》はどうやって殺しているんだ？」

「……スタンバレットで相手の動きを止めてから、十字を切って《黒星》で撃つ。ペイルライダーはそうやって殺していた」

「けど仮想世界から現実の肉体に……少なくとも致死に至るような影響を与えることは不可能だ。それはとつくに結論を出していただろ？」

「そうなんだよな……それにゼクシードもたらこも、脳の損傷じゃなくて心不全だったそうだし」

「え……心臓？」

そこが奇妙な所だ。アミユスファイア……と言うか、ナーヴギアくらい出力が高ければ、脳を焼いて殺す事はできる。

けど死因が心不全って……さっぱり分からん。

「心不全……って言うのと、ちよつと違うけど名前を書かれた人間は死ぬ死神のノートが浮かぶよなあ」

「何よそれ？」

「知らないか？ デ○ノートって」

「……ミスト、今なんて言った？」

「デ○ノートのことか？」

「違う、その前！」

「……名前を書かれた人間は死ぬ死神のノート？」

「——そうだ、それだよ！」

大声を上げて納得するキリトに、俺とシノンはえつと呆然となった。何を言い出すんだキリトは？

「え、まさか《死銃》の正体はキラで本当にデ○ノートを使って……？」

「違うっ！ 俺たちは勘違いしていたんだ！」

「勘違い？」

「嘩然として問い返すシノンに頷くと、キリトは自身の推理を語って聞かせた。

ざっくり言うと、《死銃》がああ光学迷彩マントを使って、総督府のB o B受付端末に入力しているプレイヤーから個人情報を読み取る。入手後、得られた住所から現実世界での実行役……もう1人の《死銃》がダイブ中のプレイヤー宅に侵入し、仮想世界に居る《死銃》が銃を撃つタイミングに合わせて殺害する……と。

「仮に、それができるとしても忍び込むのに鍵はどうするの？ 家の人とかも居るでしょう？」

「ゼクシードとたらしこに限って言えば、2人とも1人暮らしで家は古いアパートだった。多分、ドアの電子錠もセキュリティの甘い初期型だろう」

「ターゲットが1人暮らしで、しかもG G Oにダイブしている間なら現実の肉体は完全に無防備。多少解錠に手間取っても気づかれる可能性は無い……か」

「じゃあ死因はどう説明するの？ 心不全って言うていたでしょう？ まさか、クラウドが言ったように名前を書かれた人間は死ぬとか言うノートでも使ったの？」

「それは流石にありえないけど、何か薬品を注射したとか……死体は発見が遅れて腐敗が進んでいたそうさ。それに、寝食も忘れてゲームに打ち込むコアなV R M M Oプレイヤーが心臓発作で死ぬ例も無いわけじゃない」

なるほど……確かにキリトの推理ならかなりしつくり来る。

「……タネが割れると、なんてこと無い、しようもない仕掛けだった……ってことか。ほんつと、くだらない」

《死銃》のやっていることは大きく矛盾している。本物の死を齎すとか嘯いておきながら、自分の力で殺してなんかいない。その力すらもない。

「……？ けどキリトの推理だと、よほどタイミングを合わせなきゃ銃撃と同時にターゲットに薬品を注射するなんて出来ないんじゃないかな

いか？　いくらなんでも撃ったら偶然薬品を注射した、なんて無理だろ」

「だな……もしかしてあの十字を切る仕草は、腕に仕込んだ腕時計を確認するための物で、同時に共犯者へ準備は整った合図を送るのも兼ねているんじゃないのか？」

「そう言うことか……って待てよ、その法則で行くと……シノン、《死銃》はお前に十字を切ったか？」

「……していた、わね」

「前に1人暮らして言っていたよな？」

「ええ。鍵は掛けてあるわ。家も初期型の電子錠で、チエーンは……してなかった、かもしれない」

「って事はつまり……」

「落ち着いて聞くんだシノン。……今、君の部屋には《死銃》の協力者が侵入していて、君があの黒い拳銃で撃たれるのを待っている……という可能性がある」

「っ………！」

その言葉にシノンは大きく目を見開き息を呑む。

確かにバギーで追っていた時も奴はあの銃でシノンを撃っていた。なら今、シノンはいつ殺されてもおかしくないってことに……！

「イヤ……ッ！　イヤよそんなの……っ！」

「おいシノン落ち着け、今自動切断了ら逆に危険だっ！　ゆっくり、大きく深呼吸だ……」

「あ……あっ………！」

「あの銃で撃たれていない今、《死銃》の共犯者はまだお前を殺せない。けどお前が今自動切断して共犯者の顔を見たら、そいつは口封じのためにお前を殺してしまう。怖いだろうけど今は落ち着くんだけ」

怯えて俺にしがみつくとシノンに、俺は優しく言い聞かせながら頭を撫でて落ち着かせる。

シノンのこの状況を打破するには、ともかく《死銃》たちを倒すしかない。そうすれば現実世界にいる共犯者も立ち去るはずだ。

落ち着いたシノンを離すと腰を上げる。どうするかなんて最初か

ら分かりきってる。

「俺はこっちでの《死銃》の共犯者を倒す。キリトはスカルフエイスの方を倒せ」

「分かった」

「ちよつと、まさか一人で相手をするつもり!? いくらクラウドでも危険よ。私も一緒に……」

「いや、シノンにはキリトのサポートを頼む。俺よりもキリトの方が心配だ」

「だけど……」

それでも渋るシノンに、俺は笑いかけて手を彼女の頭に載せた。

「大丈夫だって、俺には『お守り』があるんだからさ」

「クラウド……」

「おいキリト、俺の相棒を危険な目に遭わせたら承知しないからな」
「ああ」

キリトとの間にそれ以上言葉を交わす必要はなかった。やると言った以上、必ずやる。ならそれ以上話す必要もない。

さあ、この大会の幕を引きに行くとしようか……。心の中で呟くと、俺は右手をサムズアップしながら洞窟の外へと歩いていった。

第7話 MOON LIGHT

第7話 MOON LIGHT

キリトとシノンと別れてからしばらく歩き続けて、次のスキャンが可能になったのを確認すると端末を起動して状況を確認した。

現在表示されているプレイヤーは俺とキリト、そして闇風の3人……残りは洞窟内に隠れているシノンと、ステルスマントで姿を晦ましている《死銃》だとしてもあと1人足りない……そいつがもう1人の《死銃》って事になる。

姿が見えないって事は、洞窟に隠れているか……あるいはスカルフェイスと同じようにステルスマントを持つているのか。最悪のパターンを想定して動くなら、後者と見るべきだろう。

俺を監視している最中もスキャンで表示されなかった。田園地帯には隠れる場所が無かった事を考えると、ステルスマントを持っていると考えると動くべきだ。

「こっちの姿は確認しているはずだから、恐らく向かって来ているはず。となると問題は闇風か」

闇風の事なら俺も知っている。と言うか、知らない奴はまだGGOを始めたばかりの新米だろう。

何しろ闇風は前回の大会……つまり第2回BOBで準優勝した実力を持つ間違いなく最強クラスのプレイヤーだ。

AGI特化で俺と同じく軽量なSMGをメインアーム(俺はサイドだけ)にし、近距離からの銃弾も避けられる。前回はゼクシードに装備の性能差で敗れたが、プレイヤースキルのみに限って言えばGO日本サーバーで最強、だろう。俺を除けばの話だけど。

兎も角闇風の実力は無視できない。もう1人の《死銃》と戦闘中に割り込まれたりするのも面倒だ。

「不確定要素だし、上手く行けばこっちに有利に働く事だって十分ありえる……が」

……今回はキリトに約束したからな。不確定要素は早々に取り除

いて、もう1人の《死銃》に集中させてもらおう。

「そう言えば……」

闇風を倒そうと思ったが、ふと引つかかっていた事があるのを思い出した。

《死銃》たちの本名……と言うか、キャラネーム。シノンの話から考えるとそれぞれの名前はステイブンとブラツキーなんだろう。誰がステイブンで誰がブラツキーなのかは分からないが。

「いや、なんだって良いかそれは」

名前なんて倒してから確認すればいいだけの話だ。

一度目を閉じ、ゆっくりと目を開く。普段から見えるこの情報が剥き出しにされた世界は不快だが、今この時だけは頼らせてもらおう。

闇風の位置は確認した。後は駆け抜けるだけ——！

闇風が居る先へと駆け抜ける。向こうも俺が近くにいる事に気づいていたはずで、そう時間は掛からず、お互いがお互いを認識できる距離まで接近する。

走りながら、闇風は同時にSMGの銃口を俺へと向けてきた。無数の予測線が俺の身体に当たるが、最小限の動作でフルオートの銃撃を掻い潜りなお接近する。

「ぐっ！」

向こうも俺のバトルスタイルは知っている。だからこそ剣の間合いに入らないよう距離を取ろうと試みる。

だがその瞬間はどうしてもスピードが落ちる。それに合わせてギアを上げてさらに加速。《MURAMASA》を取り、離脱しようとする闇風の胴へと加速を載せた右薙ぎを放った。

光刃が闇風の胴を抉り、重たい感触が急に軽くなると胴から真っ二つにされた闇風の上半身が宙を舞う。

啞然とした表情を浮かべる闇風の上半身が音を立てて砂地に落ち、【DEAD】の表示が浮かび上がった。これで不確定要素は排除した。残りは——っ！

「ちっ！」

微かに聞こえた風を切る音に反応し、俺は後方へと身体を回転させ

ながら回避する。一瞬視界に入った銀色に光る2つの物体は、そのまま俺の上を通過して彼方へと飛んでいった。

すぐに着地すると、前方を鋭く睨み付ける。確かにステルスマントで姿を隠しているようだが、それも全てはデータでそういう風に見せているだけのものに過ぎない。だから俺の目には奴の姿がはつきりと捉える事ができた。

「かくれんぼのつもりなら無駄だ。そこにいるのは丸分かりなんだよ」

「――あつれー？　つかしいなあ、確かに透明化してたんだけどなあ」
淡々と言い放つと、人をおちよくなるような反応が返ってきた。

人型のシルエットがフードを取ったような動きをする。ステルスを解除して顔を晒したらしいが、結構若そうな声だった。

「確認するまでも無いが、ラフコフの生き残りで《死銃》の1人で間違いないんだよな？」

「あー、そう言うアンタもS A Oにいた人間で間違いないんだ。まあ、その質問に関してはそうなんだけどさあ……オタクはいつたい何者なワケ？　ザザが追っていたのはキリトで間違いないだろうけどさあ、アンタだけはまったく謎なんだよねえ。あ、やっべー……ザザの名前言っちゃったよ！　まあいつか！」

……こいつ、相手の名前を平然と言って反省すらしてないのかよ。ただ相手はS A O時代の名前をザザと呼ぶらしい。それでも心当たりは無いが。

「昔は『レッドクリフ』……なんて呼ばれていた。これだけで通じるだろ」

「ん……たーしーか、攻略組にそう呼ばれている剣士が居た気がするけど……けど俺たちって初対面だよな？」

「そうだ。お前がどっちかは知らないが、ブラッキーなんてキリトの2つ名を名乗って挑発しているつもりか？」

「挑発もなにもお、『ブラッキー』は俺の立派な名前だし？」

「……そうかよ」

ブラッキー（こいつ自ら認めたとよ）の言い分を適当に聞き流し、光

剣を構える。これ以上は話すだけ時間の無駄だ。それに向こうのペースに飲まれたく無い。

「正直お前が何者だとかなんてどうだって良い。俺にとって重要なのは、お前たちはシノンを本当に殺そうとしている。俺はそれを止めるためにお前を倒す……これで十分だ」

「F〇〇！ オタク、クールに見えて実は熱血なの？」

「好きに言ってる——フツ！」

話を強引に切り上げ砂地を蹴る。

一瞬で縮まるブラツキーとの距離。

《MURAMASA》の刃が届く距離まで詰まった瞬間、瞬時に3連撃を放った。

俺の得意とするソードスキル『シャープネイル』。目にも留まらぬ速さで繰り出された斬撃を、ブラツキーは余裕で避ける。

ブラツキーは避けたまま、投擲用ナイフ3本を同時に投擲してきた。

通常、投擲ナイフは9ミリパラベラム弾を使用する拳銃以下の射程と威力しか無い。代わりに予測線も出ないと言うメリットがある。

だがあくまでも不意打ち、牽制用途がGGOでの主な使い道だ。だと言うのにこのブラツキーは投擲スキルをかなり上げているのか、その速度はまさに弾丸並みで、俺はステップと光剣による防御でそれを凌ぐ。

「はっ——！」

「おおっと！ ひやははっ！ アブねえアブねえ！」

迎撃を凌ぎ、さらに追撃するも、斬撃は悉く当たらない。ふざけたようでこいつ……かなり強い。ラフコフのメンバーだったのは伊達じゃないって事か……！

「お前だって曲がりなりにもあの世界じゃ剣士だったんだろ？ なのにそれがそんな武器使ってなんとも思わないのかなあ？」

「光剣の良さが分からないなんて、ロマンを分かってない残念な奴だな。さてはお前、ス〇〇オーズを見てないだろ！」

「しーらねっと！」

突きをステップで避けたブラツキーは、新たな武器を取り出した。どうやら銃器のようだが、左右に張り出しているのは……まさかCMグか？ SMGクラスのサイズに？

銃口が向けられ、無数の予測線が注がれる。やたらと大きい銃声とマズルフラツシユが轟き、予測線に沿って弾丸が撃ち出された。

だがこの距離でも捌ける……っ！ 予測線が触れた順番ごとに光剣を操り、銃弾を弾く……が。

「(この手応え……まさかっ!?)」

何百、何千、何万と銃弾を剣で弾いてきた俺は、だからこそ違和感を覚えた。

口径が違えば弾丸の形状も異なるし、それを斬ってみれば手応えだつて異なる。

だから、今斬つたのが一般的にSMGで使われる9ミリパラベラムや・45ACPのどちらとも異なる感触に気づいた。この軽くて鋭い感触は……5・56ミリNATO弾!? ライフルクラスのサイズで使われるカートリッジだぞ!?

「っ!?! ぐっ……!」

驚愕する俺にさらに信じられない出来事が起きる。ブラツキーの銃撃は完全に見切り、防いだはずだった。

そのはずなのに左肩に微かな衝撃が走り、動きが一瞬止まってしまふ。

今、何が起きた？ 伏兵……いやそれは無い。残り人数はさつき倒した闇風を除けば残りは俺と目の前にいるブラツキー、そしてシノンとキリトが戦っているであろうスカルフェスだけだ。

同様と混乱から停止しそうになる思考をどうにか回転させる。落ち着け、ダメージはあるようでほとんど無いんだ。

だが、今のスタンはなんだつたんだ？ 予測線からの射撃は全て凌いだのに……っ!?!

「いや……そういう事か。『横転』だな。そしてその銃は《パトリオツト》ハンドライフルか……!」

「へえ？ 中々察しが良いじゃん？」

ぼそりと呟いた俺の答えにブラッキーは興味深そうな反応を示した。やっぱり、俺の予想は的中したらしい。

《パトリオット》。それはM16E1をベースとしてM4カービンよりもさらに極端な小型化・短銃身化を施し、近接戦闘に特化させた5.56ミリNATO弾を使用する超小型ライフルだ。サブマシンガン並みに切り詰めた銃身にストックオフを行い、さらに100連装のCマガによる圧倒的な弾数を実現しつつ、5.56ミリNATO弾による高火力も兼ね備えている。

本来5.56ミリNATO弾は小銃クラスの銃身長で使用される弾丸だ。だがパトリオットのようなSMGクラスの銃身長で使用すれば銃弾は十分な加速を得られず、発射後すぐに風の影響などを直接受けて予期せぬ弾道を描く事もある。

その結果GGOでは本来存在しない弾丸として扱われ、横転した銃弾は予測線に表示されない……文字通り“幻影の魔弾”と化す、って事だ。

「横転した弾丸には本来の威力は無い。だが命中さえすればささやか
なスタンとダメージを発生させる事ができる……らしいけど？」

「大きなマズルフラッシュのどさくさに紛れて出てきたイレギュラー
な弾丸は予測線が出ないために相手に気づかれず、近距離でなら相手にダメージを与えられるって事か……」

「せ〜かい♪」

愉快そうに笑っているブラッキーの事は無視して、俺は瞬時に思考
を巡らせる。

銃口の向きから射線を予測……は、マズルフラッシュが激しすぎて
不可能。横転する弾丸が出る確率も不明と来てる。

となると……後は1つしかない。だが、これは……。

「やるのはよっほどの時だ。ただでさえカメラ中継がされている中
で……)」

浮かんだ考えを一旦保留にして、《M10》を取り出す。その姿を見
たブラッキーは呆れたように肩を竦めた。

「剣で無理なら銃で勝負って？ いくらなんでもこつちとの差が分か

らない訳がないっしょ?」

「知ってるよそれくらい」

確かに《M10》と《パトリオット》は似た性質を持っている。だが火力・装弾数共に《パトリオット》の方が遥かに上だ。

だが、それがどうした。

「武器で劣るなら技量で補えばいいだけの話だろうっ!」

「ビュウツ♪ やっぱ熱血じゃんお前っ!」

《M10》を撃ちながら再びブラツキーに攻め込み、《MURAMA SA》の斬撃も交えたコンビネーションを繰り出す。

だがブラツキーも銃撃と斬撃を避けながら、僅かな隙を見ては《パトリオット》で応射し俺も光剣で防ぎ、あるいはかわして凌いでいく。それでも混じっていた“存在しない弾丸”には反応が遅れてしまい、直撃はしてもたいたダメージにならないが、僅かな硬直を狙われてさらに銃撃を浴びせられてしまう。

どうにか紙一重で本命を回避するが、やはり銃の性能差が大きすぎた。特に装弾数が……!

「残弾が……!」

「ははっ! リロードなんかさせねえっての!」

残弾が少なくなつて来た時、ブラツキーは新たに刃渡りが30センチはあるマチェットを抜いて斬り付けて来る。

こいつ……俺と同じ戦闘スタイルかよ! 瞠目するがとっさに《M10》を盾にしてマチェットを防ぎ、同時に回し蹴りを放って追い払う。

……これは、マズイ。冷や汗が頬を伝っていくのを覚えながら思った。

《M10》の残弾が心許ないタイミングで向こうは格闘戦も仕掛けてくるつもりだ。リロードしようとしてもどの距離からもタイミン

グが封殺されてしまった。

「弾薬の差が命運を別けたみたいだなあ? “レッドクリフ”サン

……いいや、今はジエ〇イって言った方がいいのかあ? けひやひやっ!」

「……………」

「まあそんな顔すんなって、あつちの2人も始末したらお前も仲良く殺してやるからさあ。——あー、思い出すなあ、確か昔、仲間同士で殺し合わせて生き残った1人だけ助けてやるってゲーム。でも結局生き残った奴も殺しちやっただけどなあ」

「……………ふっ」

「あ?」

1人で勝手に喋り捲っていたブラツキーについて失笑を漏らし、それが聞こえたらしいようでジロリと睨み付けて来た。

「なるほど……俺とお前たちは似た者同士なのかも——なんて心の何処かで思っていたが、そんなことは無かったようだな。ブラツキー、お前は……どうしようもないくらい救いようの無い、クズだった……って事だな」

「あー? 何言ってるのオタク?」

「俺が殺そうとしたのは、それが矛盾しているとしても少しでも長くあいつらと同じ時間を過ごしたかったから……だがお前たちは愉しみながら人を殺した。似ているようで全ツ然違っていたわけだ」

「だーかーらー、何を訳の分からない事を言ってるんだ、ってーのツー」
苛立った口調でブラツキーは吼え、振りかざしたマチェットを一直線に振り下ろす。俺はそれを《M10》で受け止めるが、刃がアッパーに食い込んだ。

「そして今も、お前たちはあの世界と同じように人を殺している……何が『本物の死を齎す』、だ! お前も奴も、この世界から人を殺す力なんて持っていない! やっているのは卑劣で低俗なただの人殺しだ!」

「違うね! 俺たちは本物だ! この世界から人を殺してるんだよ!」

「だったら俺を殺してみせろよ! 今すぐ! ここで!」

脅すように言い放つとぐっと悔しそうに唇を噛んだ。

「そうだ、殺せないだろう! お前は俺の本当の名前も、どこに住んでいるのかすら知らない! 1人暮らしをしている意識の無い人間の

家に忍び込んで毒薬を注射？ 大口叩いてやっている事は姑息でお粗末な上にPKですらないじゃないか！ そんな事しかできない小さい人間が、俺を殺せるものなら殺してみろ！」

「テツメエ……い！」

論破していく俺にブラツキーは怒りに肩を震わせ、その隙を見計らって膝蹴りを打ち突き飛ばす。

《M10》……は、もう使い物にならない。いくら頑丈といっても全力で振り下ろされたマチェットを無傷で受け止めるのは無理だったか。

なら……奥の手を使うしかない。

「俺はお前を認めないし、同情もしない。お前は俺の仲間を殺そうとしている……正直、俺がお前をブツ殺してやりたいが、それは出来なから……だから、代わりに——お前の悉くを全て否定してやる」

「全てを否定、だあ……？ そんな事どうやってやるんだよ」

「簡単な事さ。お前は俺を絶対に殺せない。そして……お前が未だにあの世界に魂を囚われていると言うのなら、それすらも否定してやる。俺たちが囚われていた鉄の城はもうどこにも存在しない。そして《笑う棺桶》ライオンコフィンだつて無いんだつてな！」

「——違う」

奴が継り、そして囚われている全てを俺は否定する。

するとブラツキーは俯き、小声で呟いた。

「違う。違う……違う、違う違う違う違う！ 俺は、俺は《笑う棺桶》の！ ジョニー・ブラックだああ！」

狂ったように叫び、ブラツキー——いや、ジョニー・ブラックは《パトリオット》を乱射しながらマチェットを振り被つて迫る。

考えてみればコイツとは長い付き合いだった。最初は確かにゲームに出ていたつて理由で買ったけど、使い続ける内に愛着が湧いてこの世界におけるもう1人の相棒……みたいな感じになっていた。

だからこそ惜しくもある。多分、同じ物は2度と手に入らないだろう。けど今は……仲間の命がかかっている。だから——

「じゃあな、相棒——」

別れの言葉を呟き、《M10》をジョニーへとアンダースローで投擲する。

急に銃を投げられ不意を衝かれたジョニーは、とっさにマチエツトで《M10》を叩き切った。

その一瞬の間——その瞬間、空いた左手をコートの内……腰の後ろに回し、『それ』を掴んで引き抜く。

同時に弾くように入れられる電源スイッチ。出力は最初から最大出力。クライマックスその瞬間左手に握った金属棒の先から蒼く光る刃が迸った。

1歩、いや2歩、踏み込み蒼い光の刃を形成した光剣を振り下ろす。

《M10》に一瞬気を取られていたジョニーは、回避は間に合わない
と判断して《パトリオット》とマチエツトを頭上でクロスさせて受け止めようとする。が——

バキヤツ——！

「なあっ……!?!」

マチエツトを《パトリオット》ごと叩き切られ、ジョニーの目が驚愕に見開かれた。

そのまま光刃がCマグに詰まっていた弾薬の火薬に引火し、爆発するとジョニーの左腕を吹き飛ばして黒煙を撒き散らす。

煙でジョニーの姿は見えない……が、存在ははっきりと感じ取れていた。動揺と困惑、驚愕がない交ぜになってジョニーはその場で喚き出す。

「なんでだ……なんでだよ?! マチエツトが一撃で破壊って?! まだ使っていないかった! 素材だつてこの世界で手に入る最高級の金属を使ってる! 宇宙戦艦の装甲板になれる硬度の金属が、なんで簡単に折れるんだよ!?!」

「はっ……寝ぼけてるのかお前?」

「んだと……!?!」

「大方、あのレアメタルをナイフ製作スキルで加工したんだろう。けどな、逆に考えろよ。そんなものに使うならそれを加工出来るモノが

あっても不思議じゃないだろう?」

「そんなものが……っ!」

否定しかけたジョニーが息を呑む。

そう、確かにそれは存在する。そしてそれらは入手方法が未だに謎に包まれている物だった。

「オーバード・ウェポン……まさか、その光剣は《MOON LIGHT T》かよ!?!」

「そう、光剣カテゴリー唯一にして最強の剣。可変式超高出力光剣《MOON LIGHT》。……そのレアメタルを加工する技術を導入したそうだが、まさに矛と盾か」

この剣……《MOON LIGHT》を手に入れたのが俺とシノンの最初の出会いだった。

きっかけは俺がまだソロだった頃、シノンが《ヘカート》を手に入れる前。

1人で潜ったダンジョンで、最奥部に居た巨大なロボットの大型ボスにてこずっていた時にたまたま助けてくれたのがシノンだった。

なんとかボスを倒してボーナスドロップを見ると、手に入れたのがこの《MOON LIGHT》。まだCMなどで公にされている1つを除いて、他の詳細は一切謎に包まれていた武器。

これが縁になって、以来シノンとは良くコンビを組むようになり、相棒と言う間柄にまでなった。

……この時助けてくれた借りは、シノンが《ヘカート》を入手した件でようやく清算されたが。

「《MOON LIGHT》の特性は『耐久値^{フル}直接攻撃^{レイ}』。どれだけ耐久特化しようとも、命中すれば耐久ゲージを一撃で全損させる事ができる。お前のマチェットがいくら耐久性が高くても、こいつの前じゃ無意味だったんだよ」

字面だけを見ればバランスブレイカー級の代物だが、それは銃撃戦がメインのGGOでなければ、の話だ。激しい銃撃を掻い潜って超近距離まで近づいて当てなければいけない光剣の性質上、非常にリスクが高い。

故に、GGOという世界において《MOON LIGHT》の性能は宝の持ち腐れに等しい……それを使いこなせるプレイヤーがいれば、話は別だが。

だからコイツを手に入れた時、俺は存在を隠す事を選んだ。ただでさえ正体不明のオーバード・ウエポンだ。バレれば大騒ぎになるのは必至だった。

「チィッ……！」

舌打ちし、ジョニーは別のナイフを抜く。片腕を失い、メインアームを失っているというのに往生際の悪さに俺は嘆息する。

「そんなナイフ一本で勝てると思ってるのか？ ああ、自殺するなら止めないけどな」

「はんッ……ヨユー扱いてるとイタイ目に遭うんだぜえ？ こんな風によおッ！」

次の瞬間、ジョニーが握っていたナイフの刀身が丸ごと消失した。

「ひっはははは！ ナイフはナイフでもスペツナズ・ナイフだったわけだ！ しかも麻痺毒を仕込んだ俺の本当の切り札だ……よ……！」

秘中の秘策が見事に嵌り、ジョニーは狂ったように笑っていた……が、その笑い声は目の前の光景に一瞬で失われる。

「……………」

俺の目前で停止したナイフの刀身。まるで見えない手に捕まれているかのようにぴたりと空中で止まっていた。

……視線と意識を、ナイフの刀身から外すと支えを失ったかのようにナイフも砂地に落下する。

「なんだよ……なんだよ、それ……！」

自身の理解を越えた事象に、ジョニーは愕然と立っていた。

その無防備へ向けて、俺は文字通り『本気』のラストアタックを掛ける。

全身全霊、超高速の連撃。蒼と灰の粒子が星屑のように飛び散り、空間を灼いていく。

「(まだ……もつと……こんな物じゃない……！)」

2本の光剣を振り回しながら、俺はさらに速度を上げてジョニーの

身体へ剣戟のラッシュを叩き込む。

連撃の数は10を越え、スパートを掛けるべくさらにギアを上げていく。

システムのアシストも無しに10連撃以上を繰り返すのは不可能ではないが、それに近いほど

困難だ。

だが、今の俺にやら16連撃くらい造作もない。

16発目——最後の1撃。右回転から二刀を同時に叩き込み、ジョニーの身体を輪切りにしてバラバラに解体した。

「……スターバースト・ストリーム(仮)」

両腕を左右に広げ、バラバラになったジョニーに背を向けたまま膝を衝いて砂地に着地する。

「なんだよ——それ——お前、ほんとうに——にんげん、か——よ

目の前で起きた信じ難い光景を前にした感想を最後に、ジョニー・ブラツクの残骸に「DEAD」の表示が浮かんで退場した。

残心を終えて、俺は立ち上がると光剣の電源をオフにし、ふうー、と息を吐く。

「——さあな。俺にも良く分からん」

第8話 幕引きはド派手に

第8話 幕引きはド派手に

ブラッキーことジョニー・ブラックを撃破し、すぐにキリトたちが戦っている場所に応援に向かう。

だが向こうでも戦闘は終わっていたようで、走ってくる2人を見つけて声を上げた。

「キリト、シノン！」

「クラウド……ッ！」

俺の姿を認めた途端、シノンがそのまま走ってきて俺の首に抱きついてきて、思わずぎよつとするも倒れないように踏み止まる。

見ればシノンは怪我もないが、キリトの方は全身にダメージエフェクトが残っていてかなりてこずったと言うのは見て取れた。

「良かった……無事でよかった……」

「いやまあ、無事って言うほど余裕勝ちじゃなかったけどな……けど『お守り』が役に立った。にしてもひどいザマだなキリト。ボロボロじゃないか」

「人の事は言えないだろ……って言っても俺よりはダメージ少ないみたいけど……ずいぶん心配されていたみたいだな、お前」

「あの一、シノンさん？ そろそろ離れてくれませんか？」

にやにやと意地悪く言うキリトに、俺は慌ててシノンを離れるように促すと、名残惜しそうにしながらも彼女は離れてくれた。

いや、心配していたのは分かるけど抱きつくのはオーバーだし俺も驚くって。

「まあ、お互い無事……とまでは行かないけど、何とか切り抜けられたみたいだな。ところでさつきも言っていたけど、『お守り』って言うのはその事か？ ミスト」

「ああ。OW【MOON LIGHT】……ALOで言う所の「エクスキャリバー」とか【グラム】に相当する、伝説級武器みたいな物だな」キリトにも分かりやすく説明すると、「なるほど」と納得して頷く。

これでどうやって倒したか……までは話す必要はないだろう。それよりも大事な話があるんだから。

「それより……《死銃》の片割れは案の定ラフコフの1人だった。SAO時代はジョニー・ブラックって呼ばれていたらしい」

「ジョニー・ブラック……確か討伐前のミーティングでザザと一緒にその名前を聞いた気がする。ああ、大丈夫だ。SAO時代の名前も割れたし、こっちの事は俺たちに任せろ」

「頼んだからな、俺じゃ何もできないんだし。シノンももう安全とは思うけど、念のため警察に連絡してもらったほうが良いな」

「それは構わないけど……けどなんて言えばいいのよ?」

首を傾げるシノンに、そう言えば……と俺も思い直す。

部屋に不審者が……は、違うな。確かになんて説明すれば来てくれるんだ?」

「そっちは俺がなんとかするよ。ミストには話しただろ? 俺の依頼主の事」

「あー、クリスハイトか。じゃあキリトがログアウトしたらすぐに連絡してもらえばいいか」

「でも私の住所とか名前とか、リアルの情報を知らないじゃない」

「あっ……」

冷静なシノンの突っ込みに、俺とキリトは揃って間抜けた声を上げてしまった。

それもそうだよな……ううむ、そうになるとやっぱりシノンが警察を呼ぶしか手が無いんだけど、そうなると思ったらずらと勘違いされる可能性だってあるわけだし。

「はあ……良いわよ、教えるから。2人なら悪用とかしないでしょ?」

「それは誓って。けど、本当に良いのか?」

「良いわよ。その代わりそっちの名前も教えてもらうから。私の名前は、朝田詩乃。住所は——」

あっさり言うのと、シノンはそのままリアルネームと住所を俺たちに話してくれた。本当、止める間もなかった……とポカーンとしていたが、住所を聞いたキリトがそれに驚く。

「……驚いたな。俺が今ダイブしている場所の近くだ」

「えっ、そうなの？」

「うん？ キリトの家って都内だったっけ？」

「クリスハイトが用意した場所が御茶ノ水の病院なんだ。いつその事ログアウトしたら俺がシノンの家に言った方が良いかもしれない」
「いやいや、先にクリスハイトに連絡して警察向かわせるほうが良い
だろ。近くに潜伏している可能性だってあるし、用心しておくに越した事は無いだろ。シノンも、キリトか警察が来るまで誰も家に上げないほうが良いって」

第一、リアルじゃもやしっ子って言われているキリトが駆けつけて、もし実行役の《死銃》に鉢合わせしたらどうするんだ。忘れたとは言わせないぞ、ALOでアスナ助けた後の事。

「そ、それを言われると返す言葉も無いんだけどな……」

「安全確保はやるなら徹底的に。お兄さんとの約束だ！」

「誰に向かって言ってるのよ、誰に向かって……そんな事より、私にだけ個人情報を開示させてそっちは何も開示しないの？」

「あ、ああ、ごめん。俺の名前は桐ヶ谷和人」

「……それでキリト、ね。で？ クラウドは？」

「え？ いやー……そもそも俺に個人情報なんて存在するのかどうかも怪しいし……」

「わけの分からない事言っていないで、さっさと話す！」

「うぐっ……白峰霞、一応永遠の17歳」

「……うそ、年上だったんだ」

その信じられないって反応は結構傷つくんですけどねシノンさん……。

「ごほん、ごほん、とにかくログアウトするにはB o Bを終わらせなきゃ……確かアミユスファイアって、脱いでも自動ログアウトになるんだよな？」

「？ ああ、ナーヴギアと違って安全性重視だから、ダイブ中の人間からアミユスファイアを外しても死んだりはしないけど」

「時にキリトは今1人でダイブしているのか？」

「いや、すぐ近くにモニタリングしてくれている人と……あとアスナが居ると思う」

「そっかそっか……んじゃキリト、お前先にログアウトしろ」

「どうやっ——て」

きよとんとするキリト。だが次の瞬間、キリトの頭が宙を舞った。

「——こうするんだよ」

目を丸くしたキリトの頭が砂地に落ちると、「DEAD」の表示が浮かび《MOON LIGHT》の電源を同時にカットして隠しホルダーに戻す。

傍に人がいるなら、これでログアウトが出来るとなるはずだ。

えっと、カメラはあれだな。中継カメラを見つけると、それに向かってジェスチャー（キリトを指差し、アミユスフィアを外す真似をして、両手で大きく○を作って「キリトのアミユスフィアを外してOK」の意味）をしてキリトの自動ログアウトを促す。

「……ねえ、あなた達って友達……なのよ、ね？」

「ああ。付け加えるなら「悪友」って追加されるけど」

絶句していたシノン是我に返ると、ポツリと呟いたのでにと口角を吊り上げて答える。

「……後で文句言われても知らないわよ、私」

ボソツと何かを言っていたみたいだが、生憎と聞き取れなかった。

しばらくジェスチャーを繰り返していたらやっと通じたのか、キリトの表示が【DISCONNECTION】に変化されてアバターが消滅した。

「よし、これで少し時間稼ぐか……どうする？ スナイパーと剣士、どっちがGGO最強か白黒つけるか？」

「白黒も何も、クラウドボロボロじゃない。イングラムだって無いみたいだし」

「そういうシノンこそ、「ヘカート」のスコop無いじゃないか」

「そうね。これを教訓にバックアップサイトをつける事にするわ」

ニヤリと笑うシノンに対して、俺もニヤリと笑みを返す。

「——けどま、実際のところ優勝とかはどうだって良いんだけどな。」

目的は果たせたし」

「目的ってキリトの事？」

「ああ。キリトが1人で事件の調査をしようとしていたからな、たまにゲームがGGOだったし、BOBに参加するのもやぶさかじゃないなーって」

「ふーん……それでここまで勝ち残ったんだから、やつぱりデタラメじゃないクラウドって」

「否定は出来ないなー。んで、結局どうする？ シノンが優勝したいなら譲るけど」

「……勝ちを譲られるのもイヤだけど、お互いベストコンディションじゃない状態で勝敗決めるのもイヤよ。だから、キリト共々次のBOBに参加しなさい。それまで勝負は預けておくわ」

「うへえ……」

別に次回は参加するつもりなんて無かったのに、シノンの執念深さにはもう言葉も出てこない。

「……けどそれじゃあ、どうやって終わらせるんだ？」

「そうね……クラウドは第1回BOBの最後は知ってる？ あ、あともうちょつと腰落として。そう、そのくらい」

なにやらゴソゴソと何かを取り出そうとしているシノンに首を傾げるが、言われたとおりに大体同じ背丈くらいまで腰を落としながら思い返す。第1回BOBって確か……同時優勝だったんだっけ。理由は確か……。

「優勝するはずだった奴が油断して、お土産グレネードに引つかかっ
」

口にしようにとしたその言葉は、目を閉じたシノンの顔がどアップで映り、さらに口が柔らかい感触で塞がれて最後まで言えなかった。

「?!?!」

一瞬、頭の中が真っ白になって、何が起きているのかまったく判断がつかなくなる。

え……これって、もしかして俺、キスして……うええええいつ!?

再起動した思考が高速で状況を判断し、シノンにキスをされている事に驚愕して目を丸くした瞬間、強烈な衝撃と爆発が内側で炸裂して視界が真っ白な閃光に包まれた。

第3回バレット・オブ・バレッツ

勝者

シノン & クラウド

第9話 感動エンディングだと思った？ 残念、修羅場に突入だよ！

第9話 感動エンディングだと思った？ 残念、修羅場に突入だよ！

「ミストさんの……ブワカア……ッ！」

「めもっ!?!」

「……………」

……おかしいわね。ゲームを間違えたかしら。

——『あの事件』から数日が経ち、私の中でも区切りがついた事とその時の縁で友達になったアスナたちに勧められて、私もALOを始める事にした。

それをクラウドに話したら、

『あー、そうなのか。じゃあそつちで俺の事話すかな』

と言つて、こつちで落ち合う予定……はしていたんだけど。

「……何、あれ」

最初に選んだ猫妖精族の領地にある首都、フリーリアに転移されてきたら、なんだか人だからできていて騒がしかった。

いきなりで呆気に取られたけど、我に返って人だかりを作っている1人に声をかける。

「ねえ、何があったの?」

「よく分からないけど、闇妖精族の彼氏と猫妖精族の彼女が揉めてるみたいよ?」

「なんでも、彼氏が浮気してるのを彼女にバレたらしいぜ」

聞き耳を立ててみると、確かに言い争っている(と言うか彼女が一方的に責めていて、彼氏の方が必死に弁明してる)みたい。

「なんですか! ずっとGGOやっていたのはあたしに内緒で他の女の人と会っていたからですかそうなんですか!!!」

「ちがうちがうちがう! 別にシノンとはそんな関係じゃないんだっ

て！」

「言い逃れができると思ってるんですかー！ ピナ、ゴーツ！」

『きゅーー！』

「ピナ…ピナさん、いえピナ様！ どうか何卒、何卒お待ちを！ こちらの話を聞いていたいたい鼻は、鼻はらめえええ！」

えっと………何あれ。紫の髪の剣士っぽい格好の男が、小さい竜に鼻を噛まれて、さらに私よりも年下らしい女の子にぽかぽか頭を叩かれて成す術もない姿に改めて呆気に取られた。

「……もしかして、アレがそうなの？ ううん、きっと他人違いよ。アバターが違うのは仕方ないけど、私の知る彼は、もっところ………」

こう、目の前の現実を否定しようとして思い出そうとするけれど、なんでか私の知る彼と目の前の彼が一致してしまってはつきりと否定できない。

おまけにGGOとかミストとか知っている単語が出てきたし、あとおまけに私の名前まで出ていたし……人違い、で済むレベルじゃない……と思う。

いえ、待って。そうじゃなくて、そうじゃなくて………彼女？

「あの………」

躊躇したものの、恐る恐る声をかけてみる。けれど揉めている2人にはまったく耳に入っていないようだった。

「……あの！ ちょっとー！」

「なんですか！ 今取り込み中なんですけどー！」

「生憎だけど、こつちも用事があるの。もしかして、もしかしなくてもクラウドよね？」

「……もしかして、シンロン？」

私の存在にようやく気がついて、2人はようやくこつちに注目してくれた。

そして、GGOでの彼の名前に反応した事と、私の名前を口にしたことด้วยやく確信する。

ああ……間違いなく私の知っている人だと。

「えっと、彼女はシリカ。キリト達と同じSAO生還者で俺の恋人。それでもって俺の頭を執拗に叩いているのがフェザーリドラのピナさん。シリカがタイムしたモンスター……です。シリカ、彼女はシノン。GGOで俺とコンビを組んでいるスナイパー」

「……はじめまして。シリカです」

「……シノンよ。よろしく」

あの場では目立つからと言う事で私たちはカフェに場所を移し、クラウドの紹介の後改めてお互いに自己紹介をする。

彼女と私が向かい合って、その間の席にクラウドが座って、その頭上にはピナが執拗に前脚でクラウドの頭を叩いて鳴いていた。

「——単刀直入に聞きます。シノンさんはミストさんとはどういったご関係なんですか？」

……シリカは疑念の眼差しを私に向けながら、バツサリと切り込んできた。隣のクラウドが一瞬顔を青ざめる。

「いや、だからさつき言ったとおり、シノンとはGGOでコンビを組んでいる相棒ってだけで……」

「ミストさんは黙っていてください」

「……はい」

「答えてください。ただの相棒ってだけなら、あんな中継が回っている状況でキスなんてしないですよね」

ぴしやりと言い返されて蚊の鳴くような細い声で答えて小さくなるクラウドを尻目に、シリカは真っ直ぐに私の目を見ながらそう尋ねた。

2人の言い分は、確かに正しいわ。クラウドは私に対してただ相棒と思っていて、シリカの言うとおりでただの相棒ってだけならあの状況でキスなんてしないから。

……なんだろう、この胸がモヤモヤする感じ。ううん、分かってる。

私は——

「——そうね、少なくとも私は、クラウドの事をただの相棒以上に好意の対象として見ているわ。はつきり言って——クラウドの

事が好き」

隠すつもりなんてないし、負けたくもない。だからはつきりとその気持ち私を口にする。

その言葉を聞いて口を半開きにして固まるクラウド。シリカも絶句して固まっていた。

「……あ、え……? シノンさん? それは何の冗談ですか?」

「少なくとも私は本気よ。——それに私、クラウドに抱かれたわ(ステルベンから逃げる時とか色々な意味で)」

「ファッ!」

「だっ!」

あえて大事な部分を言わずに言うと、2人揃って大声を上げた。

「シツ、シシシシノンツ!? おまつ、え、何言ってるの?!」

「薄情ね、あの時の事を覚えてないの?」

「ミツ、ミイーツ! ミーストーさあーんっ!!!」

「待ってシリカ! これは本当に身に覚えがない! そんな事してないんだって! いたつ、いたたたピナさん突かないでやめてほしい!」

『きゅきゅーっ!』

……案の定2人は大騒ぎを始めて、その光景を見て私はしてやり、と内心ほくそ笑む。

クラウドに恋人が居るって知って、2人の関係が確かに友達以上だって分かって……私は嫉妬して、ついあんな誤解を招くような事を言ってしまった。

「したわよ——ステイブンから逃げる時に、動けない私を抱き抱えたじゃない」

「だけどこれ以上誤解が続かない内に、私は早々に真相を打ち明けた。」

ネタばらしされて2人は一瞬停止して、そのまま派手な音と共に揃ってずっこける。

「シ、シノン、お前……人が悪すぎるぞ……」

「そう? けど嘘は言っていないわ。私の気持ちも、ね」

「い、いやお前……」

倒れたイスを立て直し、げんなりとしながら突っ込むクラウドに私は冷ややかに答える。

大体、恋人がいるって言っていないなかったクラウドにも責任があるわよ。もし、知っていたら……。

知っていたら……どうだろう？ その時私はすんなり諦める事ができたの？

分からない……けど、誰かのために自分に出来る無理をやっている姿を見ていたら、やっぱり惹かれていたかもしれない。

「好きって……ミストさんの事を知った上で、本当に言っているんですか？ それは」

「私は……クラウドの事をほとんど知らないわ。精々リアルの名前とか、SAOでの過ちとか……その程度しか聞いていない。でも彼は話してくれると言ったし、私もそれを知りたいと思ってる」

「ミストさん……本当に良いんですか？」

その言葉と共に、シリカは気遣うようにクラウドを見やった。

あんなに罵倒していたのに……ううん。大切だから、本当に好きだからあんな風に言っただけで、誰よりも彼女はクラウドの事が……そして同じように、クラウドも。

当の本人は少し困ったように頬を掻いて、少し間を置いて口を開く。

「……全部話すって、約束したからな。でもシノン、本当に良いのか？ 正直に言っただけは、話した所で信じてもらえるような内容じゃないんだし」

「だけどその話を、貴方たちは信じているんでしょう？ なら、私も知りたい。クラウドの事を、全部」

クラウドの目をまっすぐに見ながら、はつきりと答えた。

洞窟での話から、クラウドは何かとてつもない秘密を抱えているんじゃないか……と言うのは薄々感づいていたから、聞く覚悟はあるつもりだった。

私の決意の固さを分かってもらえたのか、クラウドはやれやれと嘆息する。

「分かった。そう言うわけだからいいよな、シリカ」
「……分かりました。ミストさんがそう決めたなら、あたしも一緒に説明します」

——2人の話を全て聞き終えて、私は言葉を失った。

覚悟はしていた。していたつもりだった。だけど2人から聞かされた内容は想像を遥かに上を行く内容で、私の覚悟なんかあっさり超えてしまった。

「クラウドは本当に、別の世界の人間で……今は電腦、なの……？」

「そうなんだってさ。信じられないだろうけどな」

そんな壮絶な話をしたというのに、クラウドは他人事みたいに注文したドリンクを飲んでいる。

確かに……確かに、突然そんな話をされても信じるのは難しい。でも私は不思議とその話を受け入れて、信じられていた。

それは多分、洞窟でのやり取りで断片的にだけ感じ取っていたから。

だからあの時、キリトはクラウドに悔いるように言っていたんだ。『当たり前だろう。もっと早く知っていればあんな事にならなかつたかもしれないのに……！』

「……ごめんなさい。私、何も知らないでクラウドに酷い事言った」
「ん？　なんか言っちゃったっけ？」

「つ……あの時言ったじゃない、『そんな私のまま生き続けるなら、死んだ方がいい』とか、『何もできないくせに、勝手な事言わないで』とか……他にもたくさん。クラウドはそれを知っていたから言ったんでしょう。なのに、私……」

——『——仮想現実リアルが俺にとっての現実だから』その言葉の意味をようやく理解して、私は激しく後悔していた。

クラウドにとってはこの世界が自分にとっての現実で、私たちの現実には手が届かないから、あの時あんな風に笑っていたんだ。知らず知らずの内に私は、クラウドのことをたくさん傷つけていて……。

「あー、言っちゃたな、確かに。でもシノンが気にすることじゃない」

「けど……！」

「多分だけど、これでもまだ救いがあるほうだと思うんだ、俺は。あんなことをやらかして、それでそのまま消えてもおかしくなかったのに、俺はこうしてここに存在できている。あんな事をやって、人じやなくなっているけど、それでも仲間だって受け入れてくれる人たちがいる。それに——こんな俺を、それでも好きだって言ってくれる人も」

その言葉と共に照れくさそうにはにかむクラウド。
クラウドも彼女も本当にお互いがお互いの事を大切に思っているのが分かった。

確かに、そんな事になってもクラウドの事をはっきりと好きだって言えるシリカは……正直に凄いなと思うし、羨ましい。

これは……勝てそうにないのかな……って少しだけ思った。それくらい、2人の結びつきは強いから。

「(でも、本当に諦められるの?)」

自分自身にそう問いかける。

確かにクラウドの話は衝撃を受けた。現実世界に彼が存在しない事も驚いた。

だけどそんな事で、クラウドの事が好きという気持ちが消えるほど私の気持ちは——弱く、ない。

「——まー、そう言う事だからさ、シノンの気持ちは嬉しいけど俺なんかよりも他の男を捜すほうが良いって。あ、けどクラインって奴だけは止めておけ、それは全力で阻止するから……」

「……勝手に決めないでよ」

「え?」

「勝手に決めないで……そう言ったのよ」

一瞬きよとんと呆然とした顔を浮かべるクラウドに、私は自分を鼓舞するように席を立つと顔を上げ、はつきり自分の気持ちを口にした。

「それが何だって言うのよ、クラウドの昔に何があっても私の気持ちは変わってないわ。たとえば他に好きな人がいても、私ははつきり言える。私は、クラウドの事が好きだって」

「……………」

私の告白にクラウドとシリカは口を半開きにしたまま呆然としていた。

もしそれであっさり萎えたのなら、それはきつと本当の『好き』じゃないと私は思う。

クラウドがどんな姿になっていたとしても……人じゃなくなっていたとしても……それでも私の気持ちは変わらなくて、やっぱり好きな気持ちは変わらないんだ。

「それに……忘れたのクラウド？ 私はしつこいんだって」

「そっ……それは骨身に染みてんむっ!？」

「なあっ!？」

冷や汗を掻きながら同意しようとしたクラウドの肩を掴んで引き寄せ、私も身を乗り出して顔を近づけ、そのままの勢いで彼の唇に私のそれを重ね合う。

すぐ傍でシリカの悲鳴みたいな驚きの声が聞こえたけど、それも承知の上だった。

目を閉じていたからクラウドがどんな顔をしているのかは分からない。けど数秒と経たない内に私はゆっくりとクラウドから顔を離して、目をゆっくりと開けると驚きのあまり彼は固まっていた。

「……………だからこれは、宣戦布告。隙あらば狙い撃つから、覚悟してね?」

「あ、う……………」

突然の出来事に頭が真っ白になっているであろう彼に向けて、私は微笑みかけた。

「な——なあに言ってるんですかああああっ!」

「なにつて、見てのとおり宣戦布告よ」

ようやく復帰したシリカがその尻尾を立てて叫ぶ。それに対し私はごく自然に返すと、そのまま流れるようにクラウドの腕を自分の腕に絡ませる。

「ミ、ミストさんはあたしと付き合ってるんですよ！ 人の彼氏を横取りって何ですか！ 宣戦布告なんて意味ないです！ ノーカンで

す！ ノーカン！」

「そう？ 案外付け入る隙は結構あるみたいだけど……こんな風にね」

「だ、ダメですっ！ そんなの絶対にダメですー！」

まさか諦めなかったとは彼女も思っていないなかつたみたいで、思いきり慌てふためきながら反対側のクラウドの腕にしがみついた。

「大体なんですか、黙って聞いていればクラウドクラウドって！ ミストさんはそんな名前じゃないですよ！」

「私にとってはクラウドはクラウドよ。ああ、それともクラウドの本当の名前の事？ それだって知ってるわ。それとあなたがどれだけクラウドの事が好きでも、私も負けないし諦めるつもりはないから」「あ、あたしだってミストさんが好きな気持ちは誰にも負けないですよ！ それに、ミストさんとの思い出だつてたつつつつっくさんあるんですよ！」

「だったら私だって、あなたが知らないクラウドとのGGOでの思い出がたつっくさんあるわよ！」

「むむむむ……！」

クラウドを挟んでお互いを睨み合い、見えない火花が飛び散る。それを見て今まで私たちを遠巻きに見ていた客たちは、怯えて次々に店から逃げ出していった。

しばらくの間睨み合いが続いたけれど、ほぼ同時に呆然としているクラウドに目を向けた。

「クラウドも黙ってないで何とか言つて！」

「ミストさんも黙ってないで何とか言つてください！」

「——へあっ!？」

それまで意識が飛んでいたらしいクラウドは私たちの声でようやく我に返って、左右から密着している私たちを見て自分の置かれている状況にやっとなつと気づいて慌てふためく。

「うゝええっ!?! 何やってんの2人とも!？」

「ミストさんはあたしが好きなんですよね、そうですねっ!？」

「迷惑かもしれないって分かつてる。でもこの気持ちは本物だつて信

じて欲しいの、クラウド！」

「……………これがキャットファイトってや」「逃避しない!」「ピギイ!?!」

(仮想世界だけど)現実から目を逸らそうとしたクラウドに対し、私たちは同時に突っ込んだ。

2人から叱られてミストは怯えて逃げ出そうとする。

だけど席を立とうとしても両側から私たちに抱きつかれたままで立ち上がれず……

「うあつ——!」

「ひゃあつ!」

「きやつ……………!」

私たちもクラウドの動きに反応できず、イスごとひっくり返るクラウドに巻き込まれ、そのままつれるように私たちも倒れこんでしまう。

ドタンツ、と大きな音が鳴ったけど、その割りに衝撃は少なく不思議に思つて目を開ける。見ると私とシリカに下敷きにされているクラウドが呻いていた。

「う、ぐう……………ふ、ふたり、とも……………」

「な、なんですかつ!」

「何が言いたいの!?!」

呼ばれて、ずいっとクラウドに顔を近づけた。すると彼はゆっくりと目を細めてこっちを見て——

「お……………つもい」「重くないつ!!」「ピギヤアツ!」

たいつつつへん失礼な事を呟いたため、シリカが顔面に1発、私が腹に1発ずつの計2発の鉄拳制裁が炸裂して、無防備だったクラウドは奇妙な悲鳴を上げて撃沈する。

……………結局、クラウドの答えはあやふやなままお預けになって、私とシリカは「最大のライバル」と言う関係に収まったのだった。

Next Episode……

「そうだな。——【テラー・オブ・ジエネシス】……とかかな」

時は流れて年末。キリトの召集で（エギルを除く）いつもの面々が集まる事に。

目指すは地下世界ヨツンヘイム。目的は空中ダンジョン最下層にある【聖剣エクスキャリバー】！

「しっかし、相変わらず脳筋ばっかのパーティーだよなあ」

「それ、お前にも言えることだろクライン」

魔法スキルをほとんど上げていない物理特化が大半のせいで序盤から大苦戦するハメに！

「……なあ、やっぱりメイジ1人居ないと辛いと思うんだが」

「同感……」

おまけにクエストに失敗したらアルヴヘイムどころかALOそのものが消滅するという一大事に！

「責任重大じゃねーか！ なに考えてんだよカーディナルは！」

果たして、ALOの運命は？ 【エクスキャリバー】は獲得できるのか!?

次章、『キャリバー』！

「「おーとこーぎジャンケン、ジャンケンホイッ!!!」」

キャリバー編

第1話 ネコもトラも同じネコ科動物

第1話

2025年 12月28日 GGO内山岳フィールド内

「だあークソツッ！ これだけ撃ってなんで当たらねーんだよ!？」

「文句言っていないで撃ちまくれ!——やべエこっちにき——ぐアツ!」

銃火に交じって聞こえる悲鳴のような叫びの中を駆け抜け、目にも留まらぬ速度で握った光剣を振るう。

灰色の軌跡を伴って繰り出された光刃は相手プレイヤーの持つていたアサルトライフルごと胴体を断ち、そのまま背後へと駆け抜けていく。

ほぼ360度から向けられる予測線。銃口が火を噴くが一気に加速して離脱し、そのまま次々と各個撃破。

「(残り2人、と)」

瞬時に残存する相手プレイヤーを把握し、残りを片付けようと間合いを詰める。と、残り2人は持っていたサブマシンガンを捨てて懐からそれぞれ金属の棒を取り出した。アレは——
「つと」

出力された光刃を紙一重でかわす。残り2人は光剣もサイドに持っていたらしい。やれやれ……。

「2人がかりなら、たとえばB0B優勝者でもあべしゅっ!」

「ひえっ!？」

意気込む1人に問答無用でサブマシンガンのフルオートを叩きこむ。しかも顔面に、全弾。

顔面を穴だらけにしてひっくり返った仲間の無残な姿に、残った1人は小さな悲鳴を上げて持っていた光剣を落として後ずさった。俺はサブマシンガンをホルスターに戻して、相手が落とした光剣を拾い

上げる。リュウガG1か……シヨップ販売の光剣じゃ最安値の初心者用じゃないか。

拾った光剣を見ながら軽く振り回す。振るう度にブオンブオンと低い駆動音を鳴らすそれを、持主は顔を青くして見ていた。まあ、残像発生させるくらい高速で振り回しているのにケロッツとしてる俺を見ていたらそうなるか。

「……………にこっつ」

「……………にこっつ」

目が合つて、にっこりと笑いかける。すると向こうも若干引きつり気味で笑い返してきた。

で、一切の慈悲無くリュウガG1で滅多斬りにして倒した。

「ふいー」

敵勢力殲滅、生存者無し……と。やっぱりソロでPVPやるのは骨が折れるなあ。

「しっかし、誰も彼もが真似しようとしてまあ……」

第3回B0Bで光剣を使っていた俺とキリトは一躍時の人となった。その結果、現在B0Bでは光剣を使うプレイヤーがウナギ登りで急増している。

だがまあ、光剣とか高周波ブレードとか、そう言った超近距離でしか機能しない武器は射撃武器持ちから見れば格好のカモであつて……使いこなせている人間は全くと言っていいほどいない。シノンからも教えてくれと頼まれたものの、そもそも俺たちはSAO時代から使っていた上に各々超人レベルのプレイヤースキルで弾を斬り払っているわけで、まあしばらくすればブームも過ぎるだろう。

ブームに乗っている間は精々稼がせてもらおうか。光剣って高いから売ると結構な額になるし。

「んあ？ シノンからメールだ」

ドロップしたアイテムリストを確認していた時、メッセージ受信アイコンが表示された。アイテムリストを表示しているウインドウを消して、メッセージアイコンをタップすると内容が表示される。

『リーファから伝言よ。お昼頃に皆でALOでクエストをやるうって

誘われたんだけど、クラウドも来ない？ イグドラシルシティのリズのお店に集合なんだけど』

ふむ……ALOのクエストか。何やるんだろ？ それにしてもシノンさん、ALOにがつつり嵌まっていますね。

この後街に戻って戦利品を売っぱらうけど、その後は特に決めていなかったし……結構稼げたし、ALOに行ってみるか。

『おk。この後特に予定ないし、俺も行くわ。んじゃ向こうで』
「送信……と」

確認画面を押してメッセージを送る。

さてじゃあ、街に戻って売ってからALOに行くかねえ……のんびり考えながら俺は街に踵を向けて歩いて行った。

その後、ドロップ品の売却や弾薬等のアイテム類の補充をしてからセーブし、ALOに行くと俺が最後だったようで、リズの店にはほぼ全員揃っていた。

話を聞くと、《聖剣エクスカリバー》がついに他のプレイヤーに発見されたらしく、先を越されちゃならないと言うわけで急遽人を集めることにしたらしい。

現在、アスナとリーファとユイちゃんはポーションなどのアイテム類を買い出しに、リズは全員分の武器の耐久値を回復させるべく工房で作業中。

で、残ったメンツはと言うと……。

「ぶっはあくー！」

「昼間っから酒かよクライン……」

「会社はもう昨日から休みなんだし、いくだろうがよ。社長の野郎「年末始に1週間も休みがあるんだから、ウチは超ホワイト企業だ」とか自慢しやがってよ！」

「この後クエスト行くんだろ。飲みすぎて酩酊状態になったら置いてくからなー」

「へっ！ この程度で潰れるクライン様じゃねえつての！ おうキリの字よ、もし今日上手いこと《エクスカリバー》が手に入ったら、俺

様のために《霊刀カグツチ》取りに行くの手伝えよ！」

「ええ〜……あのダンジョンクソ暑いじゃん……」

「それを言うなら今日行くヨツンヘイムはクソ寒いだろうが！」

確か《カグツチ》って溶岩噴き出る火山ダンジョンの奥にあるんだっけか。あれ、なんかデジャヴユったぞ。

するとクラインに触発されでもしたのか、俺の右隣に座っていたシノンがおもむろに口を開いた。

「あ。じゃあ私もアレ欲しい。《光弓シエキナー》」

「キ…キヤラ作って2週間で伝説級武器かよ……」

「リズの作ってくれた弓もステキだけど、出来ればもう少し射程が……」

「あのねえ……この世界の弓つてのは精々槍以上魔法以下の距離で使う武器なの。100メートル離れた所から狙おうとするのはシノンくらいよ」

「ふふっ……欲を言えばその倍の射程は欲しいところね」

「……して、本心は」

「やっぱり500メートル以上は最低でも欲しいわ」

それも弓の射程じゃないだろ。そりゃ確かに、シノンはGGOで1000メートル以上離れた目標への狙撃を普段からやってるけど。見ろ、リズも呆れてるじゃないか。

「《シエキナー》を取りに行く時は……もちろんクラウドも手伝ってくれるでしょ？」

「え？ いや、そりゃあ……」

「もちろん」……特に深く考えもせず肯定しようとするが、それを俺の左隣にいたシリカの声が割り込んだ。

「ああー！ それならあたしは《自在剣フラガラック》が欲しいです！

ミストさん、今度一緒に取りに行きましょう！」

「う、うん…？ 別に良いけど……」

「……………（ふふん）」

「……………（ぢー……）」

顔を寄せて頼みこんできたシリカに若干驚いて引きつつも、そのお

願いを引き受けた。すると勝ち誇ったようにシノンにドヤ顔を浮かべ、それを見たシノンは不服そうに半眼で俺を睨みつける。

バチバチと俺の前で火花を散らす2人に、またか……とがっくりと肩を落とした。

知り合ってから以来、2人はこうやって（主に俺絡みで）頻繁に火花を散らせている。何このキャットファイト。ネコだけに。

で、それを眺めるクラインはニヤニヤしながら酒瓶を傾けて、キリトは同情するように苦笑いしていた。助けてくれ友よ。

「けっ！ 両手に花なんだからそれくらい辛抱しろってんだ」

「キリトといいミストといい、何をどうやったらかうなるんだか……」

「あれ……さり気なく俺も巻き込まれてないカリズ」

「ちくせう……お前ら他人事だと思ってる……」

なんて薄情な奴らだ。仲間が困っている時は助けてあげるのが人情ってものじゃないのか。

「自業自得でしょ」

「ははっ……ドンマイミスト。取りに行く時は俺も手伝ってやるからさ。ミストも何か欲しい武器があったら手伝うぞ」

それはキリトなりに最大の助け船なんだろう。この気持ちを分かってくれるのはお前くらいだよ……。

けどそれはそれとして、欲しい武器……かあ。特にこれと言って欲しいって奴は浮かばないな。別段今使っている剣でも十分だし。

んー、だからと言ってここで「特に何も」って答えるのも……特にからかってきた2人をギャフンと言わせたいし。……あつ、そうだ。

「遠慮しなくても良いんだぞ、何かないのか？」

「そうだな。——《テラー・オブ・ジエネシス》……とかかな」

瞬間、場の空気が一瞬凍った。

さっきまでニヤニヤ笑っていたクラインやリズ……そして訊いてきたキリトや隣に座るシリカすらも、その名を聞いてギクリと一瞬顔を引き攣らせる。

ただ1人、みんなが凍った理由が分からないシノンだけがきよとんと不思議そうに全員を一瞥していた。

「……どうしたの、みんな？ その《テラー・オブ・ジエネシス》……がどうかした？」

「《テラー・オブ・ジエネシス》は俺がSAOで最後に使っていた剣だ。俺はそいつでキリトと戦ったのさ。……もつとも今のは冗談だけだ」

唯一事情を知らないシノンに説明しながら、同時におどけたように肩を竦める。それを聞いて一同は心なしかほっとしたように見えた。

「ま……まったく、悪い冗談だぜミス」

「へーんだ、からかったからやり返したただけだっただけだ。第一、アレが今のインクラッドにあるはずないだろ。そもそも最上層が実装されてないし、実装されても入ってないさ」

言ってしまう《テラー・オブ・ジエネシス》は隠し武器のような存在で、恐らく本来のインクラッドには入っていない武器だっただろう。それと同時にドロップするエネミー——つまり裏ボスのミネルヴァのことだ——だって組み込まれてなかったはずだ。

元々ラスボスになったヒースクリフを倒すための最後の切り札として用意されていたんだし、もう世に出ることは無いだろう。

「たっだいまー！」

「お待たせー」

と、ナイスタイミングと呼ぶべきか買い出しに行っていた3人が戻ってきた。アスナとリーファがカゴ一杯のポーション類をテーブルに並べていると、ユイちゃんがふわりと飛んでキリトの頭の上に腰を下ろす。

「買い物ついでに少し情報収集してきたのですが、まだあの空中ダンジョンに到達できたプレイヤー、またはパーティーは存在しないようです、パパ」

「へえ……じゃあなんで《エクスキャリバー》のある場所が分かったんだろ」

「それがどうやら、私たちが発見したトンキーさんのクエストとは別種のクエストが見つかったようなのです。その報酬として、NPCが提示したのが《エクスキャリバー》だった……と言うことらしいです」

へえー、《エクスキャリバー》を入手できるクエストって複数あった

のか。……ん？　そう言うモンなのか？

ユイちゃんの話聞いてちよつと首を傾げていると、話を引き継いだアスナが少し困ったように口を開く。

「しかもそれ……あんまり平和なクエストじゃなさそうなのよ。お使い系や護衛系じゃなくて、モンスターを何匹以上倒せつて言うスローター系。おかげで今、ヨツンヘイムはポップの取り合いで殺伐としてるって」

「……そりゃあ確かに、穏やかじゃないな」

「でもよお、ヘンじゃね？　《聖剣エクスカリバー》ってのは、おつそろしい邪神がウジャウジャいる空中ダンジョンのいつちゃん奥に封印されてるんだろ？　それをNPCが、クエの報酬に提示するってどう言うこつた？」

「……言われてみればそうですね。ダンジョンまで移動させてくれるだけって言うなら分かりますけど」

だよなあ……とクラインとシリカの疑問に俺も相槌を打った。

けどダンジョンまでの移動ならキリトとリーファがやったつて言うイベントをやればいいし、わざわざ作るか？

「ま、行ってみれば分かるわよ、きつと」

考えこもうとするも、シノンの素っ気ない一言がそれを阻む。

まあ確かに、この場であれこれ考えていても分かるはずもないけどさ。

とその時、メンテナンスを終えたりズが両手で全員分の武器を抱えて声を上げた。

「よーし！　全武器フル回復ー！」

リズから武器を受け取り、異口同音に「お疲れ」と礼を言う。

俺も礼を言いつつ装備を受け取り、左手にリベットを打ちつけたナツクルを巻きつけ、腰に片手用直剣を差した。

そして分配されたポーションを受け取り、ポーチに収納して準備は完了と。

「しっかし、相変わらず脳筋ばつかのパーティーだよなあ」

「それ、お前にも言えることだろクライン」

「そうよ。だったらアンタが魔法スキル上げなさいよ」

クラインの指摘に突っ込みを入れると、リズも俺に同調する。

この中で魔法スキルを上げているのはアスナ、リーファ、シリカ、シノン、俺。とは言っても全員支援やら補助やらがメインで、いわゆる攻撃魔法を得意とするメイジポジションはギリギリ俺だけだ。かく言う俺も基本的には白兵戦メインだけど。

「はんっ！ ヤなことだ。サムライたるもの、『魔』のついたスキルは取らねえ、取っちゃなんねえ！」

「あのねえ……大昔からRPGのサムライって言えば、ミストみたいな戦士＋黒魔法なクラスなのよ」

「けっ！ 魔法使うなら刀折ってサムライ辞めてやんぜ」

おおー、言い切ったよクライン。いや、俺は別に大昔からのRPGのサムライに憧れてたわけじゃないけど。単純に魔法剣士が良かったからってだけだし。

呆れ笑いしていると、話を聞いたシリカが振り返ってショッキングな事を呟いた。

「でもクラインさん、この間炎属性のソードスキル使ってましたよね。アレって半分魔法だったと思いますけど」

「うええっ!!」

「ふうん?」

思いつきりうろたえるクライン。そして俺とリズは同時に悪い顔を浮かべる。

しかもそれに追い打ちをかけるように、ユイちゃんが詳しく説明してくれた。

「シリカさんの言う通りです。5月のアップデートでALOにもソードスキルが実装されて、上級スキルには物理属性の他に6つの魔法属性を備えていますよ」

「アイエエエ……そ、そうだった……?」

「クライン? 『魔法使うなら刀折ってサムライ辞める』なんだったっけえ〜?」

「武士の情けって奴だクライン。ほら、介錯してやるからさ?——刀

を出せい」

両サイドから俺たちに脅され、クラインは顔を青くして自分の刀を抱き抱えてキリトに泣きつく。

「キ、キリの字い〜!」

「ソードスキルは呪文唱えないんだし……ここはノーカンってことで」

「……だってよりズ。どうするよ?」

「しよーがないなあ」

キリトにフォローされ、リズはあっさり引き下がった。そもそも本気でやるつもりは無かったんだろうし。俺? 俺はまあ……ご想像にお任せします。

「みんな、今日は急な呼び出しにに応じてくれてありがとう。このお礼は、いつか必ず精神的に! それじゃ——いっちょがんばろう!」
『おーっ!』

キリトの挨拶に全員が応じ、リズの店を後にした。

地下世界ヨツン Heim へ行くにはいくつかルートがあるが、あまり知られていない最短ルートが1つある。

アルン市街から地下世界に繋がるトンネルがそれであり、敵と遭遇することなく安全かつ迅速にヨツン Heim へ行くことが出来た。

ただ……その階段と言うのが結構長い。長いつたら長い。もしこれが現実にあったら往復したら翌日筋肉痛に苦しむってレベル。

「うわ〜! いったい何段あるのコレえ!?!」

「うーん……新アインクラッドの迷宮区タワー1個分くらいはあったかなあ……?」

そんな階段にうんざりしたりズがぼやくと、何度かここを使った事があるリーファがそれに答えた。

アインクラッドの迷宮区タワー1個分ってかなりの長さがあるぞ……おまけに道中あるのは階段と松明のみだし確実に飽きる。

「あのな、通常ルートならヨツン Heim まで最速でも2時間かかる所を、ここを降りれば5分だぞ。文句を言わずに1段1段感謝の心を込

めながら降りたまえ、諸君」

「アンタが作ったわけじゃないでしょ」

なんでキリトが偉そうなんだよ。と言う全員の実つ込みを代わりにしたシノン。だがしかし、次の瞬間「フニャアツ!!!」とネコみみたいな叫び声が響いた。

一体何かと見てみると、キリトがシノンの尻尾を強く握っていて、それに驚いたシノンがさっきの鳴き声を出したらしい。

猫妖精族と他の種族との明確な違いはやっぱりネコミミとネコしつぽだろう。しかもこれは飾りではなく実際に感覚があるらしい。本人たち曰く「ヘンな感じ」らしくあまり触れられたくないそうだ。

怒ったシノンは振り返ってキリトを引つ掻こうとするが、キリトは悠々と避ける。

「アンター！ 次やったら鼻の穴に火矢ブツ込むからねっ!!!」

般若の如き形相のシノンにキリトは愛想笑いでごまかしている。ヤムチャ——じゃない、無茶しやがって……後ろから撃たれないように気をつけるんだな。シノン執念深いから。

……しっかし、さっきシノンの声……。

「ぷ……っ、くっくく……」「フニャアツ！」って、あのシノンがあんなネコみみたいな……ぶふっ！」

「——そう、クラウドは今がお望みみたいね」

「はっ!?!」

さっきのシノン进行い出し、进行い出し笑いが出ってしまった。

だがそれが聞かれてしまい、氷のような冷たい声にはつとなる。

顔を俯かせ、静かに腕を掲げて爪を立てるシノン。その姿に顔を引き攣らせ、誰かに助けてもらおうとするもみんな揃って知らん顔された。薄情な奴らめ！

「ミストさん……」

「シリカッ、良かった！ 助けて——」

「なんで彼女以外の人とイチャイチャしてるんですか……!?!」

「うゝええっ!?!」

唯一見捨てて無かった(と思われた)シリカに安堵するも一転。彼

女は大変お怒りでした！ アレをイチャイチャしているとみなされるんですか!?

振り返ったシリカも同じように爪を立てている姿に思わず後ずさるも、退路はブロックが既にシノン！（錯乱）

「ミストくん、ここでダメージを負っても回復しないから自己責任でね」

「鬼ですかアスナさんや！ あちよ、あぶ、あばあつ!? ああピナお前もそれシヤレになんた、ひえっ!?! ひ——ひゃあああああ!!!」

第2話 男気を見せる時

第2話 男気を見せる時

「ぜえー、ぜえー、ぜえー、ぜえー……」

何故俺はクエスト前から疲労困憊になってるんでしょうか……自業自得なんですよね知ってる。

シノンとシリカ（そしてピナ）に襲いかかられ、死に物狂いで階段を駆け降りた先で俺は疲れ果てて四つん這いになっていた。

「すばしっこい……わね……」

「けど……が……終点です……よ……」

だけど疲れてるのは向こうも同じなようで、言葉とは裏腹に2人も肩で息をしているのがやつとの状態だった。

しかし出た先は切り立った崖……ヨツンヘイムは飛行が出来ないから逃げ道が無い……あかん（虚ろ目）。

「ま……まあまあ2人も。今は《エクスカリバー》を手に入れるって言う大事な目的があるんだから、ここは穏便に……な？」

もはやこれまでと諦めそうになった時、遅れて来たキリトが俺たちの間に割って入りながらシリカたちを宥めようとしてくれる。

……ただ、かなりおっかなびっくりしているようで引きつった笑みを浮かべているが。

「……仕方ないわね」

「今回はキリトさんに免じて、許してあげます」

キリトの説得に2人は一応引き下がってくれたようだが、まだ文句を言いたそうに半眼で俺を見下ろしていた。

引いてくれた2人に俺はほっとしながら、同じくほっとしたキリトの手を借りて立ち上がる。

「大丈夫か、ミスト？」

「正直このまま崖下に投げられるかと思った……」

「俺も冗談のつもりだったんだけど……なんか、ごめん、ほんとに」

そう言えば事の発端ってシノンからかってたお前から始まって、俺

に飛び火したんだよな……しかも最初から全身にガソリン撒かれたような状態で。フレンドリーファイアなんてシャレじゃ済まないっ
ての……。

「これがGGOで最強と呼ばれた2人、ねえ……」

「キリトはともかく、ミストまでトップレベルって言うんだから、世の中分かんないもんよねえ」

くっそう……クラインもリズムも好き放題言いやがって。こっちだって好きで情けない格好晒してるわけじゃないのに……。

なんとか言い返したかったもののこんな状況では何も返せず、俺はぐぬぬ……と唸るしかない。

「じゃあ凍結耐性の魔法掛けるね」

こっちの漫才みたいなバカ騒ぎに笑いつつ、アスナが全員に支援バフを掛けてくれた後、リーファが勢いよく指笛を吹いた。

すると遠くからゾウに似た鳴き声がリーファに応じるように響き、崖の下を覗くと下の方から……なんだ？　ゾウ……いやクラゲ？

とにかくなんかその2つを足して割ったような邪神がやってくる。

「トンキーさーん！」

ユイちゃんの反応からするに、あれが噂の『トンキー』なんだろう。けどトンキーってなんだろ。テンキーは数字だし、オンキーはゴリラだし……。

「ってデッカー！」

が、名前の由来よりもトンキーが目の前までやってきてその巨大さに度肝を抜かれた。改めてその姿をよく見てみると足はクラゲみたいで、顔はゾウみたい長い鼻と耳がある。けどとにかく大きい。邪神だから当然だが、長い鼻の太さが人間よりも太い。

「うっひゃあ……初めて見たけど随分大きいんだな……」

「まあな。これだけ大きいから乗れる人数も……あ、っ」

大きさに感心していたら突然キリトが変なタイミングで唸った。なんだと思っ顔を見ると、「あっちゃー」と失敗したように手で顔を覆っている。

「ん？ どうしたキリの字よ」

「いや……大事なこと忘れてた。トンキーには人数制限があったんだ」

「——ああっ！ そう言えばそうだった！」

「人数制限？ 何人乗りなんだ？」

「……7人」

申し訳なさそうに呟いたキリト。

えっと、ここで今回のメンバーを確認してみよう。

- 1、キリト。
- 2、アスナ。
- 3、リーファ。
- 4、シリカ。
- 5、リズ。
- 6、クライン。
- 7、シノン。
- 8、俺（ミスト）。

「どう考えても人数オーバーです。本当にありがとうございました」

「わ、悪い……完全に失念してた……」

「お、おいおい、どうすんだ？ ダンジョンにはトンキーが居ないと行けないんだろ？」

「うくん……往復してダンジョンに行くしかないかなあ」

リーファの言う通りそれが無難だが……。

「それなら、私にいい考えがあります！」

「ユイちゃん、何かあるの？」

全員で考えていた時、唐突にユイちゃんが自信満々に言った。

……けどなんだろう。それは失敗フラグにしか聞こえないのは。……はははいやまさかね。

「それは、ミストさんも私と同じようになればいいんです！」

「フアツ!？」

「えっ……それってつまり、どういう事……?」

「つまり、ミストさんもこのナビゲーションピクシーの姿になれば、人

数制限もクリアー出来るんですよ！ これで万事解決ですっ！」

えっへんと鼻高らかに胸を張るユイちゃん。なるほど……いやちよつと待とうか!?

「えつと……本当に出来るのか？ ユイ……」

「はいパパ。理論上ですが、ミストさんのような状態ならこの姿になる事も可能です！」

「いやいやいや！ なれるとしても俺どうするのか全然知らないし、そもそも本当に出来るのか!？」

「出来ますよ！ 実際にはデータを圧縮して小さくなっているように見せればいいわけで……」

「ごめんお兄さん全然分かんないよ!？」

例え分かったとしてもやりたくないです！ なんて言うか想像しただけで我ながらキモチワルイんですけど！

「キリトツ、クラインツ！ お前らも俺の気持ち分かってくれるだろ!？」

「ま……まあな……」

「仮に俺でも出来たとしても……なんつーかよう？ そもそもそんな需要ないだろ……」

「需要はあるわ（あります）！」

「……へ？」

男たちの否定的な意見に対して、2つの声が反論した。

「えつと……シリカさん、シノンさん？ お2人は一体何を仰ってるんでしょうか……？」

「だから、需要はありますよミストさんっ！ 大丈夫です、ダンジョンに向かう間は私がちゃんと抱えてあげ——」

「シリカの所にはピナが居るから危ないでしょう？ クラウドは私が守ってあげるから気にせず小さくなっていいいわよ？」

と、俺のピクシーモードを見たい熱烈な2人の主張。この2人には需要があったのか……。

「は？ 何言ってるんですか、ピナだって無闇にミストさんに噛みついたりしませんよ。シノンさんこそ、うっかり間違えてミストさんを

矢で飛ばしたりするんじゃないですか?」

『きゅいっ!』

「そんなイージーミスを私が犯すわけ無いでしょう?」

「だあつ! 2人とも喧嘩やめいっ! 誰がなんと言おうが俺はピクシーなんて拒否するっ!」

「えー」

「ぶーたれてもやりませんっ! そんなだつたらトンキーの足にしがみついている方がマシだっ!」

「あ、それだつたら大丈夫ですよ」

「ってあれ? 不満たらたらな2人に断固たる態度で反対していたら、徐にユイちゃんがオカシナコトを言った気がする。」

「なんと言うか本能的に嫌な予感しかいないが……恐る恐る俺はもう1度聞き返した。」

「あのー……ユイちゃんさん? 何が大丈夫なのでしょう?」

「ですから、トンキーさんの足なら大丈夫ですよ。人数制限はあくまで背中に乗れる人数が、というだけで、それ以外の場所でしたらセーフです」

「と言っても裏技に近い方法ですけど……と付け加えるユイちゃんに対し、俺はというと呆然。」

「思わず口に出した事とは言っても……本当にフラグ立てちゃったのか俺は?」

「……よしっ、お疲れ!」

「——逃がすかっ!」

「は、離せキリト! 俺は触手プレイなんて特殊ジャンルは趣味じゃないツツツ!」

「俺だつて趣味じゃないわ! けど今回のクエストにはミストの力も必要なんだ! 大体、自分でトンキーの足にしがみつくって言ったじゃないか!」

「瞬時にその場から離脱しようとした俺を、行動を先読みしていたキリトが羽交い絞めにする。」

「ええい! こんなの実際にフラグになるなんて分かるわけないだ

ろっ！ 誰が触手に掴まるか！

「ちよつと、そのくんずほぐれつしてゐる2人。なんでもいいから早くしなさいよねー」

「くんずほぐれつとか言うなりズ！ お前だつて触手は嫌だろ!？」

「確かに嫌だけど、関係無いし」

「ハツキリバツサリ言いやがつてえ！ それならキリト、お前がトッキーの触手に掴まれ!」

「絶対嫌だしお前が行け!」

ぐぬぬ……なんとと言う執念深さめ！

「よーしよし、落ち着けお前ら。そこまで言うならいつちよひと勝負で決めようじゃねえか」

「勝負う……?」

「おうよ。こう言う時は——ジャンケンだろ。勝った奴が男気を見せるんだ」

だからつてなんでジャンケンなんだよ……と揉める俺とキリトの仲裁に入ったクラインに突つ込もうと思つたが、ふと思ひ止まつた。

いや、待てよ……? 今の俺なら超ギリギリまで相手の手を見てから出しても後出しと気づかれぬスピードで出す事が出来るんじゃないか? いや、うん。イケる。

うむ……勝利は既に約束されたも同然じゃないか!

え? 「全力は出さないんじゃないのか」だつて? 男にはどうしても譲れない物があるんだよ……。

「よつしその勝負乗つた。泣き見ても知らないからな」

「ほーう言つたなあ? 終わつてから「今のナシ!」とか言うなよ?」

「誰が言うか! 証人だつて大勢いるんだしやんねーよ!」

「よつしや、そうこなくつちやな! ほれキリトも、勝負すんだから離してやれつて」

「……仕方ないなあ」

やれやれと呆れながらキリトは羽交い絞めを解き、それから俺たち男3人は輪になった。

「じゃあ、「男気ジャンケン、ジャンケンホイ」でやるからな」

「いつでも来やがれってんだ！」

「よし……」

「二「おーとこーぎジャンケン、ジャンケンホイッ！」」

腕を振り下ろし、手を出そうとするその刹那。俺の視界が急激なま
でにスローモーションとなる。

ゆっくり振り下ろされる腕。キリトとクラインはパーを出そうと
しているようだった。ならば選択はただ1つ——！

「で——えりやあああつ——！」

これが俺の渾身の一手——！

「……………」

「……………」

「……………ふっ」

キリトとクラインの2人はやはりパー。そして俺はそれに勝つ
チヨキ……！

「ヴィクトリーのV！ はっはっは、悪いな2人とも俺は高みの上か
ら見物させてもらう「うし、じゃあミストはトンキーの触手な」つ
てなんでそうなんだよ?!」

「いや、だから言っただろ？ 「勝った奴が男気を見せる」って。男気
ジャンケンってそういうルールだろうがよ」

「男気……ジャンケン……」

それって木曜21時にやっていたあの番組の……確か、勝ったら全
員の支払いをするって言う………悪魔の企画………！

「は、凶ったなクライナー!?」

「人聞き悪い事言うなよな！。大体、「勝った奴が男気見せる」って最
初に言っただろーがよ」

「ぬっ、ぐ……ぐぬぬう……ッ！」

ええい、確かにその通りだが……！ だからと言ってこのままだと
触手プレイコース一直線になってしまう！ 嫌だ！ 俺は……掴ま
りたくないイイツ！

「見苦しいわよーミスト、時間がもったいないんだから観念してトン
キーの触手に捕まりなさいよ」

「けどリズ、ミストくんこんなに嫌がつてるし……2回に分けてトンキーに運んでもらわない?」

「何言ってるのよ、ミストが自分で言ったんじゃない。「トンキーの足にしがみついている方がマシだ」って。それが嫌ならピクシーモードになりなさいよ」

「なんとか場を収めようとするアスナだったが、リズがバツサリ切り捨ててしまった。」

ピクシーかトンキーの触手か……どっちも嫌なんだけど拒否して逃げ出すと言う選択も出来ないらしい。

散々悩んで、散々唸って……考え抜いた末に、もうヤケになって吠えた。

「わーつたよ! いーよ、こうなったらトンキーの触手に掴まってやる! うっかり地上に落ちたら化けて出てやるから覚悟しろよ!」

「化けるも何もアンタ幽霊みたいな物じゃない……じゃ、方針も決まった事だしさっさと乗りましょ」

そんなわけで、キリト達はそろそろトンキーの背中に。直前でクラインが躊躇っていたが、腹いせにその尻を蹴って強引に乗り込ませた。

そして俺は……クラゲみたいな触手に掴まって、全員が乗り込むとトンキーはすいーつと泳ぐように飛び立っていく。

「——ところで、もし人数制限をオーバーして乗り込んだらどうなるんですか?」

「その場合は、移動速度に制限が掛かるペナルティが発生するだけですよ」

「おいなんだそれえ!? それじゃあ今までの全部茶番じゃないの!? コラー! 今すぐ俺を背中に乗せろオオツ!!!」

——解せぬ。(真顔)

どうして俺は邪神の触手に掴まって空をフライトしてるんですしよ。うん、全く意味が分からないネツ!

トンキーの背中の上では、俺を除いたメンツがわいのわいのとなん

だか楽しそうに談笑してる。物理的にも輪に入れないのがおお、俺は悲しい。ボツチがさみしくてあれこれふざけた事を考えたりしてるぜ……ううう。

「このフラストレーションはダンジョンで暴れまくって晴らさせてもらううううぬおおおおおッ?!?!」

ボソツと呟いたその直後、トンキーが突如急降下！ 一気に地上近くまで高度を下げてきた！

上はどうかは知らないが、こっちは触手に掴まってるという極めて危うい状況。手を離せば死ぬ！ いや死ぬコレマジで死ぬううう！

「——っ………おーい、無事かミストー？」

「もうヤダーおウチかえるー！」

「扱いの酷さに駄々っ子みたいになってる……」

うるへーリズ！ こんな風にされれば誰だってこうなるわ！ 帰りはお前がやってみろ！ お前が泣き叫ぶのを俺はトンキーの背中から腹抱えて笑って見下ろしてやるから！

などと言いつ返そうと思つたが、何やら上の様子がおかしい。

怪訝に思つて上を窺おうにも、見上げればあるのはトンキーの顔。位置的に完全な死角になっている……話し声だけは辛うじて聞き取れるけど。

「(スリウムが……？ 《エクスカリバー》？ うーん、ほとんど内容聞き取れないからさっぱり分からん)」

ただ、上に居るキリトたちはかなり驚いているらしい。クラインが『誰か』に叫んでる声が聞こえる。

……あ、なんかクエスト発生した。『氷宮の聖剣』……？

首を傾げている間にもトンキーは再び動き出してダンジョンへと向かつて飛び、上ではなんやかんやあつた拳句全員が気合いを入れてすっごい盛り上がった。

「あの、ごめんなさい、話が全く見えませんですけど。俺1人だけ完全にアウトオブ眼中なんですけど。ねえ誰かー、お願いだから説明してよー」

ねえ次回もこんな扱いじゃないよね俺？ 次こそは大暴れして大

活躍なんだよねえ？

第3話 レッツ・ジャイアント・キリング

第3話

空中ダンジョン「スリュムヘイム」の入口に到着すると、何も聞けなかった俺はキリトから事の顛末を聞かされた。

現在ヨツンヘイムでは、《霜巨人の王スリュム》が率いる霜の巨人族が丘の巨人族を根絶やしにしようとしてと暴れまわっており、もし全滅すればこの地を統べる《湖の女王ウルズ》は消滅し、このダンジョンをアルヴヘイムにぶつけるつもりだ……とウルズ本人がキリト達に話したらしい。

で、それを防ぐためにこのダンジョン最下層にある要の台座から、《エクスキャリバー》を引っこ抜いて阻止してくれ、と。

「——なるほど、大体分かった。けどこのクエスト、別に隠しっけておいてもないんだろ？　なのにこんな大規模クエストを、運営が事前の告知なしにするもんなのか？」

「俺もそれは考えたんだ。やっぱりおかしいよな、今回のクエストは」話を聞いて浮かんだ疑問を口にする、キリトも同意しながら頷く。まあ、サプライズって可能性もゼロじゃない……かもしれないけど。

「あの、これはあくまで推測なのですが……」

すると、そう前置きしながらユイちゃんが口を開いた。

「このアルヴヘイム・オンラインは《ザ・シード》規格のVRMMOとは大きく異なる点、1つあります。それはゲームを動かしている「カーディナルシステム」は機能縮小版ではなく、旧SAOに使われていたフルスペック版の複製コピーだと言うことです」

「フルスペック版……？」

「本来の「カーディナルシステム」にはクエスト自動生成機能がありません。ネットワークを介して、世界各地の伝説や伝承を収集し、それらの固有名詞やストーリーパターンを流用、考案してクエストを無限シネレートに生成し続けるのです」

「ならこのクエストも、カーディナルが自動生成したものなのか？」

「先ほどのNPCの挙動からして、その可能性が高いです」

「はあく、どうりでか」

「ってミストは知らなかったの？ アンタ、一応ラスボスと一緒に行動してたでしよう？」

「いやまあ、カーディナルの事に関しては聞いていたさ。俺にも関わる事だったから。けど道理で、アーサー王伝説に出てくる聖剣が北歐神話に出てくるわけだな」

北歐神話はそこまで詳しいわけじゃないが、今回のクエストで似たようなポジションを担っていたのは《魔剣グラム》だったはずだし。ずっと抱いていた謎だったが、ユイちゃんのお陰で解決したわけだ。

リズのツツコミ通り、確かに俺はヒースクリフと一時行動を共にしていたけど、だからと言って全てを聞いたわけじゃない。合間の休みにちらほらと「カーディナルシステム」に関しては掻い摘んで聞いていた。

——って言っても一般的な男子高校生の理解力を大幅に超えるような内容だったので、その大部分がチンプンカンプンだったわけだが。

「——待てよユイちゃん、つまり今回の結果次第で……本当に最終戦争……神々の黄昏が起きるかもしれない、ってことか……？」

「はい……その可能性はあります。ヨツンヘイムやニヴルヘイムから霜の巨人族が侵攻してくるだけでなく、さらにその下層にあるムスプルヘイムと言う灼熱の世界から炎の巨人族までもが現れ、世界を焼き尽くすと言う……」

「いつ、いくらなんでも、ゲームシステムがマップを丸ごと崩壊させるなんて出来るはずが……！」

「それが出来るんだよ、オリジナルのカーディナルは浮遊城アインクラッドを崩壊させるのが最後の任務だった。だからシステムにはワールドマップ全てを破壊し尽くす権限がある。オリジナルをコピーしたALOのカーディナルだって、当然それが可能だな」

リーファの言い分をきっぱり否定しつつ、俺はヒースクリフから聞かされた事を思い出しながら口にした。

『だから君は100層まで生き残っていても、ゲームがクリアされればその崩壊に巻き込まれ消滅する』——とヒースクリフが言っていたのを覚えている。

『……………』

どんより……まさにそんな表現がびったりなくらいに沈むキリトたち。

「……もし仮にその《ラグナロク》が起きたとしても、バックアップデータからサーバーを巻き戻す事は可能じゃない?」

「カーディナルの自動バックアップ機能を利用していた場合は、巻き戻せるのはプレイヤーデータだけでフィールドは含まれません……」

シノンの考えもあっさり破れ、再び重い空気に包まれる。

が、そんな中クラインが「そうじゃん!」といきなり叫んでメニューウインドウを開き、「ダメじゃん!」と速攻で頭抱えて叫んだ。

「なんのコントよ……」

「いや、GM呼んでこの状況知ってんのか確認しようと思ったんだけどよ、人力サポート時間外でやんの」

「年末の日曜、しかも午前中だからな……」

そりゃあ大抵の会社は正月休みに入ってるだろうさ……現在もお仕事している社会人の方々、お勤めおつかれさんです。

仮に運営が動いていたとしても、この事態を把握していたとは考えにくい。もし知っていたらとつくの昔に修正を入れているはずだ。

「要するに、だ。この場でALOの崩壊を食い止められるのは俺たちだけってことだな」

「責任重大じゃねーか! なに考えてんだよカーディナルは!」

「…………ドジツ娘?」

「萌え要素入れた所で誰得だよ!」

いやあ、受ける人には受けるんじゃない? 吼えるクラインに対して淡々と答える。

「どつちにしろ、今回の目的は《エクスカリバー》を手に入れる事な

んだ。ちよつと大事になつたけど、やる事は変わらないだろ」

「うん。トンキーたちを助けるためにも、絶対にクリアしないと！」

メダリオンを握りしめながらリーファが頷く。

中心に埋め込まれた宝石は鮮やかな緑と半分以上が黒くなつていて、全て黒くなるとゾウクラゲ型邪神は全滅したことを意味する。それほど時間に余裕はないし、サクサク行こうか、サクサクと！

そんなわけでダンジョンに突入したキリトとゆかいな仲間たち一向（仮）なわけだが、中はなんと雑魚はほぼ不在、中ボスも半分近くが留守状態。聞けばウルズ曰く、地上に配下をほとんど出していたため現在この城は相当……いや、かーなーり、手薄になってるらしい。しかしそれでもフロアボスはきちんと残っていて、第1層を担当する単眼の巨人……えつと、なんだっけ？ アトラス……じゃなくて、そう、サイクロプスがふんぞり返っていたが、そこはそれ。圧倒的な数の暴力に任せたゴリ押しで難なく倒すと、そのまま次の層へ降りる。

第2層も上層と同じような感じだったが、フロアボスと戦闘に入った所で思いもよらず苦戦を強いられた。

この層を守護するのは所謂「ミノタウロス」と言われる、牛頭人身の巨人で、しかも1体ではなく黒と金の合計2体。

こいつら、何が面倒かって、黒は魔法耐性、金は物理耐性にそれぞれ極振りしているって言うから物理攻撃メインのこのパーティには本当に辛い。

ならばと黒を優先攻撃したら、ピンチに陥った黒を金がカバーし、後方に下がった黒は禅を組んで瞑想状態に入るとHPが徐々に回復している。

「シンプルだけどそれが逆に難しいか……」

ポツリと呟きつつ、俺は複数の火炎弾を撃つ火属性の下位攻撃魔法を唱えて後方から金に魔法攻撃で前衛を支援。

魔法スキルは種族によつて得意分野があり、概ね下位く中位までなら他の種族でも覚えることが出来る。より上位までとなるとより条

件が設けられ、たとえば全体回復が出来る上位回復魔法は《水妖精族》か《歌妖精族》が他種族に比べて比較的緩い条件で習得でき、広域爆裂魔法ならば火妖精族が簡単に覚えやすいなど、強力な魔法になるほどその属性に対応した種族が有利になる。

で、この脳筋ばかりのパーティメンバーの中で唯一攻撃魔法もこなせる俺は一通りの攻撃魔法は覚えている。例外としては聖属性は覚えられないけど。「闇」妖精なのに光(聖)が使えるってのも確かにどうだよって思うし。

……とは言え得意属性以外は軒並み中位まで。純粋な火力ではどうしてもメイジに譲る。

「キリトくん、今のペースだとあと150秒でMPが切れる！」

前衛が金の衝撃波攻撃をどうにか回避し、すかさずアスナが回復しながら叫ぶ。

俺の魔法攻撃で金色のHPゲージは確かに削れているものの、あのゲージを一気に消し飛ばすにはもう一押し必須だ。

……この状況で考えられる攻略パターンは2つ。1つは二手に分かれて物理耐性の低い黒を倒しにかかり、その間囷と後衛で金を足止めする。その後前衛が黒を倒した所で再び金を攻撃し、タゲを取っている間に後衛が魔法攻撃で一気に殲滅する時間はかかるが安全重視パターン。

もう1つはこうなったら総員突撃、魔法属性付きの攻撃で金を全力で倒しにかかる。ただし魔法攻撃が使えない連中は必然的に魔法属性の上位スキルを使うことになるため、長い硬直が入って反撃を喰らうリスクが非常に高いハイリスク・ハイリターンの最短最速パターン。

「どうするキリト、安全重視で二手に分かれて攻めるか？」

「——ッ、いや……！」

金が振り下ろした戦斧を二刀を交差させてブロックしたキリトに向けて問う。

確実性を求めるなら、時間はかかるが前者を選ぶべきだ。しかしキリトは——

「ここはイチかバチか、ソードスキルの集中攻撃で金色を倒し切るっ！」

あえて、危険な賭けを選んだ。

ま、そうするよな……とその選択に俺は内心微笑む。だってここはSAOじゃないんだからな、死んでも現実で死ぬわけじゃない。

「ミスト、お前は特技あるんだろう!？」

「あるぞ!…けど20秒は必要だ!」

闇属性魔法は火属性魔法と似た性質を持ち、即ち火力が高く攻撃範囲もそれなりに広い……が、詠唱が長く、発動が遅めで上位魔法になればMP効率が悪くツソ悪い——と言う特徴を持つ。

で、《闇妖精族》である俺は闇属性魔法を得意とし、高位の魔法もいくつか使える……んだが、これがとにかく詠唱が長い。ソロで使うのはほぼ不可能なレベルで。それこそアスナの《世界樹の枝》みたいな魔法にボーナスが掛かる杖とかを持っていればカバーできるんだろうが、そんな便利な物を俺は持ってないし。

「なら俺たちで時間を稼いで、ミストの魔法に合わせてソードスキルの集中攻撃!…頼むぞ!」

「責任重大だな……けどやってやるよ!」

斜に構えた言い草だが、それが俺なりに信頼へ応えようとしているのだと知っているキリトは口元に小さく笑みを浮かべ、他の前衛組と共に金を足止めに掛かる。

それを見届けて俺はガシガシと乱暴に頭を搔き、両手を頭上に掲げて詠唱を開始した。

前線では金の戦斧から繰り出される恐怖の一撃を危なげなくやり過ぎ、HPが減れば即座にアスナが回復。

その間、俺は長ったらしくて「こんなのあるんだったらルーンでも入れろよ」って古ノルド語の詠唱に対して内心突っ込みつつ、詠唱完了まで残り5秒を切ったタイミングでアスナにアイコンタクト。

——もうすぐ撃つ。お前も前に出ろ。

その意図をくみ取ったアスナは頷くと、本当に偶然手に入ったと言う伝説級武器【世界樹の枝】を仕舞い、素早く細剣を出すと勢いよく

それを抜いて前線に飛び出していく。

それを見届けて、俺はニヤリと不敵に笑った。

「アカイの行くぞ、オルア！」

吼えたと同時に、既に詠唱完了し発動状態に入っていた魔法が起動する。

金を中心とした上下の空間が激しく歪み、紫のオーラが包み込む。

確か、空間を捻じ曲げて範囲内の敵に闇属性8割と地属性2割の混合ダメージを与える高位呪文、だったか。

魔法耐性を持たず、さらに高位魔法の直撃ともなれば金に対抗する手段はない。少なくとも瞬間火力であれば、この脳筋パーティ最強クラスのダメージを叩き出して金のHPゲージを6割近くはぶっ飛ばす。そして俺のMPゲージは8割消し飛んだ上に、結構な硬直が入った。

「ゴォー！」

エフェクトが終わるタイミングを見計らい、キリトが合図を出す。各々の武器がライトエフェクトの輝きを放ち、烈火を帯びたクラインの剣撃、疾風と共に放たれるリーファの斬撃、雷光を放つリスの強打、水飛沫を散らしながらシリカの短剣が突き立てられ、後方からはシノンの放った氷の矢が金の急所らしい鼻の頭を正確に射抜く。

さらに正面からは氣勢を吐きながらキリトが8連撃の片手剣ソードスキル《ハウリング・オクターブ》が全段叩き込まれたほんの僅かな差で、前線に合流したアスナが目にも止まらぬ速さでレイピアを5回突き出す。

見ているだけでなんだか敵に同情したくなる怒涛のラッシュだったが、しかしそれでも、金はタフだった。

既に技を出し終えた面々は長い硬直に入って動けない。

「キリトッー！」

クラインが叫ぶ。

金がキリトにタゲを取り、動けないキリトへ戦斧の一撃を撃ち込もうとしたその時――

「――ここだッー！」

確信を持って叫んだキリトは、右手の剣から炎が消えた瞬間、左手に持った剣が青い輝きを放った。

間髪入れず氷の剣撃が金の横っ腹を深く切り抉り、さらに深く突き込み、跳ね上げると氷塊が断面から炸裂する。大型モンスターに有効な3連重攻撃《サベージ・フルクラム》だ。さらに右手の剣が再び輝きを放ち出す頃には他の硬直も解け、クラインを先発としたラツシユの第2弾が金に殺到する。

さらにキリトが垂直4連撃《バーチカル・スクエア》、トドメとばかりに《ヴォーパル・ストライク》が炸裂し、驚異とも言えるソードスキル4連携は終わった。

ラツシユに次ぐラツシユで金のHPゲージはレッドゾーンまで突入し、そのまま——と言うわけにはいかず、僅かばかりのHPを残して減少が停止する。

「ツ―」

まさか、と驚愕するキリト。金がそんなキリトを見下ろしながら獰猛な笑みを浮かべ――

後方から殺到した数多の闇の弾丸が全身を撃ち抜き、ダメ押しとばかりに残りを削り取った。

思わぬ追撃に驚いて振り返るキリト。その視線の先には闇属性攻撃魔法を唱えた俺の姿。

「……なあ、やっぱメイジ1人居ないと辛いと思うんだが」
「同感……」

ポツリと呟いて肩を竦めると、キリトは半ば呆れたように苦笑いを浮かべる。

で、瞑想から復帰した黒は相棒がいない事に気づいて動揺し、その後全員（主にクライン）のフルボッコによって特に惜しまれることなく爆発四散するのだった。南無。

「おいキリ公、なんだよ今のは!？」

「……言わなきやダメか？」

「つたりめえだ！ 見たことねエぞあんなの！」

黒相手に鬱憤を晴らし終えた後、その場に散らばったドロップアイテムに目もくれずクラインがキリトを問い詰めるが、そのキリトは答えるのが面倒くさそうだ。

「システム外スキルだよ。《スキルコネクタ剣技連携》。この前のアップデートでソードスキルが導入されたけど、《二刀流》や《神聖剣》、《魔装術》みたいなユニークスキルは実装されなかっただろ」

「け、けどよ、おめエ今さつき両手で——」

「いや、アレは《二刀流》ソードスキルじゃなかっただろ。全部片手剣のソードスキルだった」

このメンバーの中ではキリト以外の片手剣使いである俺が、クラインのツツコミを否定する。

多分アレは片手剣ソードスキルを左右交互に発動して、スキル使用後の硬直を潰すんだろう。第一、《二刀流》スキルだったなら両手で技を繰り出しているはずだ。

「ああ。それに、本家本元はミストだったからな」

「あつ……それって《スキルチェイン剣技連携》ですよね」

キリトの捕捉にシリカが思い当たる所があって答えた。

確かに俺がこの世界に来た最初の頃、どういうわけか所持していたエクストラスキルと組み合わせることで片手剣ソードスキルを両手で使う、なんて芸当をしていたっけ。

「ああ。感覚的にはミストが使っていた時と同じ感じだから、やろうと思えばミストもできると思う」

「って言ってもなあ……ブランクあるし、細かい感覚だって違うだろうしすぐには無理さ」

「……そっか」

チラッと一瞬俺を見たキリトだったが、すぐにリーファへ顔を向けて何かを聞いている。

何か言いたげだったが、なんだったんだろう？

実際に今やれと言われたら……まあ、やっぱり無理だな。多少なりとも練習は必要だから。

だから、嘘は言っていないし、かと言って真実も言っていない。

「よっし！ 全員HPMP全快したら、3層もさくさくつと片付けようぜ！」

キリトの言葉に俺たちは異口同音に応じ、開かれた下層への階段を駆け降りた。

このダンジョン「スリュムヘイム」は逆ピラミッド型の全4層構造になっている。

3層は2層の7割程度の面積。最後の4層はほぼボス部屋のみとなっていた。

狭いが細く入り組んでいる通路をユイちゃんのナビでさくさく進み、途中で2回の中ボス戦を挟み3層のフロアボスと接敵。

待ち構えていたムカデに人の上半身がくつついた邪神系ボスで、上層のボスと比べて2倍近い体躯を誇っている。

耐性こそそこまで高くない代わりに攻撃力が異常に高く、前衛に参加した俺を加えたキリトとクラインの3人でタゲを取り続け、その間に他がムカデ足を切り落として丸裸にしたのち、キリトの《スキルコネクト》を含む多重ソードスキルで仕留める事に成功。

なんかテンションがハイになってきて一気に4層に雪崩れ込み、スリュムの部屋まで駆け抜け抜けようとしたその途中——「それ」が姿を現した。

それは細長い氷柱で作られた氷の檻で、その中に1人の女性が蹲っている。サイズは俺たちと同じ人間（妖精）サイズで、肌は白くて長く流れる美しい金髪が良く映える。大胆に胸元が開いたドレスから覗くボリキュームは……なんと言うか、例えるなら見た目も相まって大人の魅力溢れる美女、と言っている。

「お願い……。私を……。ここから出して……」

これは間違いなく男が寄って来る。そう、助けを求める女性の声に釣られる。その美しさに心奪われてフラフラ氷の檻に近付こうとしたクラインのように。キリトがバンダナの尻尾を掴んで止めたけど。

「罨だ」

「罨よ」

「罨だね」

以上、上からキリト、リズ、シノンの3人による冷静なコメント。
「お、おう。罨、だよな……罨、かな……?」

3人に突っ込まれて正気に返ったクラインだったが、まだかなり揺れ動いている。

実際に罨かどうかはともかくとして、この人はNPCっぽい……けど変わった点が2つほど。1つはHPゲージがある事と、もう1つ……これは俺にしか見えない視点だからかもしれないが。

「(なんか……このサイズにしては密度が『濃い』な)」

コレを口頭で説明すると難しいが、なんとさえばいいのか……とにかく、ちよつとだけおかしい。

首を捻っている俺の横でユイちゃんから俺と似たような話を聞いたシリカたちが、

「罨だよ」

「罨ですね」

「罨だと思う」

と、上からアスナ、シリカ、リーファの3人が断言。

ほぼ全員から断言されて涙目のクラインは、唯一何もコメントを発さず首を傾げていた俺を見て助けを求めた。

「ミ、ミストよ！ オメエは罨じゃないって思うのか!? だよなあ、こんな美女が罨のはずないよなあ！」

「はっ……?」

なんか1人で考えていたら、勝手に同志扱いされてたんですけど。

と、全員から無言の視線が一齐に突き刺さる。あの……俺は別にクラインのように魅了されていたわけじゃないんですが。

「ミストさん……?」

「クラウド……?」

「待った、待ってくれ2人とも。俺は何も同意していないぞ」

「じゃあ、どうして黙っていたんですか?」

「それは、その……敵か味方が判断材料が無くて、困っていたからって言うのと……」

「のど？」

「……なんと言うか、こう……学校の先輩で同じバイト先で働いている包容力のある女性のような声に安心感を抱くというか……」

「お前が何を言っているのかまったくサツパリ分からないけど、限りなくメタい事を言っているのは俺にも分かるぞ……」

いや、うん。なんと言うかごめんなさい。他に言い訳が思いつかなかったし、実際NPCの声になんと言うか癒しを抱いたのも事実なんだ。

「……とにかく、畏じゃない可能性だってあるけど今は時間が無いんだ。1秒でも早くスリユムの所にたどり着かないと」

「お、おう……。うん……」

キリトに促されて、クラインは小刻みに頷くと、やっと氷の牢屋から視線を外した。

再び奥に見える階段に向かって数歩走りだすと、背後からまたか細い助け声。

「お願い……誰か……」

そりゃあ俺にだって良心はあるし、助けてあげたいと言う気持ちだってある。

仮にこれが畏だったとしても、通常のクエストならまあそれはそれで面白いかと納得して楽しむんだろうが今は緊急時。時間的余裕も無いし、危険を冒すリスクだって避けたい。

「……クライン？」

不意に、俺の横を並走していたクラインが立ち止って、俺も思わず立ち止まって声をかける。

俺たちに気付いた前の連中も立ち止って振り返ると、件の無精髭面をした野武士男は顔を俯かせ、両手をきつく握りしめていた。

「……畏だよな。畏だ、わかってる。……でも、畏でもよ……！」

低い声で呟きながら、がばっと顔を上げたクライン。

なんとなく、ほんとうになんとなーくだけど、クラインが言わんとしている事が俺は分かってしまった。

「……畏だと解っていてもよ、それでも俺ア、どうしてもここであの人

を置いてけねェんだよ！ 例えそれでクエが失敗して、アルンが崩壊しちまっても！ それでもここで助けるのが俺の生き様！ 武士道って奴なんだよー！ ツ！」

あ……戻っていったよあいつ……。

その言葉と後ろ姿に、俺は残念さとカツコよさの両方を覚えていた。

「……バカツコイイ」

「誰が上手い事言えと」

呟いた俺を、キリトがボソツと突っ込む。

その間にもクラインは吠えながら刀を抜き、氷の柱を真つ二つに切り裂いた。

——結論から言えば、女性NPCは罨でも何でもなく、この主で巨人の王スリュムに盗まれたと言う宝を取り戻すために忍び込んでいたらしい。

しかし門番に見つかってこの檻に閉じ込められて、たまたま通りかかって助けた俺たちに同行したい、と申し出てきた。

「なんか、キナくさい展開だね……」

「かといってあのNPCがスリュム本人、って可能性は無いだろ……自分から檻に閉じこもるって、どんな引きこもりだよ」

小さく囁いたアスナに同調しながらも、真つ先に考えられるだろう可能性は除外してみる俺。

いや、案外そんな閉じ込められたりするのが好きな特殊な性癖の持ち主という可能性もあるかもしれないが。

「おい、キリの字よう……」

美女の頼みでも流石に自分の一存ではどうにもできず、困り果てたクラインは情けない顔でキリトに顔を向ける。

「……あーもー、解った解ったって。こうなりや最後までこのルートで行くしかないだろ。まだ100パー罨だと決まったわけじゃないし」

で、結局パーティーリーダーのキリトは半ばあきらめたように肩をすくめながら言った。

その答えに涙目だったクラインの顔がパアアツ、と喜色満面となつて、美女に威勢良く宣言する。

「おっしや、引き受けたぜ姉さん！ 袖すり合うも一蓮托生、一緒にスリユムの野郎をブツチめようぜ！」

「ありがとうございます、剣士様！」

それって「袖すり合うも多生の縁」なのか「一蓮托生」なのかどっちなんだよ社会人、と内心突っ込んでいると、横でキリトが「ユイに妙なことわざ聞かせるなよ……」とぼやきつつ、NPC加入の許可を出すすと、視界の左上から順に並ぶ仲間たちのミニゲージに9人目のゲージが追加される。

名前は……フレイヤって読むのか？ フレイじゃないのか。確か同じ北欧モチーフのRPGゲームでめっちゃ強いキャラがいたんだけど。

いや、けど実際このフレイヤって人もかなり強い。特にMPなんてこの中じゃMPが一番高いアスナを軽く超えるほどだ。MP効率に難のある魔法を覚えている俺からするとちよつと羨ましい。

「ダンジョンの構造からして、あの階段を降りたらすぐにラスボスの部屋だ。今までのボスよりさらに強いだろうけど、あとはもう小細工抜きでぶつかってみるしかない。序盤は攻撃パターンを掴めるまで防御主体、反撃のタイミングは指示する。ボスのゲージが黄色になるとこと赤になるとかでパターンが変わるだろうから注意してくれ」

キリトが作戦を伝えると、その場に居た全員がこくりと頷く。

「——ラストバトル、全快でぶっ飛ばそうぜ！」

『おー！』

このクエスト開始から3回目の気合いにキリトの頭上に座るユイちゃん、シリカの肩に留まるピナ、そして新たに加わったNPCの金髪美女フレイヤさんまでもが唱和する。

「——ところでミストさんって年上の女性が好みなんですか？」

「——そうよね。その辺り詳しく聞きたいわね、クラウドの口から直接」

「なして!？」

「その3人修羅場はクエストが終わってからにしてくれ」

第4話 それはまるで稲妻のように

第4話 それはまるで稲妻のように

新たにフレイヤさんを加えた俺たちは階段を下りてすぐ、巨大な扉にぶつかつた。

キリトが上で話した通りこの先は間違いなくボス部屋で、アスナがバフを張り直してくれた後にフレイヤさんが最大HPを大幅に増加させる未知のバフまで張ってくれて俺たちは部屋に雪崩れ込む。

内部はとてつもなく広大で、そして何よりも目を引くのは左右の壁際から奥まで続く、黄金の品々だ。金塊に武器防具、調度品 etc...

これ、総額何ユルドになるんだ……いや、GGOに持っていったとして、全部を換金出来たとしたならそれはリアルマネーで総額何百……いやいや、そんなんじや済まないだろ。

「小虫が飛んでおる」

金銀財宝に目が眩んでいて気づかなかつたが、広間奥の暗がりから重低音の音が呟くのが聞こえた。

「煩わしい羽虫が飛んでおるぞ。どれ、悪さをする前に一つ、潰してくれようか」

ずしんっ。足を掬うような振動が響く。

飛んでいないし、そもそも飛べねーつての……と突っ込んでやろうと思つたが、姿を現した巨体にその言葉が出る事は無かつた。

鉛のような鈍い青の肌。寒々とした青い瞳と地上からは辛うじてしか見えない頭上の王冠。そして筋骨隆々の体軀。

……なんだ、このデカブツは。デカイにも限度があるだろう。

旧アインクラッドではシステムの制約があつてこんな大きいボスは存在しなかつたが……シノンと共同で倒したボスもここまで大きく無かつた。

光学銃や実弾銃もなく、飛行不可能な状況でどう戦えつていうんだおい……？

「ふっ、ふっ……アルヴヘイムの羽虫どもが、ウルズに唆されてこんな所まで潜り込んだか。どうだ、いと小さき者どもよ。あの女の居所を教えれば、この部屋の黄金を持てるだけくれてやるぞ?」

そりやまた随分魅力的な取引だことで……けど、この偉そうな態度と今のセリフからして、こいつが「霜巨人の王スリュム」本人であることに間違いない。

「……へっ、武士は食わねど高笑いってなあ! 俺様がそんな安っぽい誘いにホイホイ乗るかよ!」

真っ先に言葉を吐き返し、クラインが愛刀を鋭く鞘走らせる。そんなこと言って、さつき財宝にフラフラ誘われていたのはどこの誰だつて突っ込みは野暮って奴だ。

クラインに続き、俺たちも各々の武器を構える。

伝説級武器こそ無いが、全て固有名つきの古代級武器かマスターミスであるリズベット会心の銘品。……しかしそれでも、その規格外すぎるスリュム相手には心許なく感じてしまう。まるでアリの群れがゾウに挑むようだ。

スリュムは足元にいる俺たちを見下ろし、ふと後衛にいるフレイヤさんに目を止める。

「おお、そこにいるのはフレイヤ殿ではないか。檻から出てきたということは、儂の花嫁になる決心がついたのかな、ンン?」

スリュムが放った衝撃的な話に、クラインが声を裏返しながらかぶ。

「は、ハナヨメだあつ!」

「そうとも。その娘は我が嫁としてこの城に輿入れしてきたのよ。だが、宴の前の晩に、儂の宝物庫を嗅ぎまわろうとしたのでな。仕置きとして氷の獄に繋いでおいたのよ」

なんか話が複雑になってきたな……けど要するに、フレイヤさんは一族の宝をスリュムに盗まれてしまったから、それを取り戻そうと花嫁になると偽って城に入ったものの、宝物庫に忍び込んだのがバレて牢獄に閉じ込められてしまった……と。

んー、所々腑に落ちない所はあるけど、ひとまずフレイヤさんが裏

切る可能性は消えたかな。

「誰がお前の妻になど！ かくなる上は剣士様たちと共にお前を倒し、奪われた物を取り返すまで！」

毅然と返すフレイヤさんを、しかしスリウムは顎髭を撫でながら面白おかしそうに聞いている。

「ぬっふっふ……威勢の良い事よ。流星はその美貌と武勇を九界の果てまで轟かすフレイヤ殿。しかし……気高き花ほど手折る時は興味深いと言うもの……小虫どもを捻り潰した後、念入りに愛でてくれようぞ……」

うっへえ……これ本当に自動生成されたクエストのシナリオかよ？ 男の俺でも生理的嫌悪抱いたぞ、コイツ……特に女性陣は一樣に顔を顰めてるし。

「——だ、そうですが、女性陣のご意見は？」

「サイトテー」

「キモチワルイ」

「女の敵」

「不愉快」

「死んでもイヤ」

「ンな真似させつかよ！ この漢、クライン様がいる限りフレイヤさんには指一本触れさせねエぞ!!!」

「おうおう、ぶんぶんと羽音が聞こえるわい。どうれ、ヨツン Heim 全土が儂の物になる前祝いに、まずは貴様らから平らげてくれようぞ！」

と、スリウムが言いながら足を踏み出した瞬間、フロア全体の明度が上がり視界の右上に長大なHPゲージが3本も表示される。流星にクエスト最後のボスだけあって簡単に倒せるような相手じゃない。

だが新生アインクラッドの各層を守護するフロアボスはHPゲージが見えない仕様と比較すれば、ペースを掴みやすい。

「来るぞ！ ユイの指示を良く聞いて、序盤はひたすら回避！」

／ 空中からの氷ブレスを放ったスリウムの攻撃を回避した直後、攻撃

後の硬直を狙い撃ちにしたフレイヤさんの雷撃系攻撃魔法が炸裂してスリウムに大ダメージを与え、地上に墜落して動かなくなる。

その隙を逃さず、俺たちは大技のソードスキルによる集中攻撃を叩き込んだ。

やはりスリウムとの戦いは大激戦となつて、序盤の攻撃パターンは左右の拳による打ち下ろし、右足の3連続ストンプ、そして氷属性ブレスと床から生成される12体のドワーフ等々。

特にドワーフ生成が厄介だが、そこはシノンの驚異的な精密射撃で弱点を的確に射抜いて片付けてくれ、俺たちは本命であるスリウムの対処に専念できた。

直接攻撃系も俺の反応なら完全回避できたし、そうでなくてもユイチヤンのカウントアシストもあつて他の連中も直撃を避けられ、パターンを掴んでいざ反撃……と行きたい所で問題が。

というのも俺たちとスリウムのサイズ差から攻撃がまともに届かず、どうにか当たる場所は分厚いレギンスに守られたスネ。金ミノ程じゃないがとにかく物理耐性が高い。

ここで俺は後衛に下がって、魔法攻撃による支援に戦術を変更。弱点である炎系の攻撃魔法を撃つてどうにかHPを削って行く。

そうしてやっと1本目のHPバーを削りきった時、スリウムが一際野太い咆哮を轟かせた。

「パターンが変わるぞ、注意！」

叫んで注意を促すキリト。さらに切迫したリーファの声も微かに届く。

「まずいよお兄ちゃん、光が3つしか残ってない！ 多分あと15分もない！」

……今のペースが大体10分前後。残り15分以内にあと2本のゲージを削りきるのは、ほぼ不可能に近い。

とその時、スリウムが両胸を大きく膨らませて息を吸い込み、強烈な風で前衛と中衛を吸い寄せる。

あれは全体攻撃の予備動作……！ 後衛には辛うじて影響が無い……けど、シリカがやばい！

リーファが風魔法を詠唱しようとするが、スリュムが攻撃する方が早い！

次の瞬間、スリュムが防御姿勢を取った全員目掛け、それまでの氷ブレスとはケタ違いの規模を誇る極大ブレスを口から吐き出した。

青白い風を伴うブレスがキリト達を包み込み、アスナ達のバフすら解除してキリトたちを氷の膜が包んで行く。

アレはバフ解除と特殊なスタン効果を目的としたブレスだったらしく、直接のダメージは一切ない。しかし動きを封じられれば、その後起こる事も想像に難くない。

「ぬううーん！」

スリュムが右脚を大きく持ち上げ、野太い雄叫びと共に床を踏みつけた。

生じた衝撃波が拡散し、氷像と化して身動きが一切とれないキリト達に迫る——！

ガッシャー——！

氷が砕け散る破砕音。そして衝撃波に5人が吹き飛ばされ、視界右上に表示されるパーティメンバーのHPゲージ5つが一気に真っ赤に染まる。

しかし事前に待機してあったアスナの高位全体回復魔法が発動し、じりじりとHPバーが右側に増加していく。だがALLOの回復は時間経過回復型で一気に回復していくわけじゃない。

このままじゃマズイ——絶体絶命の状況に、俺は苦渋の決断を下した。

カッ！ ガッ！ ガンッ！

スリュムの追撃をどうにか逃れようとした俺の耳に届いたのは、何かが凄まじい勢いと力強さで蹴る音だった。

「せあらあッ!!」

「ぬおう……!?!」

次の瞬間気合いの咆哮と共にスリュムの顔を鋭い一閃が斬りつけ、予想外の不意打ちにスリュムは手で顔を抑えながら軽く仰け反る。

そして頭上から人影が落下し、全身を使いながら滑るように回転して落下の衝撃を流しながら着地した。

「ミ、ミスト……っ？」

それは今まで後衛で魔法攻撃の支援をしていたはずのミストで、その姿に俺は思わず呆気に取られる。

スリユムの広範囲攻撃の直後、ほとんど間を置かずに後衛からすっ飛んできたのか……？ しかもどう頑張ってもスネにしか剣が届かないのに、壁を駆け上がってそのままスリユムに肉薄した……？

「俺がタゲを取って時間を稼ぐ！ その間に立て直せ！ シノン、カバ―！」

一方的に言うが否や、ミストは氷の床を蹴ってスリユムに迫る。

後方ではシノンが「また無茶な真似を……！」とぼやきながら、両手長弓系ソードスキル《エクспロード・アロー》を射ってスリユムの喉元に命中させて援護に回る。

タゲを取ったミストはスリユムの振り下ろした右拳を飛んで避け、そのまま腕伝いに駆け上がった。当然腕を伝うミストを振り払おうとするスリユムだったが、払った左腕に飛び移り、肩の所まで到達するとそのまま跳躍。縦回転で勢いをつけて単発垂直ソードスキル《ホリゾンタル》でスリユムの鼻を思いっきり斬りつける。

その動きは余りにも異常だった。後衛から一瞬でスリユムに接近し、攻撃は完全に見切り完全回避。まるで稲妻のような動きは俺でも一瞬反応が遅れる。

まるで旧アインクラッド75層で戦ったあの時のよう……いいや、あるいはあの時以上の……。

「お兄ちゃん！ 早く、ミストくんがタゲを取ってる間に回復を！」

「――あ、ああ……」

しかしそれ以上の思考はリーファの声に遮られ、俺は慌ててポーチから回復ポーションを取り出すと赤い液体を呷った。

回復を待つ間、スリユムの猛攻をミストは完全に躲し、僅かな隙を逃さずカウンターを的確に当て、少しずつスリユムのHPを削っている。

ようやくHPが8割近くまで回復し、左右の剣を握り直して「攻撃用意」と声をかける。そしてカウントを始めようとしたその時、いつの間にかすぐそばに居たフレイヤに呼び止められた。

「剣士様。このままでは、スリユムを倒す事は叶いません。望みはただ一つ、この部屋のどこかに埋もれているはずの、我が一族の宝だけです。あれを取り戻せば、私の真の力もまた蘇り、スリユムを退けられるでしょう」

「し、真の力……」

……こうなったらイチかバチかだ。

もし真の力とやらを取り戻したフレイヤさんが俺たちを裏切って、敵に回ってしまふ可能性があるかもしれない。けどそんなものもよりもこのまま持久戦を続けて時間切れになり、クエスト失敗となる可能性の方がずっと大きい。

「解った。宝物ってどんなのだ？」

訊ねた俺に、フレイヤさんは両手を30センチほどの幅に広げてみせた。

「このくらいの大きさの、黄金の金槌です」

「……は？ カ、カナヅチ？」

「金槌です」

……美女が求めるには少々似つかわしくない宝物に、俺は一瞬言葉を失っていた。

左拳の打ち下ろしを躲し、同時にグローブで保護されていない上腕を瞬時に斬りつける。

これだけ近ければ氷ブレスは使用しないようで、仮に使おうとすればその予備動作を突いて目玉を抉ろうかという腹積もりだったが。

一瞬だけパーティメンバーのゲージに目を配らせるが、まだ復帰に少し時間がかかりそうだ。

その間、シノンの矢が援護してくれるからまだまだ時間は稼げる。

壁際まで下がり、ストーンプしようと足を振り上げた瞬間を狙い、スリユムに背を向けて壁を駆け上がる。

「ダークネス……ムーンブレイクーツ！」

そのまま天井まで上り詰めて蹴り飛ばし、空中で身体の向きを180度変え、天井を蹴った反動と落下の勢いを上乗せした飛び蹴りをスリユムの眉間に叩き込んだ。なぜこれかと言うと、なんか勢いで。

ズゴンツ！ と鈍い衝撃音が炸裂し、スリユムの上半身が仰け反る。その間に着地してスリユムを見上げた時、背後から援軍が駆け付けた。

「お待ちせー！」

「助太刀に来たぜー！」

リーファとクラインだ。その2人に俺は軽く笑う。

「なんだ、俺のステージはまだまだこれからだったのにさ」

「ヘッ！ お前さんだけにいいカツコさせつかよ！」

「そうだよ、それに今、お兄ちゃんが宝物探してるからそれまでの辛抱だよー！」

宝物……？ それって確か、フレイヤさんがスリユムから取り返そうとしているっていうアレか？ てつきり杯とかそんな物だと思っ
ていたが……。

しかし考える暇は無く、スリユムのストンプを散開して回避すると目の前の事に集中する。

「で、その宝物ってなんだよ!?!」

「なんか、カナツチって言ってたよ！」

「カナツチい!? なんで美女のフレイヤさんが物騒な物求めるんだよ、撲殺武器ならリズで十分だ！」

「ミスト！ アンタブン殴りたいの!?!」

おっと、これは藪蛇だった。頭上でブンブンメイスを振りまわしている、パーティ唯一の打撃武器持ちの怒鳴り声にちよつと肩を竦める。

「美女……武器……?」

「リーファ！ おい！」

突っ立っていたリーファにスリユムが両手を組んでハンマーのよ
うに打ち下ろそうとしていた事に気づき、リーファに声をかけながら

抱きかかえ、その場を離れる。

しかしスリウムが拳を床に叩きつけた際に発生した衝撃波の範囲にギリギリ入っており、リーファは無傷だが俺は少しばかりダメージを被ってしまった。

「バカ、なにやってんだ!」

「あつ……ご、ゴメンねミストくん! あともうちよつとこのまま!」
顔を僅かに顰めながら叱りつけると、我に返ったリーファは慌てて謝りつつ、なぜか抱えたままのこの状態を続けろと言う。

なんでそんな事を……と突っ込む前に、リーファはすうーつと大きく息を吸い込んでから大声を出した。

「お兄ちゃん! 雷系のスキル使って!」

「か、かみ……?」

言われたキリトはこつちを振り向きながら啞然とし、しかし刹那、右手の剣を振り被った。

「ありがと、もう大丈夫だよ」

「なんで雷のスキルがここで必要なんだよ……?」

「思い出したんだ、スリウムとフレイヤの話。私の予想が正しかったら……あ、もう降ろしていくれていいよ」

ちつとも意図が読めないリーファに問うと、リーファはどこか確信めいて答える。

……とりあえず言われた通り降ろしてあげよう。先ほどから2つの視線が怖いです。

と、キリトが自分でも使える唯一の雷系重範囲攻撃ソードスキル《ライトニング・フォール》で雷撃を発生させ、何かを見つけると財宝の山まで走ってそのまま頭から突っ込むようにダイブ。黄金のオブジェクトを掻き分けて、中からリーファの言った通り黄金で出来たカナツチを見つけて出して持ち上げようとするが、思った以上にそれは重たいのかキリトはかなり苦労しながらも気合いで持ち上げ、

「フレイヤさん、これを!!」

そのままオーバースローでフレイヤさん目掛けブン投げた。

放物線を描き自分に向かって飛ぶカナツチを、フレイヤさんはその

細い右腕で軽々とキャッチ……マジ？ キリトかなり重そうにしてたけど片手で？

「……………」

無言かつ無表情でキャッチした黄金のカナヅチを、フレイヤさんは胸元まで持つてきてじつと見つめる。

と——フレイヤさんに異変が起きた。

「ッ……………」

ドクンッ！ と何かが鼓動を鳴らし、フレイヤさんは身体を丸める。

「……………ぎる……………」

全身からは黄金のスパークが迸り、低く囁いた。

「……………なきる……………みなぎるぞ……………」

「え……………」

その異変に投げた張本人のキリトは啞然として、フレイヤさんの異変に気付いたクラインは一瞬そちらを見遣るが、スリウムに狙われて回避に意識を集中せざるを得なかった。

「みなぎるぞ……………みなぎ……………るうううおおおおオオオオ——！」

うん、この時ばかりは、クラインがスリウムのタゲを取ってくれていて良かったのかもしれない。

俺たちが呆然としている中、かつて美女だったフレイヤさんはどんどん全身を筋肉で膨らませ、ドレスは木っ端微塵に弾けていきながら巨大化していく。

その大きさはスリウム並み。全身の筋肉も同等か、あるいはそれ以上。右手のカナヅチもフレイヤさん（過去形）が大きくなるに合わせで自動的にサイズ補正。

四方には黄金の雷光が弾け、一瞬光の渦に包まれると、その全容が露わとなった。

ゴツゴツと逞しい頬と顎から伸びる長い長いヒゲは、とても先ほどまでの美女の面影が微塵も残ってないくらいのナイスミドルに。

「お、オオオオオオオ、オッ——」

「サンじゃん！」

部屋の2カ所から、最大最凶レベルのショックを受けたキリトとクラインの絶叫が響く。

「俺これ知ってる！ スーパーイ○人だろ！」

「それも危ないからやめてくれる!？」

ナイスミドルの巨人を指差して叫んだ俺を、隣に居たリーファが顔を青くしながら突っ込む。

「ヌアアアアアアアアッ!!!」

ナイスミドルの巨人は広間中をビリビリと震わせるほどの雄叫びを放ち、いつの間にか履いていた分厚いブーツに包まれた右足を踏み出した。

しかもすっごいイイバリトンボイスだったし。なんか特殊部隊の元隊長とか、人間そっくりのアンドロイドとかが出しそうな声してる。

第5話 エクスキャリバー

第5話 エクスキャリバー

視界の左端、9個並ぶHPMPゲージの一番下に表示されていた【Freya】の字が、ちょうど今書き変わって【Thor】と表示される。

トール。北欧神話において主神オーディン、悪神ロキに並ぶネームバリューのある雷神。

これは後にリーファから聞いた話だが、北欧神話には「スリウムに盗まれたカナヅチ——と言うかトールの持っているカナヅチなんだからトールハンマー以外無いよな——をトールが取り返しに行く」エピソードが確かにあるのだそうだ。

その時トールはフレイヤに扮し、何度もボロを出しそうになるも同行していたロキの助けで切り抜け、とうとうミヨルニルを取り返すとスリウムの頭をカチ割り、配下の連中にもお見舞いしてやったそうだが、とにかくカーデイナルはそのストーリーをアレンジして今回のクエストに組みこんでいたらしい。どうりであんな違和感があったのか、納得。

「卑劣な巨人めが！ 我が宝《ミヨルニル》を盗んだ報い、今こそ贖ってもらおうぞ！」

やっぱりイイ声で吼えながら、トールは右手の《ミヨルニル》を振り振り猛進。

「小汚い神め……よくも儂を謀ってくれたな！ その髭面切り離して、アースガルズに送り返してくれようぞ！」

対するスリウムも手に息を吹きつけると氷の戦斧を生み出し、トールの《ミヨルニル》と激しくぶつけあう。

ぶつかり合った衝撃が広間どころか城中を揺るがし、足元に居る小人みたいな俺たちはもう、スケールの違いに呆気に取られていた。何この怪獣映画。東○作品？ 色的にトールが○ングギ○ラでスリウムは……なんだろ、ゴ○ラじゃないよなあ……。

「トールがタゲを取ってる間に全員で攻撃しよう！」

「よし、全員全力攻撃！ ソードスキルもバンバン使ってくれ！」

シノンが鋭く叫び矢を番え、キリトも声を張り上げながら剣を振り上げた。

まあその通りだけど、もうあいつ1人で良いんじゃないかな……いや冗談だけどき。

ついさっきまで支援していたアスナも武器をレイピアに持ち替え、攻撃にシフトして突撃している。

そんな中ひとときわ印象的だったのが、愛と怒りと悲しみを力に……変えたかどうかは本人のみぞ知るが、刀を大上段に振り上げて突撃するクラインだった。その目尻からキラキラと光る物が零れ落ちていたように見えるが、武士の情けと言うことで見て見ぬふりをしておう。

硬直なんて知ったものかなんて勢いで、3連撃以上のソードスキルをバンバンスリウムに叩きこむ。特に火属性のスキルを使えるクラインやキリト、俺なんかは率先して弱点属性を叩き込んでダメージを稼ぎまくった。

「ぐ……、ぬうつー！」

たまらずスリウムは唸り、左膝を床に着いた。

「ここだつー！」

王冠の周囲からはキラキラしたライトエフェクトが回って、スリウムがスタン状態に陥ったを示している。

それを見逃さず、キリトの合図に合わせて全員が最大攻撃を放った。

四方からは多種多様なライトエフェクトの光がスリウムに殺到し、身動きが取れないスリウムのHPをこつそり削り取る。

「地の底に還るがよい、巨人の王!!」

そしてトドメと言わんばかりにトールがミョルニルを豪快に振り上げ、スリウムの脳天に叩きつけた。王冠が碎けて吹き飛び、地響きを立てながら床に叩きつけられる。

スリウムのHPゲージは既に消滅している。巨大な四肢とヒゲの

先から、ピキピキときしむ音を立てて氷に変わって行く……と、不意に低い笑いを漏らした。

「ぬっ、ふっふっふ……。今は勝ち誇るがよい小虫ども。だがな……アース神族に気を許すと痛い目を見るぞ。彼奴らこそが、真の——」
しかしスリユムが全てを言い終える前に、トールが足を踏み降ろして氷りかかったスリユムの頭を踏み砕く。

凄まじい規模のエンドフレイムが巻き起こり、無数の氷片がダイヤモンドダストのように宙に舞い散った。

また意味深な事を言ってたな……そう言えば前にもどこかで似たような事を聞いたような……？ スリユムも同じ事でも言うつもりだったのか？

「……礼を言うぞ、妖精の剣士たちよ。これで余も、宝を奪われた恥辱を雪ぐ事が出来た。——どれ、褒美をやらねばな」

言うのと、トールは右手に持ったミヨルニルを翳すと、ハンマーに嵌まっていた宝石の1つが外れて、落ちながら変形して人間サイズのハンマーへと変形しながらクラインの手の中に。

「《雷鎚ミヨルニル》、正しき戦のために使うがよい。——では、さらばだ」

そう言つてトールはミヨルニルを掲げると、ハンマーが黄金の輝きを放つて広間を覆い、次の瞬間にはトールの姿が無くなっていった。メンバー離脱のダイヤログが浮かび上がって、9人目のHPMPゲージも音もなく消滅する。

「ふう……レジェンダリーウェポンゲット、おめでとう」

「……………オレ、ハンマー系スキルびたいち上げてねエし、うっ、うう……」

キリトがクラインの隣に歩み寄って、肩に手を置きながらお祝いするも振り向いたクラインは泣きたいのか笑いたいのか、俺には答えが出せない。そりゃあ惚れた美女が実はおっさんが化けていた姿で、その騙していたおっさんから伝説級武器を貰った……ってなれば泣けばいいのか喜ばしいのか。とりあえずスリユム共々『トールに純情を弄ばれた被害者の会』でも立ち上げればいいんじゃないか？

などと2人から少し離れた場所から話を聞いていた時、突然城全体が大きく震えた。

「ぎゃああつ!?!」

突然の揺れにシリカがネコミミを伏せながら俺にしがみつく。

この揺れ……まさか城全体が浮いている!?

「たつ、大変! クエストまだ続いている!」

「な……なにイ!?!」

上ずったリーファの叫びに全員が驚いてリーファを注視する。

「どういうことだ? 親玉のスリウムを倒したらクエストクリアだったんじゃないのか!?!」

「いや……そうか! ウルズからの依頼はあくまでエクスキャリバーを台座から抜くこと、肝心の《エクスキャリバー》が抜かれていないならクエストはまだ終わってないんだ!」

と言うことはつまり、あれだけ苦戦した難敵スリウムも前座でしかないってことか!

「パパ、玉座の後ろに下り階段が生成されています!」

ユイちゃんが指摘するや否や、キリトは答える暇もなく階段へ駆けだす。それに遅れる形で、俺たちも後を追いかける。

玉座の後ろには確かに、巨人ではどうあがいても通れない、人間1人がギリギリ通れる幅の下り階段が出現していた。既にキリトは階段を下っている最中で、俺も後を追いつ階段を駆け降りる。

「でも、霜巨人の主であるスリウムがいないのにストーリーが進むってどういうことなんだ?」

「えつとね、あたしもおぼろげにしか覚えてないんだけど……スリウムヘイム城の主はスリウムじゃなかったんだ」

「はあつ!?! だって……」

「いえ、リーファさんの言う通りです。スリウムヘイム城の本来の主は《スイアチ》と言う巨人で、ヨツンヘイム地上フィールドで行われているストーリー・クエストの依頼主も、地上で最大の城を持つ《大公スイアチ》と言うNPCみたいです」

ってことはつまり、俺たちはまんまとミスリードに乗せられちゃっ

たわけか……仮に地上のスローター・クエストがクリアされたら、その時はスイアチがスリュムの後釜に座るってシナリオかよ。

やがて螺旋階段の先から光が見え、それが一気に広がる。広がった先はダンジョンの最下層。所謂『玄室』と呼ばれる空間だった。薄い壁が四方を囲み、その中心に静かに黄金の剣が突き立っている。

「《エクスキャリバー》……」

その剣を見詰めながら俺は静かに呟いた。

実際に目にするのはこれで2度目か……最初はキリトが操られていた俺を助けてくれた時。

「……………」

チラ、とキリトが俺を見て、それに俺は頷く。

キリトの右腕が細い黒皮で編まれた柄を握り、抜い——抜いて……あれ？

「……………」

キリトも一瞬戸惑うが、今度は両手でしっかりと柄を握り締め、あらん限りの力を込めて台座から引き抜こうとするも……黄金の剣はビクともしていない。

ステータス面に限って言えば、この中で最大の筋力値を持っているのはキリトで間違いない。今の俺は敏捷優先、次点で筋力のビルドだから純粹なパワーに限って言えばキリトに若干及ばない。そして筋力値で言うならばエギルの土妖精族が最高で、次点でクラインの火妖精族が高い傾向にある。けどクラインの場合、刀を使うから技のキレを優先して敏捷を優先していて、結局この中で高いのはキリトということになる。

……まあ、俺がアレを使えばステータスも無意味になるが、それはそれだ。それにこれはキリトが欲した物。キリトが抜かなきゃ意味がない。

「がんばれ、キリトくん！」

アスナが、

「ほら、もうちよっと！」

リスが、

「根性見せて！」

シノンが、

「パパ、がんばって！」

ユイちゃんが、

「キリトさん、がんばってください！」

シリカが、

《きゅるるーっ！》

ピナが、

「しつかりやれよ！」

クラインが、

「お兄ちゃん、あと少し！」

リーファがそれぞれにキリトを応援する。

「おら、腰が入ってないぞ腰が！」

そして俺も茶化するようにエールを送り、キリトは再び気合いを込めて剣を引っ張り上げた。

そして――

ぴきっ、と亀裂が走る音。直後、あれだけビクともしなかった黄金に輝く聖剣は重厚かつ爽快なサウンドと共に引き抜かれ、同時にキリトの身体が勢いよく後方へすっ飛ぶのを咄嗟に俺たちで支える。

剣を抜いた事実がまだ湧かないキリトが、腕に抱えた剣と俺たちを交互に見て、快哉を叫ぼうとして……台座から小さな根が飛び出し、頭上の巨大な根と絡み、融合しながら凄まじい轟音を立てていく。

今までの振動が震度1かと思えるほどの凄まじい揺れに立っていることもできず、四方の壁がひび割れて砕け散り、遙か真下でぽっかりと開く大空洞に落ちていく。

「スリウムヘイム全体が崩壊します！　パパ、脱出を！」

「って言っても……」

既に俺たちが降りてきた螺旋階段は頭上の世界樹本体の根で破壊され、今このフロアは中心から辛うじて伸びる根と、四方を辛うじて繋ぐワイヤーでどうにか繋がっているような状態だ。おまけに根自体も重みに耐えられないのか、引きちぎれる寸前。

「クラウド、いつもの悪知恵は無いの!？」

「無茶ぶりが過ぎる!？」

ひしつと背後を掴んでいるシノンの無茶な要求に全力で突っ込む。
いや、頑張れば俺一人くらいならなんとか助かるかもしれないが……流石にそれは良くない。と言うか俺自身、どの程度までできるのか把握していないし。

「よ、よーし、こうなりやこのクライン様がオリンピック級の垂直飛びで華麗に……」

がばつと立ち上がったクラインが、樹の根を器用に上って今にも引きちぎれそうな根に向かって思いつきジャンプ。

あ、バカ——と止める暇も無かった。

おまけにそのジャンプがいけなかったと、後にクラインを除いた俺たち全員はずつと思う事態になった。

ブチブチブチッ!

「あいでっ」

クラインが掴もうとした木の根はまさにその瞬間千切れて寸断され、最後の砦だったワイヤーも落下の衝撃でぷちんと切れた。

結果、俺たちが居るスリウムヘイム最下層は繋ぎとめる物が一切無くなり、そのままパラシュートなしフリーフォールでウィーキャンフライ。

「く、クラインさんの……バカアーツ!」

絶叫マシンが大の苦手だと言うシリカが、ガチで本気に罵倒を浴びせる。

耳元でシリカが思いつき叫んでいるが、絶叫系が平気な人でもパラシュートもなしでフリーフォールさせられれば絶叫するだろう。おまけに、周囲では俺たちと同時に崩れ落ちた巨大な氷塊同士が激突し、より小さな氷塊に分解されているんだから恐怖心を煽ってる。

うーん……これは無理、かなあ……このままだと大空洞の先にあると言うニブルヘイムまで真つ逆さま。リーファとキリトの会話に聞き耳を立てると、地上で行われていたと言うスロータークエは辛うじて阻止したらしいけど、このままだと俺たちはきつと「ミンチよりひ

どい」って状況が待ち受けてるはず。

うーん、ダメだこりや。(イカリヤ感)

などとドリフっていたら、何かが聞こえたような気がして顔を上げる。しかし周囲を見ても、俺たちと共に大空洞に向かって落ちていく氷塊しか見えない。

しかしリーファにも何か聞こえたらしく、抱きついてきたキリトから離れると器用に姿勢を調整して音の主を探し、

「——トンキー！」

何かを見つけた途端叫んだ。

リーファの視線の先。周囲を取り巻く氷塊のずっと先。南の空から「くおおおーん……」と啼きながらゾウとクラゲを合体させて羽を生やした邪神がゆっくりと近づいてくる。俺たちをスリウムヘイムまで送ってくれた仲間のトンキーだ。

これは……危機一髪の所で助かるのか？ トンキーの人数制限は7人までだが、実際それを超過しても移動速度に制限が掛かるだけだと言うから乗り移っても大丈夫だろう。

「へ……へへッ、オリヤ、最初ッから信じてたぜ。アイツが絶対助けに来てくれるってよ……！」

「……クラインはこのままニブルヘイムまで落ちてもらおうか？」

「ウソですゴメンナサイ！ トンキー様のお慈悲に感謝しますッ！」

調子の良い事を言っていたクラインを見てボソツを呟くと、舌の根も乾かぬ内に早口で捲し立てながら手のひら返し。

そうこうする内にトンキーは落下する円盤の速度にピタリと合わせ、幅5メートルほどのスペースを開けてピタリと滞空。さすがに周囲を氷塊が舞っていて横付けは出来ないが、これくらいの距離なら全員余裕で飛び越えられるため女性陣たちはとんとん拍子で飛び移り、男性陣のトップバッターを切ろうとしたクラインは、またも不穏なフラグを立てようとしていたので上段回し蹴りで蹴飛ばして強引にトンキーの背中に。若干飛距離が足りなかったが、トンキーが伸ばした鼻で見事キャッチしてくれた。ナイスフオロー。

「じゃ、お先！」

「ああ」

キリトに軽く手を上げて断つてから、軽く助走をつけて跳んでトンキーの背中に着地する。

さて、あとはキリトだけ——と思いながら振り返ると、キリトは円盤の上で立ち尽くしていた。

どうしたんだ……？ と考えてから、すぐに思い当たる。《エクスキャリバー》だ。キリトでも持つのがやつとのそれが原因で、あのままでは飛べないのか……！

「……………まったく、カーディナルつてのは……………！」

僅かな迷いの末、覚悟を決めたキリトは握っていた《エクスキャリバー》を真横に放り投げる。そのまま軽く助走をつけて円盤の縁を思いつき蹴って跳び、トンキーの背中に着地した。

「……………良かったのか？」

「ああ。また取りに行けばいいだけさ」

気遣うように言うと、キリトはスツパリ見切りをつけたようにハツキリと答える。まあ、キリトがそう言うのなら、いくらでも付き合つてやるが……。

しかし、そんな俺たちの気持ちとは裏腹に水色の髪の毛のアーチャーが1歩前に出て、銀色の細長い矢を番えながら長弓を構える。

「200メートルくらいか——」

ポカンとしている俺たちを余所に、シノンは呟くとスペルを詠唱。キリキリと引き絞られた弓。静かに予測した位置をポイントすると、シノンはぱつと指を離して矢が鋭く風を切りながら放たれる。

矢からは不思議な銀の糸が曳かれたそれは、弓使い専用の種族共通スペル《リトリーブ・アロー》だった。矢に伸縮性・粘着性の高い糸を付与し、本来使い捨てになつてしまう矢を回収したり、手の届かない位置にあるオブジェクトを引つ張り寄せたりすることが可能な便利な魔法だが、糸が矢の軌道を歪める上に誘導性も皆無。普通は近距離でしか当たらない。

「いや、シノン、いくらお前でも……………いや、まさか……………いやいや」

シノンの超人的な狙撃能力は俺が一番良く知っているが、これが1

戻された。

「その前に、1つだけ約束」

そう言い、コンビを組んで以来今まで見たこともないような輝くような笑顔でにっこりと笑ったシノン。

「——この剣を抜くたびに、心の中で、私の事を思い出してね」
ピキッ。

空気がスリユムの氷ブレス以上の寒さで凍りつく中、再び黄金の聖剣はキリトの手に移る。

「シノン、お前……行きの階段での事まだ根に持つて……？」

「さあ？ 何のことかしら？」

頬を引き攣らせながら恐る恐る訊くも、シノンはどこ吹く風のように流してしまふ。

キリトも行き先の階段での出来事を思い出し、顔が若干引きつっているが可能な限り平静を装って口を開いた。

「……うん、思い出して、礼を言うよ」

「ん。どういたしまして」

トドメにシノンはウインクを決める。こっわ！ シノンマジこっわ！

シノンの執念深さに戦慄して震えあがっていた時、突然トンキーが「くおおーん！」と啼き、翼を強く打ち鳴らして上昇する。

釣られて見上げれば、今まさにスリユムヘイム城が崩落する所だった。

「映画とかだったら、こう……爆発する敵の本拠地に背を向けながら去っていく、ってシーンだよな」

「いつの時代のハリウッド映画よ……にしてもあのダンジョン、1回冒険しただけで無くなっちゃうんだね」

「ちよつと、もったいないですよ。行ってない部屋とかいっぱいあったのに」

崩れ落ちるかつて城だった残骸を見上げてポツリと呟くと、呆れたようにリズが突っ込みを入れながら残念そうにつぶやいて、シリカもそれに相槌を打つ。

もつと時間があつたら隅々まで探索していたんだが、今回は緊急時だったから仕方ない……これがGGOであつたなら、俺はきつと血眼になって探していたんだろうなと考えると自身のがめつきに呆れて肩を竦める。

「ん……？　なあ、下から何かが……」

城の残骸が大空洞へ呑みこまれるのを見ていると、ふと大空洞から一瞬光が瞬いた。

目を凝らして光を凝視すると、ゆらゆらと揺れて青く輝くのは――

「……水？」

そう呟いた直後、大空洞の奥深くから、轟音を響かせながら巨大な水柱が噴き上がる。

「見て！　上！」

何かを見たシノンがさつと右手を上げた。

スリウムヘイムが完全に消滅したことで、世界樹の根が解放されて生き物のように大きく揺れ動きながら太さを増して寄り合い、かつて大空洞だった湖のある真下に向かって伸び、放射状に広がる。

「見て……、根から芽が……！」

アスナの声に目を凝らすと、湖の四方八方から伸びる根のあちこちから立ち上がって急激なスピードで育っていくと、芽はあつという間に巨木へと成長する。

いつの間にかヨツンヘイムに吹く冷たい風は止み、代わりに春風のような暖かい風が吹き、世界全体が太陽に照らされたかのように輝きを増していた。

「……………」

現実では到底起こり得ないだろう荘厳な光景に俺は言葉を失い、ただただ魅入っていた。

「くおおおーん……………」

突然トンキーが高らかな遠吠えを響かせる。

すると、各地からトンキーの鳴き声に似た遠吠えが聞こえ、ゾウクラゲ型邪神や他にも無数の動物型邪神が姿を見せる。

入れ替わるように人型邪神は1匹も残らず姿を消し、それと同行し

ていたレイドパーティの連中はハトが豆鉄砲食ったように呆然と立ち尽くしている。あと少いでクエストをクリアして《エクスカリバー》が手に入る……というタイミングで突然訳も分からずに強制失敗と言うのは、少々気の毒に思うけど。

「……よかった。よかったね、トンキー。ほら、友達がいっぱいいるよ。あそこも……あそこにも、あんなにたくさん……」

感極まったリーファがトンキーに囁きかける。その頬からはぽろぽろと雫が毀れ、シリカも共感してリーファに抱きついてしゃくりあげた。

それが伝わってみんなも涙ぐんだりしているのを見て、俺も少しウルツとくる。

「無事に、成し遂げてくれましたね」

と、その時。突然声が掛けられてはつととなって顔を正面に向けた。トンキーの頭の向こうに、金色の光に包まれた人影が浮かんでいる。

身の丈およそ3メートルほどのこの巨大な金髪の美女が、もしかしてキリト達が言っていた《湖の女王ウルズ》……なのか？ 特徴も同じだし。

「『全ての鉄と木を斬る剣』《エクスカリバー》が取り除かれた事により、ヨツンヘイムはかつての姿を取り戻しました。これも全てそなたたちのお陰です」

「いや、そんな……。スリウムは、トールの助けがなかったら倒せなかったと思うし……」

尻込みしながら答えたキリトに、ウルズはそつと頷く。

「かの雷神の力は、私も感じました。ですが……気をつけなさい、妖精たちよ。彼らアース神族は霜巨人の敵ですが、決してそなたたちの味方ではない……」

「(ん……?)」

ウルズの意味深な言葉に俺はふと既視感を覚える。スリウムも似たような事を呟いていたし、それに……以前にも似たようなやり取りをしたような。あれは……そう、海底神殿で……。

「——私の妹達からも、そなたらに礼があるそうです」

記憶を思い起こそうとするも、そう言ったとともにウルズの右側が水面のように揺れて人影が1つ現れた。

身長は……長女のウルズよりもやや小さいが、俺たちプレイヤーよりもずっと大きい。髪は姉と同じ金髪だが、こちらは少しだけ短いいたいだ。どっちかって言うと、姉が『高貴』で彼女は『優美』か。

「私の名は『ベルザンディ』。ありがとう、妖精の剣士たち。もう一度緑のヨツンヘイムを見られるなんて、ああ、夢のよう……」

そして今度はウルズの左側に旋風が巻き起こり、内側からまたも人影が現れる。

今度現れたのは鎧兜姿で、しかも俺たちプレイヤーと同じサイズだ。姉たちと違って勇壮な雰囲気がある。

「我が名は『スクルド』！ 礼を言おう、戦士たちよ！」

凜と張った声で短く叫び、ベルザンディとスクルドの2人は手を翳し、報酬アイテムのユルドやらアイテムやらがテンポラリ・ストレージの容量上限ギリギリまで流れ込んできた。

「——私からは、その剣を授けましょう」

そう言っただけでウルズがキリトが抱えている『エクスキャリバー』を指差し、光り輝いてキリトのストレージに格納される。念願の伝説級武器ゲットに快哉を上げたりはしなかったが、「……よしッ！」と小さくガッツポーズしたのは見なかった事にしておこう。

3人の乙女たちは、ふわりと距離を取って口を揃えて言った。

「「ありがとう、妖精たち。また会いましょう」」

同時に、凝ったフォントでクエストクリアのメッセージが表示され、やっと終わったかと溜め息をつく。

……と、クラインがものすごいスピードで後ろから飛び出してきて、身を翻して飛び去って行く3人に向かって大声で叫んだ。

「すっ、すすスクルドさん！ 連絡先をーっ！」

「——」
あまりにも斜め上な展開に俺は口を半開きにして呆然となり——
と言うかクラインを除く全員が啞然としていた——、どっから突っ込

んでやろうかと考えたが……。

あろうことか、スクルドはくるりと振り向くと面白がるように笑いかけて、小さく手を振った。

振った手から何かキラキラした物が宙を流れて、クラインの手にすぽつと飛び込む。

直後、今度こそ末妹の女神は消滅し、クラインはスクルドから贈られてきたものを大事そうに胸に抱えていた。

「……クライン、あたし今、あんたの事心の底から尊敬してる」

「……いやまったく」

呆れたように言うリズに、俺も何度も頷きながら同意した。

で、その後の話だ。

キリトがいきなり、「この後打ち上げ兼忘年会でもどう？」と言い出し、それに全員が賛成。

しかし場所——つまりALOでするかリアルでするかで悩んでいた所、出来た娘のユイちゃんが「リアルで！」と言って、会場はエギルの店《ダイシー・カフェ》で行うことに。

何しろアスナが明日から1週間、京都にある父方の実家に滞在すると言うのだから、リアルで当分会えない2人の心情を汲んで提案したのだとか。まったく、ユイちゃんは素直で良い子だなあ。お兄さん泣けてくるよ。

そうなると俺はどうするかと言うことになるが、俺はシリカのPC経由で参加、と言うことになって大急ぎでシリカの家があるIPアドレスまで素っ飛んで合流。途中でリズとも合流して台東区御徒町にある《ダイシー・カフェ》に到着すると、俺たちが最後だったらしく既に全員が揃っていた。

「ごめんごめん、ミストが合流するの遅くってさー」

『あのなあ、お前らは『パツと行く』が出来るかもしれないけど、俺はそういう便利なの出来ないんだぞ?!』

「だから言ったじゃない、「私の所なら近いしこつちから来る?」って」

「あはは、ダメですよシノンさんー。仮にシノンさんの家に行っても遠隔接続する設備がないじゃないですかー」

にここにこと笑いながら、すっかりシノンに牽制を入れるシリカ。リアルイベントに参加する時には何かと必要だろうと、キリトが好意でシリカの家から遠隔接続できるように道具やら何やらを譲ってくれていたのだ。つまりシノンの部屋に行っても、俺は参加できないわけ……。

「あ、あはは……けど、この『視聴覚双方向通信プローブ』が完成したら、今よりもっと手軽になると思うぞ」

『そうですよミストさん！ 私とミストさんのためにも、パパにはガンガン注文出してますから！』

何とも頼もしいユイちゃんのコメント。

キリトは学校でメカトロニクスコースなるものを選択しているうえで、その授業の課題でこのデバイスを作っているらしい。なお、内容に関して俺は一切頭が付いていかなかったけど、それって専門学校とかの分野じゃないの……？ 俺が学校に通っていた当時そんなコース無かったよ？ とここでもジェネレーションギャップで衝撃を受けたのは覚えている。俺、文系とか理系とか普通にある奴だったし……。

まあ、それは置いておいて、全員が集った所で会場をセッティングし、全員に飲み物が行きわたった所でキリトが音頭を取った。

「祝、《聖剣エクスカリバー》と、ついでに《雷鎚ミョルニル》ゲット！ お疲れ、2025年——乾杯！」

『かんぱーい！』

「それにしても、さ。どうして《エクスカリバー》なの？」

「へ？ どうしてって？」

宴も終盤に差し掛かった頃になって、不意に口を開いたシノンにキリトは照りつ照りのスペアリブを咀嚼しながら聞き返した。

「ファンタジー小説やマンガだと、たいてい《カリバー》でしょ。《エクスカリバー》」

『あー、それは俺も思った。《カリバー》の方がメジャーだよな』

「あ、ああ……なるほど。ミストもそう言うの詳しいのか？」

『詳しいっていうか、結構知名度が高いからな、《エクスカリバー》って。《キャリバー》も間違っちゃいないけど、どっちかって言うときマイナーな呼び方だし』

「へえ。シノンさんもミストくんも、そう言うの詳しいんだ？」

キリトの隣に座るリーファが感心しながら訊ねると、シノンは少し照れくさそうに笑った。

「中学生のころは図書館の主だったから。アーサー王伝説の本も何冊か読んだけど、全部《カリバー》だった気がするな」

『逆に俺はゲームとかで知ったし。カードゲームとか、ファンタジーRPGでも《カリバー》か《カリバーン》ばつかで、《キャリバー》はあんま……あ、1つだけあった。フライトシューティングゲームに出たレーザー兵器が《エクスカリバー》だった』

「ミスト、お前が何を言っているのか、やっぱりわからない」

「奇遇ね、私もクラウドの話がサツパリ分からない時が良くあるの。以前も《イングラム》が欲しかった理由がバ○オハザー○で出たからって、ネタが古すぎてまったく分からなかったわ」

答えた俺にキリトは頬を引き攣らせ、シノンも淡々と半眼でツツコミを入れる。

むう……エ○コンも知らないとは。またもジェネレーションギャップ。

「確か、大本の伝説だともっと色々名前があるのよね」

『《カリバーン》だってその1つだったし、《コールブランド》とか《カレドヴルツフ》とか……他にも色々あったな』

「うはっ、そんなにあるのか」

「あとは、私にはこっちの方が印象強いんだけど、銃の口径の事を《キャリバー》って。綴りは違うと思うけど。あとは、そこから転じて『人の器』って意味もある。『a man of high caliber』で、『器の大きい人』とか、『能力の高い人』って意味」「へええーっ、覚えとこっつ！」

感心するリーファにシノンは「たぶん試験には出ないかな」と苦笑する。

すると横で話を聞いていたリズが、にやにやと悪だくみを思いついたように口を開いた。

「とゆーことは、エクスカリバーの持ち主はデツカイ器が無いとダメってことよねー……」

「……？　そ、そう……なんででしょうか？」

意味深に呟いたリズが、シリカの携帯端末に付属するカメラレンズを見て意味深に笑う。

その、俺に向けられた笑みを見て、俺もニヤリと口角を釣り上げた。

『そーうーいーえーばー、どっかの誰かが短期のアルバイトでどっかーんと稼いだって聞いた気がするなー俺！』

「んなツ?!　ミスト、お前な！　だ、だいたいあの事件は、お前も関わってただろ！」

『ええ〜？　俺はあの事件に巻き込まれた被害者だし〜？　それにタダ働きでなんにも見返り貰ってないからなく。それに俺、参加しても飲み食いは一切してないしー。ところでエギル、この店チャージ料ってある?』

「そんな悪徳商法をやってるわけがないだろ……」

わざとらしくエギルに話題を振ると、こっちの意図を薄々感づいたらしいエギルが呆れた様子で答えた。

はい、と言うことで俺は実質参加費無料です。やったね！

「で、どうなのよ?」

「うぐつ……」

リズの催促にキリトはぐつと言葉を詰まらせる。ここまでお膳立てされればキリトだって引くに引けないだろう。

「……も、もちろん最初から、今日の払いは任せろっていうつもりだったぞ……はは、はははっ」

口元を引き攣らせて乾いた笑いを浮かべながら、キリトは胸を叩いて宣言した。

とたんに四方から盛大な拍手とクラインの口笛を鳴らして、喝采を

送って場は再び盛り上がる。

『よっしやエギル、料理と飲み物ジャンジャン追加してくれ！ なんから店で一番高い奴を出してくれても良いぞ！』

「やめろ本気でやめろ！ いややめてくださいお願いしますっ！」

Next Episode……

——— 今でも、時々……考える。

あの時……最後まで戦っていたら、果たして勝つのはどちらだっただろう。

……結果として勝ったのは俺だった。だけどその勝利はとても苦くて、俺はあれを自分の力で勝ったとは思っていない。

あの時だつてそうだ……助けてもらわなかったら、俺は倒されていただろう。結局俺は、あいつに『勝つ』ことが出来ないまま『勝利』を得ていた。

もしも今、再びあいつと戦ったら？……その時は今度こそ、本当に勝てないかもしれない。

……いいや、違う。その時も俺は再び『勝利』する事になるんだろう。きつとあいつは手を抜いて、わざと勝たせるはずだ。

だけど俺は、本当の事を知っている。今のあいつは俺より……いや、きつとこの世界の誰よりも———。

／
今でも時々考える。

あの時、最後まで戦っていたら、勝つのはどちらだっただろう。

あのまま追い詰めて本気を出させる事を躊躇わせていれば、きつと労せず勝てたかもしれない。それでもわざと逆鱗に触れて本気を出させたのは、あの世界を本気で生きていこうとした人間としてのせめ

てももの矜持だったか。

けれど結果的に、俺は最後の最後で切り捨てたはずの情を再び抱いて破れ、散った……そのはずだった。

だけど俺は今も生きている。……これを『生きている』と呼んでいいのか、いささか疑問は残るが。

しかし……生き残った代償は、ある意味大きかったのかもしれない。むしろいくつもの偶然といくつもの幸運を折り重ねてこうなったのなら、それはやっぱり『幸運』なのだろう。

ともあれ俺は、人ではなくなった。いや、この世界に降り立った時から既に人でなかったのかもしれない。だけど、1度目の『死』が俺を縛り付けていた『枷』を引きちぎった。

今の俺は人の限界を超えて、この世界で俺と対等の存在は居ないだろう。だからこの事は絶対に、誰にも知られてはならないし、悟らせてもいけない。あくまでも『人間』で在り続けるために。

こんな俺になっても変わらず接してくれる仲間たちには、いくら感謝の言葉を紡いでも足りないほどだけど、同時に後ろめたさもあつた。

後悔はない……それは今でも変わらない。だけど……なにも罰せず、ただ赦されるとずっと後ろめたかった。

俺は……俺が彼女のために、彼らのために出来る事はなんだろう。今の俺に何が出来るのだろうか……？

次章、『マザーズ・ロザリオ』

「……後悔するなよ、俺に本気出させた事」

「しないさ。本気でぶつかって負けたなら、悔いはない」

「そうかい。なら——」

そのリクエストに応えてやるよ、キリト——！」